

プリキュアを憎む者

匠 良心

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

七色ヶ丘に転校生が現れた。その転校生は学校では成績がよく、みんなに憧れる存在だが、彼女の本当の顔は未来からやって来たプリキュアを憎む少女であった。この物語は彼女に関わっていく人間あるいは敵としてプリキュアの未来に関する物語である。物語は表もあれば裏もある。

目次

1話	笑顔を守る5人の戦士	1
2話	オーデイウム ー憎しみー	12
設定集		22
3話	狸集会	25
4話	笑わない理由と怒り	35
5話	星奈VSポンポ	45
6話	コンビ誕生？	54
7話	プリキュアを憎む理由	59
8話	脅威のキュアキャラクター	72
9話	異世界都市 アルカ	88
10話	かちかち山	100
11話	プリキュアの調査と白銀希美の夢	112
12話	星奈VSにせプリキュアリーダーズ そして二人の決意	124
13話	ふしぎ図書館の外	142
13・5話	ピラミッドの番人	154
14話	プリキュアの書	167
15話	妹とりんご	175
16話	キャラクターの実力	194
17話	王の魂	203
18話	苦闘 星奈対呑み込まれたスマイルプリキュア	215
19話	ロイヤルクイーンの質問	237
20話	オーデイウム&ビューティー ブレインの実験	247

20・5話	完全戦闘生命体	デキータ	260
設定集2			269
加音町編			
21話	ガーディアンズ	加音町に集結せよ!	273
22話	音吉と古き友	盤怒	284
23話	上空の決闘	オーディウム対人造プリキュア	ラスト
296			
24話	世界の真実を知る者		318
25話	星奈、みゆきの家にお泊まりする		344
特別編	正月 謝礼と重大発表		361
ファイナルミッション			
26話	ジョーカーの誘いとポンポアの迷い		375
27話	星奈対不良プリキュア		408
28話	プリキュアの成れの果て		434
29話	星奈の決意		449
30話	戦いの現実	星奈対みゆき	464
31話	怒りと真実		490
31・5話	キュアハッピー対キュアキャラクター		510
32話	星奈の想い	誕生	ウルトラエターナルキュアハッピー
最終話	来るべき戦いのために		522
設定集3			555
オーディウム&HARRYA	feat	デッドプール	
プリキュアの秘密			559

1話 笑顔を守る5人の戦士

物語には必ず表もあれば裏もある。

例えて言うなら白雪姫は継母の毒リンゴを食べ、意識を失い小人たちは号泣した。だがそこにお城の王子が現れ、王子のキスによってめでめ、姫は王子とともにお城で幸せに暮らしたというのが表の話である。

裏の話は白雪姫は王子と一緒にお城で幸せに暮らしていたがある祭りで白雪姫を殺そうと企んでいた継母を招待したのだ。それは何故か？ 姫と王子の目の前で高温で焼けた靴を継母の足に無理やり履かせられ、死ぬまで踊らされたというのが裏の話である。

そしてこの物語は笑顔を守るプリキュアとすべてのプリキュアを憎む少女とその仲間の最終決戦前の記録であり、そしてある大きな闘いに繋がる物語である。

ここは七色が丘中学 この学校にはある5人の少女がいる。

あかね「やよいー なおー れいかー みゆきー おはよーさー
んって・・・みゆき また遅刻か？」

教室にやってきた女子中学生 日野あかねは元気に挨拶した。

やよい「あのみ、今日この学校に転校生来るって知ってる？」

れいか「そういえば、一週間前の金曜に先生が帰りの会でそうおっしゃいましたよね」

なお「その転校生つてもし女子だったら、仲良くできそうな気がする

るなあ」

日野あかね 黄瀬やよい 青木れいか 緑川なおは転校生の噂で
もちきりになっているころ肝心の星空みゆきはというと……

キーン コーン カーン コーン

みゆき「遅刻 遅刻ー!!!」

学校のチャイムが鳴り響いている中、特徴のロール髪を揺らしながら廊下の中を猛ダツシユで教室に向かう女子中学生、星空みゆき
彼女は今日も寝坊してしまい自分の教室に向かうところだった。

みゆき「あーん お母さん起こしてっつていったのにお母さんは
「ちゃんと起こそうとしたけど、起きなかつたあなたが悪いでしょ」つ
てはっぷっぷー」

と走りながら愚痴をこぼしやっとな願の教室にたどり着いた時

? 「そこワツクスかけた跡だから滑るわよ」

みゆき「へっ?」

ツルツ

みゆき「うわわわわわわわ!!??」

ゴンツ

みゆき「いたーい」

先生「ちよつと 星空さん大丈夫?」

ワツクスの床を滑って尻餅をついてしまったみゆき、それを見た担任の先生は慌てて駆け寄った。

? 「だからいったじゃない」

みゆきは後ろを振り向くと、そこには綺麗な黒い髪をなびかせ足には黒いタイツをはいた少女が立っていた。

みゆき「えつと あなたは?」

先生「星空さん　まずは席に」

みゆき「はい」

先生の指示でみゆきは渋々自分の席についた。

先生「はい　みんな　今日はこの教室に新しい仲間が加わります。入ってきて」

教室から出てきたのはみゆきの注意を宣告した娘だった。そして黒板に自分の名前を書いた。

？「黒井星奈（くろい　せな）です　みなさん　よろしくお願いします。」

みゆき「黒井　星奈・・・さん？」

先生「じゃあ、黒井さんは一番右の一番後ろの席に座ってください。」

そういつて黒井星奈は先生の指示に従って席についた。

――昼休み――

みゆき「黒井さんってすごいよね」

あかね「英語ペラペラ話せるし」

やよい「数学一発で答え出しちゃうし」

なお「歴史にむちやくちや詳しいし」

れいか「とても優秀で学級委員に誘いたいくらいです」

みゆき達は今日、転校してきた生徒、黒井星奈の授業風景を想い返した。

英語の時は手をあげて、最初に手を上げた星奈が黒板にすらすらと速いスピードで問題を解き、一同は驚愕した。

そして歴史の授業では江戸時代の有名な人物の時は細かい部分さえも答えて、れいかは感心したり、その担当だった先生は貧血状態になったとか

数学の時も難しい図形を書いたりして先生は混乱状態になったとか

キャンデイ「みんな 元気だすクルー」

一同「わっキャンデイ」

キャンデイ「ぶっ！」

生徒A「んっ？」

女子生徒「ねえ あかね 今 白い熊みたいのが見えたんだけど？」

あかね「あははは 気のせいとちゃうん？ あははは」

キャンデイ「キャンデイは白つぶじやないつぶ」

あかね「まあ 気にせんでええよ」

みゆきたちは必死で笑いで誤魔化し、生徒たちは興味が失せて立ち去って行った。

みゆき「はあ 助かったー」

やよい「駄目だよ キャンデイ勝手に鞆の外にでちゃあ」

キャンデイ「ううう ごめんクルー」

キャンデイは渋々みゆきの鞆の中に戻った。

なお「ねえ せつかくの昼休みなんだし、黒井さんも誘ってみない？」

なおの提案にみんなは賛成した。

あかね「そやな まだ、この学校のことわからへんやろうし、うちらがフォローしてやらんとな」

みゆき「そうと決まれば、黒井さんのところに行こー！…っつてどこにいるんだっけ？」

ガクッ

みゆきのおとぼけさに4人はずっこけ、あかねはすこしはまわりをみんかい！つと突っ込まれた。

やよい「黒井さんは確か、屋上の方に向かっていったよ」

れいか「じゃあ、私達も屋上に向かいましょう」

一同「おーー」

↑屋上↑

星奈「はい 予定通り、奴等のいる学校に潜入しました。」

星奈はスマートフォンとは異なる機械で誰かと通話していた。

星奈「引き続き ミッションを続行します。」

みゆき「黒井さーん」

スツ

みゆき達が屋上に来た時、星奈は機械をすぐにポケットに締まった。

やよい「黒井さんと一緒にお弁当を食べようと思ってここに来たんだ」

なお「一人で食べるよりみんなと一緒に食べる方がもっと美味しいからね」

あかね「ほんととは早く食べたい癖にな」

なお「う・うるさいな」

三人「はははは」

星奈「ほんと・仲がいいのね、あなたたちって」

みゆき「だって友達だもん」

星奈「友達……」

みゆきの言葉に星奈は振り向いた。

みゆき「私をはじめ、この学校に転校した時、友達が作れるか不安だったんだ。だけど、ここにいるあかねちゃん、やよいちゃん、なおちゃん、れいかちゃんがいてくれたから、いまの私はウルトラハッピーなんだ」

あかね「うちもまだ転校生だったときはめっちゃ緊張して脚がガツチガツチやったからな」

なお「えーあの時のあかねはとてもテンションあげて自己紹介してたはずだったけど？」

あかね「ちよつまでや！ なお!? うちがせっかく黒井さんに真剣な話しとつたのにー!!」

三人「はははははははは」

三人のやりとりを見ていた星奈は……

星奈「あなたたちがそんなになかよくなれたのは……」

星奈「プリキュアになれたからでしょ？」

みゆき「え？」

あかね「はえ？」

やよい「ふえ？」

なお「え？」

れいか「え？」

星奈の言葉にみゆきたちは少し動揺した。

みゆき「黒井さん……今……なんて」

？「けっ 下らねえ仲良しごっこに下らねえ仲良し女子会って奴か

ビューティー「しんしんと降り積もる清き心 キュアビューティー！」

5人「5つの光が導く未来！ 輝け！スマイルプリキュア！」

ウルフルン「けっ 何が導く未来だ？ そんなもんぶつ潰してやるぜえー!!」

ハイパーアカンベエ「アーツカンベエー!!!」

5人「はっつ！」

アカンベエの吐き出す強力な水鉄砲がプリキュアたちに直撃するがプリキュアたちは二手に避けた。

左がハッピー、サニー、ピース

右がマーチ、ビューティー

ウルフルン「けっちよこまかと だったら乱れ撃ちだー!!」

ハイパーアカンベエ「アーツカンベエー!!」

ハッピー「あの水、普通の水鉄砲よりも強力かも？」

ピース「これじゃ迂闊に近づけないよ」

サニー「せやな あっちが水なら、うちのは炎、相性最悪や」

ビューティー「いいえ 私にいい考えがあります。」

ビューティーがアカンベエの方に着地した

ビューティー「さあ 私の方に攻撃してきなさい！」

ウルフルン「けっ一人で目の前で堂々と来るとはな いい度胸だ。

だったら 遠慮なく最大出力でぶっ飛ばしてやるぜええー!!!」

ハイパーアカンベエ「アーツカンベエー!!!」

ハイパーアカンベエの最大出力の水鉄砲がビューティーに迫る！

だが、ビューティーは・・・

ビューティー「ここです！ プリキュア！ビューティーブリザード！」

ビューティーの必殺技 ビューティーブリザードがアカンベエの強力な水鉄砲を完全に凍らした。

ウルフルン「な なにー!?」

ビューティー「今です! サニー 必殺技を!」

サニー「プリキュア! サニーファイヤー!」

サニーの必殺技、サニーファイヤーで凍った水鉄砲の水に直撃した。

どかあーん!

シユウウウウウー

ウルフルン「なっ? なんだこりや!? ちくしょう どこにいやがる!?!」

5人「こっちだ!!」

バキツツ!!

ハイパーアカンベエ「アカーンベエ!!」

ウルフルン「うげえ! どうなっついていやがる?!」

ビューティー「水を凍らし、火で注げば、水蒸気ができるのです。私はそれを利用して差し上げました」

ビューティーはハイパーアカンベエの強力な水鉄砲を必殺技で凍らし、それをサニーの必殺技で氷を溶かし、水蒸気にして敵に突っ込むという作戦である。

マーチ「ハッピー ピース 後はよろしく!」

バシツツ!!

ハイパーアカンベエ「アーーツカンベエー!?!」

ハッピー&ピース「やあああ!!!」

バキツツ!!

ハイパーアカンベエ「アカンベエ~~~~!!」

ウルフルン「うわあああ!!!」

水蒸気の中からマーチが強力な上段蹴りでハイパーアカンベエを上空までぶっ飛ばし、それを上空で待っているかのようにハッピーとピースがダブルパンチでハイパーアカンベエを突き落とした

ドスーーン

ハイパーアカンベエ「あ あ アカ・・・アカん」

ハッピー「よし みんな いくよ！」

5人「ペガサスよ！私達に力を」

キュアハッピー達はロウソクと剣のようなアイテム、プリンセスキャンドルを出してプリンセスキュアデコルをセットすると、キュアハッピー達の姿がプリンセスフォームに変わっていく。

5人「プリキュア！プリンセスフォーム!!」

プリンセスハッピー「開け、ロイヤルクロック！」

キャンディ「皆の力を一つにするクルー！」

すると時計型アイテム、ロイヤルクロックが現れ、プリンセスハッピーがロイヤルレインボーキュアデコルをセットして

キャンディが押すと炎上に包まれたフェニックスが現れ、プリンセスキャンドルのトリガーを弾くと炎が燃え上がった。

プリンセスハッピー「届け！希望の光！」

5人「羽ばたけ！ 光輝く未来へ プリキュア！ロイヤルレインボーバースト！」

ハイパーアカンベエ「アカーーーーーンベエー!!」

ウルフルン「うわああああ!!!」

プリンセスハッピー「輝け！」

5人「ハッピースマイル!!」

プリンセスハッピー達がプリンセスキャンドルを前に突き出すと、フェニックスの口から強力なオーラが発射し、ハイパーアカンベエを飲み込み、プリンセスキャンドルが燃え上がってる炎を吹き消した時、ハイパーアカンベエは爆発し、浄化したのだった。

ウルフルン「ちくしょう プリキュアゝ 覚えてろよー!!」
シュンツ

負け惜しみの言葉をはきながら、ウルフルンは去ってしまった。

そして、貯水タンクは元の場所に戻り、元の空間に戻った。

キャンディ「新しいデコルクルー」

キャンディはアカンベエの黒っ鼻から出現したデコルを回収しよ

うと喜んで駆けつけたが・・・

バキユンツ

キャンデイ「クルツ!?」

ハツピー「え?」

ピース「キャンデイ?」

デコルを回収しようとしたキャンデイの前に謎の紫のビーム弾がデコルに直撃した。

ハツピー「あつ デコルが!?!」

デコルがビーム弾の影響で逆の方に飛んでいった。

パシツ

サニー「おい!そのデコルはうちのもんや!返さんかい!」

ハツピー達の目の前にいるのは、黒い仮面と黒装束を纏った少女であつた。

2話 オーデイウム ー憎しみー

ハッピー side

私達は呆然した。ウルフルンのアカンベエを浄化し、デコルが手に入ると思っていたのに、地面に落ちたデコルをキャンデイが回収しようとした時、紫のビーム弾に弾かれて、空中に舞ったデコルは黒い仮面と黒装束を纏った少女にとられた。

ハッピー「あなた・・・一体？」

私は彼女に返してと尋ねたかったけど、その子はデコルを右手で覆いつくした瞬間、

? 「ふん!!」

バキイイン!!

ハッピー「!?!」

サニー「!?!」

ピース「!?!」

マーチ「!?!」

ビューティー「!?!」

その子は凄まじい握力でデコルを破壊してしまった。

ピース「デ・・・デコルが・・・」

キャンデイ「壊れちゃったクル〜」

ピースは戸惑い、キャンデイはデコルを破壊されて涙を流してしまった。

サニー「おい!! コラツ!! なにすんねん!!お前!?!」

マーチ「そのデコルはキャンデイにとって大事なものだっただぞ!?!」

サニーとマーチは激昂して黒い少女に怒鳴り付けたが、その子は何もなかったかのように立ち去ろうとしました。

サニー「シカトすんなやああああ!!!」

マーチ「その曲がった根性叩き直してやるうう!!!」

サニーとマーチは怒りのままに黒い少女に向かつて、サニーはパンチ、マーチは強烈なかかと落として攻撃したけど、

バシッ バシッ

サニー「うわああッ!!?」

マーチ「うわあ!!?」

ピース「サニー!? マーチ!」

ハッピー「えっ 何? どうなってるの?」

ビューティー「わかりませんが、彼女はおそらく私達の目では見えない速さでサニーとマーチを一瞬で攻撃したのでしょうか」

ビューティーの分析で私は呆然とした。そして、彼女は今度は、標的は私達に向けた。

? 「ふっ!」

彼女はひとつ跳びで私、ピース、ビューティーのほうに襲いかかった。

ビューティー「ここは戦うしかありません! ハッピー ピース 来ますよ!」

私達は戦闘体勢に構えた。

? 「はっ ふっ!」

少女はパンチとキックで攻撃したが私達はすかさず避けて、ピースでダブルパンチを攻撃しようとしたが・・・

バシッ!!

二人「えっ?」

私とピースは驚いた。ダブルパンチを彼女は受け止めたのだが・・・一番驚いたのは彼女の両腕が鉛のように変わっていたのだった。

? 「武装色の覇気」

ブンッ!!

二人「きゃああああ!!!」

ビューティー「ハッピー! ピース! よくも!・・・」

ビューティーは氷の剣を作り出し、少女の方に迫る、だけど・・・

? 「剣か・・・ならこれね」

少女は謎のカードを取り出し、スマートフォンのような機械を出し、それを画面のほうに装着した。

《チェンジ！ スペシウムソード》

シユンツ

パシツ

? 「これで対等ね？」

ハツピー「え!?!」

ピース「スマホの画面の中から剣が・・・」

ビューティー「はああああつ!!!」

ビューティーと少女は剣と剣の勝負に出た。最初はビューティーの方が少女を押ししていると思つて私達は勝てると思ひ込んでいた。

・・・だが

キン！ キン！キン！ キン！ キン！

ビューティー「はあ はあ はあ はあ はあ」

ビューティーは前のアカンベエの戦いで必殺技を出してしまつたつかれがまだ残つていた。

? 「あら？もう終わり？ それじゃ・・・さっさと終わりにしてあげるわ」

少女はビューティーの方から少し距離を遠ざかり、剣を頭上に掲げ、

? 「ふうううつん!!!」

ドカアアアーーーーー

ビューティー「きゃああああ!!!」

ドサツ

ハツピー「ビューティー!?!」

剣の強力な衝撃波によつてビューティーは吹っ飛ばされ、私とキャンデイ以外の仲間がやられ、少女は私の方に剣を突き出した。

? 「キュアハツピー・・・私に向かって必殺技を出してきなさい」
ハツピー「えっ?」

？「私の活動時間もそろそろ切れるわ……だから最後にあなたの必殺技を受け止めてあげるわ」

少女の質問に私は何か迷った、私達プリキュアはバッドエンド王国からこの世界とキャンディの故郷、メルヘンランドを救うための力……今 目の前の少女に必殺技を撃てという願いに悩んでしまっている時に少女は私に向かって挑発した。

？「どうしたの？まさか、この力はこの世界とメルヘンランドを救うための力なのっていうんじゃないでしょうね？」

ハッピー「ど どうして それを!？」

？「あんた達のことなんてだいたいは検討がつくのよ」

ハッピー「あなた……一体何者？ もしかして バッドエンド王国の……」

？「バッドエンド王国の者でもなければ、メルヘンランドの住人でもない」

ハッピー「えっ!？」

？「私は人類の味方よ」

ハッピー「あなた……一体何者？」

？「私はオーデイウム 全てのプリキュアを憎み、全てのプリキュアを殺す者」

ハッピー「全ての……プリキュアを……殺す……?」

私は心の中で絶望した。今、目の前にいる少女が私達プリキュアを殺そうする者がいたことを……

ハッピー「なんで?……どうして私達プリキュアを憎むの?」

オーデイウム「あんた達は人類にとって危険な存在だからよ」

ハッピー「危険? ち 違うよ!プリキュアは世界を守る伝説の戦士だよ ヒーローなんだよ!」

キャンディ「そうクル お兄ちゃんもいつてたクル プリキュアはかつてキャンディ達の故郷 メルヘンランドを救った伝説の戦士だっていつてたクル!」

私とキャンディはオーデイウムに反論したが……彼女は溜め息を吐いて答えた。

た。

ハッピー「プリキュア!!!ハッピー・・・シャワー~~~~~!!!!」
これまで放ったハッピーの必殺技の中でも強力な必殺技がオー
デイウムに迫る。

オーデイウム「ふんっ!!」

オーデイウムは逃げずにガードの体勢に入り、ハッピーの放った強
力な必殺技に耐えようとした。

オーデイウム「うおおおおおおおおおおおおお
!!!!!!!」

ボカアアア~~~~~ン!!!

マーチ「サニー 大丈夫?」

サニー「マーチ すまんな」

サニーとマーチを肩を組んでハッピー達のいる方向に向かった。

ピース「みゆきちちゃん・・・ハッピーは!?!」

ビューティー「決着はついたのでしょうか?」

4人はハッピーとオーデイウムが戦った場所に駆け寄り、あたりを
見回した結果

ハッピー「ふえっ みんな」

4人「ハッピーー!!」

4人はハッピーの無事を喜び、駆け寄った。

ピース「ハッピーー 無事でよかったよ〜」

マーチ「ピース 泣きすぎだっば」

マーチはピースの泣き虫を見て少し泣きながら笑った。

ビューティー「あの人は?」

ビューティーはオーデイウムの方を探す。

サニー「へっあの罰当たりはハッピーの必殺技で吹っ飛んだやろ
?」

サニーは高笑いでハッピーの必殺技でオーデイウムを倒した・・・

のはずだった

オーデイウム「なるほど　それがあんたの最大の必殺技ってことね」

ピース「えっ?」

マーチ「まさか」

サニー「嘘やろ」

ハッピー「そんな!」

ビューティー「……………」

オーデイウム「まあ　これはただの挨拶がわりって奴ね　時間もそろそろ切れるし、今日は引き上げるわ!」

シユンツ

オーデイウムは黒い幕に包まれながら消えた。

ピース「消えちゃった」

サニー「負け惜しみやろ」

マーチ「まあ　次来たら返り討ちするけどね」

ビューティー（いまの声…………どこかで…………）

ハッピー「オーデイウム……………」

―放課後―

コーン　コーン　カーン　コーン　キーン　コーン　カーン
コーン

放課後のチャイムがなり響き、星奈は帰る準備をしていた。

星奈（くそ・・・動いただけでも傷にさわるわね・・・帰ってはやく治療を施さなきゃあ・・・）

星奈は急いで帰る準備を済まそうとしていた矢先に

みゆき「あつ黒井さん」

教室のドアからみゆきが除きに来た。

星奈「キュアはっじやなかった！ 星空さん!？」

みゆき「黒井さん 帰るの？ じゃあ私と一緒に帰ろうよ」

星奈（まじかよ!?!）

星奈 side

星奈「星空さんって部活とか入らないの？ 他の4人は部活に入ってるようだけど」

みゆき「うーん 私に合う部活いろいろ探したんだけどどれもなくて、えへへ」

えへへじゃねーだろ!!こいつ一体どこまで頭の中がお花畑だよ!

星奈「そういえば・・・星空さん・・・あなたって好きな本ってる?」

私は少しまじめな質問をした。

みゆき「好きな本? うん あるよ 例えばシンデレラでしょピーターパンでしょ桃太郎に金太郎に浦島太郎!!そして私の夢はシンデレラのようなお姫様そして好きな人はピーターパン!だよ」

星奈「へえー（なんかはかねー夢だなー）」

私は心の中で星空みゆきを哀れむように見た。

星奈「星空さんってさ どうして、そうまでして絵本が好きなの? 私達のような年の子にはもう卒業していると思うんだけど?」

みゆき「確かに、ほかのみんなからは少し変だってからかわれるけど、絵本は私にとって笑顔を運んでくれるものだって信じているから」

星奈「笑顔……」

……お姉ちゃんの笑顔があれば、りほ元気いっっぱいだよ……
私は思い返した。かつて妹が私にいったあのうれしい言葉……
だが……

……あなたの笑顔……もらうね……

ズキッ

星奈「くだらん」

みゆき「えっ」

星奈「あなた……シンデレラやピーターパンがこの世に誕生した
ときその物語の結末がどうなってるのか知ってる？」

みゆき「へっハッピー……エンド……じゃないの？」

星奈「ちがうわ！ シンデレラもピーターパンは元か
ら……悪役よ」

みゆき「えっなんで シンデレラもピーターパンは悪役じゃないよ
！ シンデレラもピーターパンも「星空さん!!!」

星空みゆきが最後まで反論しようとしたが、私は容赦なくこう答え
た。

星奈「みゆきさん これだけは覚えておくことね。表もあれば必ず
裏もある。この言葉を覚えておきなさい」

みゆき「黒井……さん?……」

私はもう逃げない！逃げられない！私はもう地獄と怒りというな
の境界線をこえてんのよ あんた達を全てぶちのめすため
に……

？「はあ まさかガーディアンがこの町にも来たとか少し勘弁してほしいわ・・・しかもあの黒いお嬢ちゃん、私達と同等の力を持っている気がするわね。なんなのかしらね・・・」

まあ いいわ 邪魔な存在だったら消せばいい話だし、我が長 プリキュウス様のために・・・うふふふ・・・」

その女は手には三枚のカードを持ち、不気味に笑った。

設定集

↓設定集↓

世界設定

20XX年の1年前にふたりはプリキュア（無印）がドックゾーンを倒し、今年には各日本中に別の悪の組織が出現してしまい、同じ時期に別々の町に新しいプリキュアが出現している。（ふたりはプリキュアマックスハートとキラキラプリキュアアラモードまで）

主人公設定

黒井星奈（オーデイウム）

スマイルプリキュアが活躍している町、七色ヶ丘にやって来た転校生、その目的は、プリキュアの監視、プリキュアの謎を解明するための任務を任されたガーディアン、彼女自身はプリキュアを全て根絶やししたいという執着心がある。彼女は学校では成績優秀だが、先生いわく彼女の笑顔、笑っている顔が一度も見たことがない。それは後に語っていく。モデルはRWBY のブレイク ペラドンナをモチーフ

武器設定

彼女の持っているものは全て異世界のものである。この異世界の武器をどうやって手にいれたのかその後語っていく。

ワールドフォン 見た目はスマートフォンに似ているが、その正体は武器カードを画面に装着（スキャン）することで異世界の武器が使える。あるいは異世界、あるいは過去、未来の通信も出来る優れもの

星奈が所持している武器

スペシウムソード、フリーガーハマー、ソードメイス、ボーイズMk1対装甲ライフル、ソニックアロー、ウェブシューター、シユベルトゲーベル

覇気

彼女はとある世界で覇気を覚えている。彼女の持つ覇気は見聞色、

武装色の2つである。

オリキャラ設定集

ポンポー

星奈が出会うバッドエンド王国の幹部候補、モデルは絵本の力チカチやまの狸であり、本当は幹部になるはずだったが、ウルフルンの策略によってへまして落ちてしまった。今でも、それを根に持っている。いつも三幹部達のことをバカのウルフルン、アホのアカオーニ、ボケのマジヨリーナと呼んでいる。情には熱い。星奈と一緒にいることで、自分自身に変化が起こる。

紺野秋人

七色ヶ丘中学三年生で周りから「猛犬」と呼んでいる。元々は弟思いの優しい人物だったがある1年前の事件でプリキュアを毛嫌いしている。彼自身、プリキュアを正義の味方とは思っていない。星奈とは唯一の話し相手の1人と思っっている。キャラモデル p x i v 漫画のドブラが来るのアキラをモチーフ

金田匠

七色ヶ丘中学三年生、見た目は嫌みなメガネ男子でよく人を小馬鹿にする癖がある。星奈にはすこし、好意を持つてるようだが、彼女にとってどうでもいいと思っっている。パソコン収集が得意。キャラモデル ウツデイクーンの広瀬タクヤ

白銀希美

七色ヶ丘2年生 特徴的なのは前髪が顔を隠しているようで引っ込み思案で自分に自身が持てない女子中学生、絵を描くことが好きで友達もあまり出来ず、不良の女子高生のグループに絡まれているところ、星奈に助けられ、希美は星奈を友達として親しくなりたい感じている。キャラモデルは 魔法先生ネギまの宮崎のどかがモチーフ

空野主(そらのつかさ)

七色ヶ丘中学2年生 七色ヶ丘新聞部で将来はジャーナリストに

なること、噂を聞いたとき黙ってなれない性格、星奈のとある戦いを間近に見てしまい、そのせいでよく星奈に質問をされていく。星奈にとってめんどくさい相手と思っっている。彼女は1年前の大事件の真相を探りたいと考えている。彼女はプリキュアを見て「なんで、私達と対して変わらないほどの子供達が戦っているのか？」考えてしまう。キャラモデル モブサイコ100の米里イチをモチーフ

3話 狸集会

―星奈side―

キーンコーンカーンコーン キーンコーンカーンコーン

先生「次の理科の時間は理科室でやるので、早めに理科室に移動するように」

授業の終わりに先生が次の授業をする場所をお知らせして教室を去った。

私は早速、理科の授業の準備をしているところ、私にとって今、最も会いたくない奴等がやって来た。

みゆき「くろー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！！」

星奈「ぐえっ!?!」

後ろから私の背中に衝撃ななにかにぶつかった。

星奈「ほ・・・星空・・・さん」

みゆき「えへへ 一緒に理科室に行こう」

そう私にとって最も会いたくない奴等の1人、星空みゆき

こいつは気に入った人間にはしつこいほど付きまとい、絵本が大好きで頭の中がお花畑という私に言わせれば馬鹿の塊で出来た生き物である。

あかね「コウラ！ みゆき！ あんた黒井さんが迷惑しとるやろ！

はよ どけてあげんかい！」

やよい「黒井さん ごめんね」

なお「まあまあ あかね そんなに怒らなくても」

れいか「みなさん ほかの人達も理科室に向かいましたから私達も早く向かいましょう」

星空みゆきの後ろから会いたくない奴等がぞろぞろとやって来た。星空みゆきの後ろから2番目のこいつは日野あかね、こいつはお笑い好きであり友人を貶す奴は絶対許さないといい暑いヤツであり、元々は関西出身で関西弁でツッコミが上手く実家はお好み焼き屋であり所属している部活はバレー部であり情報ではこの学校に体験入学してきた外国人に一目惚れしているらしい。

黄色い髪にカチューシャを着けて、すこしオドオドしている娘は黄瀬やよい、こいつは泣き虫で引つ込み思案でありながら、絵は上手で、ヒーローオタクでオカルトオタクでもある。私から言わせるとオカルト好きなのになんで引つ込み思案で泣き虫なのか不思議だと思っている。前に男の子向けのロボットアニメのおもちやを買ったりしたこともあるらしい。実家は母親と一緒に暮らして、父親は幼い頃に他界したらしい。

緑川なお、こいつは正義感が強く、理不尽なことは納得しない性格であり、部活は女子サッカー部でレギュラーを勤めている。この体型で似合わないほどの大食いであり、足は陸上部に負けないほどの俊足である家族は弟と妹はたくさんおり、父親と母親は共働きであり、一人で弟や妹の面倒を見ている。弟や妹には内緒にしているらしいが虫とお化けが苦手らしい

青木れいか この女はこの学校の学級委員を務めており、才色兼備かつ上品な性格であり女子達の憧れである。緑川なおとは幼馴染みの関係であり、三人とは違って名を呼び捨てでいうほどの仲である。卑怯なやり方を嫌い、怒らせると一番怖いらしい。

そしてなぜ私がこの5人を嫌っているのか?・・・それは・・・プリキュアだからだ。

だが、私はある任務でコイツらを監視しなければならぬ。そして、コイツらが・・・プリキュアがなぜこの世界に誕生したのか?

情報によると1年前の重大事件でプリキュアはドックゾーンの首領ジャアクキングを打ち倒すことに成功したかに思えたのだが・・・

今、そのドツクゾーンが最初に出現したプリキュアのいる街でまた活動を再開しているのだ。しかも、各地の街でありとあらゆる悪の組織が出現し、新しいプリキュアが続々と出現しているのである。

悪の組織とプリキュア、この二つの謎を解明するため、私達、エージェントが各地の街でプリキュアを監視、謎の解明を任されているのである。そして、このことは絶対にプリキュアあるいは一般人に知られてはいけないのだ。今、ここにいるコイツらと学校の人間にも……

星奈「悪いけど、あなた達に構ってられるほど、暇じゃないのよそれじゃ」

みゆき「あつ 黒井さん!？」

私はすかさず、教科書とノートを持って、教室を出た。

れいか「……………」

私はやっとあの5人から解放され、廊下を歩いているところ、トイレの方で生徒たちがざわめいていた。

星奈「ねえ 何かあったの？」

私は後ろの男子に声をかけた。

男子生徒A「あー あいつだよ 『猛犬』だよ猛犬」

星奈「猛犬？」

女子生徒A「黒井さんはここに転校してきたばかりだから、知らないけど七色ヶ丘中学の中で最も恐れられているのがいるのよ。ほらっ 来た!」

女子生徒が指差した方向を見ると、男の先生が男子トイレの中から引つ張って来たのが短髪で制服のボタンがはずれていた。そして目付きはほかの生徒を恐れられるほどの目付きであり、彼があのだ犬である。

先生「おい!! 紺野!!また生徒に暴力を振るったのか!?!」

秋人「……………」

先生は紺野とかいう猛犬の生徒に怒鳴り付けたが、紺野は黙っていたが先生の目の前に口を出してこういった。

秋人「あいつらが気に入らなかつたから」

やる気のないような声で言い放った。

先生「お前のせいで三人の生徒が保健室にいく羽目になったんだぞ!?! どう責任を取るつもりだ!! え?」

秋人「自業自得じゃね?」

先生はぶちきれたのか紺野の腕を引きずって職員室に連れてった。

男子生徒B「紺野の奴、本当に荒れてんな」

男子生徒C「うん 噂じゃ不良の高校生グループを一人で病院送りにしちゃったって話だぜ?」

女子生徒B「うそ! こわーい」

女子生徒C「でも 紺野君って去年はおとなしい方だったのになぜか1年前の重大事件がどうとかって怒鳴っていたもんね」

星奈（1年前の重大事件!?!）

あの紺野っていう男……………1年前の重大事件であそこにいたのかしら?すこし調べる必要がありそうね……………

「3年生の教室」

教室では猛犬こと紺野秋人の話で持ちきりだった。

男子D「まじかよ!? 紺野またやらかしたのか!?!」

男子E「ああ もうこれで何回だよって話だよ」

男子F「あいつがこの学校に登校してる時点で檻にいれられてい
るっていうもんだよな」

男子G「いつそ学校から出ていってくんね? って感じだしな?」

3年生の男子が紺野の愚痴を言ってる時に生意気な声が聞こえた。

匠「おい 受験の準備の邪魔すんなよな」

教室の窓の方の机で黙々と受験用のテキストを見てる少年は金田
匠

猛犬こと紺野秋人と同じ3年生でメガネでモヤシでがり勉の少年
である。

男子E「はあ なんだよ? 金田 ここ受験会場じゃあるめーし」

男子G「がり勉野郎がえらそうによ」

匠「紺野ぐらいでビビってんじゃねーよ」

男子F「けっお前だって前に紺野にぶん殴られていたじゃねーか
?」

私は今日の授業が終了してあいつらに出会わないように学校を出た。

星奈「さてと、とりあえず、スーパーで買い物……んっ？」

私が今日の夕食を作るためスーパーで買い物をするようと考えていたところ路地で私と同じ中学の制服の娘が3人の女子高生に絡まれていた。

女子高生A「おい 約束の金 準備したのか？」

希美「い……いえ……それは……その」

女子高生B「ちっチンタラしやがってよ ほら！ 寄越せよ！」

希美「あっ」

女子高生C「なんだよ たくさん あんじゃん……なんだ？これ」

不良の女子高生のひとりが財布を強引に取られたとき、鞆の中から一冊の絵がこぼれ落ちた。

女子高生C「……なんだよ！ すごい 下手くそじゃん」

女子高生B「えーどれどれ ほんと!!まじウケるしー」

女子高生の二人がその娘の絵を見てゲラゲラ笑いだしているところ、リーダー各の女子高生が絵を見てゲラゲラと大笑いした。

女子高生A「あんた なにこのダッサイ絵？ まるで幼稚園児の描いた絵にしか見えねーじゃん」

希美「返して それは大切な……」

ビリッ

女子高生A「糞がつくほど下手くそな絵だぜ　ぎやははははははははははは!!!」

女子高生B「ぎやははははははは!!」

女子高生C「ぎやははははは!!」

彼女は大切な絵を貶され、破り捨て、挙げ句、爆笑させられ、泣きじやくつていたところ・・・

バキッ

ドサッ

女子高生A「あっ?」

女子高生「え?」

希美「?」

私は達の悪い女子高生の一人をぶっ飛ばし、両手をパンパンと払った。

女子高生A「おい　てめえ!!　なにもんだ!?!」

星奈「只の通りすがりの女子中学生よ　かつあげ不細工先輩」

女子高生A「ぶ・・・不細工だと!?!」

女子高生B「てめえ　その制服　そいつの連れか?」

星奈「いいえ　只　学校が同じってだけよ」

希美「・・・・・・／＼」

星奈「あんた達のやってることってまるで豚に餌ちようだいつて練習してるかと思っただわ」

女子高生A「豚だと!?!　おい!　コイツぶっ飛ばしちまえ!!」

女子高生B「あいよ!」

女子高生の1人が私に思いっきり殴りかかってきたが・・・

バスっ!!

女子高生B「ぶっ」

ドサッ

私は奴の腹に掌底一発でぶっ飛ばした。

女子高生A「てめえー!! 調子に乗ってんじやねーぞーぞーぞー!!!」

希美「危ない!」

リーダー各の女子高生が私に豪腕のパンチを出したが。

星奈「ふん! たあつ!」

女子高生A「ぶっ」

ドーン

倒れた子分の女子高生の音とは違って、太い音だ。

星奈「はい これ」

希美「あ・・・ありがとう／＼／」

私は財布と破れた絵を彼女に返し、去ろうとした。

希美「わ・・・私は白銀希美です えつとあなたは・・・」

後ろから彼女の自己紹介が聞こえ、すこし止まり、私も自己紹介した。

星奈「黒井星奈よ・・・」

そういつて私は彼女から去った。

希美「黒井・・・さん／＼／」

？「ちよつとそこのあなた」

星奈「ん？」

私は買い物を終え、そろそろ帰宅しようとしたとき後ろから声が聞こえ振り向いたとき、すこし不気味な狸のお面を被った女性が私に話しかけてきた。

？「最近、あなたは何かにお悩みになっているのでしょうか？友達あるいは学校の不満とか」

星奈「生憎、私にそんな不都合なことなんてありませんので、それじゃ・・・」

？「お待ちなさい！ 私は貴方を救いたいと思つていたんですよそれを棒に振るつては貴方も私も不幸になつてしまいます ですから、我が教祖様に貴方を救えと伝えられ、ここまでできたのですよ」

これつて一種のオカルト宗教つて奴であろうか？しかし私はその教祖様が私に救いを差しのべてくるとは私にとつては片腹痛かつたので、その教祖様とやらに会つて文句いつてやろうと考えた。

星奈「わかりました。ではその教祖様に会わせてください」

？「わかつていただけましたのね！ では、私についてきてください」

私は女性に案内されると裏路地を通るとなぜかすこし変わった家があつたのだ。看板に狸集会和書かれおり、私は中に入った。

ザワザワ ザワザワ ザワザワ

会場に入った私が見たのは、皆狸のお面を被つて、入つてきた私を目の前のステージへと連れていった。

？「あれ もしかして黒井さん？」

横から私に声をかけてきたのは、同じ七色ヶ丘中学の制服を着た女子中学生だった。

星奈「えっと あなたは・・・」

？「知らなくても無理ないわ 私は空野主 あなたと同じ七色ヶ丘中学2年生よ」

彼女がステージの上で自己紹介しているときにステージの下にいる人間たちがざわついた。

？「おい ポンポー様だ！」

？「ポンポー様が来るぞー」

？「我らの救いの教祖 ポンポー様が来たぞー」

バタン

ポンポー「みなさあーん みなさんは幸せですか？」

会場の入り口から現れたのは周りにいるほかの人間が着けている狸のお面よりすこし大きく体は布で覆われた大男だった。こいつがその教祖様らしい。

そして、この後コイツは思い知らされるであろう。私がなぜ、幸せじゃないのか、なぜ笑顔ができないのかを・・・

パチ

いきなり何いってんのコイツは？私のはあの狸のお面を着けた女に案内されてきたのよ！誰もあんたの信者になろうだなんて冗談じゃないわ！

ポンポー「幸せの種を植えるためには土壌を開拓しなければなりません。人々の心は皆塞ぎきっている。これでは幸せの芽が出ません。さあ、この二人に導かれし不幸な少女達”顔を見て分かるでしょう”

ポンポー「見るからに不幸！」

ポンポー「原因は笑顔がない。」

ポンポー「笑いなさい。苦しくても笑っていれば、心が豊かになるでしょう。豊かな心は幸せの肥料であり、栄養。いつでも笑顔でいれば幸せになれるということ、絵本の狸のお腹がふつくらと膨らむようにそれが我等”狸集会”の教えです。逆に……笑わなければ不幸な人生が続く……死ぬまでね。」

星奈「……………」

主「……すこし質問いいですか？」

ポンポー「はい、何なりと」

主「狸集会 一週間に設立？ たった一週間でこんな人数の盲信者を囲ったっていうの？ 信じられないわね！怪しいわ。」

ポンポー「おやおや……君は、信者が連れて来た訳じゃなさそうですね。」

主「七色ヶ丘中学新聞部の2年の空野主です。あなた達の悪い噂を検証した記事を学校新聞部に載せるため……取材をさせてもらいます！」

ポンポー「悪い噂？」

主「集団催眠による洗脳や強迫観念の植え付けよ。実際、この空気は異常だわ」

ポンポー（怪しいと思う集団に一人で乗り込み、物怖じせずハキハキと喋る度胸、素晴らしい。これで中学の新聞部とは驚きだな……

有望だ)

ポンポー「よろしい。では一つ証明しよう。私がインチキでは無いということをして・・・」

教祖は周りを真っ暗にしその時、ステージの上から巨大なスクリーンが出現し、映像が映し出された。

ポンポー「この方は公園で一人ベンチで座っていたのです。理由は会社の不安、家族の苦労という苦しい日常に耐えきれなかったのです。だが、私は彼に救いの手を差し伸べたのです。かつてイエスキリストが飢えや病気に苦しんだ人々に手を差し伸べたようにね。その証拠に・・・来なさい」

ステージの上が上がってきたのは、スクリーンの映像に映った男性であつた。その男性はスクリーンに映った弱々しい性格ではなく顔が幸せに溢れた顔であつた。

男性「私はかつて苦しみで縛られて来ましたけど、今は私は心が解放され、家族や会社から解放され、今やりっぱな信者に転職しました。」

ポンポー「どうですか？お嬢さん？これでもまだインチキであるかと？」

主（家族や会社から解放して・・・まさか全部手放したってこと！じゃあ、ここにいる人たちは皆、現実逃避した人たちの集まり？）

空野主は周囲の信者達を見て思わず、ぞっとした。

主「・・・この取材、私の手に余ると判断したので、ここで一度失礼します。」

空野主はここは一旦退いて洗い直したほうがいいと判断し退散しようとしたが・・・

ポンポー「駄目です あなたは本来物事を放置する傍観者であつたにも関わらず、悪戯に狸集いに踏み込み我々の幸福に疑問を呈した!!!そのまま帰られては後腐れができます!!!・・・なので帰しませんよ笑うまで。」

主「いいえ笑いません！こんな気味の悪い所で笑うなんて死んでも嫌です！」

信者「なら仮面をつけましょう ポンポー様の力で矯正されます。」
カポツ

主「ちよつと！ なにすん．．．の．．．よ」
仮面を強制的につけられた主は何故か頭の中で考えていることが
どうでもよくなったという意識が溢れていた。

主「何これ？．．．なんか．．．頭の中が．．．どんどんど
うでもよく．．．．．」

ポンポー「もういいでしょう はずしてあげなさい」

信者は主の仮面を取ったとき、その顔は幸せそうな笑顔だった。

ポンポー「おおつ、最高の笑顔ではありませんか！あなたには幸福
になる素質がそんなにもあったという事です！」

信者「おめでとう」

信者「印象変わったよ。」

信者「可愛くなった！」

信者「眩しい笑顔だ。」

信者「輝いて見えるわ。」

信者「これからはいい記事が書けるんじゃないかな？」

主「誰か．．．．．助けて．．．．」

バチツ

ポンポー「ん？」

星奈「へえ この仮面の中にはこんな仕掛けがあったとはね」

私は狸の仮面の裏の中から小さなピエロのシールを取り出した。
どうやらこれを使って信者達を集めたいわね。

ポンポー（笑っていない!?!…しかも幸福の源であるバツドステツ
カーが取り出されている!?)

ポンポー「待ちなさいそのお嬢さん そんな浮かない顔で生きて
いくつもりですか?ここの皆と幸福になることで薔薇色の気分にな
れるのですよ!」

あわてながら私に説得しているが

ポンポー「笑わない人は人生を損している。これを機に変わってみ
ては!」

星奈「……もう私は嫌っていうくらい損しているのよ」

あいつらのせいで……

ポンポー（くそつたれが こんな無愛想なガキに俺様の計画を台無

しにしてたまるか！狸集会は俺様がバットエンド王国幹部になるための出発点なのだ。こんな糞餓鬼に躓いてる場合ではない．．．!!」

ポンポー「くつくつく　ならゲームでもしていかないかい？有名なお笑い芸人のネタを笑ったら負けの単純なゲームを．．．」

ポンポーはパンパンと手拍子し、ステージの上から三人の男性がステージの上から上がってきた。

ポンポー「ウチの幹部三人とこのスクリーンに映し出される芸人のネタを見て笑って牛乳を吹き出した方が負け、そして君を帰してあげよう　どうだい？」

空野主（駄目よ！これは罠よ！逃げて黒井さん）

星奈「それならシンプルでいいわね」

空野主（なんで受けてたつのよ！）

ポンポー「それじゃ．．レディー．．ゴー！」

私は牛乳を口に含み、スクリーンに映し出された芸人のネタが出た。

「ナチュラルパワーは野生の力　キュアゴリラ！」

ブツ

幹部一人　アウト！

二回戦

「それは俺の顔がデカイからや！」

ブツ！

幹部二人目　アウト

ポンポー（なんでだよ）

幹部「ふん　幹部なのに情けないな。私の耐久力で彼女を笑顔にさせてやろうじゃないか」

三回戦

「鬼瓦！」

ハブツ

幹部三人目 アウト

それは当然であるこの幹部三人組は皆こいつに幸福というインチキな言葉で操られたいわば人形。しかもこんなバカがつくほどの勝負で私に勝負を挑むというのは彼らにとって自爆以外なんでもない。

星奈「では お先に失礼します。」

私はすかさずここを後にしようとしたが、

ポンポー「待て！ 次は私が相手だ」

星奈「は？」

「ポンポー様!?!直々に」

「すごい！笑わない少女相手にポンポー様が本気を出すぞ！」

「ポンポー様!!」

星奈「ちよつと待って、これはどういうつもりです。私は三人を勝ち越し帰っていいはずよ」

私はポンポーを鋭く睨みながら言った。

ポンポー「確かに君は三幹部、全て勝ち越した!・・・だが、最終対決があるのだよ・・・そう、私との対決がね・・・」

わあーツと歓声が鳴り響く。こいつ今、考えたな。

ポンポー「私と勝負し勝ったら君は家に帰ることを許そう・・・嘘じゃない」

星奈「・・・これで最後よ」

私は仕方なく勝負に挑むことに決めた。

ポンポー（勝ち譲らない 必ず牛乳を吹いてもらうよ）

「では・・・レディー・・・ゴー！」

星奈「!?!」

瞬間、私の表情筋が躍動した。その牛乳には・・・

星奈「ぶわはあっ!!」

明らかになにかが入っていた。

ポンポー「笑ったー!?!」

「笑った」

「笑った」

ドサドサ ドサドサ

ポンポー「な!!？」

星奈の怒りの衝撃波によって信者達は次々と倒れ気絶していった。
ポンポー「な．．な．．なんだと？」

あまりの出来事にポンポーは星奈の中の脅威に恐れを感じた。

ポンポー「な．．何者だ!?!．．貴様」

震えた手で星奈に指を指すポンポー

ポンポー「お前．．まさか．．噂に聞く伝説の戦士プリキュア
なのか？」

ピクツ

ポンポー「だったら俺様がバットエンド王国幹部になるためには環
を乱す異分子はここで帰すわけにはいかねえ」

ポンポーの言葉からプリキュアという言葉聞いたとき星奈の怒
りが頂点に達した。

星奈「プリキュア．．．．．違わうわ！私は．．．」

お姉ちゃん．．．．．助け．．．．．て．．．．．

《チェンジ！ スペシウムソード》

星奈「プリキュアを憎む者だ!!!」

ドガアアーーーーー！！！！
ポンポーは星奈を片手で思いっきり振り回し壁に叩きつけた。

ポンポー「へっ生きてるか？・オメエにこの集会の真実を教えてやるよ。俺はバッドエンド王国の住人だな、ある理由で俺は幹部候補に成り下がっちゃった訳よ・幹部候補になった奴は人間界で成果を上げなきゃならねえ、俺は人間界でどうやって人間どもを絶望まで追い込めるか考えた。伝説の戦士プリキュアは人間の幸せを守るために戦う戦士・・そこで俺は思い付いたその幸せを糧にしバッドエンドに変えてやろうって計画をな」

ポンポーは地面に落ちていた信者の仮面の裏の方を見せた。

ポンポー「この仮面の裏にはこのバッドステッカーが貼りついて、本当はこのステッカーをつけた奴はバッドエンド状態になり肉体がボロボロになっちゃうヤベエ物だが俺は逆にステッカーを改造し大量の仮面に貼り付けた。そして信者達が仮面を被ったとき中ではステッカーの力で心も体も幸福なりそのかわり人間の歪んだ心を吸収し、たちまち幸せ気分になっちゃうのよ、だがこれは薬物のように仮面をつけたい心が強くなり、被れば被るほど、歪んだ心を吸収し続けやがて体は仮面を被り続けたせいで体は年寄りのような体になっちゃうのさ」

説明を終えたポンポーは片手で仮面を壊した。

ポンポー「この計画で人間どもの幸せにし続けじじいやばあのような体になったとき溜まりにたまったこのバッドエナジーをこいつらに放出し、こいつらは今までやって来たことに騙されたことに気づいたときこいつらはたちまちバッドエンド状態になりより大量のバッドエナジーが手にはいるという計画になる・・はずだったんだがよ、てめえが現れたせいで計画がぶち壊しだよ」

ポンポーの背中の赤いラインが高温になり口の中から火炎を放射した。

ポンポー「だから、てめえはここで焼け死ねやあーーーーー！！！！」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!
星奈「きや！」

ポンポー「つしやあ 直撃っ！」

ポンポーの火炎放射が星奈の顔めがけて放射し、体勢を立て直した。

ポンポー「ここで俺は死ぬわけにはいかねんだよ！いずれ俺は正式な幹部になり、俺を馬鹿にしてきたバカのウルフルンやアホのアカオーニやボケのマジョリーナを見返すことが出来る。そして俺はピーロ様の充実な家来として大出世するっっていう夢がよおお!!」

ポンポーの両腕と両足が一瞬で再生し、両手から刀と同じほどの爪で星奈にとどめをさそうとした。

ポンポー「テメエみてえな小娘に負けるわけにはいかねんだよおお!!」

星奈「あら そう・・・じゃあ、死になさい！」

ブン

バシユーーーーー!!!!!!

星奈は気合いと殺気の込めたスペシウムソードを降り下ろし強力な斬撃と衝撃波によってポンポーは跡形もなく消し去った。

れいか「今の音は？」

なお「れいかーどうしたの？」

れいか「いえ・・なんでもありません」

信者「あれ俺達何してたんだ？」

信者「ああ　なんか変な夢を見てたよな」

主「．．．．．」

私は今……白いお花畑で寝ていた。雲一つない青空で気持ちよく寝ていた。……そして

? 「お姉ちゃーん！ 星奈お姉ちゃーん」

星奈 「りほ!？」

母 「星奈」

父 「星奈」

祖父 「星奈」

祖母 「星奈ちゃん」

向こうから私の大好きな家族、妹のりほ お母さん お父さん お
じいちゃん おばあちゃん

星奈「お母さん！お父さん！おじいちゃん！おばあちゃん！」
私は涙をぬぐって家族のもとに走り出して、抱きついた。

だが・・・

星奈（あれ？・・・なんか生温かい？）

私は家族を抱いた瞬間、生温かい液体に触れたような感触に私は抱きついた手の表面を見ると・・・

星奈「ち・・・血!？」

そう血だった。その時空は黒と赤に染め上げ、お花畑も一瞬で枯れ始め、そして家族も全身の体から血が沸き始めた。

星奈「みんな!?! どうしたの りほ？ りほ!?!」

りほ「お姉ちゃん・・・痛いよ・・・あちこち全身痛いよ・・・助け・・・」

星奈「あ・・・あ・・・」

家族が全身血まみれになり血に染まった家族は別の姿に変わった・・・それは・・・

スマイルプリキュア? 「夢の中なら安心できると思った? 星奈ちゃん」

星奈「やめてええええええええええええええええええええええ!!!」

星奈「はっ!？」

どうやら私は夢を見ていたようだった。あの戦いのあと疲れがたまつて家に帰つてぐっすり寝たんだ。しかしあの夢……………どこまで……………

？「すごい汗だな？　ほいタオル」

星奈「ありがとう」

ん？……………この家に住んでいるのは私以外いないはず……

まさか……………プリキュア……

「私はあたりを見回すとそこにいたのは

ポンポー「よっ　相棒」

そこにいたのは斬撃で木っ端微塵にぶっ飛ばしたはずの元インチキ教祖で化け狸のポンポーだった。

6話 コンビ誕生？

ポンポー「起きたら俺様がいて驚いたか？ まあ昨日の敵は今日の友って言うしな」

私は呆然とした。この家には私一人しかいないのに今、目の前にはぬいぐるみサイズのポンポーがいるのであった。

ポンポー「こういつちやなんだ。まつこれからはよろしくなあいグボツ」

ドス！ドス！ドス！ドス！ドス！ドス！ドス！ドス！ドス！ドス！ドス！ドス！ドス！ドス！ドス！ドス！

ポンポー「ちよっ！おまつ！タイム！タイム！」

私は今日の前のことが夢だと思って連続で思いつきり踏みつけていたところ、ポンポーが止めに入った。

ポンポー「びつくりした。何してんのお前？」

星奈「いや、これも夢かなと思って。」

ポンポー「そういう時は自分のほっぺをつねるんだろうが!!」

ポンポーはすこし深呼吸して真面目そうな話をした。

ポンポー「昨日、星ちゃんに敗北して、俺様はわかったんだ。上には上がいるっていう事をな！」

星奈「誰・・・？」

ポンポー「ポンポーだよ！ほら！昨日お前と死闘繰り広げた教祖の！」

《チェンジ！ スペシウムソード》

ポンポー「わあ！ 待って待って！話を聞いて！」

ウルフルン「よお その腹出し狸」

ポンポー「!？」

ウルフルン「お前のお陰で俺様は見事落ちなくてピエーロ様直属の幹部になれたぜ♪ あばよ」

ウルフルンは自分でやりとげたかのように口笛を吹きながら去っていった。

ポンポー「俺様の野望は全てあのバカのウルフルンに奪われたのさ。挙げ句の果てに幹部候補っていう予備みたいなどこについてまっつて」

星奈「あんた、本当に成績優秀だったの？」

私はすこしこいつに疑問を抱いた。ある意味チョロい方かと感じられる。

ポンポー「だが、俺様は挫けなかった！幹部候補になっても俺は人間界で優秀な成績を出すため、狸集会と呼ばれる集会を出来たのはよかったんだが……」

星奈「私が出会ったことでまたふりだしに戻ったって感じね」

ポンポー「狸集会を設立するのにいろいろ勉強したんだぜ！」

星奈「……………」

ポンポー「なあ 星ちゃん……俺と組まねえか？」

星奈「は?！」

ポンポー「俺達バッドエンド王国の住人はピエーロ様復活のためブリキユアを倒そうと計画している……そこでだ！」

星奈「あなた、このカバンのストラップに化けることは出来る？」

ポンポー「ストラップ？へっ俺様は狸だ！こんなカバンのアクセサリーなんかチョロいもんだ！ ドロン！」

ポンポーは宙返りした瞬間、ボワンと煙を出した時カバンのチャックのところに狸の置物のストラップが飾ってあった。

星奈「へえ やればなれるのね」

ポンポー「どんなもんだい」

ポンポーが自信満々で星奈に自慢した。

星奈「あとポンポー・・・1ついっておくけど」

ポンポー「あ？ なんだ？」

星奈「私の名は星奈よ 黒井星奈、あんたに星ちゃんって呼ばれるとなんか腹立つから次言ったら、ズタズタに切り裂いてあげるから・・・」

ポンポー「お おう わかったぜ 星奈」

ウルフルン「キュアサニー・・・てめえの全てをぶち壊してやる・・・」

7話 プリキユアを憎む理由

―廊下―

3年男子A 「まだ来てないみたいだな紺野の奴」

3年男子B 「よお金田 本当に紺野相手に勝てるのか?」

匠 「ふん!常識で考えてみるよ 眼鏡をかけた奴を殴れるか?弱者は守られるんだ。世間が味方についている」

3年男子C 「さすがオタクの知恵袋」

3年男子A 「俺も明日から眼鏡かけようかな?」

匠 「くつくつく 今や世界を動かしているのはオタクなのさ……
紺野なんざ僕の理論攻撃でドガンしてやるぜえ!!ヒャーハッハッ
ハッハッ」

ヒソヒソヒソヒソ

3年男子A 「金田、ここで笑うのはさすがに恥ずかしいぜ」

匠 「……………／／」

3年男子C 「おい!来たぞ!!紺野だ!」

コッ コッ コッ コッ コッ

秋人 「……………」

廊下を無口で歩く秋人は何か不機嫌だった。

匠「よお紺野 おはようさん」

コツ コツ コツ コツ

秋人「・・・・・・・・」

匠「よく堂々と学校にきたもバキツ！

ドサツ

秋人「くそつたれが!!」

それだけをはきながら、秋人は3年生の教室に入った。

3年男子B「うわ〜顔面パンチかよ」

3年男子A「金田、今度から眼鏡はずした方がいいぜ？」

ピクピクピク

匠「こ・・・こんなはずじゃ・・・・・・・・」

?「あの・・・すいません」

金田「ん・・・」

匠は顔面パンチされた鼻を押さえている時、目の前から女子の声が聞こえ、振り向いたとき

匠「おっふ!／＼／＼」

星奈「おっふ?」

黒井星奈だった。

匠（なんだよ?・・・下は黒いストッキングに頭はロングパーマに目はキラキラな黄色い目の美少女は!?!／＼／＼）

星奈「?」

興奮した匠は鼻を押さえている方から鼻血が出てきて、星奈はポケットからポケットティッシュを差し出した。

星奈「先輩・・・だったかしら？はいこれ」

匠「あ？ああ、有り難う・・・ところで君ここでは見ない生徒だけど、転校生？」

スタスタスタスタ

星奈「・・・・・・・・・・」

匠の質問をスルーしながら星奈は2年生の教室に向かった。

ヒューーーー

匠「・・・・・・・・・・」

みゆき「あ！ 黒井さーん おはよー！」

星奈「星空・・・さん」

私が教室に入ろうとしたとき後ろからキュアハッピーこと星空みゆきが現れた。

あかね「黒井さん おはようさん」

やよい「おはよう 黒井さん♪」

なお「黒井さん おはよう」

れいか「・・・おはようございます」

そして後ろからぞろぞろと他のプリキュアに変身する奴等まで現れた。

やよい「あれ？ 黒井さん バッグのチャックについているのってなに？」

星奈「え．．．これ？」

みゆき「うわあ 可愛い！ 狸のお人形さんだ」

なお「狸かあ 私は一度、狸汁ってやつ食べてみたいなあ」

あかね「狸の人形見た感想がいきなり飯かい!!」

4人「はははははははは」

4人が笑っている時、人形に化けているポンポーは．．．

ポンポー（コイツら．．．．．3バカ幹部が手こずってるプリキュアじゃねーか!?! 星奈の奴．．まさかコイツらと知り合ってたなんて．．．ん?）」

ポンポーはみゆきのカバンの中からキャンデイがひよこつと現れてポンポーの方をじーつと見つめていた。

ポンポー（コイツはメルヘンランドの妖精じゃねーか!?!なんでこいつら学校に妖精つれてきてんだよ!．．しかもこいつ、いつまで見てんだよ）

ジーーーーっ

ポンポー（うううう．．．）

タラタラタラタラ

ジーーーーっ

キャンデイ「クル？」

みゆき「キャンデイ駄目だよ!出てきちゃあ!?!」

キャンデイ「クル〜」

星空みゆきが小声でなにかをしまっているようだが私にとって丸聞こえである。

あかね「あ!そや 黒井さん 見てやこれ」

星奈「これは．．．」

日野あかねがみせたのは自分の部活する服装に下にはファイトと書かれた手作り人形だった。

あかね「フフン みゆきがウチのために作ってくれたウチの宝もんやー♪」

みゆき「えへへ 作るのに苦労しちやって寝不足になっちゃったけどね」

日野あかねが自慢げに紹介してる所に星空みゆきはすこし照れながら自慢した。

やよい「そういえば黒井さんってなにか自分の宝物って何？」

星奈「宝物？」

やよい「そう、私はこれ、太陽マンのツーショット写真」

なお「私はスパイクシューズ」

れいか「私は・・・掛け軸です」

みゆき「私はシンデレラの絵本♪」

あかね「なあ、黒井さんってなんか宝物あるん？」

星奈「私の・・・宝物」

私は思い返したかつて私の宝物があつた時を・・・

お姉ちゃん・・・できたよ！・・・

お姉ちゃんの宝物・・・花冠・・・

星奈「私には・・・宝物は・・・ないわ」

みゆき「え？」

あかね「どしてや？」

星奈「ないものはないの！それじゃ」

れいか「待つてください!!」

私が教室に入ろうとした時、青木れいかに止められた。

れいか「黒井さん、すこし質問してもよろしいですか?」

星奈「なに・・・?」

なお「れいか どうしたの?そんな声出して・・・」

れいか「すみません。なお ですがすこし確かめたいことがあつて」

星奈「・・・・・・・・・・」

れいか「黒井さん・・・あなたはオーデ「黒井さーろーん」

青木れいかの質問に後ろから二人の女子が現れた。そう昨日会つた二人である。

星奈「空野さんに・・・白銀さん?」

希美「よかったー覚えててくれてたんだ」

主「黒井さん やつと見つけたわよ!」

みゆき「あれ?二人つて黒井さんの知り合い?」

希美「う・・・うん・・・私、白銀希美・・・2年生です・・・はい／＼／」

主「私は空野主 私も2年で新聞部員よ」

なお「二人とも黒井さんとなんかあつたの?」

希美「う・・・うん、私は不良の女子高生に絡まれている所・・・

黒井さんに・・・助けられて」

あかね「えー黒井さんつて不良の女子高生相手に戦つたんか?」
やよい「すごーい!まるでヒーローだね」

星奈「・・・・・・・・」

れいか「え・・・えつとあなたは」

主「私? 私は取材をしに来たの 取材」

なお「取材って……一体何の？」

主「昨日、私が狸集会っていうガシツ

星奈「……」

ズルズルズル

主「ちよつと黒井さん!?すこし・痛い!」

私は空野主の制服の袖を引っ張りながら去った。

みゆき「行っちゃった……」

れいか「……」

―女子トイレ―

星奈「私の・得にあの5人の前であの話は一切しないでくれるし
ら?」

主「え……なんで?」

星奈「めんどろな事になってしまからよ……ていうか見て
たの?」

主「まあ すこしはね♪黒井さんの「プリキュアを憎む者だ!」っ
てところはばつちり聞こえたしね♪」

星奈「……」

クルっ

主「え? ちよ ちよつと黒井さん!」

私は心の中でこの女には関わらないようにしようと誓い教室に向かおうした。

主「ちよつと黒井さん どうして逃げるの？プリキュアってあれでしょ。今世界各国で幻影帝国とか戦ったり、あらゆる悪の怪物を倒すヒーローのことでしょ！」

ピタツ

星奈「プリキュアが……ヒーロー？」

私は彼女の放った言葉にすこし苛立ちを感じた。

星奈「プリキュアは……悪と戦ってはいないわ……強いて言うなら……」

主「え？」

星奈「家畜に餌を与えているようなことをしているのよ……彼女たちは」

主「それどういうこと？ 黒井さん！」

私は彼女にそれだけを言い残して教室に向かった。

―放課後―

ポンポー「なあ 星奈 おまえさんどうしてあんなことを言ったんだ？」

星奈「言葉通りよ プリキュアが戦っているのはテレビで言う悪の秘密結社とかそういうものじゃない」

ポンポー「？」

星奈「あいつらが全ての悪の元凶を倒したとき、奴等が現れる」
ポンポー「奴ら？」

星奈がいう奴らとは一体？・・・

星奈「ん」

私が学校から出るところに目の前に聞きたい人物がそこにいた。

星奈「紺野先輩」

秋人「あ？」

紺野秋人は鬼の形相で私の方に振り向いた。

ポンポー（げっおっかねー顔）

秋人「なんだ？お前見ない顔だな」

星奈「ごめんなさい 私は今月転校して来た2年の黒井星奈です
よろしく願います。」

秋人「その転校生が俺に何のようだ？」

星奈「先輩の言う1年前の大事件について聞きたくて」

秋人「!?」

私の言葉に紺野秋人は動揺した。

星奈「私の勘からすれば・・・プリキュア・・・ですか？」

秋人「!!っ」

私の質問に紺野秋人は怒りの形相で私を睨んだ。

秋人「俺の目の前であいつらを出すな!!!」

星奈「どうしてです？」

秋人「あんな奴らは正義の味方じゃねー!!」

星奈「私も同じです。私もプリキュアに大切な物を奪われましたから」

秋人「なに？ それはどういうことだ!？」

星奈「ここじゃないんですが あそこのベンチで」

秋人「あれは……1年前の12月のことだ……」

俺と弟の夏樹は一緒にクリスマスプレゼントを買うために若葉台に行った。

夏樹「兄ちゃん はやく! はやく!」

秋人「おいおい 待てよ」

俺と弟は仲良く、小さい頃からいつも一緒だった。弟が犬に追われたときも俺が一生懸命に守ったり、小学校の遠足の時はてを繋いで一緒に歩いていたことを思い出す。

夏樹「兄ちゃん……空が」

夏樹「痛いよ……痛いよ……兄……ちゃん」
秋人「うわああああああ!!!」

秋人「弟は今、植物状態で寝込んでいて今も意識がない」
紺野秋人は憎しみで握りこぶしを握り、怒りの形相でプリキュアのことを考えた。

秋人「今年に入ってあらゆる街にプリキュアが出現した。だがあいつらの表情はなんの理由もなくヘラヘラと笑顔で悪の組織と戦ってやがった。俺はそんな奴らにこの世界を守ってほしくなんかねえ!!」

星奈「……先輩の言葉……すこし分かるわ」

秋人「え……」

星奈「私はね……未来から来たの」

秋人「何……」

星奈「私のいる未来は……プリキュアに支配された未来よ」

秋人「!!?」

星奈「そのせいで私の家族……妹を失った」

秋人「黒井……お前は……ぐっ！」

星奈「先輩!?っは」

紺色の暗雲が学校を覆い尽くし、周りにいた人間は皆バッドエンド状態になっていた。

ポンポー「おい　こりやバッドエンド空間だぜ!?!」

星奈「どうやらどこかにプリキュアが敵と戦っているのね　急ぐわよ!」

私はプリキュアと幹部のいる場所に行こうとしたとき

バシユっ

星奈「!」

ドン!!

紫の光弾が私の近くのギリギリの地面に直弾した。

?「みくくつけた♪　お邪魔虫さん♪」

星奈「あんたは……」

ポンポー「おい!　星奈　なんだあいつ　プリキュア……か?」

星奈「プリキュア……あいつはそれ以上よ」

私は上空にいるそいつを見上げて言った

星奈「あいつは最上級プリキュア、ジェネラルプリキュアの一人キュアキャラクターよ」

8話 脅威のキュアキャラクター

ポンポー「じえ・・・ジエネラルプリキュア？　なんだそりや!? あいつら以外にもこの町にプリキュアがいんのかよ？」

星奈「いいえ　強いて言うなら奴らはあらゆる町で活躍しているプリキュアの監視者っていうほうが正しいわ」

星奈の言葉にポンポーは啞然とした。

ポンポー「か・・・監視者？　あいつ自身戦わねーのか？」

星奈「奴の目的は私のような・・・」

キャラクター「ガーディアンを駆逐する・・・それが私達監視者の今の任務」

上空にいるキャラクターが胸をはっていった。

キャラクター「あんた・・・薄々感じていたけど他のガーディアンと違ってなんか私達の力と同じ気がするんだけど？」

ポンポー「？」

星奈「さあね　どっち道私はキュアサニーの所に向かう予定よ」

私の言葉を聞いたときキャラクターはいじめっ子がいじめを楽しむような笑顔をしてこう言った。

キャラクター「へ～～～～～～～～キュアサニーちゃんの華やかな舞台に～～～行くんだ～～～～～～～だったらここから先行かせやしないね～～」

キャラクターは戦闘体勢に入り私もワールドフォンを出した。

《チェンジ！スペシウムソード》

星奈「私もあんたが現れた以上、あんたはここで私が倒す！」

キャラクター「ふっ！」

星奈「来る！」

ドーン!!

キャラクターは上空からミサイルのような急降下パンチを私に攻撃してきたが、私はすかさずポンポアの耳を掴んで避けた。

ポンポー「いででで!？」

星奈「ふっ」

私は黒い仮面とマントを出し、それを装着してキャラクターの前に立った。

ポンポー「お・・・おい 星奈 それって・・・」

キャラクター「へえ、あんたが噂の・・・」

みゆき s i d e

キャンデイ「みんな あれを見るクルー！」

私達はキャンデイの指差した方角を見ると学校の上の周りにバツドエンド空間が浮かび上がっていた。

れいか「得に体育館のほうにバツドエンド空間は集中しているようです」

なお「まさか・・・あかね一人で」

みゆき「みんな 行こう！」

私達は意を決してあかねちゃんのいる体育館の向こうに向かおうとした。

その時・・・

バゴーーーーー

みゆき「え!？」

やよい「え?」

なお「なに!？」

れいか「あれは……」

あかねちゃんのほうに向かおうとしたその時、道の塀のブロックからかつて私達と闘った黒い女戦士オーディウムとそして……

みゆき「あれは……」

やよい「オーディウム!？」

なお「あいつ……また!」

れいか「しかし、状況がすこし変です」

オーディウムはすこしボロボロな状態になっていた。私達は彼女の方に駆けつけようとした時、壁の向こうから

ドガーーーーー

キャラクター「逃がさないわよ!」

みゆき「え?」

やよい「あれって……」

なお「プリキュア?」

れいか「しかし、あのプリキュアは初めて見ました」

キャンディ「キャンディもあのプリキュア初めて見たクルー!？」

キャラクター（ちつ　こいつらに見つかったか・・・）
オーデイウム「はあ　はあ　あいつら」

バッドエンド空間のないこの場所で闘っているオーデイウムと謎のプリキュアの闘いに私は何故か心が痛かった。その理由は謎のプリキュアの闘う姿があのだジョーカーに似ているのであった。そしてオーデイウムは謎のプリキュアの攻撃に苦戦しても私は私達と同じ諦めないなにかを持ってると感じた。そして私はある決心をし、スマイルパクトを出した。

なお「ちよつと！みゆきちゃん　なにをしようとしてるの？」
なおちゃんはあわてて私に質問してきた。

みゆき「決まってるよ！オーデイウムを・・・助けるの」

3人「「え!?!」」

私の言葉に三人は動揺し、やよいちゃんとなおちゃんは私に反論を始めた。

やよい「みゆきちゃん　正気なの？」

なお「そうだよ！あいつはメルヘンランド王国の・・・キャンディの大切なデコルをあいつは壊したんだよ　そんなのゆ「許される訳ないよね」

れいか「みゆきさん・・・」

みゆき「でも・・・よく見て」

私達はオーデイウムの方を見た。

キャラクター「ほらほら　どうした　どうした」

バスバスバスバス

オーデイウム「くっ！」

あの黒いプリキュアの強烈なパンチのラッシュがオーデイウムに襲いかかってきた。

キャラクター「あらよ！」

オーデイウム「ふん」

強力なキックがオーデイウムの胸に炸裂すると思ったけど剣で防ぎ防御を保ったかと思っただけ、

パキンッ

オーデイウム「ぐわあ！」

あまりのキックの威力に剣は折れてオーデイウムは吹っ飛んで壁に激突した。

やよい「あ!？」

なお「!？」

れいか「……………」

オーデイウム side

オーデイウム「はあ はあ ま……………まだ……………」

グシヤ

オーデイウム「ぐあっ！」

私が倒れ右手を差しのべようとしたその時、キャラクターの足が私の右手を踏みつけた。

生きて・・・・・・・・

お姉ちゃん・・・・・・・・りほの分まで・・・・・・・・

バシッ!

キャラクター「え？」

オーディウム「そうよね・・・りほ・・・お姉ちゃんは・・・こんなところで死んじゃいけないよね・・・」

キャラクター「お前！ その力は・・・」

オーディウム「私は・・・あんたらのようなクズに負けない・・・私は・・・もう二度と・・・プリキュアなんかには屈したりしない!!!」

ドーーーーー！！

キャラクター「この光・・・あの方と同じ・・・まさか・・・お前・・・体内に・・・」

キャラクターの目の前にいたのは金色に光輝く女戦士オーディウム、そしてキャラクターはこの感覚に見覚えがあった。かつてキャラクター達ジェネラルプリキュアとプリキュアと同じ覚醒するとき発

する光にそっくりだと・・・

キャラクター「キュアエナジーが埋め込んでいるのか？」

オーデイウム「はあ！」

ヒュッ

キャラクター「な？」

バシイーン!!

キャラクター「ガハッ」

《ネクストチェンジ！フリーガーハマー》

無意識か私はキャラクターに一発の強烈なパンチを炸裂させずかさずワールドフォンでフリーガーハマーを召喚した。

キャラクター「ふん！ そんな重火器で私とやるっての？ なめないでよね！」

ドッ！ドッ！ドッ！ドッ！ドッ！ドッ！

7発のロケット弾がキャラクターに狙いを定めたがキャラクターはすいすいと避けながら私の方に迫ってきた。

キャラクター「そんな遅いロケットで私に当てようなんて幼稚なのよ！ もらったあ!!」

キャラクターの拳が私の顔面に当てようとしたが

オーデイウム「ふん！」

バキッ

キャラクター「なに!？」

フリーガーハマーを盾にし、私は一瞬で飛び、キャラクターの真上まで飛び上がった所に私は・・・

オーデイウム「はあああああ!!」

バキイイ

キャラクター「がはっ」

空中回転で急行下しキャラクターの頭に強烈なかかと落としを炸裂させた。

ドガーーーーー!!!

オーデイウム「はあ はあ はあ」

私の体から金色の光がなくなり体力の大半は消耗した。

ポンポー「おーい」

オーデイウム「ポンポー？」

後ろからポンポーが現れ手を降って私と合流した。

ポンポー「星奈 お前探したぜ あいつにぶん殴られて遠くまで

吹っ飛んでいったから探すのに一苦労したぜ！」

オーデイウム「そう ご苦労様」

ポンポー「で、あいつは」

オーデイウム「あいつは・・・まだ」

私は目の前で倒れているキャラクターを見て私は安心出来なかった。

ガラツ

キャラクター「やってくれたね お邪魔さん」

ポンポー「げ！まだ 生きてんのかよ」

キャラクター「あのかかと落として私が死ぬはずないでしょ・・・
そろそろ私も本気「待ちなさい！」ん？」

ポンポー「この声・・・まさか」

私は後ろを振り向いてそこにいたのは

オーデイウム「キュアハッピー：キュアピース：キュアマーチ：
キュアビューティー」

ハッピー「オーデイウムはこれ以上好きにはさせない」

マーチ「まだ闘うっていうなら」

ビューティー「私達がお相手します！」

4人は私を守ろうとキャラクターの前に立ったがキャラクターは

キャラクター「参った」

4人「「「え?」「」」」

キャラクターは軽く4人の目の前で降伏した。

キャラクター「私・・・プリキュアと闘うとかそういうのさらさないのよ」

今のところは

キャラクター「だから私プリキュアが参戦した時点でここでドロンスするから♪あと早くキュアサニーちゃんを助けたほうがいいよ♪それじゃ」

シユン

ピース「消えちゃった」

そうあいつはプリキュアと戦おうとしない。いやまだその時ではないから・・・

ハッピー「ねえ 大丈夫?」

オーデイウム「別に・・・このくらいどうってことないわ」

私も早くこいつらから避けるために去ろうとしたが

ハッピー「ねえ 貴方も私達の仲間にならない?」

「「「え?」「」」

ポンポー（はあああああ!?!）

いつの間にか壁の向こうに隠れているポンポーは驚愕した。

マーチ「ちよつとハッピー 一体なにいつてるの?あいつは」

ハッピー「わかつてるよ だから デコルを壊した分は私達と一緒に

に戦おうって」

ビューティー「それがオーデイウムの・・・償いというものですね？」

ハッピー「うん　だから私達と一緒にたた「断る」え？」

オーデイウム「聞こえなかったの？私はある達とは手を組まないって言ったのよ」

マーチ「ちよつとあんた!?!なんだよその態度ハッピーが折角あんたを仲間に誘おうとしてるのに」

ピース「そうだよ！ハッピーの優しさを踏みにじっちゃだめだよ!?!」

キュアマーチとキュアピースはキュアハッピーの想いを貶した怒りで私に反論したが

オーデイウム「私は決してプリキュアと手を組むということとはしない例え神に誓っても死んでもね」

ハッピー「そんなの・・・」

キャンディ「そんなの駄目クルー!!」

4人「!!」「キャンディ!?!」「!!」

キュアハッピーの下からこいつらのパートナーの妖精が泣きながら私に反論してきた。

キャンディ「友達をなくすことをしちゃいけないクル！それじゃひとりぼっちになっちゃうクル　ううう」

ハッピー「キャンディ・・・」

オーデイウム「一人ぼっち・・・か」

私はキュアハッピーの抱いている妖精の方に近づいて妖精の涙を拭った。

キャンディ「クル？」

オーディウム「一人ぼっち・・・そうね・・・妖精さんあなたの言う通り私は一人ぼっち・・・でも私はプリキュアを許さないのよ・・・その理由は・・・」

・・・お姉ちゃん・・・

オーディウム「私の家族はプリキュアに殺されたのよ」

「!!?!」

4人と妖精は驚愕し、なぜと言わんばかり私に質問してきた。

ハッピー「オーディウムの家族はプリキュアに・・・」

ピース「ちよつと待ってよ！プリキュアは正義の味方だよ　そんな人殺しみたいなことするわけないよ」

キャンディ「そうクル！プリキュアはキャンディ達の故郷のメルヘンランドを救った伝説の戦士クル」

ビューティー「どうしてそのようなことを」

オーディウム「その理由はあるのキャラクターとかいうジェネラルプリキュアが知っているわ最も会うのは困難だと思うけど・・・それじゃ」

ハッピー「待って！」

シユン

ピース「消えちゃった……」

ビューティー「ジエネラル……プリキュア……」

そしてキュアサニーはパワーアップし圧倒的な力でウルフルンの
駆るアカンベエをやられる寸前まで追い込み、合流した4人のプリ
キュアと一緒にアカンベエを浄化したということ。

9話 異世界都市 アルカ

ポップ「ジエネラルプリキュア・・・でござるか」

キャンディ「お兄ちゃん 知ってるクル？」

ポップ「うゝむ」

ポップは考え込んでいた。キャンディは前の鬪いの後にオーディウムの言葉に疑問が出てしまいキャンディはメルヘンランドからキャンディの兄ポップを連れてきてくれたにこれまでプリキュアがバッドエンド王国以外の敵か味方のオーディウムの参戦のことについて、そしてジエネラルプリキュアのことについて語った。

みゆき「それに・・・」

私の家族はプリキュアに殺されたのよ・・・

やよい「オーディウムのお母さんとお父さんが・・・プリキュアに・・・」

あかね「うちがウルフルンと闘つてるときにそんなことが・・・もしかしたらアイツの出任せちゃうん？」

れいか「いいえ、あれは出任せという雰囲気ではありませんでした。かすかですが私には彼女は嘘をついていないと思つています・・・」

なお「どつちにしろこの先、いつかアイツと私達が対立するかもしれないって状況だね これって」

5人は深く考えこの先どうすればいいか悩んでいる時・・・

ポップ「皆の衆、今悩んでいても何も解決しないでござる。とりあえず、拙者はお主達の情報を元に早速メルヘンランドに戻って調べてくるでござる。それまでしばし待たれよ」

ポップはメルヘンランドに一時戻り、みゆき達は安堵の溜め息を吐いた。

みゆき（オーデイウム……か）

みゆきは自分の部屋の窓の外を見て彼女のことを呟いた。

パシパシパシパシ

星奈「よし！」

ポンポー「すっかり体が全快したな♪」

私はキャラクターに痛め付けられた右手が完治したか握ったり広げたりして確認した結果、完治完了していた。

ポンポー「なあ 星奈、これからどうするよ？今日の休日おまえどっか行きてーとこねーのか？」

星奈「……………」

私はキャラクターに壊された2つの武器を見て考えた。スマイルプリキュアのいる町担当となった私はプリキュアと対立したときこの2つの武器で任務を遂行できると思っていたからだ……。だがジェネラルプリキュアが参戦した以上これまで以上の武器が必要になってくる……。となると今日は……………」

星奈「ポンポー」

ポンポー「ん？」

星奈「武器の調達の為、買い物にいくわよ」

ポンポー「買い物って武器が買える店ってこの町にはねーぞ？」

星奈「違うわ……。この町じゃなく異世界都市に行くのよ」

ポンポー「異世界……。都市？」

星奈「そう 異世界都市【アルカ】」

私はテーブルに置いてあるリモコンを手にし、それを本棚のほうに押した。

ゴゴゴゴゴゴ

本棚が二つに別れた時、中から隠しエレベーターが出た。

ポンポー「すげえ……。こんなところに隠し扉が……………」

星奈「強いていうなら隠しエレベーターね」

私達は早速エレベーターにはいり、私は中のボタンを“アルカ”に押しさえ扉が閉まった。

ゴオオオオオoooooooooooo

私はエレベーターの中でじっと待っていた。

ポンポー「あのさ……………星奈」

星奈「何かしら？セクハラだったら容赦なく切り裂いてあげるけど？」

ポンポー「切り裂くって!?! そもそもお前武器壊れてんだから切り裂くことは出来ねーだろうが!」

星奈「それもそうね……………」

ポンポー「たくっ 俺が聞きてーのは昨日出会ったジェネラルプリキュア…………そして星奈…………お前は何者なんだ?」

ポンポーの質問に私はこのまま黙ろうと思ったが私は仕方なくここに話した。

星奈「ジェネラルプリキュア…………そいつらは今ご活躍中のプリキュ

ア様の監視役で全部で15人いるのよ。情報によると若葉台にはキュアデビル、そして海原市にはディザスター、サンクルミエールにはパラサイト、クローバータウンにはライアー、希望ヶ花市にはウィザー、加音町にはレクイエム、大貝町にはブレイン、ぴかりヶ丘にはエンヴィー、ノーブルにはデスサイズ、津名木町にはカース、いちご坂にはグラ、そして私が今滞在している町のジエネラルプリキュアがキャラクター他にもメモリー、リボン、そしてケルベロス・・・とまあこんな感じかしらね」

ポンポー「へえ・・・」

ポンポーは思った。まじかよ？昨日、星奈を手こずらせたあのおっかないプリキュアが15人いるのかよと思った。

星奈「そして、そいつらを生み出したのがプリキュアの王”プリキュウス”よ」

ポンポー「プリキュウス？なんだそりゃ？」

星奈「詳しいことはまだ調査中だけど、私のいた世界を焼け野原にして無法地帯化した元凶であり、私達が倒すべき相手よ」

星奈は拳を強く握り締め、その怒りには憎しみの執念が宿っていると感じたポンポーである。

ポンポー「なあ 星奈・・・お前って一体何者なんだ？」

星奈「私はこの世界からプリキュアの・・・」

チーーーーーン

ポンポー「!?」

私が話そうとしたとき、どうやら目的地に着いたらしい。

ゴゴオオオオオオオオ

エレベーターの扉から光が飛び出し、ポンポーはあまりの眩しさに目をつぶった。そして光が消え目を開けたポンポーが見たものは……

ポンポー「な……な……な……な……な……」

ポンポー「なんじゃこりゃー……」
!!!!???

恐竜あるいはロボット、あるいは獣人、あるいは宇宙人、あるいは昆虫人間、小さな妖精、未来人、侍、幽霊、妖怪、ファンタジーの間といろいろと、変わった住人たちが住んでいた。

ガヤガヤ ガヤガヤ ガヤガヤ ガヤガヤ

私達は武器の調達の為、街道を通るなか、ポンポーは私に質問してきました。

ポンポー「なあ・・・星奈、ここにいる奴らって・・・」

星奈「ここにいる住人たちは皆、いろいろな異世界から来たもの達よ。そうね・・・例えば」

ポンポー私の指差した方向を見て、

星奈「恐竜と人間が共存する世界から来た住人」

驚いた。狂暴なティラノサウルスを仲良く人間とお買い物したり、家族一同がトリケラトプスの背に乗って旅行していたりした光景にポンポーは驚いた。

星奈「あつちには昆虫人間、宇宙人、知能に優れたロボット、半魚人、妖精、獣人、といった住人がここに住んでいるのよ」

ポンポー「へ・・・へえー・・・」

あまりの光景に頭が追い付けなかった。

星奈「さ、着いたわよ。ここが私がよく行く武器屋、”狸屋”よ」

ポンポー「狸屋……」

見た目はボロだけど武器の品は一流である。私達は早速、ドアを開け店頭にいる店長に挨拶した。

カランコロンカラン

星奈「たぬじい、いる?」

たぬじい「おっく星奈ちゃんいらつしや〜い」

よぼよぼでくるくるメガネを掛け、腰が曲がった体を一本の杖で支えているこの老いぼれ狸こと、たぬじいである。

たぬじい「だれが老いぼれ狸じゃ!」

地獄耳であるがここにある武器と武器の性能と管理ははピカイチである。

たぬじい「星奈ちゃん……そこにいる太つちよ狸は誰じゃ?」

ポンポー「太つちよつて……俺かよ?」

星奈「彼は私の連れよ。別に恋愛関係とかそんなもんないし」

ポンポー（この女……）

星奈の言葉にポンポーは星奈に対する怒りがすこし込み上げてきた。

星奈「それじゃ、武器選ばせてもらおうわね」

私は早速、店の周りの武器を見回り、いいものがないか探していた。

ポンポー「へえーこいつはなかなか豪華な武器だな」

ポンポーが見ていたのは、ハンマー系の武器を眺めていた。特に黄金のように輝くそれはなにかと強そうだと思っていた。

たぬじい「そいつはゴルディオンハンマーだね」

ポンポー「うおっ！ いたのかよ？」

たぬじい「ほっほっほっ♪こいつはハンマーの衝撃で放出される強烈な重力波を浴びせ、光速以上の速度で落下させる事により、光子に変換するという物凄いハンマーじゃ」

ポンポー「へ・・・へえ」

たぬじい「ちなみにこいつは1つ1億円じゃ♪」

ポンポー「い・・・1億!!? 高えー!!」

余りの武器の価格の値段にポンポーは驚愕した。

ポンポー「じゃあ一番安い武器あるか？一番安いのか？」

たぬじい「一番安いのは100万円くらいの武器だけじゃよ、自衛隊とかよく使っている武器ぐらいはな」

たぬじいに案内され、ポンポーに一番安い武器を見せたらボロい刀、中身が錆びた機関銃等々

ポンポー「こんなボロいの欲しがるやついるのかよ？」

星奈「おまたせー」

ポンポー「星奈」

星奈「たぬじい お会計よろしく」

たぬじい「あいよ♪」

私は早速たぬじいに会計をお願いし、たぬじいも早速武器の会計を始めた。

たぬじい「えーと、ソードメイス、ボーイズMk1対装甲ライフル、ソニックアロー、ウェブシユーター、シユベルトゲーベル、全部で4億5千万円じゃ♪」

ポンポー「高ええー！?!? おい！星奈やめとけこんなろくなとこで無駄遣いとかすんじゃねー！今ならまだまに「これで・・・」へ？」

星奈は懐から黒いカードをたぬじいに見せ、それをたぬじいはレジにカードを差し込み、星奈の方に返した。

たぬじい「まいどあり♪」

星奈「それじゃたぬじい 次来るときは土産とか持ってくるわ」
たぬじい「ああ 期待しとるよ♪」

たぬじいは手を降り、私達は狸屋を後にした。

ポンポー「なあ 星奈 お前今、あのじじいに見せたあのカードなんだ？」

星奈「ああ、あれは”ワールドカード”でいってそんじゃそこらじゃ手に入らないレアなカードよ。このカード一枚の中には50兆

円ほどの金額が入っているのよ」

ポンポー（まじかよ?）

星奈「買い物も済んだし、あそこの喫茶店でひと休みしましょうか？」

私が指差した方向を見ると、そこは私がよく行く喫茶店”木の葉”

ガラガラ

?「いらつしやいませー何名様でしょうか?」

星奈「私とこれの2名で」

ポンポー「おい! これってなんだこれって……」

ポンポーが店員の方を見ると着物姿で可愛い狸の耳と尻尾が生えており、髪は綺麗なロングヘアの美少女がポンポーの方に笑顔を見せた。

ポンポー「ぽふっ／＼／＼」

星奈「ぽふ?」

?「常連様と1名様はあちらの席でお待ちください。」

彼女の案内で席に座りサービスの緑茶を飲んで一服した。

ポンポー「なあ、星奈あの子って……」

星奈「ああ、あの子はたぬじいのお孫さんの”たぬ美”よ」

ポンポー「え!? あのじじいに孫がいたのかよ!?!」

星奈「あの子の両親は小さい頃に他界してね。たぬじいに引き取られ、今は生活費を稼ぐためここでバイトしてるのよ」

ポンポー「あの子の両親が死んだ・・・」

ポンポーがすこししんみりになってるところから扉の中からたぬ美が注文の品を持ってきた。

たぬ美「お待たせしました♪スイートポテトケーキです♪」

ポンポー「ポツふ／＼／」

星奈「ぽっふ?」

10話 かちかち山

ポンポースイデ

俺は今、気持ちが高ぶっている。そもそも俺は幹部昇格のために黒井星奈と共に行動している。そして俺は星奈の武器調達のため買い物付き添いで異世界都市と呼ばれる所に来た。

そこにいる住人どもは皆ほかの異世界からやって来た奴等で正直、俺は余りの非常識なことを目撃して驚愕している。

ポンポー「なあ、星奈……ここにいる連中は皆ほかの異世界から来た奴等なんだよな」

星奈「ええ、そうよ」

俺は窓の外をのぞき込んで街道を通る住人達を見て星奈に質問した。

ポンポー「この連中って一体どうやってこの世界を見つけたんだ？」

星奈「それはね……ポンポー、あの一番高い塔を見なさい」

星奈が窓の外を指差し、その方向に周りが鉄で覆われ虹色の小さな光がチカチカと光る巨大な塔が建っていた。

ポンポー「あれって……」

星奈「あれはありとあらゆる異世界を管理し、みんなが安心してこの異世界都市あるいは別の異世界を自由に行き行き出来るための装置、異世界管理塔“デифアレントタワー”」

ポンポー「デифアレント……タワー」

星奈「あの塔の中には異世界、並行世界、別宇宙などの膨大な数のゲートが保管し存在しているの。そして他の異世界に行く方法は私たちガーディアンが持つこの”ガーディアンカード”と旅行者や探検家が持つ”トラベルカード”と故郷の異世界に帰りたいときはこの”ホームカミングカード”を使って帰れるのこのカードは一回使ったら故郷の異世界に着いたとき消えてしまうの」

ポンポー「へえー」

俺はディファレントタワーを眺め、ある意味スゲーなと感じた。

ポンポー「じゃあ、そのガーディアンカードってどうやって手に取れたんだ？」

星奈「このカードは最上階にいる”元老院”達に私達ガーディアンの素質を見極める為に身体能力、格闘能力、個性を出し、それに選ばれた者だけ手にいれる隊員用カード」

ポンポー「ほんでガーディアンって一体どういう仕事するんだ？」

星奈「異世界の侵略者の……排除」

ポンポー「へ？……はいじよ？」

星奈「ガーディアンの任務は異世界から別の異世界、簡単に言えばイレギュラーの侵略、支配の阻止を全うする異世界防衛組織……とある世界というタイムパトロールみたいな組織ね……」

俺はすこし考えた。こいつの仕事はあらゆる異世界の侵略と支配の阻止……ん？まてよ……じゃあ、こいつがプリキュアを……倒そうとしている理由って……まさか……

ポンポー「おい！星奈 お前がプリキュアを倒そうと必死なのは家

族の復讐だけじゃねーだろ？」

星奈「……………」

ポンポー「このままプリキュアが悪の元凶を倒してしまったら…：キヤラクターとほかのジェネラルプリキュアがあいつらの目の前に現れ、プリ「ガシャーン!!」って何？」

外の方を覗くとそこにはたぬ美さんが三匹の獣人達に囲まれている。だがその獣人達は俺にとってもっとも苦手な奴等だった。

「おい！ありやウサギのルーシーだぜ？」

「まじかよ！あのラビットカンパニーのドラ息子のルーシー」

「それにルーシーにくつついてるあの二人は親父から借りたボディガードらしいぜ？」

ルーシー「よお たぬ美ちゃん♪ 今お宅に貯まつてる借金きつちり返してもらおうか？」

たぬ美「もう少し待ってください！ルーシーさん！今の売上金ではこの店が潰れる可能性があります！だから、もう少し待っ「うるせええー！！！！」バキッ

たぬ美「きやあ!？」

ポンポー「!!？」

星奈「？」

ルーシー「てめえ、狸の分際でこの俺様に楯突こうつてののか？この泥棒狸!!」

ルーシーはたぬ美さんの髪の毛を強引に引っ張り、それを見ていた

俺はルーシーに怒りを覚えたが、・・・奴は俺にとって・・・

星奈 side

星奈「どうしたの?・・・助けに行けばいいじゃない?」

私はポンポーに彼女を助けに行けと忠告したが

ポンポー「・・・いや・・・無理だ・・・」

星奈「なんで?」

ポンポー「あいつは・・・ウサギ・・・だからだ」

星奈「ウサギ?ウサギがどうしたっていうの?」

ポンポー「俺は・・・ウサギが苦手なんだよ・・・」

星奈「ウサギって・・・はっ」

そういえば、ポンポーのいたバッドエンド王国の住人って皆、絵本の嫌われものの集まりだったわね。例えばウルフルンは赤ずきん、七ひきの子やぎ、三匹のこ豚、アカオーニは桃太郎、金太郎、一寸法師、マジヨリーナはヘンゼルとグレーテル、白雪姫、人魚姫などがある。そしてポンポーは”かちかち山の狸”、狸はお爺さんの畑を荒らしたり、からかったりしながら遊び呆けていたけど、それが災いでお爺さんの作った罫に掛かってしまい、お爺さんは家に持って帰って、夕食に狸汁にしようと考えた。お爺さんは狸を天井に吊るし、もう一回畑仕事の方に出掛けた。そして、家にいるのは絹で餅を突いてるお婆さんと天井に吊るしている狸だけだった。ある時狸はもう悪さはしないから、お婆さんの手伝いをさせて下さいと頼まれ、お婆さんは心優しい性格だったので、天井に吊るしている狸のほどいてあげた。たがその心優しい性格が仇となってしまい、自由になった狸はお婆さんを絹で強く叩き殺し、帰ってきたお爺さんはお婆さんの作った狸汁を召し上がったが、お爺さんが食したのは、お婆さんに化けた狸が殺した

お婆さんを狸汁の代わりにお婆さんの肉を入れた婆汁に変えられていた。それに気づいたお爺さんはまんまと狸の罠に掛かってしまいい？狸は一目散に逃げていった。

お婆さんの死に泣きじやくるお爺さんの前にウサギが現れ、お婆さんの仇を討つと宣言し、ウサギは狸の討伐に執念をもやした。

そしてウサギはわざと薪を持つてるフリをし、狸が現れ、薪を片方大きい方を持ってくれと頼んだ。

薪を片方背中に背負った狸はかすかにカチカチという音が聴こえた。

狸は後ろで片方の小さな薪を背負ってるウサギに質問し、ウサギは「ここはかちかち山だからかちかち鳥が鳴いているのさ」と返され、狸は納得したかのように前に前を向いて薪を背負ってる時、何故か煙が漂い、狸は後ろを見ると、大きな薪から巨大な火が燃え上がり狸は大慌てで山を降りてしまった。

何故狸の薪から火が出たのか？それはウサギが狸の薪の近くに火打ち石を打ち続け、その火花が薪にこびりつき巨大な火になって燃え上がっていたのであった。

翌日、狸は背中に大火傷を負わせたウサギに抗議を問おうとしたがウサギは狸の為に塗り薬を作っていたのであった。

狸はウサギが自分のために薬を作っている姿に一瞬怒る気も失せ、狸はウサギの優しさに甘え、塗り薬を塗ることを許可し、狸は塗り薬を塗るため背中を出したとき一瞬、強烈な激痛が身体中から響きわたり狸は一目散に逃げていった。

ウサギが狸に塗った塗り薬はなんと大量の赤唐辛子を潰し液体状にさせたものであった。

そしてその翌日、狸は怒り爆発で今度こそ抗議しようと思ったが、ウサギは海で魚をとろうと言い出し、狸はウサギに文句を言いに来たのに腹の虫がなりウサギは「自分は木で船を作るから狸さんは泥で船を作ってください」と言い出し、狸は何も知らないで泥の船を作り出した。

出来上がった船を岸に出し、いよいよ魚を取ろうとした矢先に狸の

乗る泥の船から水が出てしまい狸は慌てて、水を防ごうとしたが狸の乗っている船が泥で作られた船であり一瞬で溶け、狸は溺れてしまった。

狸は水の中で泳ぐことは出来ないのでウサギに助けを呼応としたがウサギがとつた行動は……

「お前はお婆さんの仇だから今ここで死で償え！」

ウサギは船の櫂で思いっきり狸の頭を叩き続け狸は力尽きて海の底に沈んで狸は海の藻屑になり死んでしまった。

そして仇を討てたウサギはお爺さんに報告し、ウサギはお爺さんと一緒に幸せに暮らしました。めでたし めでたし

星奈（まさか……それが原因で……コイツ）

私はコイツのトラウマに……なにかを感じ私がコイツにとつた行

動は

ガシツ

ポンポー「えっ？」

星奈「あの子を……助けに行きなさい」

私はポンポーの腕をつかみ

ポンポー「でも俺は……」

星奈「ネチネチ言つとらんで助けに行けえ!!!」

ブオン

ポンポー「うわああああ」

思いつきり看板娘とバカウサギどもの方に投げ飛ばした。

《チェンジャー・ウェブシューター!》

私はワールドフォンから新しいカードを出し、その武器は右腕の手に巻かれそれをポンポーの方に向けた。

ピシユン! ピシユン! ピシユン! ピシユン!

ウェブシューターから糸状の糸ウェブを4本をポンポーの後ろの

頭、両腕、胴体に張り付け私の準備は整った。

ポンポー「うわああああ!!？」
ルーシー「あ？」

たぬ美「へ？」

ドスーーーーー

ポンポーの突進でルーシー達とたぬ美のいる方向にクリティカルヒットに当たったけど、私にとって思いがけない光景を作ってしまったらしい。

ポンポー「いてて星奈の奴なんてことし「あの．．／／／」へっ」
私が作ってしまった光景は下に仰向けになっっているため美にその上にポンポーが両腕で床を付いているようするに顔と顔がちかづいている状態なのである。

たぬ美「あ／／／ あのお客様．．／／／」

ポンポー「え．．えつと／／／ これは．．その」

星奈（やつちやつたあゝ）

ルーシー「おい！コラ!？」

ルーシーが起き上がり他の二人組も起き上がって来た。

ルーシー「なに狸同士がお熱い光景作っちゃってんですかー!!？」

すっげームカつくんですけどおー!？」

ルーシーは怒りのあまりポンポーとたぬ美を目の敵にしルーシーは二人組に命令した。

ルーシー「てめえら！この糞狸どもをぶっ飛ばせ!!」

部下A「はっ」

部下B「仰せのままに」

部下の二人はウサギの体とは思えないムキムキな体でポンポーにいたっては脚がガチガチなのである。

部下A「ふん！」

部下Aのパンチがポンポーの顔に当たろうとしたが

星奈「ふん！」

ポンポー「ぐえっ！」

私は頭に張り付いたウェブを引っ張り部下Aのパンチを避けさせた。

ルーシー「なに？」

星奈「さらに」

私は右腕に張り付いたウェブを思いつき引っ張り・・・

ポンポー「うおわああああ」

バキッ！

部下A「ぐわあああ!!？」

ガシヤアアアン

部下Aはポンポーのパンチで店の壁を突き破って吹っ飛んだ。

部下B「きええええ!!」

部下Bの連続した蹴りがポンポーに襲いかかってきたが私は上手くポンポーを操り、その両足を上手く受けとめ、

ガシッ

部下B「なに!？」

星奈「ここから回ってもらおうわよ！それ！」

ブン

ポンポー「おーらおらおらおらおらおら!!」

ブンブンブンブンブンブン

部下B「うわああああ!!」

ポンポー「どうらああああ!!」

ブオーン

部下B 「うわあああああ!!」

ルーシー 「ぎやああ 来るな!来るな!来るな!」

バキツ

『ぎやあああああ!!!』

ポンポーのジャイアントスイングで部下Bを投げ飛ばし、その方向に突っ立っていたルーシーに当たり、一緒に部下Aをブツ飛ばした壁の穴にぶっ飛んだ。そしてその穴の外には・・・

ズズズーっ ドーン!!

ルーシー 「ち・・・ち・・・ちくしょう!!あの糞狸!もう勘弁ならねえ今ここであの「おい」ああ?!今俺はイラツとしてんだよ!てめえに構ってる暇なんざねえーんだよ!!」

? 「ほお? ウサギの分際でいい度胸だな?」

ルーシー 「だからうる・・・せえ・・・」

黒いリムジンから降りたのはヤクザの鮫の半魚人の集団であり、全員不機嫌のご様子・・・

組員 「おい!てめえ うちの車にすげえ凹みができてんだけど・・・ どう 責任とるつもりだ? ああ」

ルーシー 「いやあ・・・それは・・・その・・・」

ルーシーは慌ててなにか言い訳しようとしたが相手はウサギにとって天敵のような存在・・・思い立った行動は・・・

ルーシー 「逃げろー!!!」

部下A 「あく坊っちゃま!」

部下B 「待ってください!」

組長 「逃がすなー!!あいつらの皮全部剥ぎ取れー!!」

『はー!!』

組員A「おら！ 待てや!!」
組員B「ぶっ殺してやらあー!!」

どうやらウサギどもは鮫に追われて逃げていったらしいわね
ポンポー「あ……あれ……俺勝ったのか？ あのウサギに……」
ホントは私がウェブで操っただけなんだけどね

たぬ美「あの！ お客様？」

ポンポー「た……たぬ美……さん」

ポンポーに近づいできたたぬ美は手に救急箱を持っていた。

たぬ美「あ……お怪我はありませんか？……どこか痛いところはないですか」

たぬ美はポンポーがルーシー達に怪我された所がないか質問した。

ポンポー「え……いやーこのくらいどうってことないですよ」

まっ私がウェブで操ったお陰でどこも、怪我とかしてないしね

たぬ美「よかったあ〜」

たぬ美は安心してほつと一息し、ポンポーに笑顔を見せた。

たぬ美「お客様に怪我がなくて安心しました」ニコリ

ポンポー「ポッフ／／／」

星奈「ぼっふ？」

私たちは喫茶店から出て買い出しも住んでそろそろ帰ろうと街道を歩いているときポンポーはなぜかボーっとしていた。まっ私はわかつているけど・・・

星奈「ちよつとその恋に落ちた狸さん？」

ポンポー「はっ／＼／＼星奈!?なんだよ!その変なネーミングは」

星奈「別に・・・」

私はポンポーある質問をした。

星奈「ねえ、あなたこの町来てなにか感じたことはある？」

ポンポー「なんだよ?急に・・・そうだな・・・なんていうか良いところだな・・・あそこにいるより・・・それに・・・」

星奈「じゃあいつそ・・・ここに住めば・・・」

ポンポー「へっ？お前今なんて・・・」

星奈「ここに住めばいいじゃないっていったのよ」

私の言葉にポンポーはすこし戸惑った。

ポンポー「は・・・お前・・・なにいつてんだ？・・・俺はバツド
エンド王国の住人だぜ？今更・・・ここに住めって・・・」

ポンポーは頭をかきながら困り果てているところ私は・・・

星奈「はつきりいつておくけど・・・あんたに悪役向いてない
と思うわ・・・」

ポンポー「へ・・・」

それだけ言い残し私たちは帰るべき所に帰った。

11話 プリキュアの調査と白銀希美の夢

黒い空間・・・そこには長いロングテーブルの上には豪華なお菓子と上には豪華なシャンデリアがあり、そこには可愛らしい妖精の頭を被った執事らしいのが15人いた。

そのロングテーブルに座っているのは15人の・・・

デビル「・・・・・・・・・・」なにも言わず目を閉じてる寝ている訳ではない

ディザスター「ふくん♪ふくん♪」イヤホンで好きな曲を聞いている。

パラサイト「はい 今日のお餌」自分の飼っている寄生虫に餌をあげている。

ロト「えへ♪」自分の席に出してある自分の分のお菓子を腐らせニヤついている。

ウィザー「チュっ」ワインを飲んでいる。

レクイエム「♪♪♪♪」レクイエムを歌っている

キャラクター「・・・・・・・・」

ブレイン「えつと正式には・・・」自分の書いた何かの設計図の書いたり消したりの繰り返しをしている。

エンヴィー「好き嫌い好き嫌い好き嫌い」花占いしている

デスサイズ「・・・・・・・・」キュツキュツキュツ

武器を磨いている。

カース「さて、次はどんな残酷で嘆くほどの魔法を出そうかなーつと」黒い本でドクロのマークの入った本をニヤニヤしながら調べている。

グラ「バクバクバクバクバク」上に置いてあるお菓子を一人で全部食べている。

メモリー 不在

リボーン 不在

ケルベロス 遺影だけ・・・・・・・・

ジネラルプリキュア達がいた。

キャラクター「おい！デビル」

デビル「なんだ・・・キャラクター？」

キャラクターの一声にデビルは目を開けてキャラクターに問いかけた。

キャラクター「一体全体、どういう状況だい？いきなり”お茶会”に参加しに來いってよ」

デビル「どうもこうもない・・・お前らを集めたのは他でもなくガーディアンの件についてだ」

ウィザー「ガーディアンですか？私は今日で12人始末しました。・・・あつけなかつたですけど・・・」

ロト「ロトは20人♪ロトの勝ち♪♪」

ウィザー「ちっ」

パラサイト「私は10人でしたけど私にとつていい方でした。何しろ私のペットたちの食料不足には困つたもんですから」

ロトとウィザーはパラサイトの虫籠の寄生虫があまりにも不気味ですこし引いた。

デビル「やれやれ、それとブレイン」

ブレイン「はい・・・」

デビルの声に眼鏡をかけたプリキュア、ブレインは返事をした。

デビル「現在、プリキュウス様の遺体はまだみつからないのか？」

ブレイン「はい・・・各国の世界遺産と呼ばれる所にはプリキュウス様の反応はなくあるいは深海、地底、空中、どこを探しても見つかりませんでした。私の推測によるとこの星でプリキュウス様の遺体がない確率は99.8%と確証します」

デビル「ということはプリキュウス様はこの星にはいないと・・・」

ブレイン「はい・・・おそろく」
ガタツ!

『?』

キャラクター「帰る・・・」

ウィザー「はっ何それ? 空気読みなさいよ!?! このお茶会がどれほど大切かわか「るっせえ!!」

あまりのキャラクターの怒声に周りのものは黙ってしまった。

キャラクター「あたしはそもそもお茶会っていう洒落た所で飯を食うタイプじゃないんでね それじゃ・・・」

キャラクターが一人ででていこうとするときある二人の女性が立ちほだかった。

リボーン「ダメよキャラクター勝手にお茶会に出ていっちゃあ」

キャラクター「リ・・・リボーン!?!」

メモリー「もし、出ていったとしても・・・きみの弱みの記憶をここでみんなに見せびらかすけど、どうする?」

キャラクター「うっ!?!」

後に遅れてきたジエネラルプリキュアの二人、メモリー、リボーン、特にリボーンのその言葉にキャラクターはたじたじに、なっつてしまいい、渋々席に戻った。

デビル「で・・・今回のお茶会で皆に集まった理由は・・・」

みゆき「ミラクルピース！」

あかね「めっちゃ上手いやん！」

やよい「やめてよ／＼／＼大きな声で言われると恥ずかしいから」

朝から早々、大きな声をあげる星空みゆきと日野あかね、なぜ黄瀬
やよいの周りに星空みゆきと日野あかね、男子生徒に囲んでいるのか
？それは昨日のことで……

黄瀬やよいの趣味は「絵を描く」、今日もその趣味を教室で堪能していた。

みゆき「何描いてるの?」

やよい「わわ／＼／＼ みゆきちゃん!」

あかね「めっちゃ上手いやん!」

なお「ホントだよ」

やよい「あかねちゃん!? なおちゃん!」

二人に気づいてハツとする黄瀬やよい

れいか「もう少しよく見せてもらっていいですか?」

青木れいかが現れ、黄瀬やよいは渋々自分が描いた絵を見た一同は

みゆき「すごい!!すごい!!」

あかね「さすがやん!」

やよい「うん これ自分で考えて描いたんだよ」

黄瀬やよいはすこし自慢気に4人に話し4人は凄いと評価された。

なお「自分で考えて描いたの!」

れいか「まるでプロの漫画家さんが描いたみたいですよ」

4人の感想に黄瀬やよいはえへへと照れていた。

みゆき「やよいちゃん絵が上手いからもしかしたら漫画家さんになるかも」

やよい「えっ私が漫画家!」

・・・とこのように星空みゆきの言葉に動揺されプロの漫画家デビューに励む黄瀬やよいの姿があった。私はその状況についていけず・・・教室から出ようとしたとき

ガララララッ

男子生徒A（げっあいつつて）

男子生徒B（猛犬！・・・紺野秋人）

男子生徒C（なんでそのやべえ奴がこの教室に来るんだよ）

紺野秋人先輩がズカズカと教室にはいつて来てそれを見た一同は思わず自分の席に戻っていった。

5人特に星空みゆきと黄瀬やよいはすこし涙目になってたけど3人が守るように固まってたがそれを通り越し、先輩は私の席の方に歩いていった。

秋人「黒井・・・」

星奈「今日はどうしたんですか？先輩」

秋人「ちよつと話がある・・・ついてきてくれ」

私は先輩の指示にしたがって教室から出た。

みゆき「・・・」

あかね「どないしたん？みゆき そんなきよとんとした顔して」

みゆき「えっ私そんな顔してた？」

キャンデイ「してたクル」

やよい「こら！キャンデイ」

キャンデイ「クル」

なお「それにしてもあの三年生と黒井さんって・・・」

あかね「もしかして黒井さんの・・・恋人だったりしてなく」

二人『えーーーーー！！』

れいか「……………」
なお「どうしたの？れいかそんな険しい顔して」
れいか「あっ すいません。つい考え事してて、」

屋上ですわっている私と紺野先輩、紺野先輩は私にあることを話した。

秋人「黒井……お前、プリキュアをぶっ潰すために未来に来たんだってな」

星奈「強いて言うなら、プリキュアの謎と調査……だけど」

秋人「まあいい……黒井お前の言う未来ってどんなどころなんだ？」

紺野先輩の質問に私は青空を見上げながら答えた。

星奈「私のいる未来はプリキュアによって支配された世界、その理由は15人のジェネラルプリキュア達が正義の味方とやり続けたプリキュアを全てぶちのめし、そしてプリキュアの体内に眠るエネルギー”キュアエナジー”をプリキュアの王”プリキュウス”に注ぎプリキュウスは復活してしまった。」

秋人「プリキュウス？」

星奈「全てのプリキュアの王、そいつが現れて、プリキュアだった少女は彼女の配下になりプリキュアの猛攻に人類はどんな兵器を使っても彼女たちの攻撃に圧倒され、挙げ句彼女たちに降伏してしまった。彼女たちは人類が生き延びる代わりに新しいプリキュアを誕生させるべく、女兒を差し出せという命令を指定されるようになったということよ」

秋人「まじかよ・・・」

星奈「だけど私たちは諦めなかった。私たち人類は各国のリーダー達の協力で異世界都市に行ける力を持ったの」

秋人「異世界都市!？」

星奈「プリキュア達さえも知らないと言われる異世界都市にはありとあらゆる異世界の住人達が住んで彼らにとってこれが一番の安寧の地として住みはじめた。そして人類はありとあらゆる異世界の住人達と協力し対プリキュア異世界防衛組織が結成された。その名もデイファレント・ワールド・デイフェンス通称”DWD” 私隊員はガーディアンと呼び、私もその組織の一員で私の任務はプリキュアの誕生の謎を解明することよ」

秋人「ちよつと待ってくれ じゃあお前はその謎を解明するためにこの時代に来てんのに・・・お前は どうしてプリキュアを殺したがるんだ」

先輩の質問に私は・・・

星奈「私は・・・プリキュアに・・・家族・・・そしてある感情を・・・奪われたの」

秋人「感情?」

星奈「笑顔というなの感情を・・・そしてプリキュアは私の背中に焼き印を焼き入れた。」

私は背中を向け制服を脱ぎ始めた。

秋人「黒井・・・お前・・・それは!？」

それから数日・・・季節は秋で黄色い銀杏の葉が舞落ちる銀杏並木の道を私は歩いていった。

そしてあるいている途中、ベンチである人物に出会った。

星奈「白銀さん」

希美「黒井さん！」

ベンチの上でこの前と同じように絵を描いていた

星奈「白銀さんってほんと絵を描くの好きね・・・何か目指してるの？」

希美「えっ・・・・・・・・えっと・・・・・・・・はい」

星奈「児童書・・・」

希美「うん／＼／＼ 私は小学生の時から児童書が大好きで、自分も児童書をかくために絵を勉強してるんだけど・・・」

白銀希美は自分のスケッチブックを私に見せて・・・

希美「どんなに勉強しても絵がヘタツピでみんなにはバカにされる

しこの間の人達もバカにさ「いいじゃない」え？」

星奈「私にとってこの絵はすごくいいって感じてるわ」

希美「えっそんな・・・」

星奈「本当ことよ・・・私は嘘は言わないわ」

希美「黒井さん／＼／」

そういえばこの絵のキャラクターって・・・これが主人公よね・・・黒猫の耳に尻尾もあるし、そしてこのお供の方ってなんかポンポーに似てる（笑）それに剣士に魔法使い、これ地球防衛軍の衣装を着た人？なのよね？・・・これって泥棒!?!・・・もうなんでもありね

星奈「ねえ・・・白銀さん」

希美「何？」

星奈「この絵の題名は何？」

私はこの不思議な絵が気になって白銀希美に質問した。

希美「題名は”黒猫少女と愉快な5人の仲間達”」

星奈「黒猫少女と愉快な5人の仲間達・・・か」

希美「うん、あらすじは主人公の黒猫の少女は最初みんなには気味悪がるけど・・・旅に出て5人の仲間と一緒になんの差別もなく互いに幸せの世界を求む話なんだけど・・・どうかな・・・」

星奈「・・・なんの差別もなく互いに助け合う幸せの世界を求む話か・・・」

希美「黒井さん？」

星奈「そんな世界があったら・・・私たちのような存在は戦わないで平和に暮らしていたのかもね・・・」

そんな世界があったら今頃私たち家族の・・・

星奈「でも・・・そうもいつてられないわよね・・・キュアキラクターっ!!!」

私は後ろから上空の方に怒声を出しその上空にキュアキラクターがいた。

希美「え?・・・何?・・・黒井さん・・・あの人とお知り合いか友達?」

星奈「別に友達じゃないわ強いて言うなら・・・殺さなきゃならない相手よ」

希美「こ・・・殺さなきゃならない・・・相手・・・?」

星奈「まさかここで会えるとはね今ここであんたを殺す!」

私はワールドフォンを取りだし戦闘体勢に入ったがキュアキラクターは

キラクター「きゃははっ生憎今日のアンドの相手は・・・こいつらよ!」

キラクターが上空で指差している方向を見ると、なにやら12の点らしきものが落ちてくる。徐々に近づきつつ見やすくなったとき私にとって思いがけない存在だった。その時

秋人「黒井ーーーーー!!!」

希美「え?あの人って3年の・・・」

先輩が現れたとき・・・とうとう地上に降りてきた。

ドン!ドン!ドン!ドン!ドン!ドン!ドン!ドン!ドン!ドン!ドン!ドン!ドン!ドン!ドン!

希美「え?あれって・・・」

秋人「嘘だろ?・・・」

ボワン!

ポンポー「おい!星奈あれは・・・」

秋人「てっ・・・なんだこいつ!?!」

希美「大きい・・・狸・・・さん?」

星奈「キャラクター・・・こいつらって」

キャラクター「そうよ・・・こいつらは・・・」

そう、今御活躍中のプリキュアのリーダー達の・・・

キャラクター「さあ 殺れ」

ロボット軍団だった。

12話 星奈VSにせプリキュアリーダーズ そして二人の決意

ポンポー「こ……こいつらって」

秋人「プリキュアに似せたロボットか!？」

私達の前に相對するのはあらゆる町でご活躍のキュアブラック、キュアブルーム、キュアドリーム、キュアピーチ、キュアブロッサム、キュアメロディ、キュアハッピー、キュアハート、キュアラブリー、キュアフローラ、キュアミラクル、キュアホイップをモデルとしたロボットだった。

星奈「あんた……こんなロボット一体どこから」

上空にいるキャラクターに質問したが……

キャラクター「うちにはロボットを簡単に作れる奴がいてね、そいつに頼んで作ってもらったのよ」(本当は借りたけどね)

《チェンジ！ソニックアロー！》

希美「スマホの中から……武器が……」

星奈「先輩！白銀さん！ここは危険だからあなた達は早く逃げて！」

秋人「待て黒井！お前はどうすんだ？」

星奈「私がいづらを引き付ける、だから二人は安全なところへ」

希美「無茶だよ!?!黒井さん一人であんなのと戦うなんて……」

先輩も白銀希美も私のことを心配するが私は……

星奈「あんなのと対等に戦えるのは私だけだからよ！だから早く逃げ「もう無理よ」え？」

キャラクターの言葉に私は上空を見るとそこには……

星奈「バッドエンド空間・・・まさか！」

私は二人の方に振り向くと二人ともバッドエンド状態になってしまい動けなくなった。

秋人「うう・・・なんだよ?・・・」

希美「あ・・・ああ・・・」

星奈「先輩!白銀さん!」

そしてキャラクターは右手を人差し指に変え、それを私の方に向けて・・・

キャラクター「殺れ・・・」

にせプリキュア『ギギイーーーー!!』

12人のにせプリキュア達が私に襲いかかってきた。

にせブルーム「ギギイー」

にせピーチ「ギギイー」

キン! キン!

にせキュアブルームとにせキュアピーチが手刀で攻撃してきたが私はソニックアローで防ぎ私は一時体制を立て直して二人を連れて逃げようと考えたが・・・

ガシッ

星奈「え?」

待ち伏せしたにせキュアフローラが私の背中を捕まれてしまった。そしてにせブルームが地面に力を溜めジャンプし力を溜め込んだキックを私の頭に炸裂させようとしたが・・・

フッ

にせキュアフローラ「ギ?」

バキッ!

私は頭を横に振り、にせキュアブルームのキックはキュアフローラの頭に当たった。

キャラクター「!?」

ポカーーン!

にせキュアフローラは頭を破壊され爆発した。

星奈「あんたにはまだ話してなかったけど・・・私にはソニックアローや他の武器以外にも私には”覇気”と呼ばれる力がある!」

にせキュアブルーム「ギ!」

にせキュアピーチ「ギ?」

星奈「武装色!」

私は右手を鉛のように固くしてにせキュアブルームの腹とにせキュアピーチの顔面に・・・

星奈「ふん!」ブン! ブン!

バキッ ドゴツ

にせブルーム「ギギ・・・?」

にせピーチ「ギ・・・ギ・・・」

連続のパンチをかましてやった。

ドカーーン! ドカーーン!

星奈「まずは・・・ブルームとピーチとフローラを撃破・・・」

あと9体・・・

にせブルッサム「ギギイー!!」

にせキュアブルッサムは仲間を倒したせいかな怒りに震え目にも見えないほどの音速で私に襲いかかってきた・・・

星奈「・・・」

にせブルッサム「ギギイー!!」

にせブルッサムは音速で私の背後に攻撃を仕掛けようとしたが・・・バキッ!

にせブルッサム「ギギ?」

裏拳をお見舞いしてやった。

星奈「私には攻撃を高める武装色と先の未来が分かる見聞色の覇気

があるのよ!・・・よって」

〈ロックオン!〉

ソニックアローにレモンエナジーロックシードをセットしアローに定着している刃に黄色いエネルギー刃が流れ……。

〈レモンエナジー・スカッシュ!〉

星奈「ふん!はあ!」

にせハート「ギガア!!」

横、縦の斬撃を炸裂させた。

ドカーン!!

星奈「速くなったのが仇になったわね」

にせハート「ギーー!!」

にせハートのラブアローシュートが私の方に狙いを定めたが……

星奈「今度はこれね……」

私は懐からメロンエナジーロックシードを取りだし、ソニックアローにセットした。

〈メロンエナジー・ロックオン!〉

私はソニックアローのレバーを引き、にせハートに向けてトリガーを絞った。

にせハート「ギギイー!!」

バシユン!

〈メロンエナジー・スカッシュ!〉

必殺のソニックボレーを放った。

星奈「はあ!」

バシユン!

同時に射った二つのエネルギーの矢、勝ったのは……

バシユン!

にせハート「ギ?」

バシユウウー!

にせハート「ギーー!?!」

ドカーーン!!

私だった。

残り7体

星奈「一気に蹴散らすっ!」

キャラクターside

キャラクター「ちっまずいわね・・・あれじゃ一気に全部倒されるわね・・・んっ」

上空で見下ろしている私は奴が一気に5体まで破壊された。奴の強さを侮っていた私は下でバッドエンド状態になっている二人を見ていることを考え付いた。

星奈side

にセラブリー「ギー」

ガキン!

にセミラクル「ギギイ」

ガキン!

にセラブリーのライジングソードとにセミラクルのリンクルス
テツキの攻防に少し戸惑ってたが、私は二体の一瞬の間隙を突いて二体
の腕から武器をソニックアローで弾き飛ばした。

星奈「ふん!」

バシユっ!

ズバツ!

にセラブリー「ギガー!」

にセミラクル「ギギイ!」

ボカーーン! ボカーーン!

アローの刃で一気に2体を斬り裂き爆散した。

星奈「残り5体・・・ブラックとドリーム・・・そしてメロディと
ハッピーとホイップ、これで一気に「待ちな!」へ?」

星奈「キャラクター?」

キャラクター「あれを見な!」

上空にいるキャラクターが指差している方向を見るとそこには、バッドエンド状態になっている先輩と白銀希美がにせブラックとにせホイップに捕まっていたのであった。

星奈「先輩! 白銀さん!」

キャラクター「コイツらを解放したければ武器を降ろしな」

星奈「あんた卑怯ね」

キャラクター「卑怯もらつきようもないってのよ!?! 早く武器を降ろしな!」

私は仕方なくソニックアローとロックシードを下ろした。

にせメロディ「ギ」

星奈「くっ」

背後からにせメロディに両腕を捕らえられ、私の目の前からにせハッピーが現れた。

にせハッピー「ギ♪ギ♪ギ♪」

星奈「ハッピー・・・」

にせハッピー「ギイ!」

バキッ!

星奈「ぐふっ」

にせハッピー「ギイ!」

バキッ!

星奈「げふっ」

にせハッピー「ギギイー!」

バキッ!

星奈「ぐへえ」

私はにせハッピーに腹パンチをかまされる状態になってしまった。

星奈「はあ はあ はあ キャラクター・・・早く二人を・・・解放・・・はあ・・・しなさい」

私はキャラクターに二人を解放しろと命じたがキャラクターは・・・キャラクター「ぷっ・・・キャハハハ♪ いいえまだまだよ。にせ

ハッピーの攻撃を受けてもあんたは抵抗しないで頑張っているんですもの……だから……」

星奈「……まさか……」

キャラクター「にせブラックとにせホイップのパンチでコイツらの頭をぶっ壊す！」

キャラクターの恐ろしい言葉を聞いた私は慌てて止めようとした。

星奈「そんな……やめて！……目的は私のはずよ……その二人は関係「ギイ！」ぐふっ！」

私が激しくキャラクターを止めようとしたがにせハッピーのパンチを運悪くもろにくらい意識がだんだんと遠ざかろうしていた。

キャラクター「ハハハハハハ！よく見てなこの二人がフルーツのように壊されて飛び散っていく所を……」

星奈「そんな……」

星奈「や……め……て……」

秋人 side

糞!? 体が自由に動かねえ!? 黒井が一人であんなプリキュアもどきと戦つてんの俺は自分の力がこの程度のこと怒った。

希美 side

黒井さん……私達のために……一人で戦ってる……私にも力が……こんな弱い私でも……黒井さん……星奈ちゃんの助けになりたい!

にせブラック「ギ？」

にせホイップ「ギ？」

キャラクターside

心なしかブラックとホイップに捕まっている二人に私は何かを感じ取った。まさか……

秋人・希美「黒井を……」「星奈ちゃんを……」離せー!!」離してー!!」

キャラクター「何？」

二人が強烈な光を放ったせいでブラックとホイップから解放されてしまった。

秋人「黒井!!」

希美「星奈ちゃん!!」

星奈side

私は一瞬？捕まっている二人から強烈な光を発し、目を瞑ろうとしたが、背後に私の両腕をつかんでいるにせメロディに隙ができ、私は顔面に強烈な裏拳をかましてやった。

バキツ!!

にせメロディ「ギギ!？」

裏拳一発でKOしたにせメロディは倒れ付して爆発した。

ドカーーン!

秋人「黒井!!」

希美「星奈ちゃん!!」

星奈「二人とも……さつききの光……そんなことより早く逃げて！早く逃げないとまた「うるせえ!!」」

私が二人を逃そうと説得したが先輩が私に向かって怒号を発した。

秋人「女のお前が一人であんなのと戦ってるのに男の俺が戦わないでどうすんだ？」

星奈「先輩……」

希美「星奈ちゃん……星奈ちゃんがあんな恐いのと戦ってる姿見て、私、星奈ちゃんのことなにもわかってなかった。」

星奈「白銀さん……」

希美「だから私にも……星奈ちゃんの……友達のためにも何か手伝わせて！」

二人の言葉を聞いた私は自分の心になにの枷のようなものかはずれたような感じだった。本当なら二人をこの戦いに参加させたくない。今の私はプリキュアとはなんの関係もないこの二人を戦わせたくないという気持ちと不安で戦ってきたが二人は自分たちの決意で戦いに参加するという心に私の中の不安という枷が外れた。

星奈「……わかったわ……それと」希美

希美「え!？」

星奈「星奈でいいわ……ちゃん付けは慣れてないのよ」

希美「うん！わかった星奈」

秋人「でもどうすんだ？戦うつつつても素手じゃ勝てる相手じゃなさそうだぞ？」

希美「あう」

星奈「それはまかせて」

私はワールドフォンを取りだしある設定をして二人にあう武器を出した。

星奈「先輩はこれをそして希美はこれ」

《チェンジー・ソードメイス》《ネクストチェンジー！ボーイズm k 1対装甲ライフル！》

秋人「おっと」

希美「ほう これライフル？」

先輩には剣に横した棍棒ソードメイス、希美には固い鋼鉄甲をも貫くボーイズm k 1対装甲ライフル

希美「でも・・・これ思ったより軽い」

秋人「見た目はかなり重い物だと思ったがバット並の重みがあるな」

私がワールドフォンで二人が持てる力量に設定にしたのだ。

星奈「隠れてないで出てきなさい！ポンポー」

ポンポー「へ？」

私は銀杏の木で隠れているポンポーに声をかけた。

ポンポー「なんだよ？星奈」

星奈「ポンポーあんたはこの子と組んであげて」

希美「え？星奈・・・どうして」

星奈「ライフルは近距離じゃ不利よだからできるだけ遠くで撃つて！」

希美「星奈・・・うん！頑張る！」

星奈「じゃあポンポー頼んだよ」

ポンポー「お・・・おう任せろ！」

希美はポンポーと一緒に遠くに離れ、私と先輩は残り4体のにせぶりキュアを睨んだ。

キャラクター「ふん！そんな力もない奴が加わったって所詮、ただの人間……ここでこいつらもろとも殺してやるよ」

星奈「それはどうかしら？」

秋人「あまり俺を嘗めるとぶっ飛ばすぞ！」

キャラクター「ちっやれ！」

キャラクターの怒りの入った怒号で4体のにせプリキュアが私達に襲いかかってきた。

にせハッピー「ギイ！」

にせホイップ「ギイ！」

星奈「ふっ！」

私の相手はにせハッピーとにせホイップ

にせブラック「ギギイ！」

にせドリーム「ギイ！」

秋人「キュアブラック……の偽物野郎か……練習台には丁度良
いぜ！」

にせホイップ「ギギギギ〜」

にせホイップは鞭のように振るうキャンディロッドを避けながら
攻撃しようとしたが……

にせハッピー「ギギギギギギ!!!」

にせハッピーの連続パンチが襲いかかってきた。

星奈「くっ」

ガガガガガガガガガ!

星奈「痛っ」

にせハッピーの連続パンチをガードしたが素手での防御だったのでダメージはすこし出ってしまった。

にせホイップ「ギイ！」

またにせホイップのキャンディロッドの攻撃に苦戦するかと思いきや……

ドン!!

にせホイップ「ギ? ギ?」

ボカーーン!!

今の音そしてあの銃撃音、にせホイップの頭が貫かれていることに気づいた私は後ろを振り向くと、そこには対装甲ライフルを構えた希美だった。

星奈「希美……」

希美は笑顔でVサインをした。そしてポンポーは手のひらをヒラヒラと降っていた。

星奈「じゃあ、私もすこし頑張らないとね……」

私は武装色の覇気を両腕に発動させ、にせハッピーはまた同じように連続パンチを出した。

にせハッピー「ギギギギギギギギギギ!!!」

一回くらった連続パンチ私にとつてもう同じ手はくわらない

星奈「ふんっ！」

バキンッ

にせハッピー「ギ!？」

私の一降りのパンチでにせハッピーの腕を粉碎した。

星奈「はあああああ!!!」

ボカボカボカボカボカボカボカボカ!!!!

にせハッピー「ギギギギギギギギギギギギギギ」

私の連続パンチのほうはどうやら威力はあったようだ。その証拠ににせハッピーの顔がグダングダンである。

星奈「ふんっ！」

バキッ!!

にせハッピー「ギイーーーーー!!!」

ドカーーーーーー!!

私の渾身のアッパーでにせハッピーをぶっ飛ばし爆散した。

残り2対

秋人 side

にせブラック「ギイ！」

にせドリーム「ギイ！」

シュツ シュツ シュツ シュツ シュツ

ガキン！ ガキン！ ガキン！ ガキン！

俺はこいつら二体のパンチのラッシュに苦戦していた。だが俺は負けない！

にせドリーム「ギギギグググ!!」

もう一体のプリキュアが、必殺技のような体当たりを仕掛けてきた。だが俺は逃げずに構えた。

秋人「テメーらには言つてなかったが、俺は6才から野球で大活躍してっからバットの振りはお手のものなんだよ!!!」

ブンッ!!

バキーーーーー!!!

にせドリム「ギギギギギイーーーー!!」

ドカーーーーーーーン!!

秋人「ホームラン・・・か」

にせブラック「ギギギギイーーーー!!」

秋人「うおっと!」

星奈 side

星奈「先輩!」

秋人「黒井!」

残り一体 ここで一気に終わらせる。

星奈「先輩! 3人で一気にいきましょう!」

秋人「3人・・・なるほどな」

にせブラック「ギギギギ!!」

残り一体となったにせブラックは最後の力を振り絞りあり得ない速さの連続パンチを出したが・・・

ガシッ!

にせブラック「ギ?」

星奈「これで両腕は使えないわね・・・希美!」

希美「うん!」

ドン!

バコーーン!!

にせブラック「ギイ!」

私は武装色の覇気の腕で両腕を押さえつけ希美のライフルでにせブラックの腹の部分を貫いた。

星奈「先輩！あと宜しく」

秋人「オウラーラーラー!!!」

バキイーーーーー!!!!

紺野先輩のソードメイスのホームランでにせブラックをぶつとばした。

にせブラック「ギイーーーーー!!!」

ガシッ!

にせブラック「？」

ぐしやあ!!

ボカーーーーン!!

星奈「!？」

秋人「!？」

希美「!？」

ポンポー「!？」

にせブラックはキャラクターのほうにぶつ飛ばしたがキャラクターにキヤッチされそのまま顔を潰して爆発した。

キャラクター「ちつ まあいいわ今回はコイツらの性能を試しただけだし・・・今回は引き上げるわ・・・そして」

キャラクターは私の方を向いてこう言い放った。

キャラクター「次は私と勝負よ・・・黒井星奈」
殺気の籠った言葉を残して消えた。

秋人「おい！黒い雲が・・・」

希美「晴れていく・・・」

星奈「どうやらプリキュアが敵を倒したらしいわね」

それを言いながら私は銀杏の葉が沢山ある地面に倒れた。

秋人「おい！黒井！」

希美「星奈!？」

ポンポ「星奈！大丈夫か？」

星奈「今日はいろいろと疲れたわ・・・すこし眠い・・・」

私は疲れて眠ってしまった。見た目は笑ってないが私は心の中で二人に笑顔を向けた感じがした。

みゆきside

みゆき「一人でよく頑張ったね」

やよい「ありがとう みんなのお陰だよ」

私達はやよいちゃんの漫画ミラクルピースが完成した記念に私は黄色い花束をあげた。

やよい「ありがとう♪」

あかねちゃんもなおちゃんもれいかちゃんもやよいちゃんの漫画の完成を誉めた。

星奈「……………」

黒井さんは今日も一人で小説を読んでいた。

みゆき「そういえば黒井さんってまだやよいちゃんの漫画読んでないんだっけ？」

やよい「そういえば……黒井さんが漫画読んできるところ見かけないよね」

みゆき「じゃあ、黒井さんにもやよいちゃんの漫画見せてあげよう！きつと嬉しくて感動するよ」

そうと決まれば私は黒井さんの席に向かった。

みゆき「黒井さんやよいちゃんの漫画み（表もあれば必ず裏もある）……………」

あかね「どないした？みゆき」

やよい「どうしたの？みゆきちゃん」

みゆき「え……………いや……なんでもないよ?」

私は何故か黒井さんのいったあの言葉を思い出した。あの言葉は最初はどういう意味だったのか分からなかったけどなんでだろう……………私は黒井さんの所に近寄りがたくなった。

ガララッ

希美「星奈……………いる?」

星奈「あら・・・希美」

希美「続き出来ただけど・・・読む」

星奈「ええ・・・行きましょう」

ギロリッ

みゆき「!?っ」

なお「みゆきちゃん？」

れいか「どうされたんですか？」

みゆき「ううん、なんでもないから・・・あはは・・・」

黒井さんにも友達が出来たんだ。下の名前で呼びあつてたし・・・でも・・・あの目・・・なんか・・・怖かった。まるで私達のことを人間じゃない”なにか”を見下ろす目に見えていた。黒井さん・・・あなたは何なの？

13話 ふしぎ図書館の外

ピッ ピッ ピッ ピッ

私は部屋のコンピュータールームであるところを調べていた。そこは……

ポップ「皆の衆……実は折り入って話があるのでござるが」

れいか「どうなされたのですか？ポップ」

ふしぎ図書館で二人の妖精と5人の少女スマイルプリキュアのメンバーがなにやら話していた。

ポップ「拙者がお主たちの情報を元に色々と調べた結果」

みゆき「もしかしてわかったの!？」

あかね「そのジェネラルプリキュアっちゅー悪い奴のことが」

やよい「わかったの?」

なお「どうなの？ポップ」

5人がポップに詰め寄り、ポップが出た答えは……

ポップ「残念ながら……メルヘンランド中の本を調べてもジェネラルプリキュアに関する記録はどこにもなかったでござる」

みゆき「そんな……」

ポップの言葉に星空みゆきは愕然とし、日野あかね以外の3人も愕然とした。

あかね「なあ、みゆき……あんたアイツに嘘を吹き込んだんとかやうんか？」

みゆき「え？」

日野あかねの言葉に4人は動揺した。

あかね「みんな忘れてないやろな……あいつはオーディウムは全てのプリキュアを憎み、殺す奴やって……要するにあいつは先輩プリキュア達、あるいは後輩も狙つとるつちゆうことやろ？」

なお「確かにアイツはそう言ってたね」

やよい「でもオーディウムの家族はプリキュアに殺されたつて……」

バタンツ!!

みゆき「!?」

やよい「!?」

なお「!?」

れいか「!?」

キャンディ「!?」

ポップ「!?」

黄瀬やよいが喋ってる途中に日野あかねはテーブルを強く叩いた。

あかね「そこや!?そこ!なんでプリキュアが人殺しするんや?ありえへんやろ!?!プリキュアはキャンディ達の故郷メルヘンランドを救った英雄、伝説の戦士やろ?それなのにアイツはうちらを悪者呼ばわりした挙げ句、デコルまで壊しよって、アイツのいう家族をプリキュアに殺されたつちゆうこと事態怪しいんや!?!」

日野あかねの言葉に4人と2匹は黙ってしまった。

やよい「で……でも本当はそんなに悪い人じゃないのか」「やよい!!」ひっ!」

恐る恐るあかねに質問をしようとした黄瀬やよいに日野あかねは怒鳴った。

あかね「そもそも自分の口から人類の味方とほざくような奴をうちは信用ならへん!!このままだとうちらがバッドエンドの戦ってる最中にアイツは先輩やら後輩らを殺しにくるかもしれない?」

みゆき「!!っ」

あかね「せやから、バッドエンド王国より先にオーデイウムをどう「あかねちゃん……」るかかんが「あかねちゃん……」なんや!みゆきうっさい」

パチーローンツ

やよい「!っ」

なお「!?!」

れいか「!?!」

キャンディ「!」

ポップ「みゆき……殿?」

日野あかねが反論してる時……星空みゆきは日野あかねの頬を叩いた。

あかね「何すんねん!?!みゆ「あかねちゃん!!!」」

キャンディ「みゆき……」

みゆき「私達……プリキュアが「殺す」とかそんな怖いこと……:…:…
いわないでよ」

あかね「み……みゆき」

星空みゆきは涙を流していた。プリキュアにとって一番言っではいけないことを日野あかねは言ってしまったのだ。

れいか「みゆきさんのいう通りです。あかねさん」

あかね「れいか……」

れいか「私達プリキュアはバッドエンド王国と戦うとき殺そうとしたことはありますか？ちがうでしょ？私達は“救うため”に戦っているんです。」

なお「れいか」

れいか「私も彼女には少し気がかりがあります。ですが、私達プリキュアがここで仲間割れしてしまつてはオーディウムどころかバッドエンド王国でさえも勝てる見込みはありませんよ？」

あかね「……ごめん、みゆき……うち言いすぎたわ……
ホンマにゴメン！」

みゆき「あかねちゃん……いいよ……それに私もあかねちゃんをぶつたりしてご免なさい」

星空みゆきと日野あかねはお互い抱き合い、それをみていたキャンデイとポップの顔に笑顔が出た。

ポップ「メルヘンランド中の本を調べてもジェネラルプリキュアに関する記録はどこにもなかったでござる……だが本の中にこの紙切れがあつたのでござる」

みゆき「紙切れ？」

なお「かなり古い物だけど何て書いてあるの？」

キャンデイ「お兄ちゃん」

ポップ「うむ、紙切れに書かれているのは誰かが書いたかは分からないとされている本……」プリキュアの書「でござる」

一同『プリキュアの書?』

れいか「それは一体どういうものなのですか?」

ポップ「うむ・・・その本にはありとあらゆるプリキュア達のことを書かれているらしいのでござるがこの紙切れの最後の文章のほうに”大樹から離れた場所”にあると書かれていますのでござる」

なお「大樹から離れた場所・・・」

やよい「どこなんだろう?」

あかね「町には大樹とかそんな大きい木なんて見当たらんからなあ」

れいか「・・・」

みゆき「大樹から離れた場所・・・ってどこにあるんだろう?」

ピツ

私はモニターを消し、私はプリキュアと妖精達の会話の中から出てきたプリキュアの書について考えた。

星奈（大樹から離れた場所にある・・・大樹から・・・）
プリキュアの書は大樹から離れた場所にあることだ私はもう一回モニターでプリキュア達の会話を聞こうとしたときある場所に気がついた。

星奈（大樹・・・まさか!?)

プルルルル! プルルルル! プルルルル!

星奈（電話・・・）

私はワールドフォンを取りだし、画面の方をみるとそこにはある人物からの電話だった。

星奈「ミスト……」

それはDWDの総司令官からの電話である。

星奈「はい！こちら黒井星奈」

ミストへ星奈「……今君のいる町になにかプリキュアに関する手がかりはなかったか？」

星奈「はい……今のところある場所にプリキュアの書と呼ばれる本があるということがわかりました。」

ミストへ「そうか」

私との会話に総司令のミストは安心したかのように声を発した。

ミストへ「実は各町を担当している君たちガーディアンに新たな新人をそこに派遣しようと思っっている」

星奈「新人……ですか？」

ミストへ「ああ、君のいる町には5人の新人をそこに送り込む以上だ……引き続き調査を続行しろ」

星奈「5人ですか？……わかりました。よろしく願います。」

ミストへ「一週間後にはそこに着く……頼んだぞ！」
ブツ

総司令からの電話は以上で私はモニター画面を消し、そろそろ寝ようとして寝床に行こうとしたときふと星空みゆきのあの言葉が引っ掛かった。

みゆき「プリキュアが「殺す」とかそんな怖いこと言わないでよ」

星奈「ちっ」

私はその言葉が胸糞悪くなり、とつとと寝た。

「屋上」

昼休み、私は秋人先輩と希美、そしてポンポーを集めて、ある場所に行くことを計画していた。

秋人「ふしぎ図書館？」

星奈「ええ、この町で活躍しているプリキュア達の本拠地……」

希美「ふしぎ図書館ってどんなところなの？」

星奈「あそこは色々な本が納めていて、その数はかなりのモノよ。」

希美「そ……そんなに」

ふしぎ図書館の説明に希美の目は子供が玩具を欲しがるとして
いた。

ポンポー「そんで、そのふしぎ図書館に行くのはいつからなんだ？」

星奈「今夜よ……」

3人「へ？」

私の言葉に先輩、希美、ポンポーはもう一度と耳を澄ましたが私は今夜ともう一度言い聞かせ、3人はマジかというような顔をした。

星奈「今夜の12時00分……校門に集合よ」

秋人「マジかよ？」

希美「その時はお母さん達も寝てるし、大丈夫だよな？」

ポンポー「おいおい星奈、せめて早い時間でいかねえか？」

星奈「寝たいなら寝てもいいわよ……私一人でも行くから」

希美・ポンポー「えええええー!!!」

そして私はその時知らなかった屋上の扉の裏側に聞いてる人がついできたことを……

?「……………」

キラ

12時00分

星奈「全員、集まったわね？」

秋人「おう……」

希美「お母さんには怪しまれたけどギリギリ誤魔化して来ました。」
ポンポーは私と一緒に来たからよし!

星奈「それじゃしゅっぱ「黒井さん!!」」

気がついた？私は周りを見渡したがどこにも先生らしき人はいないと安心したかと思えば後ろから思わぬ人物がいた。

星奈「空野さん……」

それはかつてポンポーの狸集会でひどい目にあっただが私の正体を知ってしまい、私の方にいつも寄り付く2年の空野主がそこにいた。

主「抜け駆けは許さないわよ！黒井さん」

星奈「あなたは呼んでないけど……」

主「私はね偶然聞いちゃったのよあなた達の話している所をね」

あの時、屋上の扉の裏で耳をつきながら聞いていた空野主の存在を忘れたことに私は頭を悩ませた。

主「ということでも私も参加ってことでいいわね？」

星奈「……」

私はしぶしぶ空野主の参加を許可した。

パアアアアア

私達は図書室に到着し、本棚の本を正しい所に整えた。私はあの時、モニターで星空みゆきがふしぎ図書館に行く時の開け方を見て覚えていたので早く出来た。開けることに成功し、ピンク色の光が私達を覆い尽くした。

一同『うわあああ〜』

シュンツ

ドスンッ!!

星奈「いたた・・・早く離れなさい・・・ポンポー」

秋人「早く離れろ・・・」

希美「重い・・・」

主「いたたた」

ポンポー「へ・・・悪い悪い」

私達がふしぎ図書館に繋がるワームホールの出口から落ちてしま
い最後にポンポーが落ちてきたせいでボディープレス状態になつて
いた。

秋人「ここが・・・」

希美「すごい!!上から下まで本が沢山ある♪」

主「ここがプリキュアの本拠地・・・以外とメルヘンな所なのね?..
ん?」

空野主がカメラでふしぎ図書館を撮影してる時にふとポツンと置
いてあるピンク色の家があった。

主「ねえ・・・黒井さん、あの家って」

星奈「プリキュアと一緒にお菓子を食べたり、遊んだりする..
..いわば娯楽室みたいな所ね」

主「嘘!プリキュアの・・・じゃああの家に行ってみましょう!!」
ガシッ!

主「ちよつ何すんの黒井さん?」

私は空野主の袖を掴んだ。そもそもここに来たのはプリキュアの
娯楽室に行くことじゃない

星奈「私達の目的は・・・このふしぎ図書館の外に行くことよ
!ポンポー!」

ポンポー「よっしゃ!!ドロン!!」

ポワン!!

ポンポーは巨大なドラゴンに変身し、先輩は凄いと評価され、希美
に至っては目を輝かせた。

星奈「みんな早くのって、空野さんも！」

主「え？分かったわ！」

私達は全員ポンポーの背中に乗り、私はポンポーに合図を出した。

星奈「ここからふしぎ図書館の外に行くわよ!!みんなしつかり手を掴むのよ!ポンポー飛んで!!」

ポンポー「いっつつくぜええええ!!」

ポンポーは羽を大きく揺らし、上空まで一気に飛ばした。

ポンポー「ここからは特急で行くぞ!!しつかり捕まっときなあああ!!!」

ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

星奈「くっ!」

秋人「くううううっ!!」

希美「うううううっ」

主「くうううっ!!」

出口が分からない上空を飛んでいる中で私はあのポップとかいう妖精の言葉を思い返した。

ポップ「大樹から離れた場所にある」

その言葉の意味が分かった……大樹とはこのふしぎ図書館を表していたのだった。この図書館の周りには樹々が覆い繁っていたからである。プリキュア達の本拠地のふしぎ図書館は大樹の中にあっただのだ。

ガサツ!!!

ポンポー「お前ら!!外に出たぜ!?!」

星奈「ここがふしぎ図書館の……外」

ふしぎ図書館から出た私達の見た外は広大な草原と巨大な森に覆い尽くした所だった。

13. 5話 ピラミッドの番人

今私達はポンポーが化けたドラゴンで空中を浮遊している。

このふしぎ図書館の外にこんな場所があったとは正直知らなかった。

そもそもふしぎ図書館はプリキュア達があの家でお菓子を食べて、遊んだりする娯楽室であり、ふしぎ図書館の力で世界各国に自由に行き行きできるのだ。とある漫画で言う、〇こ〇も〇アみたいなのである。

カシヤカシヤ

主「それにしても外見でみるとこんなに大きいのね？」

空野主は持ってきたカメラでふしぎ図書館の写真を録っていた。それにしてもふしぎ図書館の中は、読みきれないほどの量の本が下から上まで詰まっている。プリキュアがたくさんの本を読む姿なんて見たこともない。

しかもふしぎ図書館を地上から見た姿は巨大な大木だった。もしかしたらと思っただけど、まさかここまでとはと心の中で驚いた。

まるでとある世界にあった”全知の木”に似ている。

主「それしても黒井さん……この……狸？……どつかで見たことあるんだけど？」

ポンポー（ギクツ）

そういえば私がポンポーに正体を明かしたとき空野主はあの時、気を失う寸前だったので記憶は曖昧なのだ。

星奈「これは私のペットのようなものよ。気にしなくていいわ」

ポンポー（ペットかよ！）

私は適当な対応で空野主を納得させたが、ポンポーにいたっては不貞腐れていた。

秋人「それで黒井、この世界で一体何をやるつもりなんだ？」

星奈「私達の目的は只一つ……プリキュアの書を手に入れること」

希美「プリキュアの……」

主「書？」

秋人「なんだよそれ？」

3人は私の方にぐいっと詰めより、私は3人を少し離れさせて、説明した。

星奈「その本の中身はありとあらゆるプリキュア達の力、そして誕生、そしてその歴史が書かれた貴重な本らしいわ」

秋人「プリキュアの……歴史……」

星奈「もしかしたらプリキュアの力を消す何か記されているはず……」

ビー！ビー！ビー！ビー！

星奈「これは！」

私のポケットからワールドフォンが激しく鳴り、取り出してみると画面に映し出された画像の地図から私達のいる位置と赤い点が近づきつつあり、それで反応し震えたのだ。強い反応……プリキュアの書がある場所は近い！

星奈「ポンポー！そこで降りて」

ポンポー「あいよ！」

ポンポーは岩山の方に止まり、そのままゆっくりと降りた。

ドロン！

私達は順番に降り始め、終わった時ポンポーは巨大なドラゴンから元の狸の姿に戻った。

星奈「どうやらこの洞窟の中から強い反応があるみたいね？」

秋人「じゃあ、とつとと行こうぜ」

希美「うん」

私達は洞窟の中に進み、その長い道のりを歩き続けた。

ザアアアアア

星奈（水の音……）

私はその音に反応し、急いでその方向に向かった。

秋人「おい！黒井」

その後ろで急いで追いかける先輩、希美、主、ポンポー

星奈「ここつて……」

私達が見たのはこの地底の広い空域に周りは湖に覆われた地底湖
その中心に光が差された陸地がポツンとそこにあった。

星奈「ここからは船ね・・・ポンポー！」

ポンポー「ほんとは水はトラウマだがやってやるぜ！」

ドロン！

ポンポーは4人乗り用のボートに変化し、私達はそれに乗って陸地
まで向かった。

星奈「着いたわ」

私達は陸地にたどり着き、進み始めた。

その時、私達は信じられない光景を目にしてしまった。

星奈「ここは……」

秋人「古びた……」

主「街……」

私達がたどり着いた場所はそこはかつて街があつたかのような場
所であり、どれも石造りでできていて長い年月で苔も生えていた。

主「すごーい!!こんな所に歴史的遺産があるなんて私なんか感激し
ちやうな♪」

? 「グルルル!!」

ポンポー「ギャアアア!!」

星奈「え?」

秋人「なんだ?」

ポンポーが一目散に逃げている中でわたし達が見たのは

? 「グルルルルル・・・」

秋人「あいつ・・・俺たちを狙ってるかもな?」

星奈「もしかしてこのピラミッドの番人かしら?」

見た目はライオンに似ているが身体中岩に覆われた巨大な生き物であった。

? 「グルルルルル・・・」

ドツドツドツドツドツドツ

秋人「こつちに来るぞ!」

ポンポー「お前ら避ける!」

全員「うわあああ!!」

ドガーーーーーーンッ

もう突進で柱の方に激突した。

へチエンジ! ソードメイス! へ

星奈「先輩!」

秋人「おう!」

私は今この状況をどうにか解決策を考えた。今の私の持っている武器では恐らく奴を倒すことは出来ない。今ピラミッドはあの怪物

がここに降りたことでもぬけの殻だ。だれかがあのピラミッドに行かせなきや

星奈「希美！主！」

希美「へ？」

主「えっ黒井さん・・・今私の名前・・・」

星奈「あなた達二人であのピラミッドの中に入って！ここは私と先輩とポンポーが足止めしておくから」

希美「星奈！」

主「ちよつと無茶よ黒井さん・・・あんな怪物あんたの武器じゃ歯が立たないわ！ここはい「行け!!」

大きな声で二人に警告した人物は秋人先輩だった。

秋人「黒井が行けつていつてんだ！だからお前らは黒井のいうとおりあの中に入れ!!」

主「猛・・・・・・・・紺野先輩・・・・・・・・」

希美「・・・・・・・・・・・・・・・・」

希美は拳を握りしめ、両目な決意した目となり主の方を向いた。

希美「行こう！主さん！」

主「希美・・・・・・・・ええ」

彼女達は意を決してピラミッドの内部に繋がる入り口に向かった。

？「グルルルル・・・・・・・・」

ドツドツドツドツドツドツ

それに反応したのか怪物は標的をあの二人に変更しピラミッドの方に向かおうとしたが・・・

へネクストチェンジ！ソニックアロー！

ピシユンツ！

ドガーン！！

？「グルルル・・・」

星奈「あなたの相手は私たちよ」

秋人「勝手に敵を間違えんなよな」

怪物は今の攻撃で効いたのか標的は私達の方に戻ってきた。

？「グルルル・・・」

ドツ！ドツ！ドツ！ドツ！ドツ！ドツ！ドツ！

星奈「はあ！」

秋人「オラア！！」

ガキンツ

ガキンツ

私の斬撃と先輩の打撃で怪物に食らわせたが傷一つついていない・・・そのせいか急に目が赤くなり始めた。どうやら怒りが頂点に達したらしい。

？「グルルルル！！」

ドツドツドツドツドツドツドツドツドツドツドツドツドツドツ

怒りで猛スピードでこちらに突進し、逃げると行ってもどこに逃げるか

ポンポー「俺様に任せろ！！」

ドロン

ガチツ！！

？「グルルルル・・・」

ポンポー「ぐぐぐぐぐぐ……」

妖怪ぬりかべに変化したポンポーが怪物の突進を受け止めた。

？「グルルルルルル」

ジリジリジリジリ

ポンポー「ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ……」

ドガッ

ドーーーーーン

力比べではあの怪物の方が上だったらしい。このままじゃ二人が戻るまでの間私達は全滅になってしまうと思ってたがさっきのポンポーと怪物の力押しでポンポーがジリジリと詰め寄ってくなかで後ろに建っていた柱が当たって倒れた。

星奈「柱……！！っ」

私は周りに立つ柱を見渡し、その最後の方を見たとき勝機があった。

ジリジリジリジリ

ポンポー「もう……駄目」

ドロソッ

？「グルルルルル！」

ピシユソッ

ドガーーーーン！

？「!?」

星奈「あんたの相手は私よ、私を倒したければこの柱から振り落とすことね」

ポンポー「おい星奈！」

秋人「あいつ……何考えてんだ？」

？「グルルルルル」

ドガーーーーン!!

怪物の猛突進で私のいる柱は私の思った場所に倒れた。

星奈「先輩！ポンポー！あなた達も早く柱に登って！」

秋人「は？」

ポンポー「なんでだよ？」

星奈「いいから早く」

今倒れた柱は2本、あと3本そこにたどり着く所におびき寄せられ
ば
.
.
.
.
.

希美 s i d e

希美「この絵って……」

私と主さんは星奈達のお陰でピラミッドの内部に入ることが出来
ました。

ピラミッドの内部は一つの狭い通路になっていてなんだかとても
不気味なところでした。

歩いて10分、私達は一つの大きな扉があり、私と主さんと一緒に力一杯押し上げやつのことで扉が開きました。

その扉の先には、広い空間になっていた両方の壁には大きな壁画が描かれていました。

希美「この壁画・・・一体・・・」

主「見て希美！」

希美「え？」

主さんは入り口前の壁画の方を指差した。

主「これ・・・猿と空を飛んでいる女の？」

左の方を見るとそれは女の人達が原始人に似ている子達に勉強を教えている壁画でした。

2、3、4の両方の壁画には女の人達がみんなに尊敬と仲良く一緒に暮らしている平和的な壁画でしたけど・・・5番目の壁画とても恐ろしく残酷な絵でした。

希美「このお城の方にいる人って王様？」

主「希美！・・・これ見て」

私は主さんが左の方を見て見るとそこには騎士の格好をした人達が女の人達を切り裂いたりしている場面だった。

主「希美・・・早くプリキュアの書を手にいれて早くここから出ましょう」

希美「う・・・うん・・・そうだね」

私達は急いでプリキュアの書がある部屋まで走った。

その時走っている中、壁画の方に赤と青と黄色の人達の壁画があったような・・・

主「はあ はあ はあ 着いたわ」

希美「あの階段の上に・・・プリキュアの書が」

私達は走っていく内に大広間に出ました。そこには周りが石造りのカプセルのようなものがありましたけどその真ん中の階段の上に石の箱が石の台座に置いてあった。

主「あそこに・・・私達の目的の物があるのね」

希美「行こう！」

私達はその階段を登り始め、私達はなんのトラブルもなく頂上にたどり着きました。

希美「それじゃ・・・開けます！」

主「ゴクリツ」

主さんはカメラを用意し、私は箱を開け、中身は本だった表紙に桃色と黒が半分塗ってあって題名は文字がわからないのでもしかしたらこれがプリキュアの書だと思いました。それにしても・・・

この表紙についているマークはハートの真ん中に目玉が書かれていてハートの両方の丸い部分には天使と悪魔の羽がついていました
がこれは一体・・・

主「ねえ・・・この紙って設計図なのかしら？」

主さんが手に取ったのは何十枚もある紙がありました。

主「ともかく、早く星奈達の所へ行きましょう」

希美「うん！」

私達は急いで星奈達のいる外へと向かいました。

星奈 s i d e

私や先輩、ポンポアの協力で怪物を何本かの柱の方におびき寄せ激突させた。

そして最後に建っていた巨大な建物の方におびき寄せた怪物を私はソニックアローで怪物の方に撃った。

ドガーン!!

? 「グルルルル」

星奈「どうしたの? 私はここにいるのよ?もしかして怖じ気づいたのかしら?」

怪物は赤い目となり最後の力を振り絞って私の方に向かって突進してきた。それが勝機だった。

星奈「ふん!」

ドーーーーーン!!!

ガラガラガラガラガラガラガラガラ

ガシャアーーーーー

怪物が建物の支えていた柱の1本に激突し、その1本の柱がなくなったお陰で建物の瓦礫が一斉に崩れだし、怪物はその下敷きになった。

ポンポー「よっしゃあ!」

秋人「終わったか・・・」

二人は戦いが終わり安心して腰を下ろした。

希美「みんな!!」

希美の声がかきこえたどうやら無事に目的の物を手にいれたみたいね

秋人「お前ら無事だったか?」

主「無事本は手にいれたわ」

星奈「それじゃ、あいつが目覚める前にとっとと逃げるわよ ポンポー」

ドロン!

ポンポーは巨大なドラゴンに変身し私達は急いでポンポーの背中に乗り、ポンポーは翼を羽ばたかせ上空まで飛んだ。

ピラミッド内部　プリキユアの書の間

希美達が去って5分・・・その時、石のカプセルの中から何かが出てきたのは知るよしもなかった・・・

14話 プリキュアの書

星奈「プリキュアの・・・書・・・この本の中にプリキュアの全てが書いてあるのね？」

私達はあの世界から無事、学校の図書室から戻ってこられ、私達はそれぞれの家に戻った。

そして私は希美と主から受け取ったプリキュアの書、そして謎の設計図と思わしき紙を受け取り、私は家で調べることにした。

まず私はプリキュアの書を読もうと本を開いた。

ポンポー「なんだこりゃ？この文字俺でも読めねーぞ」

ポンポーは覗き見し、本に書かれた文字が見たこともない字で書かれていたことで諦めた。

私はそれを無視して早速プリキュアの書を読んだ。

「私達、プリキュア人は争いと言うものはなく人と人との関わりを大切にし、困ったことがあっても友情を深めあい心を大切にする一族である・・・」

私達の星”プリズム”は宇宙から宇宙へ・・・私達プリキュア人との共存を望む星を求めて旅立つ遊星・・・

そして私達はそれを見つけた・・・その星は青と緑・・・そして白い雲に包まれたきれいな星・・・

美しい・・・まるで・・・支えてなければ・・・こぼれ落ちて

しまうかのような・・・美しい星

私達はその星に降り立ち、その景色は動物達が豊かに育てて皆のびのびと生きる姿を表していた。

私達は後に人間と呼ばれる生き物に出会い、私達は彼らに知識と力を与えた。

彼らは私達の教えに導かれ知識を持ち進歩し人々は豊かに平和に暮らすことが出来た。

私達の星では長である”マザークイーン”に双子が産まれた。

ナ
産まれた子は両方女の子であり、姉はインゲル、妹はアンジェリー

姉妹はとても仲が良かった。

マザークイーンはその姉妹にあることを頼んだ。

私達が行くある星に行き、これまで私達の知恵と力の使い方を教えた人と呼ばれる存在がどのようなものかそして仲間達はどのようなものか確かめて欲しいと頼まれ姉妹達はその星へと向かった。

そして姉妹達はその星へと足を踏み入れ、そして姉妹達が見たものは・・・

この星に生きる人の中に王と呼ばれる存在が現れ、より多くの力を得るため……私達の仲間であるプリキュア人達を支配していた。

姉のインゲルは人と呼ばれる存在に怒りを覚えた。わが同胞であるプリキュア人達を犯し、痛め付け、殺されていく様にインゲルは人を憎む心を生み出した。

妹のアンジェリーナはプリキュア人達を殺していく人にどうしてこうなったのかわからなかった。一体……どこでどの方から間違っていたのであろうか……アンジェリーナはプリキュア人と人との関係に何かが外れていることに悩んだ。

故郷の星に戻ったインゲルとアンジェリーナは母のマザークイーンにこの事を報告した。

姉のインゲルは人を全て根絶やしにし、私達の新たなる新天地として住むということを提案した。

一方、妹のアンジェリーナは人の中には平和を願う者達もいることを報告し、もう少し彼らを見守ることを提案した。

マザークイーンが出した答えは……姉のインゲルではなく妹のアンジェリーナの提案に賛成した。アンジェリーナの言う通り、もう少しだけ彼らのことを見守っていこうと考えた。

……だが、インゲルはこのことに納得いかず、マザークイーンの部屋を後にした。

インゲルはこの星の源である”キュアエナジー”に手を出そうとした。インゲルはこの力を使ってインゲルはあの星の神になろうと考え込み手を出した瞬間、全身の体から火傷が溢れだし、インゲルは熱さと痛みで転げ回った。それを見ていたプリキュア人の一人は仲間を呼び出して、インゲルを宇宙の彼方へと追放された。

宇宙の彼方に飛ばされたインゲルは心の中に人だけではなく母、妹、仲間に対する”怒り””悲しみ””憎しみ””裏切り””復讐”と呼ばれた心が出来、それを神の導きか悪魔の囁きかインゲルの頭上に大きな黒い稲妻が落ち、それを喰らったインゲルは身体中から力が沸き上がり、インゲルはキュアエナジーを求め、また惑星プリズムへと向かった。

インゲルは戦闘経験もないプリキュア人達を次々と皆殺し、プリキュア人の体内からキュアエナジーを注ぎだした。実の母でもあるマザークイーンを……殺害した。それを見ていた妹のアンジェリーナは母の死と姉の反逆に悲しんだ。インゲルはそんなことはどうでも良く、力を取り込むためもう一度キュアエナジーの眠る場所へと向かった。

そしてたどり着いたインゲルは虹色に輝くキュアエナジーを強制的に取り込み、惑星プリズムは徐々に死の星へと変わりつつなろうとした。

妹のアンジェリーナと生き残ったプリキュア人達は人の住む星へと移行した。

そしてキュアエナジーを全て取り込んだインゲルは全身から漆黒

の黒い服を纏い、キュアエナジーを取り込んだせいか……より強い力を手にしてしまった。私達はインゲルのことをこう呼んだ。……暗黒の絶対凶神”プリキュウス”と、またの名を……プリキュアの王

そしてプリキュア人達の故郷である惑星プリズムは人の住めない死の星へとなってしまった……

プリキュウスは人の住む星へと足を踏み入れ、そして人に大きな仕打ちを受けた25人のプリキュア人達を集め、プリキュウスは黒いキュアエナジーを24人のプリキュア人達に注ぎ込んだ。

25人のプリキュア人達は強靱な力を持ち、プリキュウスの絶対な僕ジェネラルプリキュアとしてプリキュウスとともに多くの人の命を奪った。

そのやり方はいかに残虐で人をまるで玩具のように扱いプリキュウスはそれを面白がり、人を殺すことが日常となっていた。

それを知ったアンジェリーナは母のマザークイーンが死ぬ間際にアンジェリーナにある設計図を渡し、マザークイーンの残りのキュアエナジーをアンジェリーナに託し、命を落とした。

アンジェリーナは母の死と惑星プリズムで死んだ仲間達そしてなんの罪もない人達を殺めるプリキュウスを止めるため、異世界から3人の勇者達を呼び出した。

赤の勇者”イサミツ”

黄色の勇者” シシオウ”
青の勇者” セイクウ”

アンジェリーナは赤の勇者の仲間の科学者に設計図を渡しその武器が完成した。

その武器はアンジェリーナ専用の武器であり、その力で変身した。伝説の戦士初代プリキュア” キュアアンジェ” として

キュアアンジェは3人の勇者に15人の英雄達を召喚した。

キュアアンジェと3人の勇者達率いる戦士達とプリキュウス率いる25人のジェネラルプリキュアの激しい戦争が開始された。

英雄達の攻防に押されつつあるジェネラルプリキュアに対し、プリキュウスとキュアアンジェの姉妹の激しい死闘が行われた。

最初はキュアアンジェはプリキュウスの攻撃に押されつつも3人の勇者達の協力でプリキュウスの撃破に成功した。

そしてプリキュウスの体から黒いキュアエナジーと虹色のキュアエナジーが飛び出し、黒いキュアエナジーは何処へと姿を消した。そして虹色のキュアエナジーはキュアアンジェの手に渡った。そしてプリキュウスの散らばった体は15人の英雄の一人が責任を持って色々な場所へと隠したそうだった。

役目を終えた勇者達と英雄達は元の異世界へと帰郷し、3人の勇者達は3人のプリキュア人達とともに元の世界に帰郷した。

そして虹色のキュアエナジーを持ったキュアアンジェは黒いキュアエナジーの行方が気になった。いずれキュアアンジェがこの世を

去ろうとしてもあの黒いキュアエナジーは邪悪な存在として人々に災いをもたらすかもしれない。だが希望はなくてはならない。いずれキュアアンジェの力を受け継ぐものが現れる……例え姉のプリキュウスが復活しても彼らの子孫が立ち上がる時が来るかもしれない……その思いを信じる……それが私の生きる道として……

パタンツ

ー七色ヶ丘中学屋上ー

秋人「赤の勇者イサミツ……黄色の勇者シシオウ……そして青の勇者セイクウ……」

主「その勇者達と初代プリキュア キュアアンジェはプリキュウスを倒すことが出来たのね」

星奈「ええ、そして私の世界ではプリキュウスは復活し、人々はプリキュア達の奴隷となりつつある……だから私達ガーディアンはプリキュウスが復活する前にプリキュアを倒さなくてはならない」
それにジェネラルプリキュアが25人もいたなんて

希美 s i d e

希美「ホントに……それでいいのかな？」

星奈「え？」

希美「プリキュアって私達と同じ年の中学生なのに倒すのってなんかかわいそうだよ……………」

星奈「希美……………貴方は「パンを踏んだ少女」の話を知ってるかしら？」

希美「え？」

星奈「意地悪で虫や動物を殺す少女が母親の為にパンを持っていくうとしたら川の間にはパンを踏み台として渡ろうとする少女が地獄に落ちる話……………彼女達プリキュアはその道を歩んでいるのよ……………今でも」

希美「星奈……………」

私は星奈の言葉を理解出来なかった。ただどこから先、彼女達プリキュアが星奈の言うパンを踏んだ少女の道を歩んでいることを私は知るよしもなかった。

15話 妹とりんご

冥王星・・・・・・・・・・かつて太陽系第9惑星として扱われていたが後に準惑星として区分された天体である。

その冥王星の大地から・・・・・・・・・・

ヒュウウウ・・・・・・・・・・

黒く光る火の玉が徐々に地球に接近してくることは・・・・・・・・・・
我々は・・・・・・・・まだ・・・・・・・・知らない

星奈 s i d e

私・・・・黒井星奈はあるプリキュアの一人の家で料理の手伝いをしているそのプリキュアの一人の家とは・・・・

なお「くうくうくう目に染みるくくく」

キュアマーチこと緑川なおの家で家事の手伝いをしているのだ。

今日は緑川なおにもう一人家族が増えるということで緑川なおの母と父が病院に行つてる間、祝いに緑川なおとその弟達、妹達みんなでカレーを作つてカレーパーティーをしようと企画しているのだ。

そして私黒井星奈は台所で緑川なおと一緒に玉ねぎと人参を切つている最中なのだ。なぜこいつらの手伝いをしているのかそれは回想して15分前……

私はエコバッグを抱えて今日の夕飯の材料を買うため商店街で買い物しに来た。

ポンポー「よお、星奈よお今日の晩飯は何すんだ？」

星奈「そうね……一昨日と昨日は魚料理だったから今日は肉料理でチンジャオロースにしようと思うんだけど」

ポンポー「おっ！そりやあいいな待ちきれないぜ！」

キーホルダーに化けているポンポーに人に怪しまれないよう話しかけ今日の夕飯について語り合つた。

私は材料の野菜を買うため、八百屋を訪れた。

星奈「えーと……人参……あつた！」

パシッ パシッ

星奈「ん？」

私が入参を手を取ったとき同時に小さな手が入参の部分に触れていた。

私がゆっくりと横を見ると左から小学生の男女が二人と幼児が私のほうをじーつと見ていた。

？「あつ！黒井さん、奇遇だね」

後ろから聞いたことのある声に私は振り替えると・・・

なお「やつ」

キュアマーチこと緑川なおとその弟達と妹達

なお「黒井さんも入参必要なの？」

緑川なおは私が持参している入参を持っている方を見て心配して顔を見せた。

ひな「・・・」じーつ

ゆうた「・・・」じーつ

こうた「・・・」じーつ

負けた・・・

星奈「はい・・・」

「「ありがとう!!」」

3人が私に挨拶をし入参を緑川なおに渡した。緑川なおは私に近づいてきた。

なお「ごめんね黒井さん・・・人参貰っちゃって」

星奈「いいえ 役に立ったのならいいわ 気にしないで」
ありがた迷惑だったよコノヤロウ!!

なお「黒井さんも買い物途中? だったらウチにこない?」

星奈「は?」

と今にいたるといふこと・・・

結局私はこいつらのカレーの材料の手伝いに付き合わされているのであった。

星奈「そういえば緑川さん」

なお「ん?」

星奈「緑川さん、あなた赤ちゃんがどうか言ってたけどお母さんとお父さんは・・・」

なお「ああ、お母ちゃんのお腹の中に赤ちゃんがいるからお父ちゃんと一緒に病院に行ってるのそして私達は赤ちゃんの祝いにみんなでカレー作ろうとみんなで計画してるんだ」

だからか、次女と長男はじゃがいもを切ったり、三女と次男は画用紙で母親の似顔絵を書いたりしてるわけか

なお「そういえば、黒井さん家族は・・・」
ピクッ

緑川なおの発したその言葉に私は人参を切るのを止めた。

なお「黒井さんの家族って何してるの? 兄弟とかいる?」

星奈「父は実業家で母は専業主婦祖父と祖母がいるわ。それに妹もいるわ」

なお「へえ 黒井さん妹もいるんだね。今度、妹さんと一緒に遊びに来てよ。」

ピクッ

なお「黒井さんの妹とうちの妹達となんか仲良く出来そうな気がするなあ 黒井さんもそ「ダアアンツ！」!?」

緑川なおの言葉に妹のことを語ったとき私のなかの憎しみが溢れかえって人参を切っている包丁を思いつきりまな板の方に切りつけた。それに驚いたのか緑川なおとその兄弟達が一斉に私の方に視線を指した。

なお「く……黒井……さん」

星奈「……ないですよ」

なお「へ?」

星奈「何も知らないくせに妹の名を口にしないでよ」

なお「黒井……さん」

はっ!

星奈「ごめんなさい……つい頭に血が上っちゃって」

私はそれを反らすように人参を小さく切始めた。

なお「黒井さん……」

星奈「あとまな板に切り傷つけたこと弁償するから」

なお「いや……そんなのいいから」

緑川なおは玉ねぎを切始める前に材料の確認をしている時にあるものがないことに驚愕した。

なお「あー！ー！ー！！りんごおおおー！！」
星奈「はっ？りんご」

なお「隠し味のりんご買い忘れちゃった！どうしよう」

けいた「別にりんごなくてもいいじゃん？」

なお「それじゃあお母ちゃんカレーが出来ないでしょ」

緑川なおと長男の言い争いをしている時に三女と次男が外に出ていこうとする姿を目撃した。どうやら材料のりんごを買いに行くらしい。私は急いで人参を切り、お肉も小さく細かく刻んだ。

星奈「それじゃあ帰るわ」

なお「えっ黒井さんもう帰るの？カレー一緒に食べていけばいいのに……」

星奈「いいわ……それと人参とお肉そして鍋の準備出来たから……失礼するわね」

なお「あつ黒井さん」

緑川なおは私が切った人参と肉は旨く刻んであり、その速さに驚いた。

なお「……はやつ」

ひな「なお姉、お母ちゃんカレーに必要なりんごが無いっていつて

たね」

ゆうた「じゃあボクたちが代わりにりんごを買いにいこう」

星奈「ちよつとアナタ達・・・」

「ひっ!?!」

二人が振り向くとそこには腕を組んだ私が立っていた。

ひな「くろい・・・お姉ちゃん」

星奈「アナタ達、お姉さんに内緒でりんご買いにいこうとしたでしょ?」

「うっ!」

星奈「お姉さんの許可なしで黙ってりんごを買いに行くのもどうかと思うんだけど」

私は鋭い目で二人を睨み、二人は涙目で頭を下げた。

「ごめんなさい!」

星奈「・・・!?!」

ひな「なお姉がりんごを買いに行く時間がかるっていうから私とゆうたでりんごを買いにいこう決めてしまっごめんなさい」

ゆうた「ごめんなさい!」

星奈「・・・」

二人が私に謝ってる姿を見て私はあの頃を思い出した。

母「りほ！こんな夜遅くに今まで何処に行ってたの!？」

りほ「ごめんなさい！今日お姉ちゃんの誕生日だから大好きなりんごを買いにいったの・・・うう」

星奈「りほ・・・」

ギユツ

りほ「お姉ちゃん・・・」

星奈「りほ、ありがとう」

ポンポー「星奈、許してやれよ・・・」ボソツ
ポンポーの小声で私はため息をはいた

星奈「しょうがないわね。私も一緒に行くわ」

「え？」

星奈「私も行くって言ったのよ。りんご代なら私が払ってあげるから」

私の言葉に二人の目がきらきらと光り、はいはいと心の中で頷きながら出発した。

八百屋店主「あいよ りんご」

ひな「ありがとう」

ゆうた「ありがとう」

星奈「はい、りんご代」

私達は八百屋に着いて早速りんご一つ買った。

八百屋店主「しかしりんごを買いそびれるとはなおちゃんも変わつとらんな」

星奈「いつもそうなの？」

八百屋店主「ああ、なおちゃんは小学生のころから御使いの後に一つは忘れて買いにいってたからな。その頃のなおちゃんはこの商店街に響くほど大泣きしてたからな」

星奈「へえ」

ひな「星奈お姉ちゃーん!!」

ゆうた「はーやーくーん!!」

星奈「ええ、今行くわ」

私は二人のいるところ行こうとしたが店主があることを伝えた。

店主「それとお嬢ちゃんについさつき、柄の悪い連中がここを通ってきてね帰る前にそいつらに出会わないよう注意しろよ」

柄の悪い連中か・・・じゃあさつきと帰りますか？

星奈「ありがとう・・・気をつけて帰るわ」

けいた「りんご買ってよかったね♪」

ひな「後は家まで真っ直ぐ帰ろー♪」

星奈「その後はお姉ちゃんの説教とか謝ることをしなきゃね」

それを聞いた二人はまた涙目になり私はやれやれと思ひ

星奈「私も一緒に謝ってあげるから・・・ね」

それを聞いて二人とも笑顔になった。

女子高生A「おい、また会ったな」

帰り道の目の前にどっかで見たことのある3人組がいた。誰だっけ？

星奈「誰だっけ？」

女子高生B「てめえ!？」

女子高生C「あの時てめえにぶっ飛ばされた恨み忘れたとはいわせねえぞ」

本当誰かしら？

女子高生A「今回は助っ人を用意してきたんだよ 陽くんこいつだ

よ」

「こいつか？」

3人組の後ろから柄の悪いチャライ男性達が5人ゾロゾロと現れた。

女子高生A「陽くん、こいつがあたしらの金を全部あいつにカツアゲされたのゝ助けてゝ」

陽くん「おい、そのアマー！」

星奈「ん？」

陽くん「てめえうちの彼女の金をぶんどりやがって 覚悟はできてるだろうな」

星奈「なにいつてんのよ？大体カツアゲしたのはあんたの隣にくっついてる豚女でしょ？」

陽くん「この糞アマ!!ぶつとばしてやらあ!!」

5人が一斉に私達に襲いかかってきた。私の足にしがみついている二人は泣きながら私に訪ねた。

ひな「星奈お姉ちゃ〜ん」ガタガタ

ゆうた「怖いよ〜ガタガタ」

星奈「アナタ達目をつぶって10回数えなさい!そして数えた後目を開けなさい!」

ひな「え？」

星奈「私を信じなさい」

私の言葉に三女は頷き次男も目をつぶって10回数え始めた。

陽くん「うおうらあああー!!」

ピシッ

不良A「コノヤロウ!」

ピシッ

不良B「死ねやー」

ピシッ

不良C 「このアマガ！」

ピシッ

不良D 「このー！」

ピシッ

シユウウウウー

女子高生A 「陽くん？」

陽くん 「……………」ボーー

女子高生A 「陽くんどうしたの？早くそいつをぶちのめしてよ」

陽くん 「いや……………」

女子高生A 「へ？」

陽くん 「こんなバカやるより勉強してたほうが楽しいぜ」

不良A 「あー俺も思ったわ」

不良C 「こんな格好してるほうがよっぽど恥ずかしいぜ」

不良B 「じゃあ帰って明日から真面目に勉強して東大目指そうぜ
？」

不良D 「だな」

不良達はそろそろと自分達の家に戻った。

女子高生A 「ちよっ陽くん…………陽く「さてと」へ？」

バキ ボゴ ドゴ

女子高生 「「あー……………」」 キラーン

「きゅーうじゅーう」パチリ

二人が十まで数え終わり目を開けたとき驚いた。

けいた 「あれ？さっきいたこわい人たちは」

ひな 「星奈お姉ちゃんは……………」

星奈 「ここよ」

私は後ろからひよこつと出したとき、二人は涙目になって私に抱き

ついた。

ひな「うえくくん星奈お姉ちゃくくん」

「聞いた「怖かったよく」」

星奈「ごめんね・・・怖い思いさせちゃって」

ー公園ー

星奈「はい、ジュース・・・」

私は自販機で紙パックのジュースを買った。私はお茶、三女はヨーグルト、次男はオレンジの紙パックのジュースをストローで飲んだ。

ちゆうううううう

ポンポー「おい、星奈？」ボソッ

星奈「なによ？ポンポー」ボソッ

ポンポー「お前、あんな不良どもをどうやって真面目そうな性格にさせたんだ？」ボソッ

星奈「簡単よ・・・あいつらのツボを思いっきり押しやってただけよ。一生悪いことがやれないくらいだね」ボソッ

ポンポー「まじかよ」

私はジュースが空っぽになったのでそろそろゴミ箱に持っていこうとし時

ひな「星奈お姉ちゃん・・・どうしていつも笑ってないの？」

星奈「へ……」

三女の言葉に私は止まった。

ひな「星奈お姉ちゃん……ひなたちと出会ったときから笑ってる
ところがなかったよ」

けいた「お姉ちゃんどうして笑わないの？」

私は二人の言葉を聞いて私は……

星奈「ひな……そしてけいた……アナタ達、妹とか弟は好き？」

ひな「うん、大好きだよ」

けいた「ぼくもこうたやなお姉、家族みーんな大好きだよ」

二人の眩い笑顔は私にとって痛いくらいだった。

星奈「私にもアナタ達と同年くらいの妹がいたわでも……もう
いないの……」

「え!？」

星奈「私のお母さんとお父さんそしてお爺ちゃん、お婆ちゃんそし
てりほ、」

星奈「私の家族はある悪いひと達の起こした大事件によってみんな
死んじゃったの……」

お姉ちゃん……

あんたの笑顔頂き♪私はウルトラハッピー♪バーカ♪

私はあの時を思いだし、紙パックを握りつぶした。

ポンポー（星奈・・・）

ひな「星奈お姉ちゃん・・・なかないで」

ひなは私の頭を撫でた。

けいた「お姉ちゃんが悲しむとぼくも悲しいよ・・・」

けいた・・・私は・・・

？「もし、そこのお嬢ちゃん達」

ひなとけいたは後ろから一人の老婆に声をかけられ近づいてくと老婆は懐からりんごを二人に差し出した。

？「とーつてもとーつても美味しい美味しいりんごをあげるだよ」

ひな「え？でもりんごならもうあるよ？」

けいた「うんうん」

？「このりんごは其処らで売ってるりんごとは一味違うだわさためしに一口食べて見たらどうだわさ？」

私はあの老婆の言葉に嫌な予感がして二人を止めようとしたがもう遅かった。

星奈「二人とも！そいつから離れて!!」

「へ？」

マジヨリーナ「ニヤツ」

りんごが急に光だし、光が徐々に収まっていった時、目の前の上には青いりんごが宙に浮かんでいてその中にひなとけいたが閉じ込められていた。

マジヨリーナ「ひえっひえっひえっこれでプリキュアを誘き寄せ準備は整っただわさ後は・・・《チェンジ！シユベルトゲール》へ？」

ヒュンツ

ドス!!

マジヨリーナ「ひえや?!」

星奈「まさかここでバッドエンド王国の幹部と出会すとはね」

私はワールドフォンで対艦刀シユベルトゲーベルを召喚し、それを力の限り投げつけた。残念ながら地面に突き刺さってしまった。

マジヨリーナ「なにもんだわさお前？」

星奈「それはこつちの台詞よあの二人をどうするつもり？」

マジヨリーナ「ふん！あの二人をとじ込めて誘き出せばプリキュアの一人キュアマーチを倒せればそれでいいだわさ」

キュアマーチ？なぜ

ポンポー「おい！マジヨリーナ！」

星奈「ポンポー!？」

マジヨリーナ「なっなんで幹部候補のお前がそいつと一緒にいるだわさ？」

私のポケットに着いてるキーホルダーに化けていたポンポーはもとの姿に戻った。

ポンポー「バカのウルフルンとアホのアカオーニは元気か？」

マジヨリーナ「ふん！あんなアホコンビのことなんか知らんだわさ。それよりなんでお前がそいつと一緒にいるだわさ」

ポンポー「俺には俺の野望つてもんがあるだよ。それよりお前どうしてそう焦ってんだ？」

ポンポーの言葉にマジヨリーナはなにやら足がガクガクとしていた。私が戦闘体勢に入る前から……

マジヨリーナ「うるさいだわさ！ここで成果をあげなきゃアタシヤあの頃に戻されるんだわさ！」

ポンポー「あ……あの頃!？」

ポンポーはその言葉を聞いたとき一瞬震えた。

ガシツ ビュツ！

マジヨリーナ「な！しまった!？」

私は一足早くシユベルトゲーベルを引き抜き、二人が閉じ込めてい

るリングの方に思いつきジャンプした。

ひな 「星奈お姉ちゃん！」
けいた 「お姉ちゃん！」

星奈 「二人とも！今助けるから！」

私は一刀両断でりんごを真っ二つに使用としたとき

キャラクター 「そうはさせるかよ・・・」

星奈 「え？」

シュンツ

「星奈お姉ちゃん!!」

ポンポー 「星奈!?!」

ここは一体……ここは……イタリアのコロッセウム……
何故

キャラクター「あたしが誘い出したんだよ」

声が聞こえ後ろを振り向くとそこにはキュアキャラクターがいた。

星奈「キュアキャラクター……あんた何のつもり」

キャラクター「何のつもり？決まってるでしょ？私の本気の方であ
んたをぶちのめそうとこの場所に誘い込んだのよ」

私はそんな暇なんかないわ

星奈「悪いけど私はそう簡単に倒されないわよ」カチャ

シユベルトゲーベルを構え、キュアキャラクターは満身創痍で戦闘
体勢に入ろうとした。

キャラクター「見せてあげるわ……私の力って奴を」

星奈「……」

キャラクター「プリキュア！ジェネラルキャラクターチェンジ！」

キュアキャラクターは顔を両手で覆って顔を隠したとき、両手を広
げた一瞬顔が光った。

星奈「一体……何？」

私はあまりの眩しさに目をつぶった。ジェネラルプリキュアの真
の力……そんなの私達のいる時代でも使わなかった力……一体ど
んな……

? 「プリキュア! ハッピーシャワー! シャイニング!!」

ポーーーーーン!!!!

星奈 「あれは・・・キュアハッピーの必殺技!？」

まさかキュアハッピーがここに・・・

? 「まさかキュアハッピーがここに来てると思った残念! その正体は・・・」

星奈 「!？」

キャラクター 「キャラクターでした♪」

そいつの正体はキャラクターだが、顔はキュアハッピーだった。

16話 キャラクターの実力

キャラクターの顔がキュアハッピーの顔になり、その力はハッピーと同等・・・いやそれ以上の力を出していると感じた。

星奈「キャラクター・・・あんた・・・その顔は」

キャラクター「紹介してあげるわ。これが私キュアキャラクターの力・・・私の顔はありとあらゆるプリキュアの顔を変えることでその力をFullに使いこなせるのよ」

Fullに・・・確かにあの必殺技・・・キュアハッピーがパワーアップした状態で使える強化技・・・あれをモロに喰らったらさすがにヤバイ・・・

星奈「ここは一端距離をおいて攻撃を仕掛けるしか」

キャラクター「させるか！キャラクターチェンジ！」

また別のプリキュアの顔に変わった次は・・・

キャラクター「キュアツプラパ・生えろ！ツタ！」

ビシ！ビシ！ビシ！ビシ！

今度は魔法使いプリキュアのキュアミラクル・・・キュアミラクルの魔法で植物のツタを呼び出し私の両腕と両足を縛り付けた。

キャラクター「さて、縛られたからの・・・キャラクターチェンジ！」

星奈「今度は何？」

キャラクター「ラブリービーム!!」

ドオーーーーン!!

キャラクター「避けたか・・・」

星奈「ギリギリだったけどね・・・」

ツタで縛られた私はキャラクターのラブリービームが近づく前に両腕に縛られたツタを強くちぎり、胴体を逆立ちした状態でかわした。ギリギリ・・・

キャラクター「だったらこれね・・・キャラクターチェンジ！キュアドリーム！」

今度はyes プリキュア5GoGoのキュアドリームの顔に変わり、プリキュア5専用の武器キュアフルーレを取りだし、襲いかかってきた。

キン！ キン！ キン！ キン！ キン！

キャラクター「きやははは！そらそらそらそら！！」

星奈「くっ」

キャラクターの素早くリーチの長いフルーレ攻撃に私はシユベルトゲールで防ぐのがやっとだ。ワールドフォンで他の武器を取り出す時間さえも与えない。

キャラクター「すきあり！」

ブスッ！

星奈「きやあ!?!」

一瞬の隙でキャラクターは私の太ももにフルーレを突き刺した。

キャラクター「あはは、やっとダメージを与えられた♪」

星奈「くっ！」

血がドクドクと流れる太ももを支える私はキャラクターは血の付いたフルーレを自分の舌でペロリと嘗めた。

キャラクター「止めはこの顔で行くわね！キャラクターチェンジ！ブラック！」

今度はふたりはプリキュアのキュアブラック!?

キャラクター「ブラックは他のプリキュアと違って力は最強クラスだからね・・・そーそーれ!!」ブンッ

バコオooooooooooooooooon!!!

星奈「きやああああ!!」

ドオオオオオオーオーオーオーン
!!!!

キャラクターside

キャラクター「逃げたか……まあいつか」

私はあの女とやり合うことには理由があるのだ。

デビル「今回このお茶会を開いたのは……キャラクター……お前が見たガーディアンについてだ。」

キャラクター「あ? あああ」

そうこのお茶会であたしらジェネラルプリキュアが集めたのはアタシが監視している町のガーディアン、黒井星奈についてだ。

キャラクター「あいつは他のガーディアン達と違ってアタシ達と同じ力を持つてたよ」

ブレイン「キュアエナジーですか?」

キャラクター「ああ」

他のジェネラルプリキュア達はざわめき始めた。

そもそも私らプリキュア人ならまだしも普通の人間がキュアエナ

ジーを体内に埋め込まれているのなら肉体は耐えられず全身が使い物にならない状態になるはずなのに……あの女はその力を持っていた。

キャラクター（そもそもガーディアン達は未来からやって来た奴等……まさか……）

キャラクター「未来のアタシらに実験された奴の一人……か」
これはあくまでアタシの仮説だけど……そろそろ戻るか？

星奈 side

星奈「ふう……どうやら行ったようね」

あの時奴の必殺技を放った一瞬、最後の力を振り絞ってワールドフォンでウェブシューターを召喚した。

そしてウェブシューターでいちばん大きい岩にたどり着き、しがみついた。

必殺技の影響で徐々に削り壊されたがギリギリ最後まで隠し通すことに成功した。

キャラクターが去った時、元の公園に戻っていた。

ポンポー「星奈ー!!」

ポンポーが私の方まで走ってきた。周りを見渡すとどうやら夜になつていた。マジヨリーナもひなやけいたもいない。

ポンポー「おい!星奈そのケガは?」

私の太ももからまだ血が出ていたことにポンポーは驚いた。

星奈「キャラクターが現れて……結果……惨敗だったわ」

ポンポー「まじかよ」

星奈「幸い隠れて過ごせたのが正解だったわ……それとひなとけいた……あのマジヨリーナは」

ポンポー「実は……」

私がキャラクターと交戦してる中、緑川なおと長男と次女と三男が現れ、兄弟の目の前でキュアマーチに変身した。結果はキュアマーチの勝利だった。

キュアマーチがパワーアップし、マジヨリーナを徹底的に追い詰めた。後からきたスマイルプリキュアのメンバーが現れマジヨリーナに最後のメで決着が着いた。

そしてみんなは母親がもうすぐ産まれるという情報で急いで病院に向かつていったってことか

星奈「なるほどね……」

ポンポー「星奈これからどうするよ?」

星奈「そうねじゃあ♪♪」

ワールドフォンの着メロが鳴っていた。緑川なおからだった。

星奈「もしもし」

なお「あ!黒井さん?よかつた〜ひなとけいたが黒井さんのことを探しにいと病院から抜け出そうとしたけど夜は遅いから私達が

探しにいろいろと思つて電話をしたけどよかつたゝ出てくれて」

星奈「そう……」

なお「それと黒井さん……」

星奈「何？」

なお「ありがとう！ひなとけいたのりんご買うことに手伝つてくれてそれに不良に絡まれそうになった所助けてくれて」

星奈「気にしないで……あの二人が困っていたからすこし手助けしただけよ……」

なお「それでもありがとう……ねえ黒井さん聞いて赤ちゃんが産まれ「ガチャ」切れちやつた」

星奈「帰るわよ」

ポンポー「いいのか？あいつの家でカレーを食べに行かなくても……」

星奈「カレーより怪我よあばら骨いつたかも」

ポンポー「おいおい」

ポンポーは私をおぶった。背中 of 毛皮がふかふかして暖かい。

星奈「今日の料理当番……私だけど代わつてくれるかしら」

ポンポー「しょうがねえな……わかつたよ」

夜に輝く満月の帰り道私はポンポーの背中ですこし寝た。

緑川家

深夜1時・・・次女のはるが三男のこうたのトイレに付き添っていた。

はる「ふあゝ」

ヒュゝ

はる「え？」

あくびをしている時、はるの近くになにやら冷たいなにかに触れたような気配を感じ辺りを見回すと

はる「なんだ何もないか」ホッ

はるが安心して溜め息をしたその時、

ヒュゝ

はる「え!?!」

ビュッ!

はる「きやあつ・・・・・・・・」

はる？「なるほどな……」

ガチャ

こうた「出たよ」

トイレを済ませたこうたはドアを開け、帰ろうとしたとき

こうた「あれ？おねえたん？」

こうたははるは先に戻っていたのか怖くなって一人で早く部屋に戻って寝た。その翌日、緑川家にはるが行方不明になっていることはまだ知らない……

星奈「はあ はあ はあ」

私がベッドで寝ているとき気配を感じた。このただならぬ気配……
覚えがある……忘れるはずもない。この気配は……
まさか……!!?

17話 王の魂

ガララッ

私が教室から入ってきた時、周りのみんなは緑川なおの席に集まっていた。何かあったのかしら？

星奈「どうしたの？」

男子A「ああ、黒井・・・実はな」

女子A「なおの妹のはるちゃんも昨日の夜から行方不明だってそれで今なおのお父さんが仕事休んではるちゃんを探し回ってるらしいよ」

星奈「行方不明!？」

はるつて確か緑川なおの次女・・・でも、何故・・・

なお「・・・・・・・・」

れいか「なお、元気出してください・・・・・・・・学校が終わったら一緒に探しにいきましょう」

みゆき「そうだよ！なおちゃん泣いてたらハッピーが逃げちゃうよ」

やよい「そうだよ！私達も一緒に探せばきつとはるちゃんを見つけ出せるよ」

あかね「そういうこっちゃ！なお」

なお「みんな・・・グスツ・・・ありがとう」

4人の言葉に緑川なおは泣くのをやめ、元気な表情に戻った。

男子B「そうと決まりや俺たちも緑川の妹を探す手伝いをしようぜ！」

女子一同「賛成!!」

まじで・・・・・・・・

女子B「黒井さんも参加するわよね？」

星奈「え？ええ・・・」

ガララッ

先生「みんなー授業始まるわよ！席に着きなさい」

「「「はーい!!」」」

ー放課後ー

みゆき「でもどうしてはるちゃんがなくなったんだろ？」

あかね「もしかして・・・あいつらの授業ちゃうんか？」

やよい「やっぱりバッドエンド王国だね？」

なお「あいつら・・・まだしようこりもなく・・・」

れいか「・・・」

あかね「どないした？れいか」

れいか「どうも違和感があります。」

みゆき「え？なんで？」

れいか「そもそもバットエンド王国は人質を誘拐するようなせこい真似はしないはずです。これまでの戦いも私達と対人したとき誘拐のような卑怯なことは一度もしていません。」

なお「そういえばこうたは深夜にはると一緒にトイレに連れていったって・・・そしてトイレに出た後ははるが急にいなくなったってこうだが・・・」

やよい「え？じゃあはるちゃんがなくなったのはバットエンド王国の仕業じゃないの？」

あかね「んじゃ誰なんや!？」

みゆき「一体・・・誰なんだろう？」

キャンディ「みゆき・・・」

プリキュアの中でね・・・ブラックは特別なのよ

黒井「くそ！」

ポンポー「どうした？星奈・・・そんなに不貞腐れてさ」

星奈「どうもあの言葉が引っ掛かるのよ」

ポンポー「あの言葉？」

キュアブラック・・・パートナーのキュアホワイトとともにかつて光の園をドツクゾーンの魔の手から救った伝説の戦士であり、この時代で誕生した始まりの戦士の一人しかしキュアブラックとジェネラルプリキュアまさかプリキュウスと何か関係が・・・

黒の間

キャラクター達ジエネラルプリキュアはデビルに緊急事態だと通告があり、お茶会に出席しなかった他のジエネラルプリキュアも集結し長いロングテーブルに座っていた。

左側の席にはデイズスター、パラサイト、ライアー、ウイザー、レクイエム、キャラクター、エンヴィー、デスサイズ、カース、グラ右側の席にはリボン、メモリー、ケルベロス（遺影）、メイジェル、インセクト、アブソリユート、アヌビス、ドール、ウエポン、テイマー、デビル「皆集まったか？前回のお茶会に出席しなかった者達もいるが今回はどうしても欠かせない事情だ」

メイジェル「欠かせない事情とは・・・」

アヌビス「それほど重大のモノらしいですね」

デビル「では・・・どうぞ」

デビルが連れてきたのは・・・

『!?!』

キュアマーチこと緑川なおの次女・・・緑川はる・・・だが・・・

キャラクター「ちよつとこのガキんちよ・・・アタシが担当している町のプリキュアの妹じゃん？」

キャラクターはテーブルを外し、ステージの上に立っているはる？に近づいて髪をくしゃくしゃとした。

キャラクター「おいガキんちよ・・・ここはあんたのようなガキが来る場所じゃないんだよ？」

デビル「おい！キャラクター馴れ馴れしいぞ!?!そのお方は・・・」
キャラクター「お方々々？それじゃまるでこいつが偉い「ガシッ！」え？」

はるの手がキャラクターの腕を掴んだ。

デビル「お前ら!!いい加減黙れ!!プリキュウス様こんな失礼な姿を見せてしまつて」

プリキュウス「……………」

プリキュウスはあるジェネラルプリキュアがいないことに不快感を与えた。

プリキュウス「ケルベロスはどうした？」

デスサイズ「ケルベロスは……………」

デスサイズの話によるとケルベロスはかつて希望ヶ花市でキュアフラワーと呼ばれるプリキュアに敗れたことそして肉体と魂は滅び、回収できたのはケルベロスというなの力だけ……

プリキュウス「キュアフラワー……………だと？」

デスサイズ「はいその頃は私達が束になつても敵わなかつたのですが…………今はもうヨボヨボのババアになっています!今ならかく「もうよい…………え?」

プリキュウス「聞こえなかつたのか?次はないぞ?」

ゾクツ!?

デスサイズ「は…………はい」

ライアー「やーいやーいデスサイズが怒られた〜♪」

デスサイズ「あ?」

アヌビス「やめなさい!みつともないプリキュウス様の御膳ですよ?」

デスサイズ「ちっ」

ライアー「ぶー」

メモリー「質問が変わりますが、プリキュウス様は何故その体に…………」

プリキュウス「これか・・・では一から話そう」

私はかつて妹のアンジェリーナと3人の勇者によつて肉体は完全に滅びてしまった。

そして私は魂だけの存在となり・・・私は隙を伺ってどこか静かに安全な場所を探した。だがあの星には私の安全な場所などどこにもなかった。

そこで私は宇宙空間へと移りある星へとたどり着いた。

パラサイト「その場所とは・・・」

プリキュウス「人間どもがその星を準惑星とほごく”冥王星”だ”冥王星の大地の中で私は永い眠りへとおちた。

プリキュウス「そして今、私は永い眠りから目覚めはるばるあの星へと渡つてきた」

忌々しいアンジェリーナと勇者達によつて代わつたこの世界の情報を知ろうとしたときある光景が見れた。

ウエポン「それは・・・」

プリキュウス「私の体の一部であろう力があの小娘どもがまるで無邪気に使い回していた!!全くもって腹立たしいっ!!」

プリキュアの力はもともとプリキュウス様の体の一部であり伝説の勇者達とアンジェリーナによつてプリキュアとなるその力を受けとり、今活躍している少女達に受け継がれているのであった。

プリキュウス「私はその夜にあの緑のプリキュアの記憶を持つこの妹の体に移り移れた。お陰で脳の記憶を探った結果すこしはわかつた。」

プリキュウス様は拳を強く握りしめ遠い過去の忌まわしき屈辱を思い出した。

プリキュウス「あの憎き伝説の勇者達と忌まわしきアンジェリーナめ!!この怨みをはらさでおくべきか」

インセクト「ですがプリキュウス様これからはその体で行こうとお考えで・・・」

プリキュウス「いや・・・この体ではまだまだ力が引き出せない・・・」

明日の夜明けにはこの体から離れてしまう……何処かい体はないのか？」

プリキュウス様は嘆いているときあのジェネラルプリキュアの言葉を聞いた。

ブレイン「ありますよ……」

プリキュウス「お前は……」

キャラクター「ブレイン……」

ブレイン「プリキュウス様の新たな体となる肉体は……あなたの故郷だった星……惑星プリズムにあります。」

プリキュウス「それは本当か？」

ブレイン「はいたった今、アリスとネメシスがその星に向かい調査をしています。」

キャラクター「あ……アリス!!？」

アリスの名を聞いたデビルとブレイン以外のジェネラルプリキュアはゾクツとしたジェネラルプリキュアの中でプリキュウスの側近で充実な部下だが性格はとてもしも残忍で首を切ることに喜びとしているプリキュアだ。彼女達にとって恐ろしすぎて近づきたくない相手である。

ブレイン「それと・・・プリキュウス様」
ゴニョゴニョ

プリキュウス「何!?それは本当か?」

ブレイン「はい・・・その証拠にこれを・・・」

ブレインはプリキュウスに”あるプリキュア”の映像を見せた。

それを最後まで見たプリキュウスは・・・

プリキュウス「くくく・・・あーはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっ!!」

デビル「プリキュウス様・・・」

プリキュウス「まさかあそこに私の”娘”がいるとはな・・・くくくこれで楽しみが二つ増えた!」

プリキュウスは立ち上がりジェネラルプリキュアに通告した。

プリキュウス「我力の一部を受け継いだ者達よ来るべき時は近い!!準備を整えろ!!やがて始まる新たなプリキュアの新時代に備えてなあー!!」

プリキュウスの言葉にジェネラルプリキュアは歓喜を翻しジェネラルプリキュア達はそれぞれの場所へと向かった。

プリキュウス「待て・・・レクイエム」

レクイエム「え?」

プリキュウス「この体はもうそろそろ私の魂と分離してしまうところでキャラクターよ」

キャラクター「は・・・はい」

プリキュウス「お前の言う黒井星奈と呼ばれる小娘の話が気になる……」

星奈 side

深夜4時……安心して眠っている私の耳にある奇妙な歌が聞こえた。

レクイエム「♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~」

みゆき「……」パチツ

あかね「・・・・・・・・」パチツ

やよい「・・・・・・・・」パチツ

なお「・・・・・・・・」パチツ

れいか「・・・・・・・・」パチツ

プリキュウス「さあ、黒井星奈よお前の力を見せてみろ」

キャラクター(さて、どうなるのやら)

このあと永い夜に目覚めたスマイルプリキュア達が黒井星奈の家がある森の奥に向かおうとしていた。

18話 苦闘 星奈対呑み込まれたスマイルプリ
キュア

キャンディ「ク・・・クル・・・みゆき?」

眠っていたキャンディがみゆきが早く起きて着替えていたことに
気づき、キャンディは何故みゆきがこんな早くに着替えいのか質問
した。

キャンディ「みゆきどうしたクル?まだお日さまは昇ってないクル
?」

みゆき「・・・・・・・・」

キャンディ「みゆきなんで返事しないクル!?ちゃんとキャンディと
話してクル!」

ピシッ

キャンディ「クル〜〜」

みゆきはキャンディを平手打ちで追い払い、外に出掛けた。

キャンディ「みゆきー!!」

キャンディの声も虚しくみゆきは霧の深い外に出掛けた。

レクイエム「来ましたわ」
プリキュウス「ほお」

霧の深い場所から現れた五つの影、その正体は星空みゆき、日野あかね、黄瀬やよい、緑川なお、青木れいか

プリキュウス「お前達、あの森の奥に攻撃してみろ」
プリキュウスの言葉を聞いた5人はコクリとスマイルパクトを取り出した。

「ニコプリキュア・・・スマイルチャージ」

ハッピー「・・・」

サニー「・・・」

ピース「・・・」

マーチ「・・・」

ビューティー「・・・」

プリキュウス「やれ・・・」

ハッピー「プリキュア・・・ハッピーシャワー！」

サニー「プリキュア・・・サニーファイヤー！」

ピース「プリキュア・・・ピースサンダー！」

マーチ「プリキュア・・・マーチシュート！」

ビューティー「プリキュア・・・ビューティーブリザード！」

バシユン！ バシユン！ バシユン！ バシユン！ バシユン！

バコーーローン!!!

プリキュア達の攻撃で森の奥が爆発した。だがそこにあつたのは燃え盛る家だった。

プリキュウス「光学迷彩とやらで私を欺こうとするとは下らない。」

レクイエム「でも、これで邪魔物は居なくなりましたわ」

？「そうでもないわよ？」

レクイエム「え？」

プリキュウス「!？」

あいつらの必殺技で私は死んだと思っていただけけれど私はその少し前に家を飛び出しシユベルトゲールを召喚し奴等を待ち伏せしていたのだ。そして私はチャンスだと気付き上空から一刀両断しようと攻撃した。

レクイエム「プリキュウス様！」

ダンツ!!

星奈「ちっ！」

レクイエムが一足早くプリキュウスを持ち上げて回避した。

プリキュウス「ほお、お主が黒井星奈か・・・」

星奈「プリキュウス・・・あんたがこの星に来たことは大体見当がついていた。まさか緑川なおの妹に乗り移っていたとはね」

プリキュウス「新しい体を探すのに一苦労したのでな、今はこの体で我慢しているのだよ・・・」

あの夜になにか胸騒ぎの正体は・・・今日の前にいるこいつプリキュウスだ・・・そして後ろにいる5人の影は、

星奈「キュアハッピー・・・キュアサニー・・・キュアピース・・・キュアマーチ・・・キュアビューティーまさかあんた達がこいつに操られていたなんて・・・」

プリキュウス「操ってなんていないぞ？」

星奈「なんですって？」

キャンデイ「みゆきいいー!!!」

ポップ「みゆき殿おおー!!!」

上空から一羽の巨大な大鷲が私の上に横切り、着地した時巨大な大鷲は煙を出した瞬間、その正体はこいつらプリキュアを支える妖精だった。

キャンデイ「みゆきやつと見つけたクル!!」

ポップ「各々がたなぜ変身を……ここにはバッドエンド王国はいないはずでござるが……」

レクイエム「クスクスクス」

プリキュウス「……………やれ」

ハッピー「……………」

《チェンジ！ウェブシューター！》

ピシユンツ ピシユンツ

バゴーーーン！

キャンデイ「みゆき!?!」

ポップ「みゆき殿!?!なぜ」

私はウェブシューターを召喚し間一髪キュアハッピーの拳が2匹の妖精にあたる直前に回避できた。

星奈「プリキュウス！あんたがコイツらを操っていないっていつてたわね……………まさか」

プリキュウス「そのまさかだ……………」

プリキュウスの言葉に後ろのキュアハッピーは喋り出した。

ハッピー「そうだよ♪私達はプリキュウス様の体の一部の意識なんだよーん♪」

キャンディ「みゆき……」

ポップ「みゆき殿……なにか様子が……」

サニー? 「こいつ……本当にアタシの力をバスバスと使うから嫌なんだよねえ」

ピース? 「ほんと! しかも私の力を使っているこの娘ヒーロー好きだかなんだか知らないけど泣き虫のくせにえらそうなこといちやつてさ」

マーチ? 「全く……何が直球勝負だよ力を使わせているアタイの身にもなれつての」

ビューティー? 「やれやれだぜ……この女、道だがなんだが知らねえ真面目なこといいやがって」

ポップ「皆の衆! どうしたのでござるか? お主達はそんなことを言う者達ではなかったはずでござる!?!」

キャンディ「そうクル! みゆき、あかね、やよい、なお、れいか、みんなどうしちゃったクル? みんな一緒にお家に帰ろうクル!」

星奈「違う!!」

私の言葉に2匹の妖精は振り向いた。

ポップ「ちがうとは……一体……」

星奈「今のあいつらは”あいつらの意識”とは違う別の意識が乗っ取っているの!」

ポップ「別の意識とはそれは一体どういうことでござる?」

星奈「プリキュウス! 今こいつらが変身したのは彼女達の意思じゃなくプリキュアの力そのものが彼女を変身させたんでしょ?」

ポップ「な……なんと!」

キャンディ「え……」

それを聞いたプリキュウスは右手を口の方に押さえてほくそ笑んだ。

プリキュウス「確かに……そもそもこやつらの力はもともと私の体の一部なのだから……だから私はレクイエムの協力で彼女達に眠るプリキュアの真の力を目覚めさせたのだ！」

真ハッピー「そう♪今のアタシは真ハッピーウルトラハッピー！
バーカー！」

真サニー「そしてアタシが真サニー……たく関西弁つてのは歯がガタガタしてはずれそうだわ」

真ピース「ぴかぴかピカリン……ジャンケンポイとだすバカがいた♪真ピース」

真マーチ「直球勝負……めんどくさ……真マーチ」

真ビューティー「戦いにビューティーも美しさもないんだよ……
真……ビューティー」

ポップ「そ……そんな皆の衆!!」

キャンディ「みんな！元に戻ってクルー!!」

プリキュウス「バカめ……これが元の姿さこいつらの持っている力は私の力……そしてその性格は私のような支配者そのものだ」

私はあの時受けた傷が疼き、私は怒りでこいつらに襲いかかろう思っていた。

星奈「疼くわね……ハッピーあんたのその性格を見せるとあの時受けた傷が久しぶりにうずいてしまうわ」

真ハッピー「へえ？じゃあどうする気〜？」

星奈「ポンポー！」

ポンポー「あいよ」

私の言葉にポンポーは現れ、2匹の妖精を担いで安全な場所にいこうとした。

キャンデイ「クル？」

ポップ「なぜ、バッドエンド王国の者が拙者達を・・・

」

ポンポー「こういうのは助け合いつて奴でしょ。今のところはな・・・」

星奈「今ここで・・・あんたをぶつ飛ばす！」

私は真ハッピーに接近し、近接格闘の蹴りを仕掛けた・・・がガシツ

真ハッピー「そんな蹴りで私に勝てると思ったのバーカ！」

星奈「そんなことあるわけないでしょ！」

ピシユン

真ハッピー「ブツ」

星奈「はあ！」

バキツ！

ウェブシューターで真ハッピーの顔にウェブを絡ませ、はずそうと急いだが私は一気に蹴りで突いた。

星奈「まずは一人・・・」

真ピース「喰らえ！」

真マーチ「はあ!!」

真ピースと真マーチの雷と風の攻撃が接近してきたが、私はその攻撃を利用し、今度はウエブで二人の喉元に付着し、二つの糸を一つの糸にまとめあげそれを一気に・・・

星奈「ふん！」

ブオン

真ピース「ぶっ」

真マーチ「ぐえ」

今度はビューティーとサニーの方に行こうとしたとき、ズキッ

星奈「いつ！」

糞・・・あの時、キャラクターに受けた太ももの傷がまだ完治していない・・・

ガシッ

星奈「なっ!?!」

真サニー「何？今の動き・・・」

真ビューティー「今鈍ったよな・・・」

ジュウウウ・・・

ポオオオオオ!

星奈「ぎやあああああ!!!!」

ポンポー「星奈あー!!!!」

真サニーと真ビューティーに私の両肩を捕まれ、炎と氷の攻撃が私の肩に炸裂させた。

バキッ! ドゴツ!

星奈「ぐふっ！」

私の背中に強力な衝撃がぶつかった。その正体は……

真マーチ「背中が……」

真ピース「ま・る・だ・しゅ」

真ピースと真マーチの強力な蹴りが私の背中に叩き込まれた。

星奈「げほっげほっ」

真ハッピー「油断したところ」

バスッ！

星奈「ぐふっ！」

真ハッピー「アッパァ」

真ハッピーが私の顎にアッパァを炸裂させさらに私の腹にパンチのラツシュを炸裂させた。

真ハッピー「オラ！」

バス

星奈「ぐはあ!!」

私は真ハッピーのパンチのラツシュを浴びせられぶっ飛んだ。

ポップ「もう黙ってみてられないでござる！」

ポンポー「お……おい！」

真ハッピー「よし今度は一斉にジャンプするよー」

「[[[[「セーの」]]]]」

ビュン

「[[[[「キーーーーーック!!」]]]]」

今度は5人一斉にキツクか……あれをひとたまりにくらえば確実に……やばい……万事休す……

ボワン!

ガキイイーーーーーッ!!!

ポップ「お主達……目を覚ますでござる!お主達の目的はこの世界をバッドエンドから守り抜き……メルヘンランドを救うはずでござろう!!」

あのポップとかいう妖精は巨大な盾になってキツクを受け止めたけど半分以上ダメージが蓄積されている。

プリキュウス「無駄だ。そもそも私の力の一部を授けた小娘達は私の操り人形に過ぎん」

バキイイーーーーーッ!!

ポップ「ぐわああああ!」

あまりのダメージに耐えられずポップは押し負けて元の姿に戻った。

真ハッピー「これで誰もいないね♪」

真ハッピーが私の目の前に現れ必殺技の構えをしだした。

真ハッピー「じゃあね♪プリキュアはっぴ「もうやめてクルーー
!!!」あ?」

星奈「!?!」

倒れている私の目の前にいるのは・・・

キャンディ「みんな・・・もうやめてクル!!」

キャンディとかいう妖精・・・

星奈「何やってんのあんた!早く逃げなさい!今のコイツらはあんなの知っている奴等じゃない」

キャンディ「やだ!逃げないクル!みゆき達をほおって逃げるなんて・・・キャンディには出来ないクル!!」

あいつ・・・小さいくせに足がガタガタ震えているのに・・・なんで・・・

キャンディ「みゆき・・・みゆきはハッピーエンドが大好きクルだからキャンディと一緒にハッピーエンドを作るクル」

真ハッピー「・・・・・・・・」

キャンディ「あかね・・・キャンディあかねのお好み焼き大好きクルまたみんなでお好み焼き食べたいクル」

真サニー「・・・・・・・・」

キャンディ「やよい・・・・・・・・キャンディはやよいの書いた絵が

大好きクルやよいのミラクルピースの続きまた読みたいクル」

真ピース「……………」

キャンディ「なお……………キャンディはなおの直球勝負の気持ちは大好きクル……………なおと一緒にまたサツカーしたいクル」

真マーチ「……………」

キャンディ「れいか……………キャンディはれいかの真っ直ぐな心が大好きクル……………キャンディと一緒にみんなで楽しくやろうクル」
真ビューティー「……………」

プリキュウス「どうしたお前達!!早くその妖精をころ……………うっ!!」

レクイエム「プリキュウス様!?!」

プリキュウス（ちっもうすぐ夜が明ける……………この体も離れてしま
う今のうちに早くしなければ……………）

キャンディ「みゆき……………」

真ハッピー「そんな言葉でこいつに届くはずないじゃん」

星奈「!?!」

真ハッピー「じゃーねー」

「やめろーーー!!!」

？「サイクロン・ディフェンダー！」

ゴオオオオオオオオー！！

何故か突然の暴風が私達の周りから発生した。一体どこから？

？「お待たせしました。」

星奈「？」

？「私達DWD 所属七色ヶ丘担当新人部隊只今到着しました。」

星奈「DWDの新人部隊!!」

暴風の中から現れたのは5人編成の部隊、みんな仮面を被っているが武器はどれも見たこともないものばかりである得にあの青い方はスーツで覆われているあれは・・・

真マーチ「新手か」

真ハッピー「ボコボコにしてあげる♪」

真ハッピーと真マーチが緑と黄緑の仮面の方を攻撃しようとした

が

バキッ！ ドゴッ！

真ハッピー「がはっ」

真マーチ「ぐはっ」

あいつらなんの武器もないあいつらに攻撃したら逆に攻撃された。

あれは・・・

ビービービービー

ワールドフォンが鳴り出し出てみると

ミスト「どうやら来たらしいね・・・」

星奈「総司令」

DWDの総司令ミストが出てきた。

ミスト「今戦っているのはあの双子の方だろ？」

星奈「ええ」

ミスト「あの双子は”スタンド使い”だ」

星奈「スタンド使い!?!」

聞いたことがある確か持ち主の側に現れありとあらゆる超上の能力を發揮する守護靈のような存在だということ

ミスト「兄の方のスタンドはハリケーンストライカー、戦闘スタイルは足蹴だが走れば走るほどその足の威力は竜巻を發揮するほどの力を持つ」

緑の仮面の方にはそんなスタンドが確かに真マーチを追い詰めているのは確かだ。

ミスト「そして妹の方はサイクロンディフェンダー戦闘スタイルは兄と同じく蹴り技をメインとしたスタンドだそして彼女のスタンドは蹴れば蹴るほど威力は暴風を發揮するほどの力を持つ」

あの時、あの暴風が現れたのはあの黄緑の仮面の娘がやったのね

プリキュウス「糞・・・ここは一旦引いて作戦の立て直し・・・ボオ「へ？」」

赤仮面「オウラアアア!!」

ドオオオオoooooooooooo!!

今度はあの赤仮面がプリキュウスの真上からあの燃えるボールで攻撃しようとしたすさまじい攻撃と爆発力……

ドクン

プリキュウス「糞！」

レクイエム「プリキュウス様」

プリキュウスの奴が苦しそうだ。どうやら夜明けが近いようだ。

プリキュウス「レクイエム……私はこの体から離れる……受け止める」ボoooooooooooooooo

レクイエム「プリキュウス様!!」

プリキュウスの魂がはるの体から出ていった。そしてレクイエムは謎のカプセルでプリキュウスの魂を吸いとった。

レクイエム「ブレインの作ったこのカプセルでプリキュウス様の魂を回収することが出来ましたわ。みなさんそれでは御機嫌よう」
ブウウウウン

真ビューティー「ま……まじ……かよ」

真マーチ「そ……そんな」

真ピース「まだ……遊び……足りないのに」

真サニー「ここで……終り……」

真ハッピー「星奈……ちゃん……」

星奈「!」

真ハツピー「また・・・遊ぼ・・・うね」

星奈「うるさい・・・」

みゆき「う・・・うん・・・あれ?」

あかね「なんで・・・うちらが外にいるんや?」

やよい「しかもいつの間に私服に着替えているし」

れいか「一体何が・・・」

キャンディ「みゆき! あかね! やよい! なお! れいか!」

みゆき「きや・・・キャンディ!」

あかね「どないしたんや? 急に抱きついてきて」

キャンディ「みゆき・・・元の性格に戻ってるクル・・・良かったクル!」

みゆき「元の性格?」

れいか「ポップ! その怪我は」

ポップ「みゆき殿・・・皆の衆・・・」

なお「あそこに倒れてるの……はる？……はるだ!!」

はる「……………」

なお「はるーー!!!」

はる「う……………うん……………なおねえ……………」

ガシツ

なお「このバカ!色々心配したんだよ!一体どこにいたの!?!」

はる「なお……………姉ちゃん……………ひくつ……………ええーん!!ごめんなさあーい」

星奈「……………」

みゆき「あれ?黒井さん……………」

星奈「……………」

みゆき「黒井さあーん!!」

星奈「……………」

みゆき「黒井さん、どうしたの?それにその傷……………一体何があったの」

星奈「……………なんでもないわよ」

みゆき「なんでもないとて・・・その傷かなり酷いよ！一緒に病院に行こう！」

ガシッ

お姉ちゃん！お姉ちゃん！助けて！助けて！助けてええええええええええ！！

きやはははははは♪星奈ちゃん的笑顔・・・ゲツーーーーート♪

お・・・・・・・・姉・・・・・・・・ちゃん・・・・・・・・

その時・・・私の頭の中の怒りが頂点に達し、星空みゆきを・・・

ガシッ

みゆき「へ？」

バキッ！！

ずずずー

あかね「みゆき!」

やよい「みゆきちちゃん!」

なお「みゆきちちゃん!」

れいか「みゆきさん!」

キャンディ「みゆき!」

私は星空みゆきの胸蔵をつかんで頬を拳で殴った。

みゆき「黒井さん………なんで……」

星奈「あんた……自分達が一体何をしたのかわからないの?」

みゆき「へ?」

星奈「この傷はあんた達につけられた傷よ……」

みゆき「私達が……黒井さん……を」

私はもう一度星空みゆきの胸蔵を掴んだ。

星奈「覚えておきなさい……あんた達の力は確かに強力よ……でもねあんた達の力の使い方は無邪気な子供が刃物を振り回しているほど恐ろしい存在よ!!」

みゆき「黒井……さ」

星奈「お前達のやつてることはテレビでよくある世界を救う正義の味方とかそんなことをしているんじゃないのよ!!!」

みゆき「へ……」

星奈「お前らのやってることはヒーローごっこにかに過ぎない!!
してお前らは正義の味方じゃなく只の操り人形に過ぎないこと
を……」

みゆき「え……」

星奈「あんた達が……もしもその力の恐ろしさに気づかずにか
みたいに笑うようなことがあったら……」

私は星空みゆきの肩を強く握りしめ

星奈「私あんたを一生許さないわよっ
!!!!!!」

みゆき「黒井……さん」

星奈「帰るわ……」

私はそれを言い残し後にした。

やよい「みゆきちゃん大丈夫？」

あかね「ちよ何すんねん!!戻ってきい!!」

ポップ「皆の衆っ!!!」

なお「ポップ……」

ポップ「今はそーつとしくでびびる」

れいか「……」

みゆき（黒井さん……）

「惑星プリズム最深部」

ネメシス「どうやらこの奥らしいな………アリス」

アリス「うむ」

シャツ シャツ シャツ シャツ シャツ

バコーーコーン

アリスの持つ武器で分厚い扉が綺麗に切り裂かれた。

ネメシス「おお、これがプリキュウス様の新しい体か」

アリス「まさか………この遺体に乗つとるのか」

アリス「プリキュウス様の妹君………アンジエリーナこと
キュアアンジエ」

19話 ロイヤルクイーンの問題

先生「皆に伝えなくてはならないことがあります。黒井さんが今朝家で大ケガをしまして来週まで休みだそうです」

『ええええええー！！！？』

女子A 「黒井さん・・・大丈夫かしら」

女子B 「私達でお見舞いに行かない？」

男子A 「黒井・・・大丈夫かよ」

男子B 「なんか心配だよね」

ガヤガヤ ガヤガヤ ガヤガヤ

私はあの時、黒井さんに殴られた頬を撫でた。

” あんた達がもしその力の恐ろしさを気づかずにバカみたいに笑うようなことがあったら・・・私はアンタを一生許さないわよ!!”

みゆき（黒井さん・・・あの時、泣いていた・・・）

キーンコーン カーンコーン

私は休み時間に入り、黒井さんのことを考えていた。

れいか「みゆきさん」

みゆき「れいかちゃん？」

れいか「みゆきさん・・・類は」

みゆき「え？・・・あー大丈夫大丈夫このぐらい平気だから・・・
あははは・・・」

れいか「みゆきさん・・・黒井さんは私達がプリキュアだということ
とはもうわかってると思います。」

みゆき「え・・・」

れいか「あの時の黒井さんの感情的な発言は私達がプリキュアだ
ということを知っていたからです。」

みゆき「なんで・・・私達がプリキュアって知ってるのはキャンディ
とポップ達だけなのに」

れいか「おそらく、黒井さんがオーディウムだったんでしょう？」

みゆき「黒井さんが・・・オーディウム？」

れいか「オーディウムが現れたのは黒井さんがこの学校に転校した
ときから現れました。そしてあの時の発言からすれば黒井さんは間
違いなくオーディウムです。」

みゆき「そんな・・・じゃあなんで黒井さんは私達を攻撃するの？

まさかバッドエンド王国の・・・」

れいか「それは違うと思います。」

みゆき「え？」

れいか「オーディウムはラテン語で”憎しみ”と解きます黒井さん
は私達プリキュアという存在を憎んでいると私は思います。」

みゆき「そんな・・・なんで黒井さんが・・・プリキュアを・・・」

私の家族はプリキュアに殺されたのよ・・・

みゆき（まさか黒井さんの家族を殺したのは・・・私達・・・）

れいか「みゆきさん」

みゆき「れ・・・れいかちゃん」

れいか「明後日の土曜日に黒井さんに会おうと思っています」

みゆき「れいかちゃん一人で・・・」

れいか「はい・・・もしあかねさんやなおをつれていけば対立しそうですね。黒井さんにとって不便だと思っています。」

みゆき「だったら私も一緒に・・・」

れいか「いいえ、ここは私自らお会いしようと思っています。みゆきさん、すみませんが私の我儘を聞いてくれませんか？」

みゆき「れいかちゃん・・・」

私はあの時の闘いで深いダメージを負ってしまい、スマイルプリキュアによって家が破壊され、新人のガーディアン達の協力で古いマンションを改造した個室で傷ついた体を回復させるためメデイカルベッドで療養中なのだ。

私は眠りついた。

? 「……いさん」

?

? 「……黒井星奈さん……」

誰?

? 「私はメルヘンランドの女王」ロイヤルクイーン”です」

ロイヤルクイーン……あいつらをプリキュアに引きずり込んだ張本人か

「女王様直々になんのようかしら?」

ロイヤルクイーン「あなたのこと知っています未来からやって来たプリキュアを憎む者、そしてオーディウムと呼ばれる戦士、そしてあなた達は全てのプリキュアを排除、あるいはその謎を調査するためにやって来たことを……」

この女王様は全部お見通しってことか……

「で……それがわかってどうする気……プリキュアを呼んで私を……

殺す気かしら？」

ロイヤルクイーン「そんなことはしません。ただ私はあなたに重大な質問をしに来たのです」

重大な質問・・・？

ロイヤルクイーン「あなたが戦っているジェネラルプリキュアとプリキュウスそして彼女達プリキュアの意味とは違った謎の意識について説明してください」

「・・・」

私は彼女にプリキュウスとジェネラルプリキュアのことについて説明した。プリキュウスはかつて初代プリキュア キュアアンジェと戦っていたこと、プリキュウスとキュアアンジェは双子であり、姉のプリキュウスは実の母を殺して故郷の星のエネルギーを自分の物にし故郷の星を死の星へと変えたこと、そしてそのエネルギーを人間の玩具にされたプリキュア人達をプリキュウスがそのエネルギーでジェネラルプリキュアに変えたことを語った。

ロイヤルクイーン「そんなことが・・・」

星奈「その発言・・・どうやら知らなかったようね」

ロイヤルクイーン「キュアアンジェは私達の世界でも伝説の戦士として語っています。しかしどうして貴方が私達の知らないことをそこまで知っているのですか？」

星奈「プリキュアの書ってご存知かしら？」

ロイヤルクイーン「プリキュアの書・・・それはかつて私達の先代が書かれたと呼ばれる伝説の本・・・まさか」

星奈「そう・・・今は私が持っているわ」

ロイヤルクイーン「プリキュアの書を・・・あなたが」

星奈「そう、そしてあいつらプリキュアの意識とは違う別の意識とはあいつらの力そのものが乗っ取っていたのよ」

ロイヤルクイーン「プリキュアの力そのものが・・・」

星奈「原因は・・・プリキュウスがこの地に降り立ったことよ」

ロイヤルクイーン「・・・」

星奈「幸い、そのときのやつは緑川なおの妹に乗り移っていたからあの時上手くあやつることは出来なかつたんでしよう？ けど・・・もし奴が新たな体を手に入れたとき奴等プリキュアオールスターズは・・・プリキュウス、ジェネラルプリキュア達と、共にこの世界の人間あるいは異世界の侵略を開始することになるでしょうね」

ロイヤルクイーン「・・・本当だったのですね」

星奈「は？」

ロイヤルクイーン「かつて・・・私の住むメルヘンランドにある一人の人間が現れました。その人物はいずれピエーロを含む邪悪なる存在を倒してしまえばプリキュアの力が完全に目覚め、メルヘンランドを含む妖精達の国が滅びてしまうと・・・」

星奈「・・・その人物って・・・」

ロイヤルクイーン「黄瀬………勇一です」

星奈「!？」

黄瀬勇一……情報では黄瀬やよいの父であり、黄瀬やよいが5歳の時、他界していると書いてあった。

星奈「黄瀬勇一は……自分の娘がプリキュアになることを……知っていたのね」

ロイヤルクイーン「はい……おそらく」

星奈「黄瀬勇一はあの人の情報によれば、異世界都市アルカ”の出身であり、プリキュアの歴史を変えようとした第一人者であること、だがそれをジエネラルプリキュア達に邪魔をされ、自分の寿命が残り少ないことに不安を抱いていた。それを励ましたのは黄瀬やよいの母にあたる黄瀬千春に出会った。黄瀬勇一は黄瀬千春と結婚し、黄瀬やよいが生まれた。そして黄瀬勇一は黄瀬千春にこの世界にやって来た理由をすべて話した。そして彼が死ぬ間際にプリキュアに関することをすべてレポートにしこの世を去った」

ロイヤルクイーン「私はあの時……あの人にこう言われたのです」

黄瀬勇一『もし俺の娘がプリキュアになって世界を滅ぼそうとする

ようなことになってしまったら・・・その時は必ず止めてくれ！プリキュウスの思い通りにさせないために・・・』

ロイヤルクイーン「あの人のあの言葉を聞いたとき、私は決意しました。」

決意？

ロイヤルクイーン「プリキュア達がピエーロを倒した時ジエネラルプリキュアが彼女達を連れ去ろうということがあれば・・・私達は全力で迎え撃ちます」

本当に・・・そんな風に行けばいいと願ってるわ

星奈「はっ」

ポンポー「おっ星奈起きたか？」

どうやら目覚めたらしい、それに黄瀬勇一……まさか”私を救ってくれた恩人”があんな風なことをいうなんて

星奈「それにしても……このメデイカル装置はさすがね傷が早く治って安心して寝てしまったわ」

ピンポーン

ポンポー「おっ誰か来たらしいぞ」

誰か……そもそもここは誰も近づかない廃ビル……一体誰が……

ガチャ

星奈「あんたは……」

私は休日の日曜日に一人で店の外のテーブルでコーヒーを飲んで
いた。そしてある人物を待っていた。

ザッ

? 「黒井さん」

星奈 「来ると思っていたわ……………」

星奈 「青木れいか」

青木れいかことスマイルプリキュアの一人 キュアビューティー

20話 オーディウム&ビューティー ブレインの 実験

私は喫茶店の外のテーブルである人物を待っていた。

それは……………

星奈「あなたが来ると思っていたわ……………青木れいか」

れいか「今ここでやつとあなたと話をすることが出来て私は嬉しい
です」

青木れいかは空いているテーブルの椅子に腰掛け、私と顔を見合
わせた。

れいか「黒井さん……………あなたは何者なのですか？」

星奈「……………」

青木れいか……………こいつはスマイルプリキュアの中で一番要注意な
プリキュアだ……………こいつは他のプリキュアと違って周りを良く把握
し、敵の戦い、仲間のチームワークを分析しながら戦う凄腕レベルに
等しい……………

星奈「……………青木さん」

れいか「……………」

星奈「もし私が……………そのオーディウムと呼ばれる戦士だったらど
うする気?」

れいか「もしそうであったのなら……………なぜ私達プリキュアを倒そ

うとするのか？それを教えてください」

.....

星奈「青木さん・・・貴方のいうとおり私がオーデイウムよ」

れいか「やはり」

星奈「そして私の本来の目的は貴方達プリキュアの抹殺あるいはプリキュアに関する秘密の調査よ」

れいか「プリキュアに関する秘密・・・それは一体」

私は鞆の中からある少し茶色い汚れた部分がついたノートを出した。

れいか「これは・・・」

星奈「黄瀬勇一が貴方達プリキュアに関するデータがまつたノートよ・・・」

私は青木れいかに黄瀬勇一の名前を出したとき青木れいかは啞然とした。

れいか「黄瀬勇一!?っ・・・・・・・・その方はやよいさんのお父様の名前・・・・・・・・黒井さんっこれをどこで」

グルルっ

星奈「!!」

れいか「黒井さん？」

私はこの町には聞かない獣の声が聞こえたとき現れたのは

星奈「グリム！」

そいつらは黒い毛で覆われ狼と熊の頭に獣の骨を被った怪物グリムが12体現れた。

れいか「あれは一体・・・バッドエンド王国の・・・」

星奈「違うわ・・・あれはバッドエンド王国に属さない怪物いわば、異世界の敵らしいわね」

れいか「異世界の・・・敵」

バチィー！！

上空から黒い穴が出てきた。その黒い穴から稲妻がはしり、現れたのは・・・・・・・・

星奈「時間遡行軍・・・」

情報によれば歴史修正主義者と呼ぶものによって作られた謎の戦士達・・・その目的は古来日本の歴史を変えることだと・・・・・・・・

れいか「黒井さん！あれも異世界からやって来た敵なのですか？」

「きゃあー！」

「助けてくれえ!!」

グリム「グルルル」

打刀「ウウウ・・・」

人々がグリムと時間遡行軍に逃げ惑う中・・・そこに立ち塞がったのは青木れいかである。

れいか「私が一人で来た以上、バッドエンド王国の者でなからうと人々の安心を妨げるものは許しません！」

青木れいかはポケットからプリキュアの変身アイテムスマイルパクトを取り出した。

れいか「プリキュア・スマイルチャージ！」

パアアア

ビューティー「しんしんと降り積もる清き心 キュアビューティー」

グリム『グアアアアッ！』

遡行軍『ウオオオオオオッ！』

ビューティー「はあああああッ！」

熊グリム「グアアアアッ！」

ビューティー「はあッ！」

バキッ

薙刀「ウオオオオオオッ！」

ブオンッ

ビューティー「ふっはあッ！」

バキッ

ビューティー対グリムと時間遡行軍

グリムは狼型が6体熊型が5体、そして時間遡行軍は、骨だけで口に小刀をくわえている短刀は3体、薙刀は5体、太刀は3体、一対多数では不利だと考えられる．．．しかしキュアビューティーは古武術と合気道でなんとか凌いでいる。果たしてどこまで持つのか．．．．．

星奈「ん．．．」

あれは．．．．．

妹「お姉ちゃん．．．もう疲れたよ．．．」

姉「大丈夫よ．．．あともう少力で逃げれるわ」

どうやら逃げ遅れた小学生の姉妹らしい．．．あそこにいれば奴等の格好の餌食になるのに．．．そこに気がついたのか狼型のグリムが姉妹に気付き、襲いかかってきた。

妹「お姉ちゃん来よ！」

姉「走って！」

姉妹は手を繋ぎながら走っていくが．．．．．後ろにいた妹が足をつまずいて転んでしまった。

狼グリム「グオオオオオオツ!!」

妹「お姉ちゃん!!!!!!!!!!」

姉「みのり!!!!!!!!!!」

お・・・・・・・・・・・・・・・・姉・・・・・・・・・・・・・・・・ちやん

《チェンジ！ソニックアロー！》

バシユツ

姉「え？」

妹「ふえ？」

姉妹はもう駄目かと諦めかけたが私はそれが見過ごせなくワールドフォンで武器を召喚しそれと黒のマントと黒の仮面を装備し狼型のグリムを切り裂いた。

オーデイウム「はやく逃げなさい・・・」

姉「へ・・・・・・・・は・・・・・・・・はい」

ビューティー「黒井さん……あなたはやはり」
戦っているビューティーは私がオーディウムということに見事に
的中した。

私の言葉を聞いた姉妹は急いで遠くまで避難し、私はレモンロック
シールドをソニックアローに装着し、奴等を一気に斬りつけた。

へロックオン！レモンエナジースカッシュユ！

オーディウム「はあああつ」

ズバツ！ バシユツ！ ブシヤツ！ ブシユツ！ ズバツ！ バ
シユツ！ズバツ！ブシヤツ！ ズバツ！ バシユツ！ ズバツ！
ブシヤツ！ ブシユツ！ ズバツ！ バシユツ！ ズバツ！ ブ
シヤツ！

熊型グリム『グアアアアツ……』 ドサツ

狼型グリム『ウオオオツ……』 バタツ

薙刀『グオオオツ……』 ボウツ

太刀『ウオオオツ……』 ボウツ

ゴゴゴゴゴツ

短刀『グオオオオオツ！』

上空にいる3体の短刀が私に向かって切り裂こうとしたが私はメ
ロンエナジールックシールドを取りだしソニックアローで一気に3本
出現し、まとめて放った。

へメロンエナジー・スカッシュユ！

オーデイウム「ふっ！」
バシユシユシユンツ！

バスツ　グサツ　バスツ

短刀『グオオオオオツ・・・』ボウツ

光矢に命中した3体の短刀は断末魔をあげながら消滅した。

ゴリラ型グリム「ウウウウ・・・」

大太刀「うくく」

残りは一番ゴツい大太刀とゴリラ型グリムあの2体だけね

ゴリラ型グリム「グオオオオオオツ！」

ガシツ

オーデイウム「な!？」

ブオンツ

オーデイウム（あのゴリラ・・・女の子に対して本気で投げるなんてどういう風のふきまわしなのか）

と投げられた私は眩いている時・・・私が飛ばされている先の方向では奴が待ち構えていた。

大太刀「ウウウ」

チャキツ

一旦距離をおいて行こうと感じたとき大太刀の後ろから彼女の必

殺技が放った。

ビューティー「プリキュア・ビューティーブリザード！」

ビューウウウー

大太刀「グオオツ？」

ズバツ！

キュアビューティーが大太刀の足を凍らせ身動き出来ずに動こうと必死な瞬間、私は投げ飛ばされたのを利用してそこで一瞬でソニックアローで斬り裂いた。

ゴリラ型グリム「グオオツ!？」

奴が仲間を倒されたことでどうすればいいか慌てている隙に……

オーデイウム「はああつ!!」

ビューティー「はあああつ!!」

ブシュツ！ ズバツ！

ゴリラ型グリム「グオオオオオツ……」 バタツ

キュアビューティーと一緒に奴を倒すことに成功しこれで全て片付いた。

ビューティー「黒井さん……あなたが……」

オーデイウム「オーデイウムよ……恨んでもいいから」

ビューティー「恨むなんて……」

オーデイウム「私はね……覚悟を持ってこの時代に来たの……たとえあんた達に非道と呼ばれようと」

ビューティー「黒井さん……」

キイイイイイイン

オーデイウム「!!」

一瞬、私の中のアレが何かに反応し、私は目の前の高いビルの上まで一気にジャンプした。

ビューティー「黒井さん!？」

キュアビューティーも私の後を追うようにジャンプした。

スタツ

オーデイウム「あの時間遡行軍もグリムもあんたの差し金らしいわね」

スタツ

ビューティー「あれは……」

そこにいるのは黒衣を纏い、眼鏡は両方に黒と闇の文字が浮かんで
いるその正体は

オーデイウム「ジエネラルプリキュアの一人……キュアブレイン
！」

ビューティー「ジエネラルプリキュア……」

ジエネラルプリキュアの参謀的存在……キュアブレイン

ブレイン「ほお、私のことをご存知なのですね……それにキュア
ビューティー……貴方は来るとは予想外です」

ビューティー「予想外……？」

ブレイン「はい、あなた方はピエーロを倒すのが何よりの目的のは
ず……早く自分の持ち場に帰ってください」

シャリンツ

ビューティー「それはできません！黒井さんがプリキュアを憎む理
由……そして貴方は私達プリキュアの知らないことを知っている……
答えてください……」

氷の刃をブレインに差し向けたがブレインは溜め息をはいて答え
た。

ブレイン「やれやれ……ビューティーあなたのリーダーキュアハツ

ピーはおとぎ話は好きだとおっしゃってましたね」

ビューティー「なぜ、それを」

ブレイン「あなた方のことは全てお見通しですよ・・・そして初めてこの世におとぎ話が存在したときビューティーその結末はハッピーエンドだと思いますか？」

ビューティー「え？」

ブレイン「シンデレラは王子と結婚するためありとあらゆる方法で義理の姉達や母を追い詰めようとします。斧で足を斬り裂いたり・・・ピーターパンはネバーランドに住む子供が大人になる前に殺したり、ヘンゼルとグレーテルは魔女と思い込んだ老婆を釜戸で焼き殺し、保護された子供達を毒の入ったパンを忍び込ませ殺したりと昔のおとぎ話はとても残酷な物語なのです。プリキュアも同じことです」

ビューティー「どういうことですか？」

ブレイン「プリキュアの力は元々私達の主、プリキュウス様の物なのですから」

ビューティー「プリキュウス？」

オーディウム「あんた達プリキュア達を作った生みの親の存在であり、同時に闇の存在を生み出した元凶」

ビューティー「え？」

オーディウム「そして私達が倒すべき敵でもある」

ビューティー「黒井さん・・・」

ブレイン「そのとおりです。あなた方は闇の存在と闘い平和のために尽くしていますがそれは間違いです。」

ビューティー「そんな・・・」

ブレイン「あなた方の闘いはプリキュウス様の復活させるための家畜にすぎませんよ・・・そしてあなた方や他の町で活躍しているプリキュアの皆さんも闇の元凶を討ち取った時、我々プリキュアの時代が来るのですよ」

オーディウム「そんなことさせるかつ!!」

ビューティー「黒井さん・・・」

オーディウム「あんた達の正義の味方ゴツコのせいでどれだけ命が失ったのか分かる？大切な人、愛した人、そして一緒にいたかった人そのいなくなつた悔しさと痛みがどれ程だったのか・・・今ここであんたを討つ!!っ」

ブレイン「ふふふふ、血気盛んな人ですね・・・ならば私も対勇者用のアレの試作を試させてもらいますよ」

ブレインが手に取つたのは小さな小型カプセルでそれを地面に投げた。

ブレイン「貴方達プリキュアが闘つた邪悪なる存在のデータを元に作つた対勇者用戦闘生命体・・・いでよーデキータ!!」

デキータ「デキーターーーーーデキーターーーーー!!!」

20. 5話 完全戦闘生命体 デキータ

デキータ「デキーーーーーターーーーーー」
「!!!!」

ブレイン「さらにこれもつけますよ」

ブレインが手に持っているのは白い鼯と狂暴な熊のフィギュアであつた。

そしてそれを謎のアイテムで二つのフィギュアを入れた。

ブレイン「さあ、実験開始です。」

《ノロイ・赤カブト・クロスオーバーチェンジ!》

オーディウム（あれは・・・それにあのフィギュアは・・・）

ブレイン「さあ、暴れなさい!呪いかぶト!」

呪いかぶト「グガアアアつ!!!」

デキータと呼ばれる怪物はブレインの二つのカプセルによってデキータは全身が白い毛で覆われ上から赤い鬣が生えており、目は鋭く、瞳は真つ赤な血のごとく赤い色をしていた。

呪いかぶト「グガアアア!!」

ドガアーン!

ビューティー「はああつ!」

バシィィィーッ!!

ジャンプしたビューティーは上空から強力な蹴りを放ったが……

呪いカブト「ニイツ」

ビューティー「なっ!？」

バシーーーーンツ!!

ビューティー「きゃあああ!!」

キュアビューティーの蹴りを喰らっても効かないなんてキュアブレインなんて怪物を作り上げたの……

呪いカブト「……………」「ビーーーー

あの怪物今度は目を開いて何かをしている……一体何を

ゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロ
ゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロ
ゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロ
ゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロ
ゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロ
ゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロ
ゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロゾロ

オーデイウム「嘘!?! 鼠の大軍!?!」

ブレイン「呪いカブトはたったの一睨みで大量の鼠を操れることが出来るのですよ」

鼠『チチユウー!!!』

鼠達が一斉に私達に襲い掛かって来て私はソニックアローで凧ぎ
払った。

ブシュツ！ ズバツ！ ブシュツ！

斬っても鼠達が大量に襲い掛かって来るから拉致があかない
オーデイウム「糞！ 斬っても斬ってもキリがない」

呪いカブト「グオオオツ！」

ブオンツ！

ビューティー「黒井さん！ 危ない！」
ドンツ！

オーデイウム「へ？」

バシユウツ！

ビューティー「きやあああつ!!」

オーデイウム「?!」

ドサツ

呪いカブトの強力な拳に襲われそうになったとき

あいつ……キュアビューティーが……私を庇った……

オーデイウム「あんた……何故」

ビューティー「ハア ハア ハアハア……何故ってそんなこと……」

オーデイウム「……………」

ビューティー「私達は……仲間です」

ズキツ

オーデイウム「……………へ?……………」

ブレイン「仲間……………素晴らしい……………」

ビューティー「!」

ブレイン「ビューティー、あなたの言う通り仲間は大事な事です。我々のように選ばれし者達はプリキュウス様の為に尽くして行くことこそが何よりのこと「違います!」?」

ビューティー「友達というものは人と人が互いに認め合い共に険しい道を進み、信頼することです。自分の為に私達を利用するということは……………私は絶対に許しません!!」

なんだ?アイツのパクトから青い光を発し、私が見たのは青く輝くオーラを纏ったキュアビューティーが立っていた。

ビューティー「黒井さん待ってて下さい……直ぐに終わらせます。」

ブレイン「行きなさい 呪いカブト!」

ブレインの命令に呪いカブトは動きだし、大量の鼠達が一斉にキュアビューティーの方に襲い掛かったが

シュンツ

バタバタバタバタバタバタバタバタバタバタバタバ

オーデイウム「!?」

ビューティー「峰打ちです。」

手刀一振りで大量の鼠達が一掃された。

呪いかブト「グオオオツ!!」

今度はやつ自ら襲い掛かって来た。対するビューティーは両方に氷剣を装備し、呪いかブトの鋭い爪と相對した。

ビューティー「はああつ!!」

キンツ!キンツ!キンツ!キンツ!キンツ!キンツ!

ブレイン「やはり、呪いかブトが押されていますね。このままだと……」

ビューティー「セイヤツ!!」

バキーーーーーンツ!!

呪いかブト「グアアアアツ!!?」

ビューティーの二刀流の剣さばきで呪いかブトの鋭い爪が碎かれた。

ビューティー「これで決めます！プリキュアビューティーブリザード！アロー!!」

バシユウウー~~~~ン
!!!!!!

呪いカブト「ガアアアアアアッ!!!」

ボ~~~~ンツ!!!

ビューティーの新しい必殺技で呪いカブトは爆散した。

だがブレインはどこを探しても見当たらなかった。どうやら逃げたらしい。

ブレイン「流石ですね。キュアビューティー」

オーディウム「この声は……」

ビューティー「ブレイン!……一体どこに……」

ブレイン「今日のところはここで引き上げます。いいデータも取れましたし、それとキュアビューティー」

ビューティー「え?」

ブレイン「いずれ貴方達はピエーロを倒した後、我々ジェネラルプリキュアの前に膝まずき、プリキュウス様の為に異世界の支配に加担することを貴方のリーダーに伝えておいてください。ハハハハハ!」

その笑い声を上げ、ブレインの声は聞かなくなった。

オーデイウム「……………」

私は直ぐに去ろうとしたが……

ビューティー「待ってください!?!」

オーデイウム「!!」

ビューティー「貴方はやよいさんのお父様とどういう関係なのか?」

私は答えず、直ぐに立ち去ろうと考えたが仕方なく答えた。

オーデイウム「勇一さんは私にとって兄のような存在だった。」

ビューティー「え?」

オーデイウム「あの人は私が路頭に迷っていた時、手をさしのべてくれた恩人よ」クルツ

ビューティー「黒井さ「あと他のメンバーに伝えておきなさい。あんた達はいずれ引摺り下ろされるって」」

私は立ち去ろうとするときビューティーに一言

オーデイウム「次はぶつ殺してあげるから……………」

ヒュンツ

ビューティー「黒井……さん」

オーデイウム「・・・・・・・・」

私達は・・・仲間です。

オーデイウム「う・・・・・・・・うう・・・・・・・・うう」

スタツ

オーデイウム「チクシヨーーーーー！！！！」

私は悔しかった。ビューティーが言ったあの言葉、私にとってプリキユアの一言は私が小さいときに受けられたあの屈辱を思い出させてしまった。

星奈「うわあああああああ
！！！！！！」

ーとある研究所ー

ブレイン 「デキータのデータ・・・彼女のお陰でいい収穫が出来た。」

ブレインがパソコンでオーデイウムとビューティーがデキータの戦いを見て満身創痍していた。

ブレイン 「もうすぐですね・・・私も準備を始めましょう・・・来るべき新時代のために」

研究所の周りにはありとあらゆるフィギュアが覆い尽くすほど置かれていた。

動物、鳥、虫、魚介類、怪獣、ロボット、怪人、空想の動物などのフィギュアが置かれていた。

設定集2

設定集2

異世界都市・アルカ

ありとあらゆる異世界の中で互いに共存、生活できるいわゆる巨大なエントランスである。そしてその世界に行けるのは世界各国のリーダー達の特別な資格がなければ入れない。そしてアルカにはAからZまでの町と島がある。この世界に住むことができる方法は免許をとっていくこと。

ディファレントタワー

ありとあらゆる異世界を管理している他の異世界人達が安心して異世界都市あるいは別の異世界を自由に行くことが出来る巨大装置塔

塔の中には異世界、平行世界、別宇宙などの膨大な数のゲートが保管し存在している。

DWD 通称(ディファレント・ワールド・ディフェンス)

アルカで結成された異世界防衛組織、DWDの隊員通称ガーディアンになれるのはディファレントタワーに住む元老院達から認められたら合格できる。ガーディアンの任務は異世界の侵略・支配の阻止である。

住人

たぬじい

異世界都市アルカの中心街、セントラルの古い武器屋を営む狸の老人、商品の武器はどれも異世界の武器であり、安物は使いきった武器

とかである。ときどき客に自分が気に入った武器の紹介をしたり、自分の武勇伝を聞いたりもするクセがある。好きなものは饅頭と抹茶

たぬ美

たぬじいの孫であり、喫茶木の葉の女性店員、両親は小さい頃から他界している。たぬじいがこれまで借りた借金を返すため、バイト店員として働いている。

キャラモチーフはけものフレンズの狸

プリキュアに関する設定

惑星プリズム

プリキュアの先祖、プリキュア人が住んでいた星、その星には戦いというものはなくそれを統一していたキュアアンジェとプリキュウス之母、マザークイーン、だがプリキュウスによってマザークイーンは殺害され、プリズムの心臓部であり源であるキュアエナジーを全て注ぎ込んでしまい、今は誰も住めない死の星となっている。

プリキュアの書

プリキュアの誕生と真実を書いた大昔の書物であり、ふしぎ図書館の外の古代都市のピラミッドの内部に発見された。一体、どこで誰が書いたのかこの後に語る

番人

古代都市のピラミッドを守るライオン型の怪物、猪のように突進し狙った獲物は容赦せずぶつとばす。

キャラモチーフはワンダと巨像の第14の巨像

ジエネラルプリキュア

プリキュアの上位クラスの存在であり、その力はパワーアップしたプリキュアとフルに闘う程の潜在能力を持つているそして全部で25人にいるが全員プリキュア人である彼女達は人間に迫害されたものの達の集まりであり25人の内一人はプリキュウスの娘がいた。プリキュウスの娘は後に語る。

キュアキャラクター

ジエネラルプリキュアの一人でありスマイルプリキュアの活躍している七色ヶ丘担当の監視者である。彼女の能力は他のプリキュアの顔を変えることで原作では出さなかったそのプリキュアの力の潜在能力をフルに出すことが出来る彼女の生い立ちは地球で人間達に親しみがあつたが人間の欲望が強すぎて始めて発見した硫酸の影響で元の顔が見せられない醜い顔になっていた。プリキュウスによって顔はプリキュアになつたことで元の顔を保っている。

キュアブレイン

ジエネラルプリキュアの一人であり、ジエネラルプリキュア唯一の頭脳派プリキュアであるありとあらゆる手段で異世界の生物、機械を研究しているそしてプリキュア達が戦っているドックゾーンからノワールのデータを基にして作られた怪物”デキータ”を生み出した。

プリキュウス

元の名前はインゲル、キュアアンジェことアンジェリーナの姉にあたる。母のマザークイーンに妹と一緒に地球を調査したところ人間の残酷さと非常さに怒りを覚え、マザークイーンに訴えかけたがマザークイーンはそれを拒否され自分の手で地球をありのままの姿にしようとしてキュアエナジーを求めたが失敗し、仲間から宇宙に追放された。それが原因でインゲルは黒い雷が当たり強靭な力を手に入れて

仲間と母を殺害し、キュアエナジー全て注ぎ込むことに成功した。だがキュアアンジェとその仲間である伝説の勇者に返り討ちにあつてしまい魂だけ冥王星で永い眠りについた。そして今、ジェネラルプリキュア達と共に来るべき時に備えるため、新たな肉体とプリキュア達の捕獲と『プリズムクリスタル』の入手を計画している。

その他

黄瀬勇一

黄瀬やよいの父親であり、幼き頃の星奈を救った恩人であり、異世界都市アルカのDWDのプリキュア調査隊員であるジェネラルプリキュアのキュアパラサイトとキュアブレインのウィルスに侵され、寿命が短命になっしまったが後の妻となる黄瀬千春にこれまでの全てのことを話し、死ぬ前にプリキュアに関する全てのデータをレポートにしこの世を去った。

加音町編

21話 ガーディアンズ 加音町に集結せよ！

私は家で暖かいコーヒーを呑みながらニュースを見ていた。

世間ではやれミサイルだのやれ話し合いだの国と国との関係性はバラバラである。

全くこんなことで世界のバランスが保てるのか不安になってきた。

ポンポー「ふくん♪ふんふくん♪」

星奈「？」

ポンポーの奴、帰ってきた時からなんか御機嫌ね・・・どうしたのかしら？

星奈「ねえ、あんたなんか随分とご機嫌ななめだけどなんかいいことあったの？」

ポンポー「え？知りたい？知りたいのか？うわあどうしようかなくぼふふふ」

なんかだんだんイラツとしてきた。ワールドフォンで武器を出そうとしたときポンポーは正直に答えた。

ポンポー「実はお前に借りたカードでアルカに行ってきたんだよ」

星奈「ああ、そういえば」

確かキュアビューティーと会う前にポンポーに暇なときはアルカ

に遊びにいったらと言つてたんだっ．．．

ポンポー「そして俺は、たぬ美さんに．．．．．告白したんだ／＼」

星奈「ほお、告白ねえ．．．．．ズズー

私はお茶をすすりながら聞いていた。ポンポーが．．．．．に．．．．．ん？．．．．．

ポンポー「そしたら．．．．．たぬ美さん．．．．．はつきりOKもらったんだよ／＼」

星奈「ぶぶぶううううー！！！！」ブー！！！！
私はあまりのことに驚愕し、飲んでいたお茶を吹いてしまった。

ポンポー「なんだよ!?キタねーな」

星奈「え?うそ?まじで!?え?え?えー!!??」

いやいやいや、明らかに唐突すぎるでしょ?嘘!マジで

ポンポー「うん．．．マジで／＼」

星奈「．．．．．」

私は啞然として言葉に出なかった。その時、テレビのニュースのアナウンサーが隣の方に新しい情報と思わしき行動をとっておりその紙を持ってニュースに切り替えた。

『只今最新のニュースが出ました。現場の稲垣さん』

『はい！現場リポーターの稲垣です！私は今 “加音町” にいます』

星奈 「加音町！」

現場リポーターの言葉に加音町が出たことに私は切り替えてテレビに集中した。

『たった今、この加音町に “未確認生命体” が現れたという情報を聞き現れました』

星奈 「未確認生命体？」

現場のリポーターがもう一回目の前を見ると辺りは霧で覆っていたが段々はれていき、目の前にいるのは

『あれです！あれが未確認生命体らしき姿が現れました。見た目は人の形をしています』

リポーターの言う通り、人らしき姿をしている。その時私はその姿に見覚えがあった。

星奈 「プリ・・・キュア・・・なの？」

ビー！ビー！ビー！ビー！ビー！

ワールドフォンが鳴り、着信相手は総司令のミストからであった。

『星奈！たった今加音町にプリキュアに似たと思わしき存在が出現し、ぴかりヶ丘とノーブル担当のガーディアンをそちらに向かわせている。星奈、君も今から加音町に向かってくれ』

加音町・・・確かあの町にもプリキュアがいたわね

だったら行くしかないわよね

星奈「了解！黒井星奈直ちに加音町に向かいます」

私は電話を切り、また私はボタンを押し始めた。彼らにこの事を報告するために

星奈「今七色ヶ丘にパトロールしているみんな私はこれから別の任務で加音町に向かうことになったわ引き続き任務を怠らないように」

『了解！』

私は加音町に行くことを新人達に報告し、必要な装備を持っていよいよ加音町に向かおうとした。

ポンポー「あの時は大変だったぜなんせ「ガシッ！」へ？」

星奈「ポンポー！今から加音町に向かうわよ」

ポンポー「へ？加音町？」

ー加音町ー

そこは音楽と芸術にありふれた街・・・その街に謎の未確認生命体が暴れだしていた

？「あれが噂の未確認生命体って奴か」

？「そうらしいわね・・・どうする？」

未確認生命体と睨む二人の男女は ワールドフォンを取り出し戦闘態勢に入った。

ジエイド「あいつらが来る前に片付けるっ！それだけだ！」

《チェンジ！メダジャリバー！》

ユーチェン「OK！ジエイド！」

《チェンジ！ガシャコンソード！》

『ハアアッ!!』

ジエイドとユーチェンの武器が敵を切り裂くと思いきや、それを簡単に受け止めた。

ジエイド「何!？」

ユーチェン「嘘?」

未確認「うおおおおお!!」

ブオンツ!

ジエイド「うわあああ!!」

ユーチェン「きゃあああ!!」

二人は壁に激突した。

ユーチェン「あいつ……超強いんですけど」

ジエイド「だがここで倒れるわけには……」

?『待ちなさい!』

二人が立ち上がるうとしている時、3人の中学生と1人の小学生が未確認の前に現れた。

響「ねえ、あれってマイナーランド……じゃないよね?」

奏「当たり前でしょ!マイナーランドだったら音符を狙うためにネガトーンを使ってくるもの」

エレン「でも……あれ人の形をしてるんだけど」

アコ「ウダウダいってないで、行くわよ!」

ハミイ「みんな変身するニャー!」

『レッツ！プリキュアモジュレーション！』

ユーチェン「げ！まじで？」

ジエイド「ちっ遅かったか・・・」

メロデイ「爪弾くは荒ぶる調べ！キュアメロデイ！」

リズム「爪弾くはおやかな調べ！キュアリズム！」

ビート「爪弾くは魂の調べ！キュアビート！」

ミューズ「爪弾くは女神の調べ！キュアミューズ」

『届け！4人の組曲 スイートプリキュア！』

この町、〃加音町〃に活躍するプリキュア、スイートプリキュアの登場である。

メロデイ「みんな！行くよ！」

メロデイの掛け声で未確認に一斉攻撃しようとしたが突如バイク音が聞こえ、まっすぐこっちに近づいてくると感じた。

ブオンツ！ ブオーンツ

リズム「この音、バイク音？」

ミューズ「一体どこから」

ジエイド「あそこか！」

ブオーンツ！！

キキイーーーー!!

ガチャ

オーデイウム「なんとか間に合ったようね……」

ボワンツ

ポンポー「もうダメ……」

バイクで現れたのは七色ヶ丘担当のガーディアンオーデイウムと黒井星奈の登場である。

そしてバイクに化けて走ったポンポーは体力に限界が来て倒れた。

ユーチエン「黒井ちゃん！」

ジェイド「黒井！」

オーデイウム「お待たせしました。ジェイド先輩！ユーチエン先輩！」

私は仲間である二人の先輩に敬礼した。

ビート「あの子一体、」

ミューズ「ちよつとミューズそれは何？」

ビート「へ？……はっいつの間にか木彫りのギター？なんで？」

ハミイ「あ！あそこニヤ！」

？「チチチチュ……あんたがさがしてるのはこれですかい？」

ビート「え？」

ビートが声がした方向を振り向くとそこにはビート専用武器のラブリギターロッドを片手に持つ顔がネズミのような顔した男性ともう1人は肌が茶色で髪が白髪の男性だった。

？「すみませんね〜人の物勝手に盗っちゃって……」

メロディ「あんた達何者よ!？」

アヤマリ「これはすみません俺はDWDぴかりヶ丘担当ガーディアン……アヤマリつてもんだ……元雲隠れの里出身の忍者っすけど……」

リズム「忍者?」

根津「あつしはノーブル担当のガーディアン……根津っちゅー言います以後お見知りおきをチュチュチュ」

ビート「あいつ……なんかネズミのような言葉言ってるような」

音吉「みんな!あれを見ろ!」

メロディ「え?」

ミューズ「おじいちゃん？」

リズム「何あれ……」

ビート「あれは……」

スイートプリキュア達は駆けつけてきたミューズこと調辺アコの祖父音吉が指を指している方向を見ると人型の未確認生命体に変化を感じた。

？「うう……ううう……ううう……ううう……ううう……ううう……ううう……ううう……ううう……ううう……」

？「GYAOOOOOOOOOOOOOOOO……！！！！」

人型の未確認生命体が突如巨大生物もとい頭がドラゴンのような姿に成り果てた。

メロディ「何あれ……」

リズム「人の形から・・・化け物になった？」
ハミイ「怖いニヤ〜」

？『くつくつくつ・・・』

音吉「？」

星奈「ドローン？」

？『噂のガーディアンと・・・音吉、貴様の町にいる人形が私が放つ
た餌に嗅ぎ付けてきたな』

音吉「何者だ！貴様は」

盤怒『私だよ・・・盤怒だよ』

音吉「ば・・・盤怒だと」

星奈「？」

22話 音吉と古き友 盤怒

音吉「盤怒……本当に盤怒なのか？」

キュアミューズの祖父、調辺音吉がドローンに話しかけているところどうやら相手は音吉の知り合いらしい。

盤怒『ああ、私だよ……音吉、私が放ったあの「人造プリキュア」をどう見る？』

音吉「人造……プリキュアだと」

調辺音吉はスイートプリキュアとガーディアン先輩達が相対する人造プリキュアを観察した。

音吉「あれがプリキュアだと……盤怒！貴様はあの少女に何をしたんだ？」

盤怒『素晴らしいだろ私が作った人造プリキュアは動きに攻撃に迷いなど一切ない……それに比べて貴様のでく人形はどうだ？』

音吉「で……でく人形だと！盤怒っ!!今のは聞き捨てならんぞっ！」

盤怒『友達？……ふん……仲良く？ふん、私の考えではあの小娘どもは力に溺れただけにしか見えんがな』

音吉「な……何だと!？」

盤怒『考えてみる。彼女らがなぜその力を持つことが出来たのか……あるいはなぜ元凶であるブラックホールとやらが倒されても悪は潰えないのか？なぜ、新しいプリキュアが誕生するのか？貴様に

は分かるか?』

音吉「そ…………それは…………」

ド……………ンっ!!

音吉「!?」

盤怒『無駄話をしてる暇があったらよく見るんだな。私が作った人造プリキュアを』

音吉「……………」

人造プリキュア「ガアアアアアアアアアアツ!!」

メロディ「女の子が怪物に……………」

リズム「そんな・・・なんで」

アヤマリ「こりや少々面倒なことになったな」

根津「ちちちちっそうでやんすね」

ビート「ちよつと！私のギターを返して!!」

根津「返してあげやすよ・・・ほいつ」ポイ

ビート「うわつとつとつとつ」バシッ

ジェイド「これよりたつた今あの未確認生命体を排除する!!・・・
根津とアヤマリは右の後方で援護を頼む」

根津「ちちちち承知しやした」

アヤマリ「すみませんねえ」

ジェイド「黒井とユーチエンは俺とともに前方の攻撃だ」

ユーチエン「オツケー！」

オーデイウム「わかりました。」

《チェンジ！フリーガーハマー！》
《チェンジ！フリーガーハマー！》

アヤマリ「んじゃ、行きますか」

根津「ちちちゆ、大いに盛り上げましょう」

バシユウ！

バシユウ！

二人は後方の援護でフリーガーハマーを召喚し、ロケットランチャーの嵐が未確認生命体に降り注いだ。

ジェイド「行くぞ！」

「「はあああっ!!」」

ブシュツ！バシユツ！ ザシュツ！

未確認生命体の喉元に私のソニックアロー、ユーチェン先輩のガシヤコンソード、ジェイド先輩のメダジャリバーの斬撃を炸裂させた。

ポンポー「やった！」

ポンポーは歓喜の声を挙げたが、未確認生命体の喉元は一気に自己修復していった。

ジェイド「なにッ！」

ユーチェン「嘘！」

根津「ちちゆ！」

アヤマリ「まじかよ!?!」

今度は未確認生命体の口から巨大な紫色の息を吐きかけてきた。

シユウウウウ・・・

ユーチェン「なに・・・これ・・・」ドサツ

ジエイド「これは・・・」ドサツ

根津「ちちゆ・・・ちゆううう・・・」ドサツ

アヤマリ「すんま・・・せん・・・」ドサツ

オーデイウム「みんな!?!」

どうやら奴が吐いたのは一気に眠らせる催眠ガスらしい幸い私は仮面を付けているので私一人になってしまい、どうしようか考えているとき、

「「「はああっ!!」」」

バキツ!!

人造プリキュア「ギャアアアッ！」

オーデイウム「え？」

スイートプリキュア達の強力なパンチが人造プリキュアの顔に当たりおもいつきりぶっ飛んだ。

メロディ「はああっ!!」

リズム「はああっ!!」

バキッ!

キュアメロディとキュアリズムのアップで上空までぶっ飛び、

ビート「はあっ!」

ミューズ「はあっ!」

上空からキュアビートとキュアミューズの一回転した強力なかかとおとしが人造プリキュアの頭に炸裂させた。

リズム「メロディ! 一気に行くわよ!」

メロディ「うん! ビート! ミューズ! 行くよ」

「OK!」

『プリキュア・スイートセッションアンサンブル! クレッシェンド!』

人造プリキュア「グオオオオ!!」

「ニ「ファイナル!!」」

ドーーーーーニーン!!

スイートプリキュア「やったー!!!」

ハミイ「プリキュアが勝利したニャ〜!」

オーディウム「未確認を……倒した」

スイートプリキュアの必殺技であの未確認生命体を倒した……だけれどあいつらは私達の近くにいたのに催眠ガスが効いていない……なぜ?

盤怒『ふん、あの程度の奴を倒したことでウカウカとうかれおってあれはあの人形どもの性能を確かめるためのテストに過ぎん』

音吉「何!?!」

盤怒『ラスト……出番だ！行けるか？』

ラスト「はい、いつでも……」

メロディ「いやあ、意外と大したことなかったね」

リズム「何いつてるの？最初はびっくりしてたくせに」

ビート「ははは」

あいつら……敵を倒したことであんなに浮かれて、プリキュアってなんであんなに平常丸出しなのか理解できない。

ミューズ「みんな！何かがこっちに来る！」

メロディ「へ？」

リズム「何かって」

ヒュンツ

バキッ!

リズム「きゃああっ!」ドサツ
ゲシッ!

ビート「がはっ」ドサツ
ビシッ!

ミュージズ「いつ!」ドサツ

メロディ「え?リズム、ビート、ミュージズ?」

オーディウム「あれは……」

三人のプリキュアを一瞬で倒したプリキュアらしき少女が立って
いた。

メロディ「あんた……一体」

ラスト「貴様に用はない……」ヒュンツ

バキッ!

メロディ「グフッ!」

ドーーーーー

ハミイ「メロディ!!」

キユアメロディをボディブロー一発でぶっ飛ばした。あいつ・・・
一体

ゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

オーデイウム「な・・・なんだ？」

ハミイ「地震ニヤア!!」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

音吉「この揺れは・・・盤怒！貴様何をした」

盤怒『なに、新しい門出祝いだそろそろこの街を去ろうと思つて
ね・・・大いに』

音吉「なに!？」

ピシピシピシピシピシピシピシピシピシピシピシピシピシピシピシ……

バコーーーーーーッーン!!

オーデイウム「一体何が……」

砂ぼこりが漂う中、私が見たのは

オーデイウム「こ……これは地面が割れて……中から巨大な円盤!？」

ハミイ「ニャー!!大きい!」

音吉 「盤怒・・・あんな物を作るとは」

盤怒 『じゃあな、音吉縁があつたらまた会おう』

音吉 「くっ」ダッ

巨大円盤が徐々に浮かび上がり、もうどうしようもないと思った中
円盤の上に立っているあの少女は私にこう言った

ラスト 「私と戦え」

23話 上空の決闘 オーディウム対人造プリキユ
ア ラスト

ラスト「私と戦え」

オーディウム「え？」

巨大円盤の上に立つ少女は私に向かってそう言った。

オーディウム「どうして私と・・・」

ラスト「お前と私は戦わなければならない運命なのだ・・・同じ傷を持つものとして」

オーディウム「え!？」

盤怒『ラスト早く戻れ!』

ラスト「・・・」

オーディウム「ポンポー、気絶しているみんなを安全な場所まで誘導させて」

ポンポー「え？星奈、お前は？」

オーディウム「アイツは私に用があるみたい、だから私は行くわ」

ポンポー「何いってんだ！罨かも知れないんだぞ？」

オーデイウム「罨でも行くしかないわ！」
オーデイウムの頑固たる決心にポンポーは今までこの少女についていったかぎり、逃げることにすら考えず、がむしやらに立ち向かうことが多かった。そして今も

ポンポー「……………死ぬなよ」

オーデイウム「死なないわ」バツ

盤怒『ラスト！何をしている返事をしろ！』

ラスト「申し訳ありません…………マスター…………私の初めての我儘をお許してください」

盤怒『おい！ラストブツ！』

スタツ

ラスト「来たか…………」

《チェンジ！ソニックアロー！》

オーデイウム「まさか…………この円盤の上で戦うなんて…………スケールありすぎね」

ラスト「どうかな？」

ー円盤コックピットー

盤怒「くそ！ラストめ何を考えておる」

バン！

盤怒「!？」

内部から誰かが侵入したらしい音がしその人物は

盤怒「まさか、ラストじゃなくお前が来るとはな………音吉」

音吉「盤怒………」

音吉と盤怒……お互いにらみ合いただ動けずに立ち止まる。

音吉「盤怒よ……なぜあの化け物をわしらの街に差し向けたのだ？
お前は一体……何をしようと企てているのだ？」

盤怒「音吉……これは〃聖戦〃なのだよ」

音吉「聖戦だと?・・・」

盤怒「そうだ・・・考えてみる・・・なぜありとあらゆる街にプリキユアと呼ばれる少女がいるのか?なぜブラックホールとやらが倒されても悪は潰えないのか?原因はあの小娘どもにあるじゃないのか?」

音吉「な・・・何だとっ!?!」

盤怒「あの小娘どもがあんな強大な力を持っていながら友達だの友情だの、まるで人間の真似事をしている操り人形そのものじゃないか」

盤怒の言葉に音吉は怒りの頂点に達し、盤怒に襲いかかろうとしたが

ガシッ! ガシッ!

音吉「ぐっ」

盤怒「はははは、用意周到に部下を待ち伏せてやって正解だわい」

音吉「盤怒・・・」

盤怒「音吉・・・お前は昔からそうだ・・・かつて私とお前はかつて、あの赤ん坊〃を拾わなければこのような大惨事にはならなかった。そのせいで私は学会から追放された。」

音吉「それは・・・」

ドーーーーー!!

盤怒「うおっ!!」

音吉「ぬおっ!」

部下『うわああ』

外から大きな地震が揺れ動き、音吉も盤怒も部下達も揺れのせいで転がり始めてしまった。

音吉「こ……これは」

ラスト「糞!ラストめ……一体外で何をやっているのだ」

ー巨大円盤上空ー

ビュウウウーーー

ガキン! ガキン! ガキン! ガキン! ガキン!

オーデイウム「糞!」

私と人造プリキュアラストは円盤上空の上で刃と拳の攻防戦に入っていた攻撃と防御は他のプリキュアとたいして変わらないがス
タミナはジエネラルプリキュアと同等らしい

ラスト「どうした・・・戦う気はないのか？」

オーデイウム「は？」

ラスト「お前の戦いには殺意がこもってないそんなんでよくプリ
キュアを憎むものだとほざけたほのだな」

オーデイウム「何ですって!？」

ラスト「お前のことは知っている・・・お前はプリキュア達全てを
殺そうと企てる未来からやって来た者だとな」

オーデイウム「何!? 一体どこでそんな情報を・・・」

ラスト「お前の中にあるキュアエナジーが教えてくれたのだ・・・
そしてお前は最愛の家族をプリキュア達によって殺され、プリキュア
を憎むようになったことを」

オーデイウム「それがどうしたの?」

ラスト「お前はプリキュア達と戦ったあの怪物を見たら・・・あれ
は私の妹だ」

オーデイウム「え？」

ガキンツ!

ラストは私に向かって拳を突きつけて来たが私は運良くソニックアローで防いだ。

ラスト「お前は惑星プリズムと呼ばれる星を知ってるか？」

オーデイウム「え？」

ゲシツ！

オーデイウム「ぐっ」

ラストは私の腹に強烈な蹴りを出しその反動で距離をとった。

ラスト「私は・・・いや私達は元々大昔に惑星プリズムに住んでいたプリキュア人だ」

オーデイウム「プリキュア人!？」

プリキュア人、プリキュアの書に書かれた惑星プリズムの住人達のことだ。そしてキュアアンジエとプリキュウスも惑星プリズムのプリキュア人の一人だ。

ラスト「私はかつて妹と一緒に幸せな日常を過ごしていた。だが、ある日マザークイーンの実娘であるインゲルがプリキュウスと呼ばれる悪魔になり惑星プリズムは死の星に変えてしまった。そのせいで大半のプリキュア人達がプリキュウスによって殺された。わずかに残った私と妹を含めたプリキュア人達は地球に移り住みなんとか逃げ延びたと思ったが今度はプリキュウスはジェネラルプリキュアと呼ばれる悪魔に魂を売ったプリキュア人とともに破壊の限りを尽くしていった。そして妹はあの時、ジェネラルプリキュアに改造されたあのような化け物に成り果てたが伝説の勇者達によってその一命を

取り止めた。そして私はある場所で妹とともに長い眠りに入った。」

オーデイウム「ある場所？」

ラスト「それは私達の記録、プリキュアの書と一緒にあった場所だ！」

オーデイウム「!?」

私は驚愕した。かつて私達はプリキュアの謎を解明すべく不思議図書館の外に出て、廃墟となったあのピラミッドの中にいた奴だと確信した。

オーデイウム「あんたが・・・あのピラミッドの中にいた奴？」

ラスト「そう、私はお前の仲間にプリキュアの書を手にとつてしまひその影響で私と妹は目覚めた。私達は外に出て路頭に彷徨う毎日であった。あるものはけなされ、あるものは売春にあいそうになり、あるものは猛獣に襲われ、ひもじい毎日だった。そんな時、出会ったのが科学者の盤怒奏助、後の私達のマスターだ」

オーデイウム「盤怒奏助!？」

ラスト「そうだ、マスターは今ありとあらゆる街に所属しているプリキュウスの忘れ形見であろうプリキュアと呼ばれる英雄気取りが気に入らなかつた。そして私達はプリキュアと戦うための力をマスターは授けた。妹は力を授ける代償にかつてジェネラルプリキュアに改造されたあの姿にならなければならなかつた。だが死にかけの妹はそれを百も承知で望み、私もプリキュアを倒すための力を授けた。妹は力を持ちさつきのプ

リキュア達と闘い破れ去ってしまった。私は最愛の妹を亡くして

涙を噛み締めた。敵を倒し、平然とヘラヘラ笑う英雄気取りの畜生下の偽善者のプリキュアに怒りを覚えた。お前だってわかるはずだっ！」

オーデイウム「!?!」

ラスト「お前は妹を亡くし家族を殺されプリキュア達によって哀れな人生を送った私とお前は志は同じ私達と来い！」

オーデイウム「……………」

私と……………こいつが……………同じ……………同じ……………同じ……………同じ……………

オーデイウム「確かに私はあなた達と同じようにプリキュアを憎んでいる」

ラスト「そうか……………では「でも」え」

オーデイウム「なぜ、死にかけの妹を止めて上げなかったの？」

ラスト「え？」

オーデイウム「あなたの妹は本当に戦うことを望んでいたの？例え怪物になったとしてもなぜ止めて上げなかったの？」

ラスト「……………」

お姉ちゃん・・・・・・・・痛いよ・・・・・・・・苦しいよ・・・・・・・・

お願いします。私と妹にプリキュアを・・・・・・・・あの化け物と戦う力を・・・・・・・・

ラスト「止めようとしたさ・・・・・・・・だが、そうもいつてられないんだよ・・・・・・・・プリキュアがいる限りな」

オーディウム「ラスト・・・・・・・・」

ラスト「どうやら、私とお前は辻褄が合わないようだな」

ラストは上空まで飛び、胸から紫の稲妻が飛び出し、巨大な球体を作り上げた。

ラスト「せめて、私の必殺技で楽にしてやる・・・・・・・・必殺！ラスト・ダスト！」

バチバチバチバチバチバチバチバチバチバチバチバチバチ
!!!!!!!

オーディウム「ぐっ！」

紫の巨大な球体から巨大な隕石が稲妻を纏って飛び出し巨大円盤ごと炸裂した。

バコンッ！　バコンッ！　バコンッ！　バコンッ！　バコンッ！
バコンッ！　バコンッ！　バコンッ！　バコンッ！　バコンッ！

円盤ごと・・・・・・・・これを落とす気かよ

ー円盤内コックピットー

グラグラグラグラグラグラグラグラグラグラ

音吉「うわあっ！」

盤怒「ぐわあっ！」

ラストの必殺技でコックピットの方にもぐらつき始め、音吉と盤怒その部下達も転がり始めてしまった。

盤怒「ラストめ！一体外で何をしているのだ！」

部下A「博士！大変です！」

盤怒「なんだ！」

部下A「左肩ウイングと右肩ウイングが両方とも大破されました
!!」

盤怒「何だと！」

部下B「こっちはエンジントラブルです！」

盤怒「ええーい!!」

盤怒は操縦槳の隣についているマイクを握りしめ叫んだ。

盤怒「ラスト!!もうやめろ!!このままじゃ落ちるぞ!!」

盤怒の言葉を聞こえたのか攻撃が弱まった。だが、円盤はすでに壊滅状態になっていた。

盤怒「おい!お前らどこに行く?」

部下達は緊急予備であるパラシュートを背負い外の方に向かおうとした。

部下A「このままじゃ墜落する一方です」

部下B「我々は一足先に脱出します。」バツ!

盤怒「おい!!逃げるなー!!!」

部下が次々とパラシュートを担ぎ外に向かってジャンプしていき、盤怒の悲痛の声も届かず部下は皆予備のパラシュートを背負って逃げていった。

音吉「終わりだな盤怒」

盤怒「……………」

音吉「お前のやり方は間違っていたんだ…今ならまだ間に合う…」

ワシとともに脱出しよう」

音吉は手を盤怒の方に差し伸べたが盤怒は……

盤怒「間違っていた……だど？」

バキッ！

音吉「ぐわあ！」

手を差し伸べた音吉は盤怒に頬を思いっきりぶん殴り、音吉はぶっ飛んで眼鏡が外された。

盤怒「じゃあ、私も質問しよう……お前はあの小娘どもにプリキュアの力を持たせるべきだと本気で思っているのか？」

盤怒の質問に音吉は……

音吉「ああ、今わしらの街はノイズと呼ばれる魔物が復活する前にプリキュアの力が不可欠なんだ」

盤怒「あまいんだよ……その力を持った小娘どもは人間に背を向けるかもしれんぞ！プリキュアと敵対することになったらお前はどうする？」

音吉「そのようなことにはならないとワシは彼女達、プリキュアを信じる！」

盤怒「信じる？実にお前らしい言葉だな……だがそれは只のおごりでしかないんだよ」

音吉「な……何？」

盤怒 「よく少年漫画に出てくるイイモンの科学者の言葉だな．．．いや厳密には違うなプリキュアはよくある正義の味方と違ってイチからお前が作ったわけではないからな．．．．．で．．．いつ彼女達に話すんだ？．．．」

「プリキュアは何者か？なんのために存在し生まれたのか？」

音吉 「それは．．．」

盤怒 「いや．．．できれば話したくないか？そうだよなお前の理想の世界が根本的にくつがえされてしまうからな」

音吉 「．．．．．盤怒」

盤怒 「お前ら偽善者は好きにやってろ」

ー巨大円盤上空ー5分前

バコンツッ！バコンツッ！バコンツッ！バコンツッ！バコンツッ！

オーデイウム「くっっ！」

私は今ラストの必殺技で苦戦している避けることだけで精一杯なので勝機が出るチャンスが見当たらないのだ。

ラスト「ははははは、落ちろ！落ちろ！落ちろ！落ちろ！落ちろ！

『ラスト!!もうやめろ!!このままじゃ落ちるぞ!!』はっ」

オーデイウム「勝機！」

ラストが攻撃を止め、今こそ勝機と感じレモンエナジーロックシードをホルスターにセットし私はラストに向かって思いっきり飛んだ。

へレモンエナジー・スパークキング！

オーデイウム「はああっ!!」

ラスト「ぐわあっ!!」

バシユツッ！ スバツッ！バシユツッ！バシユツッ！バシユツッ！スバツッ！スバツッ！スバツッ！バシユツッ！

オーデイウム「これで止め！」ガシヤツ

へメロンエナジー・ロックオン!<

へメロンエナジー・スカッシュ!!<

オーデイウム「はあっ!」

バゴーンンっ!!

ラスト「ぐわああっ!」ドサツ

あぶなかった・・・あのまま奴が必殺技をかましつづけていたら、私は逃げ場もなくやられていた

オーデイウム「さてと・・・私も早く中にガシツ!え?

突然後ろから誰かがしがみついていた。その正体は・・・

ラスト「逃がさんぞ・・・オーデイウム・・・」

オーデイウム「ラスト!」

ラスト「お前を・・・マスターに会わせるくらいならせめて・・・私と共に・・・死ねええええ!!!」

ラストの体から紫色の炎に包まれて私もその炎に包まれた。

ラスト「必殺!ラスト・ダイナマイト!」

大爆発の爆発によりコックピットのガラスが割れ、音吉は後ろから出てきた爆風で吹っ飛んだ。

盤怒「これは・・・まさかラストが・・・・・・・・」

音吉「うわああああ!!!」

爆風によつて音吉は海へと真つ逆さまに落下していった。

フワツ

音吉「んっ?」

クレツシエンドトーン「大丈夫ですか?」

音吉「クレツシエンドトーン! 御主が来てくれたか」

音吉を助けたのは黄金の翼に金の冠を付けた伝説の精霊クレツシエンドトーンが駆けつけてくれた。

クレツシエンドトーン「プリキュアのみなさんに頼まれあなたが彼処にいると感じ駆けつけて参りました。」

音吉「そうか・・・」

音吉は安心し巨大円盤を眺めた。

イイモンの科学者の言葉だな

おごりだよ

いつ彼女達に話すんだ？

音吉「盤怒……………」

クレツシエンドトーン「……………帰りましょう」「ブワッ

ー円盤内コックピットー

盤怒「はは……………ははは……………」

スタツ！

盤怒「戻ったのか……………何故だ？……………」

盤怒の後ろに現れたのは……………

ラスト「……………」

オーディウムとともに海へと真っ逆さまに落下し大爆発したラストだった。どうやら運良く無事に戻ってきたらしい

ラスト「私が頼れるのは……………マスター……………あなただけです……………私の命はあなたのために尽くそうと誓ったのです。」

盤怒「あんな大爆発をしても戻ってくる実に素晴らしい力だその力があればどんな悪でも倒せる……………が、だからこそ……………だからこそ問題なのだツ!!」

盤怒は空に沈む夕陽を目にし眩いた。

盤怒「いつか人は彼女らを脅威に感じるようになる、只の人でいるほうが幸せかもしれんぞ……………違うかね、音吉……………それに……………お前だつてわかっているはずだ……………」

「美墨・・・」

その後DWDの捜索隊が密かにオーデイウムを探したが彼女自身どこにもいなかった。だが捜索隊が発見したのは

黒い仮面だけだった。

つづく

24話 世界の真実を知る者

ゴボゴボ……………

私は……………今……………どこにいる

ゴボボ……………

冷たい……………そうだ……………私はあの時……………拘束されラストと共に自爆する直前に爆発から逃れようと海に潜り抗い続け、やっと解放されどこか遠くまで離れようとしたが間に合わず、大爆発の衝撃でブツ飛ばされたんだ。……………

……………あれから……………どのくらい……………たつんだろ……………

．．．．．ポンポーは．．．元気かな．．．

紺野先輩．．．．．希美．．．．．主．．．．．

みんな．．．．．元気に．．．してるかな．．．

りほ．．．．．どうやら．．．お姉ちゃん．．．ここで死ぬかも
しれない．．．．．

今．．．．．そつちに．．．．．行くから．．．

？「起きろやっ!!コンコンニヤローのバーロー岬がっ!!!」

.....
起きろ.....

.....
ろ.....

星奈「うわ！何あんた!?ここはどこだ!?!」

私が目覚めたのはさつき沈んでいた海底の底じゃなくまわり一面白い空間に私は一つの机に座っていたのだった。

?「やれやれやつと起きたかコノヤロー」

私が今日の前にいるゆるキャラ?つぽいなにかがいた。

?「私の名は『アマノガミ』人間たちには5万年からそう呼ばれている。そしてここはお前の頭の中だ」

星奈「?.....?.....」

何いつてるの? さっぱりわからない

アマノガミ「じゃあ、見せてやろうか私の本当の姿を」

アマノガミの体から全身に巨大な光が発光し、私は目を瞑り、徐々に光が弱まり私が見たものは・・・

星奈「な・・・な・・・な・・・何よこれえええー!?!?!?!??」

超巨大な首長竜であった。

星奈「嘘!恐竜!?こんな海底にまだ生き残りがいるなんて・・・」

アマノガミ「おいおい勝手に全部死んだみたいなことはいわないで

くれ！こう見えても一生懸命生きてんだからさ」

星奈「あなたが私を助けてくれたの？」

アマノガミ「私の力・・・というよりとある異星人の力をお借りしてるんだけどね」

星奈「とある異星人？」

アマノガミ「お前さんが戦っていた奴の一族、プリキュア人にね」

星奈「プリキュア人!？」

プリキュア人って確か惑星プリズムに住んでいた友好的存在の宇宙人、私が戦っていたラストはその生き残りの一人である。

アマノガミ「んじやなぜ私が人間達と話が出来るのか教えてやろう」

星奈「・・・・・・・・」

アマノガミ「私達は古来、まだ人間達の祖先が小さな鼠だったころ私達恐竜達の天下だった・・・だがある時一つの巨大隕石で運命が迫った。生き残った私達とはある安全な場所で生き抜くことが出来、死んでいった仲間達は冬季など病原菌など死に絶えた。」

星奈「とある安全な場所って」

アマノガミ「とある漫画で言うタイムトンネルって奴だね」

星奈「・・・・・・・・」

アマノガミ「まあ、絶滅を免れた我々はまた優雅に暮らせると思ってたが恐竜に代わり人間が支配する世界になってたことに驚いた。私達は不安になってたが、空からやって来た彼女達が人間と我々に架け橋をかけてくれた。」

星奈「それが・・・プリキュア人？」

アマノガミ「その通り、彼女達の力の源であるキュアエナジーを我々に注ぎ込み、この星と惑星プリズムの通信係として役に立ち、そして人類と我々恐竜達の共存の始まりであった。」

星奈「でも・・・それは長くは続かなかったんでしょ？」

アマノガミ「確かに・・・人間達が徐々に道具を持ち始めて進化した繁栄し文化と呼ばれるものが出来た・・・だが、その人の中に王と呼ばれる存在が現れ、地球に滞在していたプリキュア人を捕らえより多くの力を手に入れるためにキュアエナジーを取り除いていった。当然、我々もあんなに親しかつたもの達もいつからか我々を食料と判断し、我々は真の絶滅に墜ちると思っていた。」

星奈「・・・・・・・・・・」

アマノガミ「だが・・・あの時、惑星プリズムからある二人の少女達が現れ、この星の悲惨さを見て一人は怒り、一人は悲しみを覚えた」

星奈「それが後のプリキュウスとなるインゲルとキュアアンジェとなるアンジェリーナ・・・」

アマノガミ「そう、彼女達がマザークイーンに訴えている所からインゲルがプリキュウスになって倒される所をビジョンで見えない

か？」

星奈「そんなことが出来るの？」

アmanoガミ「これもプリキュア人にキュアエナジーをくれた力の1つでね」

アmanoガミは全身から光を放ち、あまりの眩しさに私は目をつぶり、光が治まつて目を開けたとたん、私がいたのはとある国の宮殿の中に立っていた。

星奈「ここは・・・」

アmanoガミ「ここは惑星プリズムの王国、プリズムキャッスルの宮殿の内部だ」

カツカツカツカツ

星奈「誰か来る!」

アmanoガミ「安心しなこれは映像だから私達は見えない」

星奈「そうなの？」

現れたのは黒い髪に顔が厳つい少女と隣は髪は金髪で少しオドオドしていた少女が大きな扉の前に現れた。

星奈「あれは・・・」

アmanoガミ「あの二人がインゲルとアンジェリーナだ」

星奈「え・・・」

あれが後のプリキュウスとなるインゲル・・・そして隣の弱々しいのが後のキュアアンジェのアンジェリーナ

アマノガミ「扉が開くぞ」

扉の先には部屋の中心のイスつまり玉座に座る赤い髪を綺麗に整え、30代位の若い女性である。

星奈「あれが・・・」

アマノガミ「そう、あれが二人を産んだ母親あり、この星の女王・・・マザークイーンだ」

マザークイーン「二人とも、はるばるよくお戻りになりましたね。インゲル、アンジェリーナ」

インゲル「はい、お母様」

アンジェリーナ「お母様、只今お戻りになりました」

マザークイーン「それで、滞在している私達の仲間とあの星の人達は何か変わったことはありませんか？」

マザークイーンの質問にインゲルは強い口調で訴えかけた。

インゲル「お母様・・・私達が見たものはとても残酷なものでした・・・あの星の者達は我々の同胞であるプリキュア人をまるで物のように扱い、挙げ句、無理やり子を産ませるようなことをしたのです!!お母

様、あの者達は危険です！今こそ私達が勢力を上げてあの星の住人どもに怒りの鉄槌をつ!!」

マザークイーン「……………アンジェリーナ、あなたは どう思いますか？」

アンジェリーナ「お母様……………私は……………」

マザークイーン「いいのですよ……………力を抜いて、あなたの言いたいことを言いなさい」

アンジェリーナ「お母様……………私はあの星の人達を助けたいと思っています」

インゲル「助けたいだど!？」

マザークイーン「……………」

アンジェリーナ「あの人達があんなことするのは何かとても深いわけがあったはずです。私はあの星に行って人と人がなぜ争い、なぜ怒り、悲しむのか気になりました。お母様……………私はいえ私達はあの人達を悲しみや怒りから救おうと考えています。」

星奈「アンジェリーナ……………最初は内気な子だったのね」

アマノガミ「ああ、キュアアンジェになる前のアンジェリーナは元々気が弱くいつもオドオドしていた。でもやるときはやる娘だよ」

マザークイーン「では二人の意見に賛成するものは手をあげよ」

星奈「多数決で決めるのね」

マザークイーン「インゲルの意見に賛成するものは？」

さっ さっ さっ さっ さっ さっ

星奈「60人！多いわね」

マザークイーン「アンジェリーナの意見に賛成するものは」

さっさっさっ

星奈「31人位？」

インゲル「ふんっあいつらを救うおう片腹痛いあんなやつらなど力でねじ伏せるま……」

インゲルがマザークイーンの方を見ると

マザークイーン「……」

アンジェリーナの意見にマザークイーンは手をあげていた。

インゲル「お母様！これはどういうことですか!?!」

怒りの形相でマザークイーンに食って掛かるインゲル

マザークイーン「インゲル……私達の力は確かに強力です。ですが私達の先祖はこの力を殺めるために使うのではなく困っていることのために使うと誓ったのです」

インゲル「だったら」

マザークイーン「ですが・・・生まれつきなんの力もない人は互いに協力しあい、例え木の根をかじってでも生き続けようと努力している・・・私はアンジェリーナの意見に賛成します」ニコツ

アンジェリーナ「お母様・・・」

マザークイーン「なにか意見はあるか？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

マザークイーン「ではアンジェリーナ・・・あなたを人を守る守護者の勲章を能えましょう」

マザークイーンはプラチナ色のバッチを福の胸側につけアンジェリーナは嬉しそうだった。だがこれを見ていたインゲルは面白くなかった。

インゲル（お母様は甘すぎる・・・そのようなことじゃいずれこの星も乗っ取られるのかも知れないのだぞ）

アマノガミ「そしてインゲルは強い力を求めることを決意し、ある場所へと向かった。」

星奈「ある場所？」

アマノガミ「それは惑星プリズムの心臓部であり、大量のキュアエナジーが施された石、その名は『プリズムクリスタル』」

星奈「プリズム・・・クリスタル」

アミノガミ「その部屋に入ってきたインゲルは力を求めるため手をさしのべたが・・・結果」

インゲル「うわああああっ!!!??」

アミノガミ「プリズムクリスタルの力はインゲルにとって強すぎた力だったんだ・・・インゲルが手をさしのべた瞬間、全身から火を出し、全身大火傷になったんだ」

星奈「そのあとは・・・」

アミノガミ「そのあとは兵士のプリキュア人に見つかり、強い力を欲する理由でプリズムクリスタルを手にいれようとしたが大火傷を負ったインゲルのことはマザークイーンの耳にも入った」

マザークイーン「インゲル・・・あの場所へは行くなとあれほど忠告したのに」

インゲル「お母様・・・」

マザークイーン「インゲル・・・反省するまであなたを宇宙の彼方へと追放します」

インゲル「そんな！お母様！お母様！」

アマノガミ「そしてインゲルは惑星プリズムから程遠い宇宙の彼方へと追放されたのさ」

インゲル「ちくしょう……何故だ……何故だ!!? 神よ何故だ!? 私がなぜ力を求めることを許されないのだ!? 答えろ!!」

星奈「……………」

アマノガミ「……………」

インゲル「貴様もそのつもりなら……貴様とは縁を切つてやるっ!!!」

ゴロゴロ　ゴロゴロ　ゴロゴロ

星奈「宇宙空間なのに雷雲?なんで?」

アマノガミ「私も正直わからなかった……もしかしたら彼女を覆い尽くすほどの怒りと憎しみによって作られた怨念の塊かもしれない……………」

インゲル「来い……よこせ……奴等に復讐する力を私によこせええええええつつつつつ!!!」

ピシャアアアアン!!!

ドーーーーーン
!!!!!!!

星奈「今のは……まさか!？」

アマノガミ「そう……これが悪魔の誕生……インゲルから絶対的の悪魔……プリキュウスの誕生だ」

私はインゲルが悪魔に魂を売りプリキュウスとなった姿はまるで恐怖の大王そのものであった。

アマノガミ「そして奴は故郷の星に戻り、プリキュウスは街という街を破壊つくし最終的には自分の母親をも殺害した」

マザークイーン「インゲルなの?……その姿は一体?」

プリキュウス「お母様……私は力を手に入れたのですよ……誰にも負けない……絶大的な力を……」

マザークイーン「インゲル……」

プリキュウス「だからお母様……新たなる門出のために……死んでくださいっ!!!」

ブシュッ!

マザークイーン「きゃあああああ!!!」

星奈「!!」

アマノガミ「そして奴は闘いを忘れたプリキュア人達を皆殺しにし、最後はプリズムの心臓部であるプリズムクリスタルを……」

アンジェリーナ「え．．．．．インゲルお姉様が」

マザークイーン「ええ．．．インゲルが．．．あの娘がもつとも危険な力に目覚めて．．．しまった．．．わ．．．あの娘の．．．目的は．．．恐らく．．．プリズム．．．クリスタルを．．．．．手にいれる．．．ゴホッ！」

アンジェリーナ「お母様！」

マザークイーン「アンジェリーナ．．．．．あなたはあの星に行きなさい．．．インゲルがクリスタルを手にいれる．．．．．前に．．．」

アンジェリーナ「そんな．．．．．嫌です！私はお母様とともに一緒に死にます！」

マザークイーン「アンジェリーナ．．．．．」

その時、マザークイーンはアンジェリーナの手を優しく握るとマザークイーンの手から輝き、それをアンジェリーナの体に移った。

アンジェリーナ「お母様．．．何を．．．」

マザークイーン「私の残りのキュアエナジーを．．．あなたに．．．受け継がせたの．．．アンジェリーナ．．．早く．．．行つて．．．」

アンジェリーナ「そんな．．．いや！．．．お母様死なないでお母様！おかあさまあああ!!!」

アマノガミ「こうしてアンジェリーナは兵士とともに地球へ逃げる

ことに成功したってことさ」

星奈「でも・・・安心は出来なかったんでしょ？」

アマノガミ「ああ、プリキュウスはプリズムクリスタルを持ち地球に降り立った時、まず手始めに人間に虐げられたプリキュア人達をプリズムクリスタルの力で強い力を与えた・・・これが最初の悪のプリキュア、ジエネラルプリキュアの誕生だった」

私が見た光景はプリキュウスが地球に降り立ち、24人のプリキュア人の少女達、皆人間に迫害された者達の集まりであり、得に顔を隠している少女、その少女がプリキュウスに力を貰って変身した時、その顔に見覚えがあった。

星奈「あれは・・・キュアキャラクター」

アマノガミ「ああ、あいつは地球に降り立ち人間達と仲良く暮らしたのは良かったがだんだん人間は歪んでしまいある一人の男が後の硫酸だとは知らずにそれをふざけたつもりでキャラクターの顔にかけた・・・顔が醜い顔になりどこかひっそりと山の中に入って過ごしたんだ」

星奈「キャラクター・・・」

アマノガミ「そしてプリキュウスはジエネラルプリキュア達とともに人間達を殺すという残酷な日常を過ごすようになった・・・そしてそれを一部始終を見ていたアンジェリーナは神に祈りを捧げた」

アンジェリーナ「お願いです・・・神様・・・どうかこの星をお救いください・・・」

アマノガミ「そして、願いは届いたのか？3つの時空の穴が出現し、やって来たのは伝説の勇者、赤の勇者イサミツ、黄色の勇者シシオウ、青の勇者セイクウが現れた」

星奈「伝説の勇者・・・3人とも男なのね」

アマノガミ「そう、そして勇者達はこれまで生き残ったプリキュア人達を集めアンジェリーナにキュアエナジーを少しずつ与えた」

星奈「あれは・・・アンジェリーナがだんだん輝いてく」

アンジェリーナ「この力は・・・それにみなさんからもらった力からお姉様を止めると聞こえる」

イサミツ「アンジェリーナ・・・今こそお前も戦うのだ！皆のために・・・この世界の未来のために」

アンジェリーナ「わかったわ・・・皆のためにこの星の未来のために・・・私はお姉様を討つ!!」

アマノガミ「そして、アンジェリーナは皆のために最初の正義のプリキュア・・・キュアアンジェに変身した。」

星奈「これがキュアアンジェの誕生の瞬間・・・」

アマノガミ「そしてキュアアンジェと勇者達はプリキュウスとジェネラルプリキュアに対抗するため異世界から15人の戦士達を呼んだんだ」

星奈「15人の戦士？・・・一体どんなの」

アマノガミ「聞いて驚け・・・赤の勇者イサミツが呼び出した5人の戦士の二人は海賊王『ゴールドロジャー』」

星奈「ロジャーってあの海賊王の・・・」

アマノガミ「そう、そしてその海賊王と対等に戦ったのが白ひげ、エドワード ニューゲート」

星奈「ロジャーに白ひげも・・・」

アマノガミ「そう・・・そして黄色の勇者には4代目火影と呼ばれた『波風ミナト』そして『一龍』と呼ばれるスゲー強いじいさんもいたなそれに『猿』がいたな。そいつも強かった」

星奈「猿?・・・」

アマノガミ「青の勇者には『訃堂』とか言う侍がいたな・・・それにガープとかいう荒くれ者がいたなあと『アデイン』とかいうも・・・あとはこんぐらいしか覚えてないな」

凄い・・・凄いとしか言いようがない・・・異世界都市アルカでもその名を轟かせている者たちだ。

アマノガミ「キュアアンジェと勇者達は戦士達を引き連れいざプリキュウスのいるところへ迫った。攻防は激しさを増していった。その威力は地球を破壊するほどの戦争だった」

星奈「地球を破壊するほどの戦争・・・」

アマノガミ「そしてジェネラルプリキュアは倒され、キュアアンジェとプリキュウスの一騎討ちの戦いが始まった。」

プリキュウス「アンジェリーナお前・・・なぜ私の邪魔をする」

キュアアンジェ「お姉様・・・あなたは私たちの故郷を滅ぼし、私達を育ててくださったお母様の無念そしてこの星を守るため・・・今貴方を止めるっ!!」

プリキュウス「ほぎけえええええ
!!!!!!」

キュアアンジェ「はああああああつ!!!!」

ガキイーーーーーッ!!

プリキュウス「ぐはっ!!」

キュアアンジェ「お母様・・・今お姉様をここで止めます!」

プリキュウス「やめろおおおおお
!!!!!!」

アマノガミ「そして、キュアアンジェはプリキュウスを打ち倒し・・・地球に平和を取り戻した・・・に見えたが」

星奈「見えたが・・・」

アマノガミ「プリキュウスは自らの肉体を失い魂だけとなったプリキュウスは運よく逃れて冥王星に移り住み長い眠りに入った」

星奈「え・・・じゃあ私が見たあのプリキュウスは・・・」

アマノガミ「どうやら、冥王星から長い眠りに目覚め地球に遙々戻ってきたんだ・・・しつこい奴だよ」

星奈「そういうことが・・・どうりで」

アマノガミ「それに・・・ジェネラルプリキュアも準備していたからね・・・プリキュウスの体から出てきた二つの光と闇の球、光の球はアンジェリーナが持ち、未来のためにプリキュアと呼ばれる戦士を生み出していった・・・そして闇の球はジェネラルプリキュア達が回収し、後の悪の組織を作り上げることとなったってことさ」

ドックゾーンやバッドエンド王国を生み出したのがあのジェネラルプリキュアだったなんて

アマノガミ「それに・・・ジェネラルプリキュアは『プリキュウスの娘』がいたんだ」

星奈「プリキュウスの娘？」

アマノガミ「ああ、かつて科学を操るプリキュア、キュアブレインはプリキュウスの提案で自分の遺伝子を受け継いだプリキュアを産み出すことに成功した。プリキュウスを倒してから・・・およそ50年がたち、そいつは成長し、妖精の国を攻撃して来たんだ。」

星奈「プリキュウスの娘ってそんなに強いのか？」

アマノガミ「その当時は奴は『光の園』で大暴れしてね・・・誰も奴を止めることは出来なかったよ」

星奈「光の園って確か・・・キュアブラックとキュアホワイトのパイ

トナーの妖精達の故郷なのよね?」

アマノガミ「そ：：そしてプリキュウスの娘はその当時のプリキュア達と激しい攻防戦に出て結果、一人のプリキュアと一緒に自滅ということで終わった」

星奈「そしてプリキュウスの娘はどうなったの?」

アマノガミ「プリキュウスの娘はプリキュアの一人と一緒に自滅して死んだと思っていたがその二つのエネルギーが1つとなり、一人の小さな赤ン坊に生まれ変わった」

星奈「赤ン坊?」

アマノガミ「その赤ン坊はある一人の男に委ねられ、そしてその赤ン坊は成長し正義のプリキュアとして活躍しているらしい、そのせいでジェネラルプリキュアにとって仕事がやりやすくなり、ありとあらゆる街にプリキュアが誕生してしまった」

星奈「ねえ、その赤ン坊だったプリキュアって」

アマノガミ「その赤ン坊だったプリキュアの名は：：：：」

星奈「……………嘘！」

アマノガミ「嘘じゃない・・・事実だ」

星奈「これが本当なら大変じゃない!? キュアアンジエが苦勞して倒したプリキュウスが娘を残し、その娘のせいでたくさんのプリキュアが誕生し、裏で着々と異世界を侵略する準備をしている・・・一体どうすれば・・・いいの?」

アマノガミ「私がどう思うか聞きたいかい?」

星奈「ええ」

アマノガミ「ぶっちゃけていうが私はキュアアンジエのように聖人君子じゃないし、プリキュウスのようなネクラじゃない。んまどうでもいいってことさ」

星奈「はあ? じゃあ私達はどうなるの!? この先プリキュウスが復活し、娘とともに全ての異世界を征服され人類は本当の絶望が待っている!」

私の言葉を聞いた首長竜アマノガミの返答は・・・

アマノガミ「そりや、お前さん達の好きなようにすればいい……………」

星奈「……………」

アマノガミ「あ…………でもお前はあることを勘違いしている……………」

星奈「勘違い？…………それどういう……………」

星奈「はっ！」

気がつくとは私は目覚めた。もしかして夢を見ていたの？あれは夢？夢にしてはリアルだった。

星奈「それにしても・・・」

私が目覚めた場所はどうかやらかの部屋らしい・・・それに部屋を見たところ女の子の部屋らしい

ガチャ

？「あ！黒井さん起きたんだね」

ドアから顔を出したのは私にとって会いたくない奴の1人だった。

星奈「星空・・・みゆき・・・」

―深海―

アマノガミ「ふふふ」

25話 星奈、みゆきの家にお泊まりする

みゆき「あ!?!黒井さん起きたんだね!良かったー」

星奈「星空・・・みゆき・・・?」

今、私の目の前にいるのは私にとって倒すべき敵で今は会いたくない奴、キュアハッピーこと星空みゆきの部屋にいるのだ。

星奈「あんた、なんつツツ!」

みゆき「黒井さん!大丈夫?今は安静にしとかないと」

ラストの戦いのダメージがまだ残っておりそのせいで傷が痛みだした。

ー10分後ー

みゆき「あの時、私が友達と別れて家に帰る途中黒井さんが浜辺で打ち上げていたときは驚いたよ」

浜辺・・・あの時、アマノガミと頭の中で話をしている時に私の体は浜辺に打ち上げられてコイツの家で看病してもらっているのが正直驚いている。

みゆき「ねえ黒井さん、黒井さんはなんで倒れていたの?」

星奈「・・・・・・・・」

どうする？このまま話を続けると加音町でプリキュアもどきと戦っていたことは話せない。もし話したら私がコイツに正体をバラすのと同じだ。

星奈「別に・・・」

みゆき「別について黒井さんこんな寒い時期に冷たい海に打ち上げられたことって大変なんだよ！何があったの？」

星奈「別にいいでしょ!!」

みゆき「よくないよ！」

星奈「なんで私にそこまで突っかかるの!？」

みゆき「だって・・・・・・友達だもん」

星奈「!？」

育代「みゆきーご飯よー！」

みゆき「はい！黒井さんも行こう♪」

星奈「はあ？なんで？」

みゆき「ちちゃんとお母さんに黒井さんの分も作ってるはずだよ」

星空みゆきは私の背中を押して2階から降りていった。

私は星空みゆきに連れられ、下の階に降りた時、星空みゆきの母親がいつのまにか4人分、つまり私の分も作ってくれたのだった。

育代「黒井星奈ちゃん・・・だったかしら？みゆきに頼んで貴方の分も作ってあげたから」

星奈「は・・・はあ」

博司「母さんが腕によりをかけて作ってくれたからね♪」

星奈「はあ・・・」

星空みゆきの家族は・・・みんな笑顔だ・・・でも私にとって眩しい・・・眩しすぎるのだ・・・

「「いただきまーす!!」」

星奈「・・・いただきます」

カチャカチャ カチャカチャ

パクツ

博司「うま〜い♪やっぱり母さんの料理は世界一だな〜」

みゆき「おーいしい♪お母さんのご飯とっ〜てもおいしい♪」

育代「もう、二人とも〜」

星奈「……………」

星空みゆきとその家族の食事はとても賑やかで楽しそうな雰囲気だった。私にとってそれはつらい光景でもあった。

みゆき「どうしたの？黒井さん美味しくなかった？」

星奈「いや……そういう訳じゃ……」

美味しいと感じても出来ないのだ……笑顔という感情が……

育代「星奈ちゃん……あなたの家族はどうしてるの？」

星奈「家族……………」

私の家族は……

『お姉ちゃん!!助けて!痛い!痛いよー!!』

『星奈!逃げてー!!』

『星奈——!!』

『星奈ちゃん!!』

『星奈——!!』

星奈「……いません」

みゆき「えっ?」

星奈「私の家族は……ある事故で私以外家族は亡くなっているんです」

みゆき「うそ……」

博司「そんなことが……あつたなんて……」

育代「星奈ちゃん……ごめんなさい!私……星奈ちゃんの過去も知らずについ調子に乗って……」

星奈「いえ……育代さんは悪くありません……私がつい過去を話したから……」

あの楽しい空気が・・・一時的に悲しい空気に変えてしまった。

みゆき「星奈ちゃん♪」

星奈「ぶっ！」

星空みゆきが私のことを「星奈ちゃん」と呼ばれて思わず吹いた。

星奈「な・・・何・・・？」

みゆき「今日は・・・ここに泊まっていいよ」

星奈「え・・・」

私がコイツの家にお泊まり・・・・・・・・それは断然拒否する。

星奈「いや、いいわ」

みゆき「そういわないで泊まろうよ！お母さんはいいでしょ？」

育代「ええ、いいわよ♪」

ズルツ!

星空みゆきの母親って微妙なところに抜けてる気がする。

みゆき「じゃあ、私星奈ちゃんのパジャマ用意するね」

そう言っつて星空みゆきは寝間着を取りに行くため二階に向かっていった。

バシヤバシヤバシヤバシヤバシヤ

今、この部屋にいるのは私と星空みゆきの母、星空育代父親の星空博司は先に風呂に入っている。

星奈「あの・・・」

育代「何?星奈ちゃん」

星奈「みゆき・・・さんっていい人ですね・・・」

育代「ええ、知ってる?あの子が笑顔が出来る理由」

星奈「え?」

育代「昔のあの子は人見知りによく家の中でおとぎ話の絵本をよく読んでいたの。ある時パパの仕事の関係でおばあちゃんが家にお世話になってる頃にあの子の話だと一人の女の子と友だちになったこととでみんなと仲良く笑顔を出すことが出来たの」

星奈「その女の子って・・・」

育代「みゆきの話だとその子は “スマイルちゃん” って子だっただ
ど名前はみゆきが勝手につけたらしくてその子についてはあまりわ
からないの」

星奈「スマイル……………」

星奈『そんな…………出来ない……………私……………笑顔が……………
出来ない……………』

ハッピー? 『あなたの笑顔ゲット♪私はハッピー♪あなたはアン
ハッピー♪きやははははははははははは』

星奈「そんなのは・・・只のまやかしよ・・・」ボソツ

育代「星奈ちゃん？」

星奈「育代さん・・・」

育代「〃育代さん〃だなんていいのよ普通におばさんって呼んでも・・・」

星奈「いえ・・・育代さんっていうほうが礼儀正しいと思って」

私は心の中で何かを迷っていたが私は意を決意して育代さんの方を向いた。

星奈「例えばの話をしていますか？」

育代「例えばの話？どんなのかしら？」

星奈「あなたの娘は学校では友達ちと仲良く生活し勉強と遊びをやりくりしながら過ごす娘です」

育代「うんうん」

星奈「もしも、私達の知らない間に何かを秘密にしているのかもしれない・・・」

育代「何かあって？」

星奈「例えば、正義のヒーローとか」

育代「……………」

星奈「その秘密は私達さえも知らない悪の軍団が存在し、それをやっつけようとあなたの娘とその友だちが力を合わせて戦っているのかもしれない……………」

育代「……………」

星奈「その正義の味方はあちこちの町で滞在し、別々の街で悪の軍団と対峙している」

育代「……………」

星奈「けどもし…………その力は本当は悪の軍団の物であり彼女達が戦っている敵は正義の味方を強くするためのエサに過ぎなかった」

育代「……………」

星奈「正義の味方だった者達の力は本当の悪の親玉を復活させるための人形に過ぎなかった。」

育代「……………」

星奈「そしてそれが後の世界の悪魔になることはあなたの娘とその友だちは知らなかった……………」

育代「ねえ、星奈ちゃん……………」

星奈「はい？」

育代「あなたは・・・今のこの世界をどう思う？」

星奈「・・・・・・・・・・・・・・・・正直言つて・・・・・・・・残酷です・・・・・・・・」

みゆき「星奈ちゃん♪」
ガシッ

星奈「ちよっ！何？」

みゆき「お父さんが上がったから今度は私と星奈ちゃんが入りに行こうよ♪」

コイツと二人きりで・・・冗談じゃない・・・コイツと風呂に入るなんて絶対にイヤ!!

星奈「悪いけど私は一人で入るからお先にど「そんなこと言わずに入ろうよ♪」ちよつと！」

みゆき「お母さーん私達先に入るけどいいよね？」

育代「ええ、いいわよ♪」

ガーーーーー！！

みゆき「それじゃ行って来まーす♪」

星奈「不幸よーーーーー!!!?」

育代「残酷・・・・・・・・か・・・・・・・・確かに・・・・・・・・そうかもしれ
ないわ」

育代の目から一粒の涙が出たことは星奈もみゆきも知らなかった。

ーみゆきSIDEー

私は星奈ちゃんと一緒に風呂に入り、私と星奈ちゃんは一緒に肩ま
でつかり交代で背中の中の流し合いをした。

ゴシゴシゴシゴシ

星奈「・・・・・・・・」

みゆき「星奈ちゃんの背中って綺麗だね」

星奈「あっそ・・・・・・・・」

みゆき（あれ？）

私が星奈ちゃんの背中を磨ってる時に真ん中の部分に小さな刺青のようなのがあった。

みゆき（星奈ちゃんの背中の中についてるのなんだろう？）

私が見たのはハートのマークに真ん中に目玉が付いていて両方には蝙蝠と黒い羽を纏い隣に数字が書かれていた。

みゆき「1・・・1・・・1」

星奈「ちよつと」

みゆき「な・・・何!？」

星奈「なんか言った？」

私の声が聞いたのか、星奈ちゃんは私を睨みながら質問した。

みゆき「何でもない！何でもない！何でもない！」

星奈「・・・じゃあ今度は私の番ね」

みゆき（ほっ）

―星奈SIDE―

みゆき「星奈ちゃんおやすみなさい♪」

星奈「はいおやすみ・・・」

星空みゆきが明かりを消して自分の布団に入って眠った。今回、星空みゆきの家での1日は明日で終わる、年のために仲間との連絡は繋がり、迎えもやって来るらしいなんにせよ助かった。

みゆき「ねえ・・・星奈ちゃん・・・起きてる?」

ビクッ!

起きてたの?

星奈「ええ、まだ起きてるわ・・・」

一体、何よ

みゆき「星奈ちゃんってさ好きな絵本とかある?」

星奈「え?」

みゆき「好きな絵本・・・私の好きな絵本はシンデレラ・・・理由はシンデレラは意地悪なお姉さんにいじめられてもめげずに生きていて、大好きな王子様に出会ってハッピーになる話私大好きなんだ」

星奈「ふーん・・・」

みゆき「星奈ちゃんの好きな絵本は何？」

星奈「私の好きな絵本・・・」

『ほーら星奈お父さんが今から読んであげるね大好きな絵本を・・・』

星奈「・・・星の王子様」

みゆき「星の王子様・・・それが星奈ちゃんの好きな絵本なんだね」

星奈「なによ・・・悪い？」

みゆき「全然悪くないよ・・・それもウルトラハッピーなんだね」

星奈「星空みゆき」

みゆき「へ？」

星奈「あなたは今の生活は楽しい？」

みゆき「楽しいよ」

私の質問に星空みゆきは即答した。

みゆき「だって私にはお友だちがいるあかねちゃん、やよいちゃん、なおちゃん、れいかちゃん、それにクラスみんな・・・運動会のはりレーで負けてお互い抱き合って慰めたり、文化祭の時はクラスのみんなでおとぎ話のキャラクターの仮装をしてコンサートをしたりウルトラハッピーだよ♪」

星奈「・・・・・・・・」

みゆき「だから星奈ちゃんも私の友「星空みゆき」え？」

星奈「あなたは・・・何もわかってないわ」

みゆき「わかってないって？」

星奈「あなたがそのウルトラハッピーの日常を過ごせるのは……貴女が力を持つてることよ」

みゆき「え……」

星奈「いい、力を持った人間にはそれ相応の代償を支払うことになる……何かを得るためにあなたは何かを捨てているのよ」

みゆき「何かを捨ててるって何を？」

星奈「答えは自分の胸に聞きなさい・・・」

それだけ残して私は寝た・・・

みゆき「自分の・・・胸に・・・」

私はあの時星奈ちゃんのあの言葉が引つ掛かった。その時私が次に星奈ちゃんと会うのはピエーロの決戦前だとはこの時・・・私は信じられなかった。

特別編 正月 謝礼と重大発表

みゆき「みなさん！新年・・・」

「」「明けましておめでとぅございます」「」「
「クルー！」

私達は2018年を迎え、私、あかねちゃん、やよいちゃん、なおちゃん、れいかちゃんそして星奈ちゃんと一緒に新年の挨拶をしました。

あかね「今年は成年やな〜」

やよい「うん♪今年で平成30年になるんだね」

なお「私達が活躍した時は2012年つまり平成24年だね」

れいか「あの頃の私達は中学2年生2018年は大学生ですね」

キャンディ「キャンディはメルヘンランドの女王クル」

あかね「もうなつとるやろ！」

ポップ「女王になってもおてんばがすぎるでゴザルよ」

私達はやよいちゃんのツッコミに私達は笑い合った。

やよい「ねえ今から私達の夢について語ろうよ」

みゆき「うん！私は絵本作家」

あかね「うちはお好み焼屋を継ぐこと」

やよい「私は漫画家」

なお「私は女子サッカー選手」

れいか「私は七色ヶ丘の教師になります」

私達5人は将来の夢を語り合いながら話しているとまだ肝心の星奈ちゃんの夢を語っていなかった。

みゆき「星奈ちゃんの夢は何？」

星奈「……………」

あかね「あのな星奈、黙ってちやわからへんでなんか喋りい」

やよい「そうだよ！じーっとしてもドーにもならないからね！」

なお「誰も笑わないからさ」

れいか「あなたの道をぜひ私達に聞かせてください！」

キャンデイ「キャンデイも聞きたいクルー！」

ポップ「拙者も聞きたいでゴザル」

みんなが星奈ちゃんの夢を聞こうと迫っている時、私は星奈ちゃんの肩を押した。

みゆき「星奈ちゃん、星奈ちゃんの夢を聞かせて」

星奈「……………」

チツチツチツチツチツチツチツチツチツチツチツチツチツ

みゆき「へ？」

ピーーーーー

ボガーーーーー
!!!!!!

みゆき「けほけほ、なんで爆発したの？」

突然、星奈ちゃんが爆発し私達は真っ黒焦げになってしまいました。せつかく着物来てるのにボロボロになっちゃったよ。

あかね「なんや！これ人形やで！しかも蠟人形」

やよい「え！もしかして星奈ちゃん蠟人形になったの!？」

なお「イヤ！絶対違うから」

キャンディ「クルーお兄ちゃん真っ黒クルー」

ポップ「そういうキャンディもでござろう」

ヒラヒラヒラ

パサツ

れいか「これは・・・皆さん来てください！」

みゆき「どうしたの？」

れいか「星奈さんからの手紙らしいです」

みゆき「手紙？なんて書いてあるの？」

れいか「はい・・・」

お前らと一緒に新年を迎えるのは絶対嫌ですので代わりに爆弾入りの蠟人形を置いときます。私は別の所で新年を迎えます。by
星奈

れいか「とのことです」

やよい「それだけ？」

れいか「最後のほうに（笑い）って書いてます」

あかね「笑えるかあー！！！！」

あかねちゃんはれいかちゃんから手紙を取り上げくしゃくしゃに
した。

あかね「なんやねん！あいつ人が親切に新年を迎えるつちゅーのに
蠟人形で爆破ってなんやねん！」

なお「全くだよ！筋が通ってないよ！」

あかね「よっしゃ！今から星奈に殴り込みかけるで」

みゆき「えー！？」

やよい「あかねちゃんそれはいくらなんでも・・・」

チツチツチツチツチツチツチツチツ

みゆき「へ？」

なお「この音って」

キャンディ「手紙がもう1枚落ちてたクルー！」

やよい「もう1枚？」

ポップ「ちよつと見せてござる・・・なにになに」

いい忘れたけど、その手紙は一度くしゃくしゃにすれば爆発するよ
うになってるから・・・ご用心

ポップ「と書いているでござる・・・」

手紙で書いていることが事実なら、今から・・・

みゆき「逃げよう!!!」

ボガーーーーーッッッッッッッッッッ!!

―星奈 side―

星奈「新年明けまして」

「「「おめでとうございます」」」」

希美「2018年だね」

主「平成が今年で30周年かー」

秋人「あともう少して平成は終わるか・・・」

匠「平成が終わろうとあろうと僕には関係ないけどね」

秋人「なんでお前がいるんだよ？」

匠「誘いが来たんだよ黒井さんに!!」

秋人「黒井・・・なんでこいつ連れてきたんだよ」

星奈「先輩・・・この人も来年から大いに頑張る予定日だから」

匠「うんうん」

星奈「ほぼだけど・・・」

匠「ほぼって・・・」

ポンポー「おい始めるぞ」

私はもう一回座り、一礼した。

星奈「まずは謝礼について話します・・・私達の物語を作った作者はこの2017年内まで書こうとしてましたけどそれが出来なく2018年以降からも続ける予定です。大変お礼申し訳ありません」

私達はもう一回一礼した。

星奈「そして重大発表を申し上げます。2018年以降からプリキュアを憎む者の過去編『プリキュアを憎む少女』がスタート、そしてプリキュアを憎む者の続編企画とある小説を書こうと思う企画がこちら・・・」

伝説の戦士プリキュア・・・それは人々から悪しき者から世界の平和を守るために戦う戦士・・・のはずだった。

ウルトラマン、仮面ライダー、ガンダム、スーパー戦隊それだけじゃない！ありとあらゆるヒーローがプリキュアによって滅ぼされた。

なぜプリキュアが悪になったのか・・・原因はプリキュアの王、プ

リキユウスの復活・・・

それは支えてきた者達も妖精達さえも知らなかった。プリキュウスが復活し全ての異世界を支配しようと企みプリキュウスの娘率いる伝説の戦士プリキュアはプリキュウスに従う悪の戦士になり、もう誰もプリキュアを正義の味方だと認識されなくなった・・・

だが・・・希望はあった。

かつて始まりの戦士キュアアンジェと戦った伝説の勇者の一人であり、その血を受け継ぐもの

勇光 龍魔

龍魔「全てのヒーローが・・・プリキュアに・・・」

あゆみ「あなたの力が必要なのに」

龍魔「僕はヒーローじゃない！ある意味軟弱なその辺にいるヒーローオタクと変わらないそれ以前になぜ！なんであんな化物女と戦わないといけないんだ!？」

次々と主人公を殺そうと企むプリキュア達・・・

龍魔「お前が・・・お前が死ねえええー!!」

果たしてどうなるのか・・・！

グレイトジェネレーション 伝説の勇者対プリキュアの王

そして・・・ネット版仮面ライダーシリーズそれは仮面ライダーデイケイドからウィザードまでの笑いありのギャグ劇場のことである。それを題材にし・・・題名「ノベル版アニメ&特撮ヒーロークロス劇場」

作者がいろんなアニメキャラに特撮ヒーロー達の紹介をするコーナーなど

例えば、ルファイがゴークイジャーと出会い、ジャンプ版レンジャーキーを使うことに・・・

悟空のスーパーサイヤ人、闘士ウルトラマンの超闘士一体どちらが上か？

などの話を作る面白クロスオーバー劇場

「ビルド「さあ、実験を始めようか」

星奈「いかがでしたか？」

秋人「へー」

希美「あゆみって誰なの？」

星奈「彼女はキュアエコーと呼ばれるプリキュアだけど一体どうやって主人公と接触するのははまって！続編って感じかしら」

秋人「クロスオーバー劇場ってどんな奴が出るんだ」

星奈「作者の予定だとSAOとかインフィニットストラトス忍たまとか妖怪ウオッチとかストライクウィッチーズとRWBYと特撮は作者の専門的だからウルトラマン、仮面ライダー、ありとあらゆる特撮ヒーローを出す予定よ」

主「主人公ってすこしおどおどしてるのね」

匠「僕達も出るんだよね」

星奈「出す予定よ・・・作者が」

「」「オーツ!!」「」

ポンポー「ということは期待ありだな」

星奈「あんたはどうかしら？」

ポンポー「え？なんで」

星奈「この物語は終了まであと8話どうぞ！」

26話

ジョーカー「ポンポーさん・・・あなたはこれまで何をやってたのですか？」

ポンポー「じょ・・・ジョーカー！」

星奈「あんた・・・何やってんの？」

ポンポー「俺は手に入れたんだ！幹部になれたこの時をだから失うわけにはいかねえんだよ!!」

27話

秋人「黒井！白銀と空野と後金田が捕まったんだ！」

バキツ！

ワイバーン「ぐほっ！」

オーデイウム「あんたがプリキュアの力を持ったとしても力を上手く扱えないなら対したこともないわ」

28話

ワイバーン「ぐおおおお!!」

希美「何・・・あれ」

主「あれってプリキュア・・・だった奴でしょ」

星奈「あれはプリキュアの・・・なれの果てよ」

29話

星奈「秋人先輩、希美、主、後金田先輩」

匠「後は余計だろ」

星奈「あなた達の記憶を一時消します！」

「「「ええええええ!!??」」」

30話

みゆき「星奈・・・ちゃん」

星奈「星空みゆき・・・ちよつと強くなったからっていい気になつてんじやないわよ何の格闘経験もないあんたが戦いの現実つてものを教えてあげるわ」

31話

キャラクター「オラオラ!!くらえー」

ハッピー「くっ!」

星奈「逃げて! ジェネラルプリキュアが相手だったらあんたじゃ勝ち目がない!」

ハッピー「大丈夫だよ!」

32話

星奈「あれは……」

ポンポ「プリキュアが大人に……」

キャラクター「なんだ? あんなのブレインのデータにもなかったぞ!」

UEハッピー「今の私は……ウルトラエターナルキュアハッピー!!」

完結話

あかね「星奈? 誰や」

みゆき「え?」

やよい「黒井星奈さんってどんな娘なの？」

なお「この学校に転校してきたって・・・みゆきちちゃんが転校した時から転校生なんて来てないよ」

れいか「黒井星奈さん・・・すみません記憶がありません」

みゆき「なんで・・・なんで私以外のみんなが星奈ちゃんのことを覚えてないの・・・なんで・・・」

星奈「以上が8話の物語の半分です・・・」

ポンポー「ではもう一礼」

「「「「「これからもよろしくお願いします!!」「」「」「」

ファイナルミツシヨン

26話 ジョーカーの誘いとポンポアの迷い

ポンポア side

俺は今まで星奈と一緒に暮らし、戦ってきたどれくらいだったのか・・・初めて出会ったのは俺がバットエンド王国幹部昇進のために俺はタヌキ集会と呼ばれるカルト協会を作った。だがそれはある一人の少女によって打ち砕かれた。そいつは大人しそうだが戦う時は狙った敵を逃がさない肉食動物の目をしていたのだ。

俺はあっけなくやられ、それを教訓として星奈の方に 許しを請いて逆に利用しようと企んだ・・・そう、企むはずだった。

あいつは人間の癖にプリキュアを憎む者だった。あいつの話からすると奴は未来からやって来てプリキュアの調査の任務を存続中なのだ。

奴はプリキュアを見ただけで周りをみずに襲いかかろうしやがった。あいつのプリキュアに対する憎しみは俺たちバットエンド王国以上である。もしコイツ一人でバットエンド王国と戦ったら絶対あいつが勝つなど俺は思った。

ポンポア「はー星奈の奴・・・あいつ海に沈んで死んだのかとひやひやしたぜ」

あのととき、加音町で巨大円盤が出現し星奈は乗り込んでいった。気絶している隊員達はなんとか無事救出し、一旦俺は元の町に戻り星奈の無事を祈ったが後の報告によると黒井星奈は敵と一緒に海のそこへ落ち供に爆死したと聞き出されて俺はショックを受けた。俺は泣きそうだったが、2時間後星奈から電話があり夜には迎えに来いと命

令され、俺は星奈が無事だったことを感涙し、俺は一刻も早く星奈のいる家にたどり着き、加音町の戦いはとりあえず終了した。

ポンポー「……………」

ポンポー「……………どうしよう」

あいつと暮らして一体どのくらいだったのだろうか、俺は星奈を利用して幹部昇進しようと計画していたが上手くいかず結局はあいつの手助けばっかだった。

「はつきりと言うけど、あんたに悪役は向いてないわ」

あいつの言う通り……俺は悪役に向いてないかもしれない……

ポンポー「たぬ美さん……………」

あの時、苦手な卯相手に立ち向かった俺のことを惚れ込み、あの時はデートを楽しむことが出来た。

ポンポー「俺……………もう……………やめるか」

うん！もうやめよう

ポンポー「もうやめよう……あんなところで幹部昇進とかいう夢は諦めよう……それにバットエンド王国にジョーカーとかいう奴がいるようだけど、結局辞める俺には関係ねーかあはははははははは……」

パッ！

突然辺りが真っ暗になり困惑する俺……突然スポットライトが俺

の方に当たった。

ポンポー「な・・・なんだ？一体どこにスポットライトか？」

？「貴方と会うのはこれで二度目ですね・・・ポンポーさん」

ゾクツ！

なんだこの感じたこともない寒気と悪寒が入り乱れる気配は・・・俺は恐る恐る後ろを後ろに振り向くとそこに立っていたのは

ポンポー「まさか・・・あんたが・・・ジョーカー？」

ジョーカー「その通り・・・私はバットエンド王国皇帝ピーロ様の側近ジョーカーです」

ポンポー「ひー！！！」

ピーロ様の側近が俺の前に現れたことに俺は腰を抜かし身動きが取れなかった。

ポンポー「一体、何しに来たんだ？・・・まさか俺を殺しに来たとか」

ジョーカー「いいえ、私がここに来たのはあなた方幹部候補の結果を見に来たのです」

やべえ、ジョーカーの目は真っ赤に光っていて怖くて身動きが取れねえ

ジョーカー「今の幹部はどうも駄目な人ばかりでした。ウルフルンさんもアカオーニさんもマジヨリーナさんもプリキュア達に惨敗さ

れ路頭に迷うようになりましてそこで幹部になれずに幹部候補なつたみなさんにチャンスをあげようとここに参りましたが、結果他の幹部候補のワルジージさんもヤマバーバさん、サルツキーさんヒキゲーロさん、ビッグマンさんドラゴゴさんはあえなく結果を出せずあの頃に戻ってもらいました。」

ポンポー「あ……あの頃……」

ジョーカーの言う「あの頃」それは元の絵本に戻されることだ。つまりあのやられ役に戻されることだ。俺達バットエンド王国の住人にとっては絶対に嫌だ。

ジョーカー「ポンポーさん幹部候補は貴方だけになつたのであなたの結果を見せてください。貴方だけが頼りですよ……だけでもし……ギロツ

ポンポー「ひいひい！」

ドン！ パサツ

俺はジョーカーの圧力に後退りしてしまい、後ろに机の角に当りその衝撃で一冊の本が落とされた。その本は

ジョーカー「なんです？これは」

ポンポー「はあ！それはっ！」

星奈がああ場所で手に入れた本プリキュアの書がジョーカーの手に取られた。

ジョーカー「ポンポーさん……これは」

ポンポー「それは……あ……プリキュアに関する情報が多数書かれて……大昔のプリキュアが悪者だったことに……はっ！」
やばい！つい口が……

ジョーカー「プリキュアに関する……ほう」

ジョーカーは一気にプリキュアの書を速読していった。

パタン！

ポンポー「それじゃ俺はここで……」

俺は恐る恐るコイツから逃げようとするときジョーカーは

ジョーカー「ポンポーさん!!」

ポンポー「は……はい！」

ジョーカー「あなたというのは……なあくんでいい子なん
でしょ♪」

ポンポー「へ？」

ジョーカー「まさかプリキュアが大昔にありいうことをしていたと
はむふふ」

ポンポー「……」

ジョーカー「ポンポーさん♪」

ポンポー「へ？は……はい」

ジョーカー「おめでとうございます♪あなたは今から正式にバットエンド王国幹部に任命します」

へ？俺・・・幹部に・・・この俺が幹部・・・

ジョーカー「どうぞ♪黒っ鼻と絵の具と本です」

ポンポー「これが・・・俺の手元に」

ジョーカー「あなたの活躍、期待してますよ♪では」

ジョーカーはプリキュアの書を持ったままどこかに消えた。

ポンポー「この俺が・・・」ドクンドクンドクン

星奈SIDE

星奈「ただいま」

やっと帰路に辿り着き念願の家に帰ってきた。だが、

星奈「ポンポー？どこにいったの？ポンポー」

私はあちこち探したがあいつはどこにもいなかった。

星奈「あれ……」

プリキュアの書が………ない

女子高生A「ちつつまんねえ………」

女子高生C「なんかピリピリしてるねどうしたの？」

女子高生B「彼氏が勉強一筋になってリーダーなんか見向きもしなくなつてイライラしてるんだよ」

女子高生A「くそおおお!!!」

女子高生B「ひっ!」

女子高生C「うわっ!」

女子高生A「もとはといえばあの正義の味方ずらしたあの糞女が原因だ、お陰で彼氏にはあたしを見向きもしなくなつたし……あいつを殺してええ!」

ブレイン「その願い・・・叶えて差し上げますよ」

女子高生A「あ？誰だてめえ？」

ブレイン「なに・・・通りすがりの正義の味方ですよ♪」

みゆき s i d e

私達はふしぎ図書館で一緒に遊んで一日を過ごした。私達は帰り道

キャンデイ「クル・・・」

みゆき「キャンデイどうしたの？なんか今日元気ないよ？」

キャンディ「みゆき、キャンディは大丈夫クル・・・」

キャンディはこの頃からなんだか調子が悪いみたいだった。なん
でだろ？

やよい「大丈夫？ 疲れた時には甘い物を食べると落ち着くよ」

キャンディ「やよい・・・ありがとうクル」

ポンポー「おい・・・プリキュア・・・」

みゆき「え？」

突然誰かが私達の名を呼ぶ者がいた。私達は周りを見渡した。

なお「あ！あそこだ！」

なおちゃんが上空に指差した方向を見ると、いつもはウルフルンか
アカオーニかマジヨリーナが来るはずだったが・・・今回はタヌキサ
んの幹部が現れた。

れいか「あなた・・・」

ポンポー「俺の名はポンポー、今回からバットエンド王国幹部に
なった者だ！俺をあのカのウルフルンやアホのアカオーニやボケ
のマジヨリーナと一緒にすんなよ！」

あかね「へ！なにが来ようが振り返ちにするだけやで」

なお「あかねのいうとおり、みんなの日常を壊す奴は私達が許さな
い！」

ポンポー「けつ世界よ最悪の結末バッドエンドに染まれ！白紙の未来を黒く塗りつぶすのだ！」

あんなに綺麗だった空がバッドエンド空間になり周りの人達はバッドエンド状態になった。

ポンポー「あれがいいな・・・」

黒っ鼻が近くにあった狸の置物に憑依し、アカンベーに変わった幹部のタヌキさんはその中に入り戦闘体勢に入った。

アカンベー「アカーーンベエエー！！」

みゆき「みんな！行くよ」

「ニコプリキュア！スマイルチャージ！」

ハッピー「キラキラ輝く未来の光キュアハッピー！」

サニー「太陽サンサン熱血パワーキュアサニー！」

ピース「ぴかぴかピカリンじゃんけんぼんキュアピース」

マーチ「勇気りんりん直球勝負キュアマーチ！」

ビューティー「しんしんと降り積もる清き心キュアビューティー」

『五つの光が導く未来！輝け！スマイルプリキュア！』

ポンポー「おら！行くぜ！！」

「「「はあああ!!」「」」」

私達が戦いを始めようとしたとき私達はおもいもよらない人物が現れたのです。

ひゅうううううー

ドーーーーー

ハッピー「きゃあ!」

ピース「何?」

マーチ「あいつは・・・」

突然、上空から一気に落ちてきたのは私達プリキュアを倒そうと企む黒い仮面の少女・・・

ハッピー「オーデイウム・・・」

オーデイウムSIDE

ハッピー「オーデイウム・・・」

サニー「なんや・・・またうちの邪魔しに来たんか?」

オーデイウム「・・・」

サニー「なんか答えんかい!!」

ハッピー「サニー!落ち着いて」

サニー「けどな・・・」

オーデイウム「・・・」パチンツ

バツバツバツバツ

ハッピー「え？」

ピース「な・・・何？」

ビューティー「この人達は」

サニー「何やねん！お前らそこをどかんかい！！」

マーチ「お前達はオーデイウムの仲間なの？」

オーデイウム「あなた達はそいつらの足止めをしてて」

『了解！』

隊員達は一斉にスマイルプリキュア達の足止めをし私はその間ワールドフォンであるアイテムを出した。

《チェンジ！ドームボール》

パシツ！ ビュン！

ブーーーーー

ハッピー「オーデイウムとタヌキサンの周りだけドームみたいなの
に閉じこもっちゃった？」

オーデイウム「……………何やってんの？あんた」

ポンポー「せ……星奈……」

今、私の目の前にいるのはスマイルプリキュアの敵アカンベ……
そして今その中で操っているのは……

オーデイウム「いつからあんたはバッドエンド王国に戻ったの？」

ポンポー「……………」

オーデイウム「プリキュアの書はどこにやったの？」

ポンポー「……………」

ド……………ン!!!

ポンポー「!!」

オーデイウム「いいこと……二度も同じ質問させないで」

ポンポー「プリキュアの書……あれはジョーカーに渡してやった
よ」

オーデイウム「え？」

ポンポー「あんな貴重な物・・・あのジョーカーがみすみすほうつておく訳にはいかねーからな」

オーデイウム「あんた・・・」

ポンポー「それにいつまでも上下関係が逆転しないと思ってたら大間違いだぜ」

オーデイウム「上下関係？何言ってるの？」

ポンポー「この際ハッキリと言つといてやるよ、星奈お前じゃああいつらを倒すのは無理だ」

オーデイウム「は？」

ポンポー「おれはこの街のプリキュアと加音町のプリキュアを見て思ったんだ。あいつらは例え一人になっても仲間の思い出を糧にしウルフルン達がどんなに挑もうと負けることは確定済みだったんだ。あいつらの強さにはとてつもない絆って奴に繋がっているんだってわかった」

オーデイウム「・・・」

ポンポー「例えお前がプリキュアに挑もうとしてもいつかは負け戦の人生に突き進むようになるのさ」

オーデイウム「・・・」

ポンポー「だが安心しなお前も俺たちの仲間に入ればプリキュアなん「バシッ！」え？」

オーデイウム「つまらない・・・」

バシッ バシッ バシッ バシッバシッバシッ
ガシッ

ポンポー「おうコラ！いい気になるなよてめえ・・・優しくしてりや
つけあがりやがって!!! だったら俺もマジにならざるをえねーなあ！」

カッ

ズザザザザザ

オーデイウム「・・・・・・・・・・」

ポンポー「・・・・・・・・よく見とけ・・・・・・・・これが・・・・・・・・この度めでたく
幹部になりあがった新ポンポー様だ！崇めろ!!」

あいつ・・・・・・・・前のと比べて強いオーラを感じるどうやら本気になっ
たようね

オーデイウム「だから何なの？」

ポンポー「じゃあ行くぜ・・・・・・・・」ドツ！

ポンポーは一気に私の目の前にダッシュして襲いかかってきた。

ポンポー「黒っ鼻を取得しハイパーアカンベエに乗り移った俺様の
力を思い知りやがれ！」

ブオン！

ポンポー「ハイパーパンチ!!」

ゴツ!

オーデイウム「ぐはっ!」

ポンポー「ハイパーダツシユからの・・・」ガツ!

ポンポー「ハイパー叩きつけ!!」

ドゴオオオオーーーーーーん!!!

ポンポー「まだだ」ガツ!

ポンポー「ハイパースイング!」ブオン!

オーデイウム「・・・」

ポンポー「こいつは痛えぞ?ハイパーサンドバッグ!!」

ドツ!ドツ!ドツ!ドツ!ドツ!ドツ!ドツ!ドツ!ドツ!ドツ!

!ドツ!ドツ!ドツ!ドツ!

ドシヤ!

オーデイウム「・・・」

ポンポー「おい生きてるか?お前がこの程度で倒れる女じゃないっこととはわかってんだからよ!!」

スッ

オーデイウム「冗談でしょ……」

ポンポー「あ?」

オーデイウム「本気でそう思ってるの?力づくで終わらせるつもり
だったら手を抜いてる場合じゃないでしょ」

ポンポー「てめえ……俺のやってることが本気じゃねえって言い
てえのか?」

オーデイウム「そうよ……あなたの力も行動も言葉も全部偽物
よ……」

ポンポー「この野郎……」

オーデイウム「それが本当のあんただとは思わせないでよ……そ
んなの許さない……認めない」

ブチッ!

ポンポー「認めない?何様だあ!!てめえは!!俺様が求めてやまな
かったものを……軽々しく否定すんじゃない!!」カツ!

ハイパービーーーーーーム!!!!

ポンポーside

ポンポー「いや、まさか、たぬ美さんから俺に喫茶店の無料券をくれるなんて……」

たぬ美「いえ、あの時の助けられたことでもありますし、これはお礼です。」

俺はあの時、あのウサギどもを追い払い店を救ったヒーローとして賞賛された。その御礼として喫茶木の葉の無料券を二十枚もらったのだ。

たぬ美「あの……ポンポーさん……」

ポンポー「え？なんで俺の名前を……」

たぬ美「あ！あの時、常連さんが名前を覚えてくれたので……／＼」

常連さんって星奈のことか……

たぬ美「私と常連さんは結構親しい関係ですので、よく私の悩みを聞いてくれるんです」

ポンポー「へえ〜」

たぬ美「あのポンポーさん？」

ポンポー「え！なんですか？」

たぬ美「ポンポーさんはかちかち山っていう物語を知ってますか？」

ポンポー「いつ!?!ああ、よく知ってるよあはは……」

俺にとってトラウマとなった物語……なんだよな

たぬ美「狸は毎日おじいさんの畑を荒らし怒ったおじいさんは罠をはって狸を捕まえることに成功した。でも狸はおばあさんを殺し、一目散に逃げ、おじいさんは悲しみ、そこへ兎が現れ敵討ちをとることにした。薪に火をつき、次の日は辛子を背中にかけて最後は泥舟に乗せられ死んでしまう……私はあの絵本を読んだとき狸は好きでイタズラをしていたんじゃないと思うんです。」

ポンポー「へ?」

たぬ美「狸は……本当は……」

ポンポー「……」

ポンポー「お母・・・また食べ物を持ってくるからちよつとまっつてな」

お母「いつもすまないね・・・」

ポンポー「それじゃ行ってくるわ」

ー畑ー

ポンポー「さあーてどれにしようかな？」

俺はあの時病気のお母のためにいい芋がないか探しに来たところ
どうやらないと思った・・・が

ポンポー「やった♪まだあった！」

最後の一本がまだ土の中にあるのを確信し取ろうと思った矢先に・・・

シユルツ！

ポンポー「へ？」

パシッ！

ポンポー「うええええ!!？」

おじいさん「やつとつまえたぞイタズラ狸！お前を今日の晩飯の狸汁にして食うからな」

ポンポー「そ．．．そんなく!!まじかよ」

俺はおじいさんに両手と両足を縛りつけ天井にぶらさがった。

ポンポー「くそ．．．噛もうとしても届かない」

結局あきらめて目を閉じようとしたとき

ブシユッ！

おばあさん「きやあああ」

突然おばあさんの悲鳴が聞こえ何なのかと気になり覗いて見ると

兔「．．．．」ポタポタ

ゾクッ

ポンポー「まさか．．．兔？」

兔「にやつ」

右腕に大量の血液を浴びた兎は俺をみて笑い、兎はおばあさんが使ったであろう包丁を俺に向かって投げ狙ったのは俺を縛りつけた縄だった。

ポンポー「お前・・・なんで」

兎「さっさと逃げろよ・・・」

あの頃は奴に従い一目散に逃げた。それが最善だと思ったからだ。

それはただの序章に過ぎなかった。俺は兎に説明させようとやって来たが!?？兎は聞く耳もたず、デカイ薪を俺の背中に担がせ、兎は・・・

兎「仕事なんだ手伝ってくれ」

俺は兎の指示に従い、俺は薪を運んだ。だが突然、背中の薪が突然火を吹き俺は一目散に逃げた。

次の日、俺は兎に説教をしようと思いつけたが兎は俺のために薬を作ったと聞き、俺は仕返しをしようと思んなバカな考えはなくなってきた。

兎「おらよ!!」

バシャーーーーーーン

ポンポー「ぎゃあああああ!!!」

薬かと思いきや、兎は俺を待ち伏せるため激辛の薬をポンポーのしみる背中に流し込んだ。俺は痛かった。

その時、帰ってきた俺の目にはとんでもないザンゲキがあった。

そう、いつも俺の味方であり、よい理解者であったお母の血を流した遺体があった。

ポンポー「お母!!お母!!」

お母「・・・・・・・・・・・・・・・・」

もう虫の息だった。その血の足跡には兎のものだと分かり明日、俺は奴を殺そうと企てた・・・・が

兎「よお・・・狸どん、どうした？」

ポンポー「てめえ！よくも俺のお母を」

兎「そうカリカリしなさんな・・・今から魚を取ろうと船を作ったんだ。狸どんお前さんののはあれだ」

兎が指差した方向を見るとそれは黒くて頑丈な船だった。もうこの頃怪我をされてる最中で食べ物を喉に通らなくなる位だった。

俺は兎に用意した船で魚を取ろうとしたが、下に水が溢れ出て徐々に崩れ始め最後は壊れて俺は溺れてしまった。

ポンポー「助けて！あぶ！あぶぶ!!」

兎「よお、狸」

ポンポー「兎・・・ぶっ！助けてくれ」

俺は自分が情けなく兎に助けを請いたが・・・

兎「悪いなババアを殺したことはお前に着せるわだからよ死んでくれよ・・・頼むから・・・」

ポンポー「へ？」

バシッ！バシッ！バシッ！バシッ！バシッ！バシッ！

兎は俺の頭をバシバシと強く殴られ、俺は疲れはてて海に沈んだ。

ゴボゴボ

死んだ・・・俺は・・・兎に何もかも奪われた。お母、今からそっちに行くわ・・・

ジョーカー「それでいいのですか？」

ポンポー「へ？」

ジョーカー「あなたの運命を私を変えてあげましょう」

ポンポー「お前・・・誰だ？」

ジョーカー「私はバッドエンド王国皇帝ピエーロ様の側近・・・」

ジョーカーと申します。」

ドーーーーー！！！！

ポンポー「しまった!!まだ黒っ鼻のアカンベエの力を使いこなせてねえんだった!やっちゃまったかっ!!?」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

ゾツ!

ポンポー(伝わってくる・・・アイツの怒りが・・・初めて会ったときと同じか・・・いやそれ以上)

この先、あの女は本気で俺を消そうとするんじゃないや・・・やべえぞ・・・こつちも本気で倒しにかからねえと

やられる・・・

オーデイウム「今のは驚いたわ・・・死ぬかもしれないし」

怖え・・・あんな目で俺を見ていやがる・・・!

オーデイウム「私はあんたの本音が聞きたい・・・何か言いなさいよ」

本音・・・・・・・・だと

ポンポー「・・・・・・・・・・・・・・・・本音も何もねえ・・・元々俺は・・・お前を・・・利用しようとしただけだ」

俺から見ればお前は虎の威を借る狐の虎なんだよ

オーデイウム「もう・・・お別れなの・・・?」

来るか!!?

オーデイウム「・・・・・・・・・・」ザツ

ポンポー「うおおおお!! 決着をつけてやる!」

ハイパーインパクト!!

ドーーーーーん!!!

ドサツ

ポンポー「あれ? やけに軽く吹っ飛んだな。どうした?」

オーデイウム「……………」

まさか……こいつ……最初から俺とやり合うことなんか……

ポンポー「……わざとなんのために……俺に呆れた？もう説得する気も失せたのか？こんな状況で終わりかよ？こっちはハイパーアカンベエまで用意したっつーのに。そもそもなめとんのか!?目の前にいるのはかつてない強敵だぞ！それじゃ指でちよんつと突くだけで終わっちゃうぞ!?ああん!!」

オーデイウム「……………そうね……でもそんなことしないでしょ?」

ポンポー「あ?てめえ、今さら……」

オーデイウム「わかったのよ。ポンポーと話すときには力なんてあっても邪魔なだけだ……」ゴツ!

ポンポー「おい!」

こいつ・・・ハイパーアカンベエの人差し指のほうを自分で当たってくるなんて・・・

オーデイウム「あんたは・・・信頼できる」

ポンポー「え？」

信頼・・・・・・・・・・・・・・・・信頼・・・

ポンポー「なんで？」

オーデイウム「私は今まで誰も信頼する人間なんかいなかったいやむしろプリキュアと戦う頃から誰もいなかったの」

ポンポー「・・・・・・・・」

オーデイウム「私は子供の頃から・・・プリキュアに感情を奪われ・・・どんなに親しい人間にもチームを組んでいた人間からも親しくなろうともしなかった・・・例えばそれが騙された奴だったとしても・・・」

ポンポー「・・・・・・・・」

オーデイウム「たとえこの世界に来ても私の心は真つ暗な闇だった。たとえ周りからどんなに賞賛を受けても虚しいだけだった・・・・・・・・でも・・・最初に現れたポンポー・・・あんたが現れなかったら私はただの心のない人形のような奴になっていたかもしれない・・・・・・・・」

ポンポー「んだよそれ・・・気持ち悪い・・・」

俺は幹部になり、ジョーカーから黒っ鼻を貰って・・・でけえ力を
持って嬉しいと思った。

だが・・・いまいち面白くねえ・・・

こいつと会う前、幹部候補になった俺はあの三バカにはよくバカに
された・・・

ウルフルン「なんだよ？幹部になりきれなかった狸かよ？おめえな
んか船を作ってるほうがお似合いだぜ」

アカオーニ「お前幹部になれなかつのかオニということはお前は俺
より下っぱつてことオニ」

マジヨリーナ「お前みたいな成績のいい奴が幹部候補なんて笑える
だわさ！ひゃひゃひゃ」

認めたい・・・

こいつは俺と会ったとき怖がらず、煙たがらず、結局俺を受け入れた。その時は利用出来ると思った。

だがこいつと一緒に生活していると徐々に幹部に成り上がることもな
んざどうでもよくなった。

お母「あんたは自分のやりたいことをやりんしゃい」

たぬ美「狸は本当は・・・・・・・・・・」

誰かのために尽くそうとしたから・・・

そう俺は今まで気づかなかった絵本の世界で俺がやろうとしたこ
とは・・・・・・・・大切な人を守りたかったからだ・・・

ポンポー「星奈・・・・・・・・お前はすげえ奴だよ・・・・・・・・」

オーデイウム「・・・・・・・・」ドサツ

ポンポー「おい!?!どうした」

突然、星奈がゆっくりと倒れてしまった。

オーデイウム「はあ はあ はああんたの攻撃をモロに食らったから体が思うように動けない・・・・・・・・立っていることが奇跡だったわ」

ポンポー「そりやお前の自業自得だろ！」

オーデイウム「そうね・・・・・・・・ごめん」

？「黒井星奈・・・たった今お前の仲間を人質にした場所は今送った地図の廃ビルにいる・・・逃げるなよ」

希美「助けて!!」

主「誰かー!!」

匠「なんで僕がこんな目にー!!」

オーディウム「みんな!!」

そう本当の戦いはこれからなのだ・・・

27話 星奈対不良プリキュア

オーディウム「希美!主!.....あと誰?」

秋人「こいつは金田匠、一応俺ん所のクラスの奴らしい」

ワールドフォンで映し出された映像を見て左から三番目に泣きじやくつてる男子生徒を見て呆れた。

匠「おろして〜!?助けて〜!?帰らせて〜!」

オーディウム「この人が先輩と同じクラスの人ってすこしひどいわ.....」

ポンポー「おい!星奈どうすんだよ?行くのか?」

オーディウム「行くに決まってるでしょ!それになんだかジエネラルプリキュアが絡んでいる気がするし」

希美と主.....あと金田先輩を捕まえて私を誘き寄せようとするなんて.....そんなことはあっちゃいけないんだ!

オーディウム「それじゃ、ポンポーそいつから離れてバイクに変化して行くわよ!」

ポンポー「でもよ星奈.....今ハイパーアカンベエから出ようとしてるが.....どうやって出るんだ?」

そういえば、3幹部達がハイパーアカンベエから脱出してる所なんか見たことがない実際はプリキュアに浄化されて出られるんだだけ

ど・・・・・・・・プリキュアの力・・・そうか！その手があった。

オーディウム「ポンポーいいことを思い付いたわ」

ポンポー「お！なんだ」

オーディウム「今からあんたを殴る！」

ポンポー「はっ!?なんで!!」

オーディウム「私の体にはキュアエナジーと呼ばれる力があるわ・・・私はこの右手に集中してその力をハイパーアカンベエに流しこませれば・・・」

ポンポー「出られるのか？」

オーディウム「それじゃ・・・」グツ

ポンポー「ちよつと待て!!まだ心の準備が・・・」

オーディウム「うおりやああああー!!!」

バゴーーーーーん!!!

ハイパーアカンベエ「アカーンベエー!!」

ポンポー「ぎよえー!!怒ってるみたい!!」

ドーーーーん!!

シユウウウウ・・・

オーディウム「成功ね・・・」

キュアエナジーを込めたパンチで無事ポンポーを出すことに成功できた。

ポンポー「おい・・・星奈・・・もうちょっと・・・他のやり方が・・・あつたんじゃねーか？」

オーディウム「これしか他に方法はないわ！さあ行くわよ!!」

ポンポー「たくつ・・・ほい!!」ドロンツ

ポンポーはバイクに変化し私はそれにまたがってレバーを引いてエンジンを吹かせた。

オーディウム「じゃあ行くわよ!!」

ポンポー「おう！」

ブオオオオオooooooooooooon!!

ハッピー side

黄緑の仮面「サイクロン・ディフェンダー!!」

「オラオラオラオラオラオラオラオラ!!!」

ハッピー「くっ!」

私達はバッドエンド空間で戦いを始めようとしたところオーディウムが現れて変わりに仮面を被った5人に圧倒された。黄緑の仮面の見えない攻撃が私に襲いかかってくる。

赤仮面「うおりゃー!!!」

サニー「このう!!あんたもウチと同じ炎だからって手加減せんで」

サニーの方は赤い仮面の持っている燃える玉に苦戦しつつあった。あの玉は投げることに火を吹き出してくる。なんで？

黄仮面「ふん!ふん!」

ピース「ひゃっ!こっちは私と同じ雷!」

ピースの方は黄色い仮面の槍に苦戦しつつ一步も近づくことが出来ない。でもあれギターに似てるような・・・

緑仮面「ハリケーン・ストライカー!!」

「オーララララララララ!!!」

マーチ「こいつら・・・反撃のチャンスを与えてくれない!」

マーチは緑の仮面に圧倒されていた。あの黄緑の仮面と同じ見えない攻撃に隙を与えず攻撃してくる。

青仮面「ふん!ふん!ふん!はあ!」

キン!キン!キン!キン!キン!

ビューティー「ふん!はあ!」

キン!キン!キン!キン!キン!

ビューティーの方は青い仮面と剣と剣の決闘を行っていた。
ビューティー大丈夫かな?

キン!

青仮面「やはり・・・あいかわらずだね」

ビューティー「・・・・・・・・」

ビー!!ビー!!ビー!!ビー!!

黄緑「ん?」

ハッピー「え?」

なぜかどこかに電話のベルのようなのが鳴っていた。一体何だろ

う？

黄緑仮面「どうやら・・・時間ね・・・みんな！」シュツ！

赤仮面「ちつ時間切れか・・・」シュツ！

黄仮面「仕方ねえ」シュツ！

緑仮面「くそ!？」シュツ！

青仮面「ここまでか・・・」シュツ！

スタタタタタ

サニー「なんや?」

マーチ「今度は一体なにを・・・」

赤仮面「今日はここで退いたるわ、次はこうはいかへんで・・・」

サニー「な・・・なんやて!？」

黄緑仮面「私達の任務はオーディウム隊長があの狸さんを説得させるまで時間稼ぎをすること・・・」

緑仮面「それも成功できたらしいからな・・・」

黄仮面「もう俺達の仕事はここまでってことだ」

ハッピー「狸さんを説得・・・? オーディウムと狸さんって一体どういう関係なの?」

赤仮面「んなもん知るか!？」ボウツ!

赤い仮面の人が持っているボールが真つ赤に燃えだしさそれを思いつき私に投げ飛ばした。

キン!

ハッピー「ビューティー!」

ビューティー「大丈夫ですか?ハッピー」

ハッピー「うん・・・大丈夫」

サニー「お前!何するんや!!」

赤仮面「・・・・・・・・」

サニー「うちの大事な友達を傷つけさせて、ただですむと思うなや!!」

マーチ「私達の友達を傷つける奴は絶対許さない!」

赤仮面「黙れやつ!!」

5人「!？」

赤い仮面の人がとても大きな声で二人を黙らせた。

赤仮面「友達・・・友達って・・・なんで気づいてくれへんのや・・・」

ハッピー「え・・・」

黄緑仮面「私達は好きでやってる訳じゃないのよ」

マーチ「え？」

黄仮面「俺達は本当はお前らを殺したくない」

ピース「それどういうこと？」

緑仮面「だけど仕方ないんだ・・・お前らがプリキュアになつて
いる限り・・・」

ビューティー「プリキュア・・・になつてるとはどういうことですか？」

青仮面「君たちの目的はバッドエンドの皇帝ピーロを倒してメル
ヘンランドを救うのが目的なんだよね」

サニー「ああそうや！」

青仮面「たとえメルヘンランドを救ったとしても君たちはその力を
どうするつもりなんだい？」

サニー「え？」

青仮面「君たちはピーロを倒し・・・全ての皆が幸せにいつもの
日常に戻る・・・でも君たちプリキュアはその力を捨てるのかい？そ
れとも・・・」

サニー「それは・・・」

赤仮面「それに・・・本当の敵はバッドエンド王国とかいう奴やない」

ハッピー「え？」

赤仮面「バッドエンド王国以外・・・ドックゾーン、ダークフォー
ル、ナイトメア、エターナル、ラビリンス、砂漠の使徒、マイナーラ
ンド、ジコチュー、幻影帝国、デイスダーク・・・そいつらをぶっ飛
ばした所で、お前らの活躍はほんまに報われるとは限らへん・・・」

ピース「そんな・・・」

ビューティー「では、一体何故あなた方やオーデイウムは私達を倒
そうとするのですか？」

青仮面「それは自分自身だ・・・」

ハッピー「え？」

赤仮面「ほな・・・」

シユルルルル・・・

仮面の人達は下からつむじ風を起しそれに包まれながら消えてし
まった。

ピース「消えちゃった・・・」

マーチ「けど、あいつら・・・また来るかもね・・・」

サニー「ふん！あんな奴らバッドエンド王国と一緒にボコボコにす
るだけや」

マーチ「うん！そうだね」

ピース「がんばろう！」

ハッピー「うん！」

私達が心のなかで決心したけどなぜかビューティーだけは不安な顔をしていた。

ハッピー「どうしたの？」

ビューティー「え？すいません・・・考え事を」

ハッピー「考え事？」

ビューティー（あの青い仮面の人の声・・・それにあの剣の太刀筋・・・どこかで受けた気が・・・）

星奈「どうやらここらしいわね……」

ポンポー「この廃ビルの中にいるのか……」

私達が着いたのはあの場所から約30メートルから離れた場所に
あつた誰にも寄り付かない廃ビルだった。

秋人「おーい黒井！」

星奈「先輩！」

先輩の話からすると休日に弟の見舞いを終えて家に帰ろうとした
ところ空を見上げると羽が生えたプリキュアらしき奴が希美と主後
金田先輩を捕まえそれを追うと、この廃ビルの中に入っていた所を目
撃したらしい。となるとこの中に三人が捕まっているのね

星奈「それじゃ行くわよ！」

？「待ちな……」

星奈「？」

秋人「どこから……」

ポンポー「上だ！」

私達は上を見上げると廃ビルの鉄骨の上にガラの悪い女子高生二
人が立っていた。てゆうかあいつらどこかで見たような……誰だっ
け？

秋人「てめーら何もんだ？」

女子高生B「ここを通りたくばあたしらを倒してから行くんだな」

女子高生C「もつとも無理な話だけどね・・・あたしらにはこれがあからね！」

女子高生の一人が何かを見せた。それはなにやら触角のような物がブヨブヨした玉だった。でもあれは・・・まさか!?

星奈「まさか！それは『怪人細胞』!!」

秋人「怪人細胞？」

ポンポー「なにそれ？」

星奈「とある異世界に存在するヤバイ物よあれを食べば肉体が活性化し人間の限界を超えた筋力や寿命を手に入れることが出来るの・・・」

ポンポー「そのつまり・・・」

星奈「人間を辞めて怪人になるっていうことよ・・・もつともどんな医学を執り行っても治る確率は0よ」

ポンポー「な・・・なんだと!？」

秋人「おい！お前ら！それを捨てろ！」

女子高生C「捨てる・・・そんなことするか!!」

女子高生B「黒井星奈!!てめえをぶつ殺せるなら人間辞めて怪人になつてやらあ!？」

バクツ!

バクツ!

あいつら!怪人細胞を食べてしまった!

女子高生B「う……うう……」

女子高生C「ううう……」

秋人「おい!なんかやべえ気がする」

ポンポー「同じく……」

女子高生B「うわああああ!!」

女子高生C「うおおおお!!」

変化していく……女子高生Bは毛におおわれ太い尻尾も生えて耳も生えてきた……あれは狐?それと女子高生Cも毛におおわれ長い尻尾に耳も生えてきたあれは猫かしら?

狐女「どうだ!怪人細胞を取り込んだ結果強い力が溢れてくるぜ!」

猫女「ああ負ける気がしねえ!!」

星奈「・・・・・・・・・・」

狐女「今ここでめえの首を取れば・・・」

猫女「リーダー大喜びにやー!!」

『死ねええ!!!』

《チェンジ!ソニックアロー!》

星奈「ふん!」

バシユツ!ブシユツ!バシユ!ドシユツ!バシユツ!

スタツ

星奈「・・・・・・・・」

狐女「へ・・・」カッ

猫女「にや・・・・・・・・」カッ

ボガーーーーーン!!!

ポンポー「やりやがった・・・」

秋人「黒井!!」

星奈「先輩……」

秋人「黒井……お前……」

星奈「こうするしか他に方法はないわ怪人細胞を一口かじればもうもどに戻れる保証はない……」

ポンポー「星奈……」

星奈「行くわよ！」

ポンポー「……」

秋人「……」

匠「誰かー！！助けてー！！恐ー！！いー！！」

主「うっさいわよ！あんた静かにしなさいよ」

匠「そんなこと言われても怖いんだよ！！」

？「ふん！泣きわめいても」助けが来たらしいよ」

希美「え？」

主「へ？」

匠「何？」

バコーーーーーーン!!

星奈「希美！主！後、金田先輩！」

希美「星奈!!」

主「星奈さん！」

匠「え？黒井さん？なんで？」

秋人「お前ら無事か？」

匠「げっ！紺野!?!」

星奈「みんな！」

私はとうとう彼女達のいるところまで辿り着き、三本の鉄骨に吊るされている三人をみてどこも怪我はないどうやら無事のようなね……

？「やっと逢えたな黒井星奈……」

星奈「誰……あんた？」

？「あたしはプリキュアさ……」

星奈「プリキュア・・・」

?「そうさ、あたしはキュアソーン・・・お前に復讐するために来た地獄の使者さ」

星奈「地獄の使者つてまるで悪役プロレスラーが言いそうなセリフね・・・それにプリキュアなら必ず自己紹介とかするものよ」

ソーン「そんなもん知るか!?あたしはてめえさえ殺せば他は何も要らねえよ!?!」

あんなガラの悪い女子高生がプリキュアになるなんてどう考えてもおかしい・・・こんなことが出来るのは

星奈「じゃあここは狭いから、屋上で戦いましょう」

ソーン「ふん!望むところだ」

星奈「ふん!」シユン!

匠「え!黒井さんが飛んだ!」

私は一気に屋上までジャンプし、それに続きソーンまで飛んで来た。

秋人「よし!俺達も屋上に行くぞ!」

ポンポー「よっしゃ!」

希美「うん」

主「ええ」

匠「……………って僕を置いていくな!!」

―廃ビル屋上―

ソーン「この時をずっと待ってたあたしがあんたにどれ程の屈辱を味わったのか……」

星奈「……………」

ソーン「今ここで決着つけてやる!!くらえ!!」

ソーン、あいつの手にもつ茨の鞭が私の方に襲いかかってくるが、私はそれを簡単に避けた。

ソーン「くらえ!くらえ!くらえ!くらえ!」

星奈「……………」ヒヨイヒヨイヒヨイヒヨイヒヨイ

ソーン「オラオラオラオラ!!!」

星奈「……………」ヒヨイヒヨイヒヨイヒヨイ

ソーン「畜生!!なんで当たらねえんだよ!!」

星奈「あんたのプリキュアの力の使い方が雑過ぎるのよ」

ソーン「んだと！だったらこいつでどうだ!!」

星奈「……………」

ソーン「プリキュア！ソーンリンチ!!」

こいつの必殺技、無数の茨が集結して巨大な茨になってこつちに振り落とされるわね……

ドーーーーーソーン!!!

ソーン「ははははどうだ!!やつとあいつを葬りかることができたぜえ!!イエーイ!!」

ピシピシピシピシ

ソーン「……………」

ドーーーーーソーン!!

ソーン「え!?!」

星奈「この程度の必殺技で私が倒せるわけないでしょ」

ソーン「な……なんで!?!」

その理由はいいつの必殺技があたる前に私は武装色の覇気で前進を硬化し必殺技のダメージをセーブしていたのだ。

星奈「今度はこっちなね……」パキポキ シュン!

ソーン「へ？」

バキツ!!

ソーン「ぐへ!!」

まず私は奴の顎に上段蹴りを食らわせた。

星奈「ふん!!」

ソーン「ブブブブブブブブ
!!!!!!」

そして奴の腹に連続のマシガンパンチを食らわせた。

ソーン「てめえ……調子に乗んな!!」

奴が茨の鞭で私に襲いかかろうとしたが……

星奈「ふんっ!!」

バキツ!!

ソーン「ぐふあ!!」

奴の頬に強力なカウンターのハイキックを食らわせた。

星奈「これで終わりよ……」

ソーン「ひい!助け……ぶうっ!」

私は強力な上段蹴りで奴を上空に飛ばし一気に勝負をつけるつも

りでいた。

バタンツ

ポンポー「星奈!!」

秋人「黒井!!」

希美「星奈!!」

主「星奈さん!!」

匠「黒井さん!?!」

ガシツ!

ソーン「今度は何だ!?!」

星奈「行くわよ・・・」

秋人「あの技は!?!」

ポンポー「ありえねえだろ!?!」

上空からのジャーマンスーパーレックス!!!

ソーン「うわあああああ
!!!????!!!」

ドーーーーー
ソーン
!!!!

パラパラパラパラ

星奈「終わり・・・」

ポンポー「星奈!!」

私はよろよろとみんなのもとに向いそれを出迎えるかのように希美に抱かれた。

星奈「希美・・・痛い!痛い!」

希美「よかった・・・よかった・・・星奈が生きていてくれて」

星奈「希美・・・」

秋人「黒井・・・」

主「星奈さん」

私以外のみんなは笑い始めた。でもこれは悪くない。

ソーン「畜生………なんでだよ……この力を手に入れたの
に………なんであいつに勝てねえんだ!!!」

ブレイン「おやおや、だいぶ荒れてますね」

ソーン「てめえ……おいてめえのもらった力でもあいつに勝てな
かったぞ!なんでだ?」

ブレイン「それはそのはず私にとってあなたは実験材料の一人です
から」

ソーン「何!？」

ブレイン「私の本来の目的は黒井星奈の戦闘能力がどれ程上がったか
の研究です。でもあなたじや今の彼女の戦闘能力を大幅に増
幅出来ませんでしたね。あなたに失望しました」

ソーン「てめえさつきからウダウダとうぜえんだよ!!？」

ガシッ!

ブレイン「おっと」

ソーン「このまま首をへし折ってやりや!!」

ブレイン「そうですか………だつたら私もあなたにスペシャ
ルチャンスをお上げしましょう♪私達ジエネラルプリキュアにしかない
あの技を……」

ソーン「あ?」

ブレイン「伝説の戦士よ………今こそ覚醒せよ!プリキュア
!ウエイク!!」ガシッ!

ソーン「うわああああああ
!!!!!!」

匠「なあ、黒井さん・・・君は何者なんだ？」

初めて初対面で会う金田匠先輩

星奈「それは・・・・・・・・」

秋人「俺達の仲間だ・・・」

星奈「先輩・・・・・・・・」

匠「いやいやいや!!それじゃ納得できないから僕に分かりやすく
「文句あんのか?」ないです」

グラググラグラググラグラ・・・

ポンポー「げ!何だ!?!」

希美「きゃあ!」

主「何?地震!?!」

匠「今度は・・・・・・・・うわわ・・・・・・・・!!」

秋人「お前ら!何かに捕まってじっとしてろ!!」

この揺れ・・・・・・・・地震じゃない・・・・・・・・まさか・・・・・・・・

グラググラグラグラググラグラ……

? 「グオオオオオオオオツ!!!」

秋人 「あれは……」

希美 「大きい……」

主 「龍……しかも西洋の」

匠 「あわわわわ」 ガタガタガタガタ

ポンポー 「おい! 星奈あれは……」

星奈 「あれは……」

あれは……ジエネラルプリキュアにしか使えない技によって覚醒された姿……つまり

星奈 「プリキュアの……なれの果てよ……」

28話 プリキュアの成れの果て

秋人「なんだよ・・・ありや」

匠「あ・・・ああ・・・」

ポンポー「まじかよ」

主「こんなのって・・・」

希美「星奈・・・あれって」

みんながあり得ない光景を目にしてしまい言葉も出せなかった。

星奈「・・・あれは・・・」

りほ？「オネエチャン・・・・・・・・・・」

星奈「りほ・・・なの？」

りほ？「オネエチャン・・・・・・・・・・アエタ・・・・・・・・リホ・・・・・・・・ウレシ
イ・・・・・・・・」

星奈「あんた！りほに何をしたの!!」

？「あんたの妹は念願のプリキュアになったんだよ♪成れの果てでね」

星奈「成れの……果て……」

星奈「あれは……プリキュアの……成れの果ての姿よ」

「!!!え!!」

匠「プリキュアって……確か幻影帝国とか戦ってるあのプリキュア?」

秋人「おい！黒井！なんでプリキュアがああ怪物みてえのになつてんだ?」

星奈「そもそもプリキュアと呼ばれる戦士は表向きは邪悪なる存在から平和を守るための存在・・・でも本当はプリキュアの力はもともとプリキュウスの力の一部であり彼女のプリキュアの力が奴等の解放で怪物として生み出された存在、それを解放出来るの奴は・・・」

ブレイン「我々、ジェネラルプリキュアです」

星奈「ブレイン!!」

秋人「てめえは!？」

匠「誰?」

上空から平然と立っているジェネラルプリキュア キュアブレインはまるで勝ち誇ったかのように浮いてたっていた。

ブレイン「あなたが倒したキュアソーン・・・あなたにコテンパンにされ私に我が儘を言われて仕方なくあぁなりましたけどまさかこれほど巨大な龍になるとは・・・いやはや」

秋人「てめえ・・・さつきから聞いてりや人間を物みてえに言いやがって・・・それでもヒーローのつもりかよ」

ブレイン「ヒーロー・・・ですか? まあ世間では彼女達は英雄的存在として見られてますが・・・その内」

ブレインは巨大な龍になったキュアソーンを見て関心しながら見物する。キュアソーン・・・あいつにはもう人間としての理性はもうないのであろう。

ブレイン「ひとまず私はここで退却して別のところで見ます。黒井星奈さん・・・またお会いしましょう」シュン!

秋人「野郎！逃げられた！」

匠「あんな奴よりまずこのビルから逃げるのが先決だろ！」

星奈「それもそうね・・・みんな行くわよ!!」

「「「おーーーーー!!!」」」

私達は一斉に屋上から最下層まで降りようとしたその時

「グワアアア!!」

外から除いていた怪物化したキュアソーンは緑色の炎を撒き散らした。

星奈「きやあ!!」

ポンポー「うおっ!!」

秋人「うっ!!」

希美「ひゃっ！」

主「うわっ！」

匠「ひえっ！」

ガラガラガラガラ

ガシヤーーーーー!!!!

匠「ああ！階段が!？」

ビルから降りるための階段が奴の炎で天井に燃え移り崩れて行き

止まりになってしまった。

「グオオオオオオオ!!」ボオオオ!!

秋人「引き返せ!!」

先輩の一声で私達は上の階段に引き返した。そこで私達は奴が見えない階段の手前で作戦会議を始めた。

匠「・・・どうすんだよ?」

主「どうするって・・・」

希美「それは・・・」

秋人「戦うしかねえだろ・・・」

匠「戦う?冗談だろ!!あんなデカイ怪物が僕たちの手で倒せるわけないだろ!!それに僕たちは只の中学生だ!!なんで僕らがこんな目にあわなきやなんないんだよ!!」

ポンポー「なあ、お前落ち着けよ・・・」

匠「そもそもお前何なんだよ?」

ポンポー「へ?」

匠「なんでお前みたいな化け物が僕たちのいる場にいるんだよ!あつちいけよ!!」

ポンポー「……………」

匠「それに……あいつの狙いはそいつ……黒井星奈じゃないのか？」

主「なっ……」

希美「それは違います!!星奈は私達のために助けに来てくれたんですよ!!」

匠「助けに?どうだかあいつも化け物ならこいつも化け物じゃないのか?」

星奈「……………」

匠「口を開かないってことは凶星か?こいつをあいつに差し出せば僕たちの身柄はかくガシツ!え?」

バキツ!!

匠「ぶっ!」 カランカラン

星奈「先輩!」

突然、秋人先輩の拳が金田先輩の鼻目掛けて思いつきり殴られ、そのせいでメガネが飛ばされ鼻血も流れ出した。

匠「へ?」 ガシツ!

秋人「てめえ……さつきからピーチクパーチクうるせえんだよ……
てめえは低学年の小学生か？ ああ」

匠「ふえ？」

秋人「いいかこれだけは覚えとけ……黒井はなてめえみたいな口
クデナシ野郎でも見捨てなかつたんだぞ？」

匠「へ？」

秋人「仮に黒井が化け物なら俺たちなんか最初っからこの場所には
いないはずだぜ？」

星奈「先輩……」

秋人「それに今、出入口が塞がれたとしたらもう奴を倒すことしか
ねえだろうな？」

匠「そ……そんな……」

金田先輩は秋人先輩の言葉を聞いてガツクリと腰を下ろした。

秋人「黒井……なにかあいつを倒す武器はないか？」

先輩は必死な形相で積みよって来た……私はプリキュア用にとっ
ておいたある武器を出すことを決心した。

星奈「一つだけ……ある物があるわ」

《チェンジ！ペンシル爆弾！》パシッ

ポンポー「おい星奈・・・なんだよ？それ」

星奈「ペンシル爆弾・・・通称無重力弾、これを奴の腹に当てた時、体が無重力に浮かび爆発する代物、でもこれはたったの最後の一本、隙を作って奴の腹に当てれば・・・奴を倒せる！」

私達は奴を倒すための作戦に入った。

星奈「希美、主・・・あなた達にはこれで奴の隙を作って」

《チェンジ！フリーガーハンマー！》

《ネクストチェンジ！ボーズMk1対装甲ライフル！》

希美には修理が完了したフリーガーハンマーを持たせ、主にはボーズMk1対装甲ライフルを持たせた。

星奈「そして秋人先輩にはこれを・・・」

《ネクストチェンジ！ソニックアロー！》

星奈「これをこのレモンエナジーロックシードをセットすればすこしはダメージを与えることが出来るわ」

秋人「わかった・・・」

星奈「あと金田先輩・・・」

匠「・・・」

まだこもっている・・・よっぽどあそこには行きたくないのね

ポンポー「俺はどうすればいい？」

星奈「あんたは・・・万が一奴が私に攻撃される前に足止めをお願い」

ポンポー「足止めか・・・わかった」

ソーンドラゴン「グルルル・・・」

あいつまだ私のことを探しているでもこれで終わりよ

星奈「私はここよ羽根つきトカゲ」

ソーンドラゴン「グオオオオー!!!」

作戦通り奴は私に向かって襲いかかってきた。

星奈「みんな頼むわね！」

希美「えーいーい!!」バシユツ！バシユツ！バシユツ！

主「当たれー!!」ドンツ！ドンツ！ドンツ！ドンツ！

希美と主のフリーガーハマーと対装甲ライフルでなんとか足止め
に専念してるわね

ソーンドラゴン「グオオオオオー！」

イラつき怒ったソーンドラゴンはまずは希美を始末しようと思
かった。

希美「きゃあ！」

秋人「白銀！ふせろ！！」

へロックオン！レモンエナジー・スカツシユ！

秋人先輩はソニックアローのホルスターにレモンエナジーロック
シードをセットしその引き金を引こうと準備する！

秋人「くらいやがれ！！」バシユツ！

ドーーーーー！！！！

ソーンドラゴン「グオオオオオオオ！！」

秋人「黒井！やれ！」

星奈「OK！」

私はペンシル爆弾を専用の銃にセットし奴の腹に狙いすまして討
とうとした瞬間……

ソーンドラゴン「グオオオオオオオ！！！！」

シユルルルルルルル

星奈「え!？」

パシツ パシツ パシツ パシツ

星奈「しまった!」

奴の腹からキュアソーン之力である茨のつたが生え私の両手両足を縛り付け、身動き出来なかった。そのおかげでペンシル爆弾が床に落ちてしまった。

ソーンドラゴン「グオオオオオオオオ!!!」
ボウウウウウ!!!

奴の炎が私に向かって多いつくそうとした時、

ドロン!!

ポンポー「うおりやああああ!!!」

ジュウウウウ・・・

星奈「ポンポー!」

ポンポーがぬりかべに変化して奴の炎の攻撃を耐えながら縛り付けてる私を守っている。

ポンポー「星奈!!・・・早く・・・それをぶち破って・・・こいつに・・・攻撃しろ・・・これに耐えるのも・・・限界が・・・ある・・・早く・・・しろ!!」ジュウウウウ!!!

星奈「ポンポー……………」

あいつの腹が徐々に真っ黒焦げになっていく。一刻も早くこれから脱出しないと

星奈「ふん！ふん！」

糞！このつた！何度やっても千切れない！糞！あいつが体張ってるってのに！！

ソーンドラゴン「グオオオオオオオオ！！」

ポンポー「うおおおおお！！！！」ジュウウウウ

糞！ちぎれる！ちぎれる！こんなところで立ち止まってる訳にはいかないのよ！！

ポンポー「……………」星奈「……………」

星奈「あ？何よ！！今はそれどこじゃないのよ！」

ポンポー「どうやら俺はここまで……………お前と一緒に生活できたこと……………忘れないぜ……………」

星奈「あんた……………何いってんの……………」

ポンポー「星奈……………あばよ」

ドーーーーー！！！！

星奈「!!?」

奴の炎がたちまちポンポの体を覆い尽くし
爆発した。

星奈「ポンポーーーーー！！！！」

ソーンドラゴン「グオオオオオオオオ！！！！」

星奈「よくも . . . お前!! . . . よくも . . .」

ポンポがいなくなり私はあまりの悔しさに涙を流した。

ソーンドラゴン「グオオオオオオオオ」

奴の攻撃が来る!! 両手両足を縛り付けられた私にとってもう身動きの取れない的になった。もう確実に私は死ぬ!!

ソーンドラゴン「グオオオオオオオオ!!!」

星奈「くっ!!」

秋人「黒井!!?」

希美「星奈!!?」

主「星奈さん!!?」

星奈「ごめんね……りほ……」

匠「うおおおおおおおおお!!!」

いきなり屋上のドアから猛ダツシユで突っ走る男性が現れた。その正体は階段でこもっていた金田 匠先輩だった

星奈「先輩!!それを拾って撃って!!」

匠「これか!!」

金田先輩はペンシル爆弾をセットした銃を拾い上げ奴に狙いをすまして発射した。

匠「くらえ!!怪物野郎!!!」バシユウウー!!

ソーンドラゴン「グオオオオオオオ!!!」

プスッ

ソーンドラゴン「グオ!?……」

金田先輩の活躍で見事奴の腹に命中した。そして奴はどんどん宙に浮かび上がっていった。

ソーンドラゴン「……」

ボガーーーーー！！！！

宙に浮かび上がった奴は全身から光を放ち大爆発をおこした。

秋人「よっしゃ!!」

希美「やった!!」

主「やったああ♪」

匠「勝った………はははははは」

そして奴を倒したことでつたがどんどん枯れ始めやっと解放することが出来た。

星奈「……………」

29話 星奈の決意

私達は協力してあの怪物を倒したことに一段落し、私は疲れはてて倒れた。

ドサツ

秋人「黒井!？」

希美「星奈!？」

主「星奈さん!？」

匠「黒井さん!？」

皆が私の方に駆け寄ってくる……

秋人「おい黒井しっかりしろ」

希美「星奈!大丈夫?」

主「星奈さん!」

匠「黒井さん!」

星奈「ええ……大丈夫……すこし疲れただけだから……」

ガシツ!

星奈「!!」

私はゆっくり立ち上がろうとしたけど希美が私に抱きついてきた。

星奈「希美……」

希美「星奈・・・バカ・・・心配したんだよ・・・」

希美が私のために泣いてる・・・あの頃の私には誰一人いなかった
時とは違つて・・・

匠「・・・・・・・・・・」

星奈「金田先輩・・・」

匠「う！・・・・・・・・・・な・・・なんだい？黒井さん／＼／」

星奈「ありがとう・・・あの時あなたが駆けつけていなかったら・・・
私は死んでたわ・・・」

匠（黒井さん・・・彼女は見た目は笑ってないけど・・・なんだろ
顔とセリフが合つてないけど・・・僕・・・黒井さんに誉められて超
嬉しい／＼／）

金田先輩は一人で嬉しがつてるようだけどこの際無視した。

星奈（ポンポー・・・）

あの怪物の攻撃を必死で私を守ってくれた・・・アイツが・・・

最初・・・出会った時から只の鬱陶しい奴かと思つていた。

でも、アイツと供に暮らしていくと・・・私のなかに楽しい気持ち
が込み上げていた。

アイツと一緒に戦って・・・今は友達もできた私は今・・・とても幸せな気分・・・なはずなのに

星奈「あんたがいなきや・・・幸せな気分が・・・台無しじゃない」
ポタツ

？「そりや悪かったなポン」

星奈「え？」

今一瞬、声が聞こえてきた。この下から目線で聞こえるようなセリフ・・・でもどこに・・・

？「ここだ！ここ星奈・・・お前の目の前だポン」

星奈「え？」

私が目の前の方を見るとそこにいたのは・・・

星奈「ポンポー・・・なの？」

そこにいたのはとても小さく可愛らしい子狸がいた。

？「ああ、これが俺のメルヘンランドの真の姿、ポコンだポン！」

秋人「お前があのだ狸・・・」

希美「可愛い／＼／＼」

主「ちっちゃーい！」

匠「えええー」

ポコン「いや、あの時はどうなるかと思ったぜなん「ポンポー!!」
「え!?!」

星奈「……………」ゴゴゴ

ポコン「え! 星奈……………」さん?」

ガシツ!

ポコン「ひっ!」

星奈「ポンポー……………」あんた……………」あんた……………」

ポコン「星奈さん! すみません! すみません! すみません!」

ぎゆう~~~~

ポコン「ぐええええ〜」

私は思いつきり抱き締めた。

星奈「心配したのよ……………」

ポコン「星奈……………」ごめんな……………」

私達は今の状況を切り替えてポンポーことポコンになぜ生き返ったのか質問した。

ポコン「俺も詳しくは知らねえけど・・・周りが真っ黒な空間で声が聞こえたんだよ」

(あなたにはまだやるべきことがあります・・・来るべき最大の戦いのために・・・)

カツ！

ポコン「ということがあつて俺はこうして生き返ることが出来ただ！すごいだろ」

星奈「なんか嘘臭いぞーせ化けて隠れてたんでしょ？」

ポコン「いやいや本当だつてばマジで！」

私は他の皆はどー思うと聞いた結果、

秋人「どっかに隠れてたんだろ？」

希美「すごいと思うよ？」

主「ねえ、声って何？インタビューさせて」

匠「いやありえないだろ」

星奈「だそうよ」

ポコン「ガーン！なんで信じてくれねえんだよ」

みんなが笑っている時、私はポコンの言う「声」が気になった。その声の主って一体……

匠「なあ……みんな」

星奈「ん？」

金田先輩が私達に声をかけられ、なにやら話があるらしい。

金田「みんな、僕があんな態度をとってしまったってごめんなさい！」

秋人「お前……」

希美「金田さん……」

主「先輩……」

匠「僕が弱い臆病者だったから……みんなに迷惑をかけてしまつて……それに黒井さんにもひどいこといって「いいわよ」え？」

星奈「もうそんなこと忘れちゃったわ」

匠「黒井さん……」

星奈「いつそのこと仲間に入れてあげましょう……いいでしょみんな」

秋人「ま、嫌味さえ言わなければな」

希美「私はいいですよ」

主「まあ、別にいいけど」

星奈「だそうよ・・・よかったわね匠先輩」

匠「みんな・・・ありがとうございます！　ありがとうございます！」

みんなは匠先輩を受けいれ、歓迎された。本当に・・・よかった・・・

星奈「それに・・・」

星奈「私にはもう時間が・・・ないらしいわ・・・」

秋人「へ!？」

希美「星奈!？」

主「それって・・・」

匠「どういうことなんだ？」

ポコン「星奈!？」

みんなは私の言葉に動揺し、一体どういうことなのかせまってきた。

星奈「ポコン・・・あんたはもうすこし私に付き合って・・・」

ポコン「え」

星奈「秋人先輩、希美、主、匠先輩・・・あなた達にこれからのことを伝えます・・・」

「「「え!?!」」」

ーみゆきsideー

BEハッピー「バッドエンドシャワー!!」

ハッピー「プリキュア!ハッピーシャワー!シャイニング!」

私は今ジョーカーの力で別の世界でバッドエンドプリキュアと戦っていた。

どうしてこうなってるのか説明するね

私達は外でみんなと一緒に遊んでいる時、突然キャンディが輝いて、翼の生えた宝石になっちゃった!これって何でなの!

でもその時、上空からウルフルン、アカオーニ マジヨリーナが現れなんだか今までと何かが違うようだったけどポップが言うにはこれが最後の戦いと言われ私達も気合いを引き締めてプリキュアに変

身した。

三幹部達は黒っ鼻を自分たちに取り込み、ものすごく強くなった。でも私達は負けない、キャンデイを守るため私達は全力で立ち向かった。

でも三幹部は圧倒的に強かった。どんなに戦っても三幹部の強い執念が彼らを強くさせているだと私は思った。

でも私達は諦めない私達はプリンセスフォームに変身しここで勝負をつけようと必殺技を放ったけど三幹部の必殺技には勝てなかった。

どうしてこんなに強く執念を燃やすのか、それは三幹部の哀しみと痛みと悔しさによって生み出された怒りだったことに私達は今まで彼らと戦って何もわかりあえずに終わってきたことに私達は後悔した。

どうしてあの時、理由を話せなかったんだろ。どうしてあの時仲良くなれなかったんだろ・・・どうして・・・

そして三幹部が黒く染まり私達に襲いかかった。

「その怒りをどうか静めて・・・」

私は無意識だけどウルトラキュアハッピーになったような気がした。

私は本当は気づいていたんだ・・・狼さんも赤鬼さんも魔女さんも優しいってことを・・・

だから・・・私達と友達になろう、誰もあなた達を傷つけないから・・・

光が収まり、私達が見たのは狼と赤鬼と魔女の妖精が倒れていたことに気づいてポップは三幹部はもともとメルヘンランドの妖精だったの本当の名前はウルルン オニリン マジヨリン それが本当の名前なんだね。

その喜びもつかの間最後のデコルを取ろうとしたけど上空からジョーカーが現れデコルがカードに吸い込まれちゃった。

ジョーカーは私達が戦っている間世界中の人々からバッドエナジーを全て搾り取られた。

ジョーカーはウルルン達から出たエネルギーが紙を丸めるようにクシャクシャにし紫とオレンジと黄色と緑と青色のカードになって、そこに地面に突き刺すと現れたのは私達にそっくりなプリキュア、バッドエンドプリキュアが立っていた。

私は正直驚いた。私達と似てるようで似てない彼女達

でももう一人の私かもしれないバッドエンドハッピーは

“人が苦しんでるのを見ると、あー私は幸せなんだってすっごく嬉しい気分になると聞いた私は声も出せなかった。

その時ピンクの光が輝きだし爆発した。

私が今いるのは大きい岩が浮いている世界だった。みんなはそれぞれ別の世界に行っちゃたんだ……

考えてる途中、上から笑顔で攻撃してくるバッドエンドハッピー

BEハッピー「まずは貴女を不幸に落とす！」

といわれ殴り飛ばされ岩に突き破って墜落した。

その時、ジョーカーの声が聞こえキャンデイを渡せといわれどうしてこんな酷いことするのか・・・その目的は何も願いなんで無いことミラクルジュエルに頼らなくても世界を滅ぼせる・・・世界だけじゃなく夢も希望も奇跡全て消し去ってこそ本当の絶望が訪れる

その目的の為にミラクルジュエル・・・キャンデイを殺そうと企んでいた。

私は今すぐ駆けつけようとしたけどバッドエンドハッピーに立ちふさがれで・・・私はもうダメだと思った。

その時、ロイヤルクイーンさんの声が聞こえ、

ロイヤルクイーン「絶望の淵に立たされようとも未来を見る力を失わない限り希望はあります。私は信じてます。キャンデイならどんな困難も乗り越えてくれる。プリキュア達と供に！」

BEハッピー「バッドエンドシャワー！」

ドーーーーーーーーーーーーーーーーン!!

BEハッピー「ピエーロ様が復活したら何もかも終わりだよ♪不幸

だね〜絶望だね〜」

私達は・・・

ハッピー「絶望なんかしない！明日を信じて今を頑張る全力で頑張るの。私は今までそうしてきたもん」

BEハッピー「世界に明日も未来もないよ。もうバッドエンドは決まったの」

ハッピー「決まってないよ・・・だってまだ終わってない。私達は諦めないもん諦めずに頑張っていればきつと未来は輝くから、私はキュアハッピーだから」

BEハッピー「何それ？だったらこれで終わりにしてあげる！」

私のスマイルパクトはそれを答えるように光を放ち私は全身全霊を込めて必殺技を放った。

BEハッピー「バッドエンドシャワー!!」

ハッピー「プリキュア！ハッピーシャワー！シャイニング！」

激突する両方のハッピーシャワー！だけど私のハッピーは負けない！

BEハッピー「世界はもう終わりだよ？あなたが何をしたって幸せになんてなれないの」

ハッピー「そんなこと無い！皆で頑張れば絶対にウルトラハッピー

になれる！私はそう信じて進む！だからネガティブな私、退いてー
!!」

バシユウウウー！ー！！

BEハッピー「うわあああああ!!!」

消滅したもう一人の私、その時一筋の光が現れ私はひと安心してみんなのところに行けると思った。

みゆき「ここは・・・どこ・・・?」

ここは・・・みんなはどこ?」

みゆき「あ！スマイルパクトが!？」

シユルルル パシ！

みゆき「え」

地面に落ちていたスマイルパクトが突然！黒いヒモがパクトを締め上げ、パクトは彼女の手に行った。その彼女というのは・・・

オーデイウム「・・・・・・・・・・」

みゆき「お・・・・・・・・オーデイウム・・・・・・・・なんで・・・・・・・・」

オーデイウム「・・・・・・・・・・」スツ　カチャ

その時、オーデイウムは被っていた仮面を取り外し私はその時信じられなかった。オーデイウムの正体が

星奈「・・・・・・・・・・」

みゆき「星奈・・・・・・・・ちゃん・・・・・・・・」

30話 戦いの現実 星奈対みゆき

みゆき side

私はバッドエンドハッピーを倒しみんなのいる所に戻れると思った。だけどそれは簡単に壊され、私が今いるのは地面が砂漠と空が雲に覆い尽くし雷が降り注ぐ怖い場所だった。

みゆき「スマイルパクトが!!」

私の目の前にポツンと落ちていたことに気づきすぐさま拾おうとしたその時

ピシユン!

みゆき「え?」

パシッ! シュルン

みゆき「ああ!パクトが」

私達プリキュアになるために欠かせないスマイルパクトが誰かに取られ、その相手は・・・

オーデイウム「……………」

みゆき「オーデイウム・・・なんでここに」

オーデイウムが私のスマイルパクトを手にしていてすぐさま声をあげようとしたけどオーデイウムは黙って仮面を脱いだ時、私は彼女の素顔を見て驚いた。

みゆき「え…………オーデイウムの…正体って…………」

星奈「……………」

みゆき「星奈…………ちゃん…………」

オーデイウムの正体が…………星奈ちゃん…………なんて…………

ーサニースイデー

サニー「みんな全員戻って来れたんやな」

ピース「うん！」

マーチ「手強い相手だったけどなんとか勝てたよ」

うちらはそれぞれの世界でバッドエンドプリキュアと戦い最初は苦戦はしてたけどうちのパワーアップした技で奴等をコテンパンにしてやったで！

ビューティー「ここは……………」

マーチ「どうしたの？」

ビューティー「ここは元の世界じゃありません！」

「「え!?!」」

ビューティーの言う通りいわれてみればビルもないしまわりはなんもない所や

サニー「ここは一体どこなんや!?!」

ビューティー「……………」キヨロキヨロ

サニー「どないした?ビューティー」

ビューティー「ハッピーが……ハッピーがいないんです」

サニー「な……なんやて!?!」

ピース「そんな!!」

マーチ「まさかハッピーはまだあつちの世界に……」

?「それは違うで……」

後ろから声が聞こえて来る方向に振り向くとそこにおったのはオーディウムの腰巾着である仮面の5人組や

マーチ「お前たちハッピーをどこにやったんだ!?!」

赤仮面「ハッピーはバッドエンドハッピーを倒してこの世界に戻る

前にオーディウム隊長はそれを利用してハッピーを別の世界で飛ばして今、オーディウム隊長と戦ってるかもしれないで……」

サニー「なんやて！」

ピース「ハッピーが……」

ビューティー「……………」

マーチ「じゃあ早く助けにいかなくちゃ!!」

赤仮面「それはアカンで!!」

サニー「なんやて……」

うちらはハッピーの所に行こうと思つとつたんやけど仮面の奴等が立ち塞がつとつた。

赤仮面「ここからは門前払いや」

緑仮面「いまここでお前たちの好きにさせねえ」

黄緑仮面「誰にも邪魔させないんだから！」

5人組全員戦闘体制に入りよつた。ふん上等やんけ

サニー「だつたらお前らまとめてぶつとばしてみゆきの所に行くだけや……」

ピース「ん……」

マーチ「……………」

ビューティー「……………」

赤仮面「そんな俺らが許すと思うとるんか？」

緑仮面「……………」

黄緑仮面「……………」

黄仮面「……………」

青仮面「……………」

『はああああ
!!!!』

『うおおおお
!!!!』

—みゆきside—

れいか『おそらく、黒井さんがオーディウムだったんでしょう？』

れいかちゃんというとおりであったオーディウムの正体が私の友達だった……星奈ちゃんが……

みゆき「星奈ちゃん……なんで……なんで……こんなことをするの？」

星奈「……………」

みゆき「黙ってちやわかんないよ！」

星奈「……………」

みゆき「星奈ちゃん……いま持つてる私のスマイルパクトを返して……」

私は星奈ちゃんにスマイルパクトを返して欲しいと近づいていったその時……

ガシッ

みゆき「え？」

ブオンッ！

みゆき「うわあああああ!!？」

ドスン！

みゆき「いたたた・・・何するの？」

突然星奈ちゃんが私の腕を引っ張り思いつきり投げ飛ばした。

星奈「ポコン！」ヒュン！

ポコン「おっととと」

みゆき「ああ！パクトが」

パクトが狸さんのような妖精に預けちゃった。

星奈「星空みゆき・・・ちよつとばかり強くなったからっていい気になってんじゃないわよ・・・プリキュアになる前のあんたが如何に弱いのか教えてあげるわ」

みゆき「星奈ちゃん・・・」

星奈「そんなにあれが欲しいなら私と勝負しましょう」

みゆき「勝負？」

星奈「私の頬に一発でも攻撃を当てたらアンタの勝ちでいいわよ勝てたらあのスマイルパクトを返してあげるわ」

みゆき「星奈ちゃんの頬に一発・・・」

星奈「ええ、どうするの？やるの？やらないの？」

みゆき「星奈ちゃんなん「早くしろおおお!!!」「ひっ！」

星奈ちゃんの怒声に驚き、私は仕方なく星奈ちゃんの勝負にのろくとにした。

みゆき「行くよ！星奈ちゃん」

私は右手で拳を作って星奈ちゃんのほうに向かった。

みゆき「えーーーーーい!!」

ヒュン

みゆき「あれ？」

星奈「なにそのパンチ？」

ボゴツ！

みゆき「ぐふっ!!」

星奈ちゃん私のパンチをするりと避けられ星奈ちゃんは私のお腹に思いつきりパンチを当てられた。

みゆき「うえええ・・・」

お腹・・・痛い・・・

星奈「何してんの？プリキュアになった時のように振る舞えばいいだけじゃない？」

みゆき「くっ・・・えーーーーい！」

私はもう一回星奈ちゃんに攻撃をしたけど

みゆき「えい！えい！えい！えい！えい！えい！えい！えい！えい！えい！」

スツ スツ スツ スツスツ スツ スツ

ガシッ！

みゆき「へ？」

星奈「はあああ!!」
ブオンツ！

みゆき「うわああああああ!!」
ドスン！

星奈ちゃんは私の袖を思いつきり引つ張り上げて一本背負いで投げ飛ばした。

星奈「これでわかったでしょ？アンタはプリキュアになったことでもものすごい力を発揮できるけど・・・現実の姿のアンタは力もなく何の戦闘訓練もつまないでプリキュアの力に頼っていただけ。つまりアンタは・・・元の姿だと只の絵本好きのナードってことよ」

みゆき「そんなの・・・わからないよ！」

もう一回星奈ちゃんにパンチを仕掛けようとした時

星奈「はあ!!」

バキッ！

みゆき「うわああああ!!」
パンチを仕掛けようとしたら星奈ちゃんはすぐさま右足でハイキックを私の頬に当たった。

星奈「まだよ・・・」

ガシツ!

みゆき「へ?」

星奈「ジャーマン・スープレックス!」

ブオンツ!

みゆき「うわああああ!!」

ドーーーーー!!

みゆき「あ・・・ああ」

星奈「コブラツイスト!」ギリギリ　ギリギリ

みゆき「星奈ちゃん!痛い!痛いよ!」

星奈「タワーブリッジ!!」

みゆき「うわああああ!!!??」

星奈「パロスペシャル!!」

ギリギリギリギリ

星奈「ああああ!!」

ポコン（星奈……）

みゆき「がはっ……」

そんな……プリキュアになってた時はあんなに強かったの
に……

星奈「どお？もしかして……まだ続ける気？」

星奈……ちゃん……私は……

みゆき「う……うう……うう」

星奈（こいつ……）

ポコン（まだ立つのかよ……）

みゆき「星奈ちゃん……私……負けないよ……」

ーあかね side ー

サニー「うりやああ!!」

赤仮面「うらああ!!」

ボギー「ooooooooon!!」

ピース「うりやああ!!」バリバリバリ

黄仮面「うらああ!!」バリバリバリ

バリバリバリバリバリ

マーチ「はあああ!!」

緑仮面「はあああ!!」

黄緑仮面「いやあああ!!」

バシイイイooooooooon!!!

ビューティー「はあああ!!」キンキンキン

青仮面「はあああ!!」キンキンキン

サニー「はあ・・・はあ、はあ」

マーチ「あいつら・・・どんなに長く戦っても疲れてる様子がない・・・」

ビューティー「おそらく私達がこれまで三幹部やバッドエンドプリキュアの戦いであまりの力を消費してしまったせいです。これまで貯まった疲れが膨れ上がっているんです」

ピース「そ・・・そんなあゝ」

サニー「でも・・・こちらはここで負けるわけにはいかへんのや・・・みゆきが戻ってくる前にこいつらを叩かなあかんのや!!」

ピース「うん!」

マーチ「直球勝負だ!」

ビューティー「そうですね」

うちらが一致団結してる時、赤仮面は一人ボソリと呟いた。

赤仮面「ほんま・・・昔も今も・・・なんも変わつとらんな・・・」

「姉ちゃんは……」

サニー「へ？」

あいつ今なんていったんや……今……姉ちゃんって

プシユー

プシユー

プシユー

プシユー

プシユー

あいつらが一人ずつ仮面を脱ぎとった時、
うちらはそいつらの正体が
思いもよらない相手だったんや

？「まさか姉ちゃんが・・・プリキュアなんてな」

サニー「元気!？」

？「日野達が悪いんだぞ・・・その力はお前らにとって充分すぎるほどの力があるってことをな」

ピース「豊島くん!？」

黄仮面の正体がうちのクラスの豊島やて!？」

？「できれば・・・俺達にとってなお姉はその力を知らずに平和に暮らしたかったよ・・・」

？「なお姉はそれが命取りになるんだよ」

マーチ「けいた!?!ひな!？」

緑の仮面と黄緑の仮面の正体がけいたとひなちゃん!?!どうなってるんや!？」

？「れいか・・・お前にとってその道は本当に正しかったのか・・・僕は心底心配したんだよ」

ビューティー「淳之介お兄様・・・」

青仮面の正体がれいかの兄ちゃん!？」

なんやねん!?!なにがどうなってるんや!?!

―星奈 side―

星奈「はあ、はあ、はあ」

みゆき「……………」「フラフラフラ

こいつ…………殴つても蹴つても投げられても直ぐに起き上がる。

みゆき「ま……………まだ……………まだ……………」

こいつの顔はもう片目の方はもう腫れてるし両方の頬だって腫れまくってるし…………それに頭のロールだってもうとかさされて垂れてるし…………もうボロボロよ

星奈「もういい加減にしなさいよ!?!なんであんたはそう必死にその力に求められてんのよ!?!」

みゆき「……………友……………達……………のためだから……………」

ブチツ!!

星奈「いい加減にしろおお!!」

ポコン「おい!星奈!」

私はあまりの怒りによって勢いよく星空みゆきの袖を掴み私は星空みゆき殴った。

バキツ!ドゴツ!バゴツ!

星奈「あなたは自分が何をしているのかわかってない!!」

ボゴツ!ボゴツ!バキツ!

星奈「あんたが例えピエーロを倒したとしても……………その先にあるのは地獄よ!!」

ドゴツ!ドゴツ!バキツ!

星奈「あんた達プリキュアが全ての悪の元凶なのおおおお!!!!!」

ボコオツ!!

ズザザザ!!

みゆき「……………」

私はワールドフォンを取り出し、ある武器を召喚した。

《チェンジ！シンゴウアックス！》

ガシッ！

《ヒッサーツ!!》

《マツテローヨ!》

星奈「あんたをいまここで首を捕れば・・・私の任務は終了・・・」

《マツテローヨ!》

星奈「楽しい時間だったわ・・・」

《マツテローヨ!》

星奈「これで終わらせる!」

《イツテイーヨ!》

みゆき「星奈・・・・・・・・ちゃん・・・」

星奈「うおりゃあああああああ!!!!」

みゆき「・・・・・・・・」

りほ 「私！将来プリキュアになるんだ！」

星奈 「プリキュアって・・・あの都市伝説の」

りほ 「うん！困ってる人を助ける！りほ憧れちゃうな」

星奈 「じゃあさもし、りほがプリキュアになったらその時はお姉ちゃんを助けてね」

りほ 「うん♪」

ド
ン
!!!!

パラパラパラパラ

―みゆきside―

あれ？まだ・・・私・・・生きてる星奈ちゃんに殴られて死にそうになったのに・・・なんで？

ポタツ

みゆき「？」

星奈「なんでよ・・・・・・なんで・・・りほの大好きなプリキュアが・・・りほを死なせたのよ！」

みゆき「せい・・・な・・・ちゃ・・・ん」

星奈ちゃんが泣いている・・・

星奈「どうしてよ!どうして!どうして!どうして!どうして!」

みゆき「星奈ちゃん・・・」

星奈ちゃん・・・・・・・・ 私は頑張つて起き上がり星奈ちゃんの方に歩いた。

星奈「何よ・・・来ないでよ!・・・来ないでよ!逸れ以上近づいたら切るわよ!!」

みゆき「・・・・・・・・」

大丈夫だよ・・・

星奈「何よ・・・来ないでよ!来ないで!来ないで!来ないで!来ないで!来ないで!来ないで!来ないで!」

ガシッ!

星奈「え・・・」

私は星奈ちゃんを思いつきり抱き締めた。

みゆき「大丈夫だよ星奈ちゃん・・・・・・・・よっほど辛いことがあったんだね・・・私と出会う前からずっと・・・」

星奈「だから何よ・・・それで納得するわけないでしょう!!」

みゆき「納得しなくていいから・・・・・・・・」

星奈「え……………」

みゆき「私……星奈ちゃんのこともつと知りたい星奈ちゃんの大
好きなこと嫌いなことそれに大好きな絵本のことも……私……星
奈ちゃんのこと知りたい!!」

星奈「何よ……みゆき……………このバカプリキュア……………」

《チェンジ！ポーション！》

パアアア

みゆき「あ！すごい！顔の腫れと服も髪も元通りになってる♪」

星奈「……………」

みゆき「星奈ちゃん……………」

ポコン「ほらよ……………」

みゆき「へ？これって」

ちっちゃな狸さんの妖精が預かっていた私のスマイルパクトを返した。

みゆき「ありがとう♪狸さん」

ポコン「おいおい…………俺の名はポコンだよろしくな」

みゆき「そっかよろしくポコン♪」

星奈「……………」

みゆき「星奈ちゃん教えて…………星奈ちゃんがいる時代で何があったの？」

私は星奈ちゃんにどうしてプリキュアを憎むのか聞き出した。

星奈「私のいる時代は……プリキュアに支配された世界よ……」

みゆき「プリキュアが支配？なんで？」

星奈「アンタ達の戦いは……プリキュアの王、プリキュウスを復活させるための役割をしていたの」

みゆき「プリキュウス？」

星奈「かつてプリキュアという存在を生み出し、同時に邪悪なる存在を生み出した倒すべき元凶よ」

みゆき「え？」

星奈「そもそもこの戦いは妖精達も知らない歴史の闇があるの」

みゆき「歴史の闇」

星奈「かつて大昔、邪悪なる存在がすべての命を滅ぼそうとしたけどその時伝説の戦士プリキュアがそれを阻んでいた……でも違うの！」

みゆき「違うって何が？」

星奈「ピエーロは世界を滅ぼそうなんて意志はない……奴の目的は……アンタ達プリキュアをもっと強くさせるため……つまり家畜の餌なの」

みゆき「家畜の餌って」

星奈「プリキュウスは計画していたの、ジェネラルプリキュア達と協力し、ありとあらゆる町を監視させ、ずっと長いこと待っていたの・・・魔女が子供を食べるために子供を太らせるようにプリキュアもどんどん強くなって奴の復活の準備をジェネラルプリキュア達は仕組んでいたの・・・」

みゆき「ちょっと待って！じゃあ私達が本当に倒すべき相手って・・・」

星奈「そう」

ピシユン！

ブチユツ！

星奈「へ？」

みゆき「え？」

突然、紫の光弾が星奈ちゃんの左目に直撃した。

星奈「うわあああああ!!!」

ポコン「星奈!!」

みゆき「星奈ちゃん!!」

星奈ちゃんが光弾に当たった左目を多いつくし仰向けになって、暴れだした。

星奈「うわあああああああ!!?!」

ポコン「星奈！落ち着け！落ち着け！」

？「へえ・・・来てみりや・・・いいところに来ちやつたよ」

私は振り向くとそこにはありとあらゆる顔の仮面をもった女性だった

ポコン「げ！あいつは」

みゆき「あの人は・・・」

星奈「・・・ジェネラル・・・プリキュアの・・・一人・・・キュアキャラクター・・・」

キャラクター「きゃーはっはっはっはっ!!」

31話 怒りと真実

ーみゆきside

みゆき「キュア・・・キャラクター」

星奈ちゃんが言うキュアキャラクター・・・なんだろう？他のみんなとは違ってなんだかやな感じ・・・

星奈「キャラクター!!あんた一体どうやってこの世界に来たの!?!この世界はあんた達ジェネラルプリキュアが立ち入れない結界が張ってあったはずなのに」

キャラクター「張ってあった?お前は何をいつてるんだ?私はわざわざお前を追うためにはるばる未来からやって来たっていうのに・・・」

星奈「え?」

キャラクター「会いたかったよ・・・プロトプリキュアNo.111号」

星奈「!!」ゾクツ

みゆき「どうしたの?星奈ちゃん」

星奈ちゃんが両手を腕に握らせて震えてる・・・なんで

みゆき「星奈ちゃん大丈夫「近づかないで!!」え?」

星奈「あ・・・あああ・・・」

みゆき「ねえ、あなたは星奈ちゃんのことを知ってるの？プロトプリキュアって何？」

キャラクター「へえ、お前はこの時間のキュアハッピーか・・・いいよ・・・冥土の土産に教えてやる」

No. 1111 って星奈ちゃん の背中に書いてあったあの番号？

キャラクター「こいつはもともと普通の人間だったが、プリキュウス様が復活し、私達ジエネラルプリキュアが他のプリキュア達を引き連れ新たな兵士を作るため5歳から16歳までの子供を連れ去ることにした。そして度重なる実験でほとんどの奴が死んでしまい、この実験は廃止にしようとしたが奴がその実験の成功者として私達の新たなプリキュアになる・・・はずだったが邪魔が入ってしまいそいつは行方をくらましてしまった・・・が」

みゆき「その成功者・・・って・・・まさか」

キャラクター「そう、こいつだよ・・・黒井星奈が後のプリキュアになる予定だった奴だよ」

星奈「・・・・・・・・」

みゆき「星奈ちゃんが・・・」

キャラクター「それにプリキュアになる為にはそれぞれある感情を捨てなければならぬ」

みゆき「感情？」

キャラクター「そう、あるいは喜び、悲しみ、怒り、憎しみ、楽しみなどなどをそしてこいつが取った感情は………喜び……つまり笑顔だ」

みゆき「笑顔？」

私は星奈ちゃんの方を見て、これまで星奈ちゃんが笑った所は一度もなくどうしてなのか気になった。その理由はあのプリキュアに笑顔つまり喜びの感情を抜き取られたからだとわかったとき同時にあのプリキュアに対する怒りが私のなかに膨れ上がった。

みゆき「……許さない」

キャラクター「は？」

みゆき「星奈ちゃんの笑顔を奪ったあなたを私は絶対に許さない！」

キャラクター「おいおい、あんたなんか勘違いしてるんじゃないか？」

みゆき「勘違い？」

キャラクター「そもそも私は別の部屋でこいつの感情を抜く様を見てただけだ………そしてこいつの感情を抜き取った帳本人は」

キャラクター「お前だよ・・・星空みゆき」

みゆき「え？」

キャラクター「お前がこの女の笑顔を奪った帳本人なんだよ！」

みゆき「私が・・・星奈ちゃんの・・・そんな・・・嘘だよね！星奈ちゃん！」

―星奈 s i d e r

星奈「・・・・・・・・・・本当よ」

みゆき「え！」

星奈「私は7歳の頃、5歳の妹と一緒にその実験室に行ったの・・・そしてその感情を抜き取ったのが・・・みゆきなの・・・」

みゆき「そんな・・・」

キャラクター「きやははは♪黒井星奈・・・あんたはあの時大切な家族を失い、今度は妹を失い、次は何を失うんだろうね」

《チェンジ！ソニックアロー！》

星奈「黙れ！あんた達がこれまでやって来た悪行今ここで止める！！」

私はまだ血が流れる左目で動けない状態だったが私は根性で立ち上がった。

ポコン「星奈！！」

みゆき「無茶だよ星奈ちゃん!?左目を怪我してる状態じゃせ「うるさい!!」!?」

私はみゆきの説得を一喝してすこし深呼吸をした。

星奈「みゆき……これはね私の戦いなよ……そして私の選んだ越えてはいけない道……それは血を吐きながら続く悲しい運命なのよ……」

みゆき「星奈ちゃん……」

星奈「はあああ!!」

キャラクター「来い！」

ガキン！ バキン！ ガキン！ バキン！ ガキン！ バキン！

刃と拳の激しい戦いで私は例え左目に血が出ても私は油断はしない。

星奈「これで決める!!」

へレモンエナジー！スパークキング！

星奈「うおりやあああああーーーーー！！！！」

バシユ！スバ！バシユ！バシユ！スバ！スバ！バシユ！

キャラクター「グツ！」

星奈「まだだ！」

へレモンエナジースカッシュ！

星奈「これで止めだーーーー！！」

バシユーーーーーン！！

ドーーーーーん！！

星奈「やったか！！」

いややったんだ！！そうでもしなきゃあんなやつに……

キャラクター「ふー」

星奈「!?」

嘘！傷ひとつついていない……

キャラクター「もう終わり……じゃあ今度は私の番♪」

シユンッ

星奈「なっ！」

キャラクター「ふん！」

バキッ!!

星奈「うわあああああ!!!」

ポコン「星奈!!」

これが私がいた時代のキャラクターの力……こんなに強くなっていたなんて

キャラクター「ぶっ飛ばしたんじゃおもしろくないわ最後は派手に決めるわよ!!」

ガシッ!

星奈「え！」

キャラクター「ふん！」

キャラクターは私を掴んで上空まで飛び今度は私を又の方に挟み私の体を掴んだ。これはまさかパイールドライバーの構え!?

キャラクター「お前なんか……力を使わんでも意外とチョロいわね」

星奈「な!？」

キャラクター「うおらあああああ!!!!」

星奈「うわあああああ!!!」

ドーーーーーーン!!!

キャラクター「口ほどにもないわね」

星奈「がは・・・けほけほ」

キャラクター「まだ息があるの? 案外しぶといわね」

星奈「私はまだ・・・こんなところで死ぬわけには行かないのよ!!」

私は一気にジャンプしてキャラクターに殴りかかろうとしたその時!

りほ「お姉ちゃん! やめてよ!」

星奈「りほ!？」

キャラクター「バーーーーカ!!」

ガチツ!!

星奈「あうっ!!」

油断・・・してしまった・・・キャラクターの奴・・・妹の顔に・・・
変えるなんて・・・

キャラクター「キュアエナジーを体に宿したくらいで私達ジエネラルプリキュアに勝てるはずないでしょ？」ギリギリギリギリ

星奈「があ……ぐ……」

こいつに首を絞められて今でも死にそうな感じだ。

キャラクター「じゃあね」グツ！

星奈「がっ！」

私は首をへし折られそうになったその時！

ハッピー「はああ!!」

キャラクター「おっと！」スツ

ガシツ！

ハッピー「星奈ちゃん……大丈夫」

星奈「み……ゆき……」

みゆきは私に向かって笑顔を出した。その顔には何か安心感を感じた。

ハッピー「星奈ちゃん……ここからは私に任せて」

星奈「……」コクツ

ーみゆきsideー

私はプリキュアに変身して星奈ちゃんを助けることに成功した。

ハッピー「キュアキャラクター・・・これ以上星奈ちゃんにひどいことするなら・・・今度が私が相手になる!」

キャラクター「ふ・・・まさか君が相手をすることになるなんてね・・・」

ハッピー「プリキュア同士の戦いはすこしイヤだけど、星奈ちゃんを傷つけることだったらあなたを絶対にゆるさない!」

キャラクター「絶対にゆるさない・・・か・・・ふふふ、いいのかい、君は人間として生まれたプリキュアであり私は大昔からお前達を監視していたジェネラルプリキュア・・・もう勝負は分かっていると思うけどね」

ハッピー「そんなのやってみなくちゃわからないよ!」

キャラクター「フツだったら・・・私の遊びに付き合ってもらおう・・・」

ハッピー「え?」

キャラクター「プリキュア・・・ジェネラル・・・キャラクターチエンジ!」カッ

突然、キャラクターの体から虹色の光が輝きだし、私は目をつむってたけど光がおさまってそこにいたのは、

ハッピー「え？」

星奈「その姿は……」

キャラクター「……」

キュアハッピーだった。

「あかね side」

うちらは混乱した。あのオーデイウムの腰巾着と思わし仮面の5人組、うちらはコイツらの正体を知るまで戦ってきた。戦ってきたんや……それが……

サニー「なんでや……」

5人組の正体が……

サニー「元気……」

元気「……」

ピース「豊島くん……」

豊島「……」

マーチ「けいた……ひな……」

けいた「……」

ひな「……」

ビューティー「お兄様……」

淳之介「……」

サニー「なんであんたらがおるんや!」

元気「……姉ちゃん……まさか姉ちゃんがプリキュアやったとはな」

ピース「豊島くんもどうして」

豊島「これは俺たちが選んだ道だ!」

マーチ「けいたもひなもどうして?」

けいた「なお姉……あの頃は俺たちのヒーローだと思ってたんだ?でもそうじゃなかった」

マーチ「え？」

ひな「なお姉の力は私達にとって危険な力だったんだよ」

淳之介「れいか……」

ビューティー「お兄様……なぜ……」

淳之介「何故？……それはれいかお前が一番よく知ってる筈だよ……」

ビューティー「……」

サニー「なんでや……なんでみんな……うちらと敵対しとるん？それになんで……あんたらは元の世界でウルフルンらにバッドエンド状態になつてはるはずやのに」

元氣「はあ、ホンマアホやな姉ちゃんは……」

サニー「な……なんやて!?!」

元氣「俺らは未来からやってきたんや」

サニー「未来から？」

元氣「そや、姉ちゃんらがピエーロを倒したその後の未来にな」

サニー「うちらがピエーロを……ということは未来は平和になつてるんやな」

元氣「なわけあるかアホ……」

サニー「な！・・・またアホゆーて」

元気は姉のうちにアホを二回ゆーなんて、何様や

豊島「お前らはこの後、二元の世界でピエーロと対峙しそしてピエーロを倒し、俺達の街は平和になると思ってたが・・・それは違った・・・」

ピース「違うって・・・どういふこと豊島くん」

豊島「本当の敵はピエーロじゃないってことさ」

けいた「ピエーロはそもそもこの世界の歪みや憎悪を蓄えていただけだった」

ひな「ピエーロを生み出したのは・・・なお姉達プリキュアだったんだよ」

マーチ「え？」

けいた「本当に世界を救いたいなら・・・この世界から全てのプリキュアの力を捨てなきゃならないんだ！」

マーチ「けいた・・・ひな何いつてるの？」

淳之介「それにこれまでこの世界から邪悪な存在が現れ続けているのはプリキュアの王、プリキュウスが復活しようとする兆しでありプリキュウスの娘がプリキュアとして覚醒してしまったからなんだ・・・」

ビューティー「プリキュアの王？」

ピース「何なんです？プリキュウスって？」

元気「プリキュウスは大昔に多くの悪さをやらかした極悪な奴やそして、ピエーロや他の悪もんを生み出したと同じく……」

豊島「プリキュアを生み出した帳本人なんだ」

サニー「なんやねん！それぞれのプリキュウスつちゅー奴がピエーロや他の悪もんを生み出した奴で同時にプリキュアを生み出した帳本人やて！なんやねんそれ？何いつてるのかさっぱりわからん！」

マーチ「そうだよ！プリキュウスだか知らないけど、まさかオーデイウムに騙されているんじゃない？」

ひな「騙されてないよ……なお姉」

けいた「それに不思議だとは思わなかったか？」

マーチ「え？」

けいた「どうしてこの世界に……邪悪な存在が現れたのか？……そしてなんでありとあらゆる街にプリキュアが誕生したのか……」

4人「……………」

けいた「全てプリキュウスのシナリオ通りに動かされてたんだよ」

サニー「え」

ピース「え」

マーチ「え」

ビューティー「え」

元気「プリキュウスは大昔、自分は死ぬかもしれないということに不満をだいたったらしいけどあるジェネラルプリキュアの提案でプリキュウスを復活させられるかもしれないということがわかったらしいや」

元気「死ぬ間際にプリキュウスの娘を出産し、この世を去ったプリキュウスは冥王星で永い眠りについたんや。キュアアンジェがプリキュウスの一部であるキュアエナジーを妖精達がいる国に配り、妖精を守る自称伝説のヒーロープリキュアの誕生やった。そしてジェネラルプリキュアはプリキュウスの一部である闇の力を邪悪な存在に変わりプリキュアと邪悪な存在の戦いが始まったんやほんで浄化した敵はエネルギーに変わりそれをジェネラルプリキュアが回収し続けてきたんや」

元気の話聞いたうちらは何かともないことをしてしまっただと感じた。

サニー「なんやねん・・・それ・・・じゃあうちらがこれまで戦ったアカンベーも浄化したエネルギーが」

元気「ジェネラルプリキュアに回収してきたってことやろ」

サニー「そ・・・そんな・・・」

ピース「サニー！」

元気「これで、わかったやろお前らの戦いがいかに踊らされていたことを」

淳之介「れいか・・・これでわかっただろ例え元の世界でピーロを復活して暴れだしたとしても勝っても負けても君たちに未来はプリキュウスに握られてしまったんだ」

サニー「・・・・・・・・」

ピース「・・・・・・・・」

マーチ「・・・・・・・・」

ビューティー「・・・・・・・・」

淳之介「れいか今からでも遅くはない・・・その力を棄てるんだ」

ビューティー「・・・・・・・・いやです・・・」

淳之介「・・・・・・・・え？」

ビューティー「いやです。私達にはまだやらなければならないことがあります。申し訳ありませんがお兄様の忠告は有り難いです・・・でも私達には友達がキャンデイが待つてるのです。」

ピクツ

ピース「そうだよ！今ここでプリキュアの力を棄てたらキャンデイ

が助けられなくなっちゃう」

ピクッ

マーチ「友達を頼って置いて力を棄てるなんて私には出来ない！」

ピクッ

そうや！ あっちの・・・元の世界で・・・キャンデイがうちらを待っている！

サニー「元気・・・あなたの忠告は有り難いけど、悪いがことわるで・・・友達が・・・キャンデイの待ってるんや!!」

元気「姉ちゃん・・・・・・・・わかった・・・姉ちゃんがそう言うんなら・・・俺は容赦せえへん・・・俺の帝具、炎球 プロメテウス」で姉ちゃんを止める！」

サニー「来いや！元気!!姉ちゃんを怒らすとどうなるかその体で教えてやる!!」

豊島「黄瀬・・・いいのかこの先・・・ピエーロを倒したらもうどこにもならないぞ」

ピース「それでも・・・私はキャンデイを助ける・・・例え悲しいことでも私は戦う！」

豊島「そうか・・・じゃあ、俺も全力でお前を食い止める！俺の帝具！雷矛！”トニトルス”でな」

けいた「なお姉・・・本当にいいの家族のことをないがしろにして」

マーチ「ないがしろになんてしないよ」

けいた「え？」

マーチ「私は友達を助けに行くだけ・・・友達だって家族のようなもんじゃない！」

ひな「なお姉・・・」

マーチ「だから二人ともそこを退いて！」

けいた「それは・・・」

ひな「出来ない！」

淳之介「れいか・・・それがお前の進むべき道なんだね」

ビューティー「はい、お兄様・・・私の道はとても深く険しい道かもしれませんが・・・ですが、私達を待っているキャンディを今ここで見過ごすわけにはいかないのです!!」

淳之介「そうか、ならばここから先はこの僕を倒して見せろ!!」

ビューティー「ふっ」

キャンディを助けるため奮闘する5人のプリキュア、そしてピエー

口が倒された未来・・・一体どうなるのか？

待て！31・5話

31. 5話 キュアハッピー対キュアキャラクター

↓星奈side↓

星奈「その姿は・・・」

ハッピー「キュアハッピー・・・なの？」

キュアキャラクターの奴・・・この時代のキャラクターは顔だけ変わって他のプリキュアの力を使えるが未来のキャラクターは顔以外、全身が他のプリキュアの姿になっている・・・ということは

星奈「みゆき！気をつけて！奴があんたと同じ姿だったら！攻撃はあんたより10倍の威力を持つてるわ！」

ハッピー「え？」

キャラクター「ああ、そのとおりだよ!!」

キュアハッピーに変身したキャラクターはその力をフルに発揮し、みゆきの間近まで来た。

キャラクター「ふん！」

バキッ！

ハッピー「がはっ！」

キャラクター「さらさらさらさらさら!!」

キャラクターの連続の突きが音速のようにみゆきに襲いかかるで

もみゆきはそれをうまく防いでいる。

ハッピー「はあ、はあ、はあ……姿が私に似てるのに……力は私以上に強い」

キャラクター「へえ……じゃあ……もっと強くなってあげる♪」

キャラクターの奴……今度は手から変わった玉を取り出し、それを上空に投げた。

星奈「あれは……一体？」

キャラクター「お見せするわ……この玉はブレインがプリキュアをより強化するために開発された玉……その名も『プリキュア・カスタム・ボール』」

ハッピー「プリキュア・カスタム・ボール？」

その時、その玉から黒とマゼンタの光が輝き、光が止んだ時キャラクター（ハッピー）はみゆきのような可愛らしい姿ではなく腰には二本の刀とドラゴンの羽が生え、ピンクと血のように赤い色を持った少女がそこに立っていた。

キャラクター「これがプリキュア・カスタム・ボールでカスタマイズしたキュアハッピー……その名もキュアハッピートゥルー」

ハッピー「キュアハッピー……トゥルー……」

星奈「ブレインの奴……あんな物を作っていたなんて……」

キャラクター「行くよ……」シユンツ

ハッピー「え？消えた？」

星奈「バカ！みゆき！もう近くにいるわよ！」

ハッピー「え？」

キャラクター「もう遅いよ……」

バキツ！

ハッピー「がはっ！」

星奈「みゆき！」

一瞬の速さで私にも見えない速度でみゆきの方に近づいていた。そして奴はみゆきの腹にボディブローを炸裂させた。

ハッピー「この……」

今度はみゆきがキャラクターに攻撃を仕掛けようとパンチをくらわせようとしたがキャラクターはそれを受けとめ……

キャラクター「そんなへっぽこパンチで私を倒そうなんて……嘗めてるの？」

バキツ！

ハッピー「ぐふっ！」

ドサツ!

キャラクター「お前の戦いを見て正直言うと小学生のごっこ遊びと変わらないわね・・・」

ハッピー「うつ・・・・・・・・だったら・・・」

あいつ、まさか・・・必殺技を撃つ気だ・・・

ハッピー「プリキュア!ハッピー!シャワー!」

キャラクター「必殺技か・・・じゃあ・・・プリキュア!ハッピー!トウルーシャワー!」

ピンクの光線と黒とマゼンタの光線が激突し、両者の必殺技は激突した。

ハッピー「く~~~~~~~~!!!!」

キャラクター「・・・・・・・・」

キャラクターのあの表情・・・余裕をかましている・・・それに比べて・・・みゆきは・・・

キャラクター「ふあく・・・じゃあこれで終わり♪」
バシユウウウー~~~~~!!!!!!

ハッピー「うわああああああ!!!!!!」

ドオオオオオオオooooooooooooooooooooon!!!!

星奈「みゆきいいーーーーー!!!
!!!」

キャラクターの必殺技がみゆきの必殺技を破った。

ハッピー「はあ……はあ……はあ……まだ……まだ……」

キャラクター「へえ、まだ戦う気力があるんだ………だつたら……」

キャラクターは私の方に振り向き……不気味な笑みを浮かんだ。

キャラクター「キュアハッピー対黒井星奈の第2ラウンドと行こうか……」

あいつ……みゆきに何を………まさか!!

キャラクター「伝説の戦士よ………今こそ覚醒せよ!……プリキュア!ウエイク!」

ガシツ!

ハッピー「あつ!」

ガキン!

ハッピー「うわああああああああああああ!!!!?

星奈「みゆき!!」

キャラクターはみゆきの胸を掴み機械の枷を捻るような音がした。だが、私にはキャラクターがみゆきになにをしたのか……。それは

星奈「みゆき……不味い!!」

ポコン「おい!星奈……これって……」

星奈「みゆきが……怪物に……!!」

キャラクター「さあ、暴れろ!!キュアハッピー!!」

ハッピー（魔獣態）「グオオオオオオオオオオ!!!」

魔獣になったハッピーの姿はゴツい体に太い二本の角、巨大な羽根に背中は何本も生えた岩のような刺、色はピンク色なのに凶暴性を持っている……

ハッピー（魔獣態）「グオオオオオオオオオオ!!!」

ポコン「おい!こっちに向かってくるぞ!」

ハッピー（魔獣態）「グオオオオオオオオオオ!!!」

ガシッ!

星奈「あっ!?!」

ポコン「星奈!?!」

みゆき・・・」

ポコン「へ？」

ハッピー（魔獣態）「・・・・・・・・・・・・・・・・」

キャラクター「どうしたキュアハッピー！早くこいつを食い殺せ！！？」

ハッピー（魔獣態）「・・・・・・・・・・・・・・・・」

キャラクター「おい！聞こえないのか!？」

ハッピー（魔獣）「・・・・・・・・・・・・・・・・イヤダ・・・」

ポコン「へ？」

ハッピー（魔獣態）「ワタシハ・・・・・・・・セイナチャン・・・・・・・・
ヲ・・・・・・・・キズツケタクナイ・・・」

星奈「みゆき・・・あんた・・・そんな怪獣みたいな姿に・・・
なっても・・・私のことを・・・心配するなんて・・・」

私は血まみれの私の目から一粒の涙を流した。

ピカーーーーーーッ!!

ポコン「うおっ!」

キャラクター「何!?この光!?とても嫌な光・・・一体何なの!」

私は今桃色の光の中にいた。

星奈「この光・・・暖かい・・・みゆき」

みゆき「星奈ちゃん・・・伝わったよ・・・星奈ちゃんの思い・・・」

星奈「みゆき・・・」

その時、私の右手から何かが光っていたことに気がついた。

星奈「これは・・・」

みゆき「デコル・・・でも・・・見たこともないよ」

星奈「みゆき・・・これを使って・・・」

みゆき「星奈・・・ちゃん」

星奈「私は・・・まだプリキュアが嫌いだけど・・・あんたは好き

になれそう・・・」

みゆき「星奈ちゃん・・・」

星奈「受け取って！」

みゆき「うん！」

みゆきはスマイルパクトでデコルをセットしプリキュアに変身した。

みゆき「プリキュア！スマイルチャージ！！」

ピカーーーーーーッ！！

キャラクター「一体どうなっているんだ？」

ポコン「お！光がだんだんおさまっていく・・・」

光が収まり、私が今みゆきを見て驚いた。

星奈「嘘・・・みゆきが・・・大人に」

キャラクター「あんた！誰よ！」

キャラクターの怒気がこもった質問にみゆきは答えた。

？「キラキラ輝く未来の光……ウルトラエターナルキュアハッピー
!!」

ポコン「ウルトラ……エターナル……」

キャラクター「キュアハッピー……だと!!??」

私の思いがキュアハッピーを強くした。

32話 星奈の思い 誕生 ウルトラエターナル
キュアハッピー

キャラクター「ウルトラ：：エターナル：：キュアハッピー：：
だど！」

星奈「・・・すごい・・・」

ポコン「綺麗・・・」

私が一粒の涙を流して出現したあのデコルでみゆきがパワーアツ
プ大人版プリキュアになったことに驚いた。

星奈「みゆき・・・あなた・・・」

UEハッピー「星奈ちゃん待ってて直ぐに済ましにいくから」

それを言いながらみゆきはキャラクターの下に立った。

キャラクター「この私を直ぐに済ませるだど？お前誰に口聞いてん
だ!？」

キャラクターは一気にみゆきに近づき強力なパンチを仕掛けた
が・・・

バシッ!

キャラクター「な!？」

UEハッピー「もう・・・負けない！」

バキッ!

キャラクター「がはっ！」

嘘?あのジェネラルプリキュアのキャラクターのパンチを軽く受けとめた!?そしてキャラクターにパンチを喰らわせた。

キャラクター「なんだと!？」

UEハッピー「まだまだ!!」

そしてみゆきは背中に生えた翼で上昇気流に乗り急降下でキャラクターに接近し・・・

UEハッピー「うりやあああああ!!」

バス!バス!バス!バス!バス!バス!バス!バス!

キャラクター「がはっ！」

UEハッピー「てえーーい!!」

バキン!

キャラクター「ぐはあああ!!」

急降下での連続パンチからの右フック・・・もしかしたら・・・みゆきは・・・

キャラクター「なめるな!!」

キャラクターは背中の2本の刀を手に取り、剣での攻撃を仕掛けたが・・・

ガキンツ!

キャラクター「え?」

UEハッピー「あなたが次で剣で攻撃することはこの姿になつてから読んでたよ」

みゆきの持っているのはキュアハッピーのパワーアップした姿のみ使えるプリンセスキャンダルを持っていた。

ガキンツ!

キャラクター「うあっ!」

UEハッピー「はああああ!!」

ヒュン!ヒュン!ヒュン!ヒュン!ヒュン!ヒュン!ヒュン!ヒュン!

バキツ!バキツ!バキツ!バキツ!バキツ!バキツ!バキツ!

キャラクター「うあああああ!!」

星奈「すごい・・・あれをフェンシングのように戦うなんて」

ポコン「でもこれ、いけんじゃねーか?」

キャラクター「こんなことが・・・」

UEハッピー「どうしてもやめるっていうなら・・・二度と星奈ちゃんにひどいことしないって約束したら見逃してあげる」

キャラクター「誰がするか!!」

キャラクターの奴・・・怒りの必殺技をみゆきにぶつける気だ！みゆき

キャラクター「プリキュア！ハッピー！シャワー！トウルー！」

UEハッピー「そうなんだね・・・それじゃ私も！プリキュア！ウルトラエターナル！シャワー！」

バシユウウウー————ン!!!!

白とピンクの光線と黒とマゼンタの光線がぶつかり合う

キャラクター「どうやら必殺技は私の勝ちのようね・・・」

UEハッピー「それはどうかな？」

キャラクター「何!？」

UEハッピー「はあああああ!!!」

星奈「光線を飲み込んでいる!？」

キャラクター「うわあああああああ!!!??」

ドーーーーー！！！！

キャラクター「ぐはっ!?」

キャラクターがハッピートゥルーから元のキャラクターに戻った。

キャラクター「何故だ・・・何故・・・ジエネラルプリキュアの私がこんな奴に・・・」

UEハッピー「私がどうして貴方に勝てたのか・・・」

星奈「・・・・・・・・」

ポコン「・・・・・・・・」

UEハッピー「それは星奈ちゃんの想いが私を強くしてくれたから・・・私達は友達の想いがあればどんな辛いことでも乗り越えていける!」

星奈「みゆき・・・」

キャラクター「想い・・・だと・・・くだらない!!想いなど私らやプリキュウス様には欠陥品に過ぎん!!そんなもの・・・この世から消し去ってやる!!」

キャラクターの奴・・・みゆきの言葉に苛立ちを感じ全力の必殺技で迎え撃つ気だ!!

キャラクター「あの勇者どもと同じことを言いやがって・・・お前

は・・・消えてなくなれ!!!」

キャラクターの背後から歴代プリキュア達の陰が出現し、その陰がキャラクターの体に入り、必殺技を炸裂させた。

キャラクター「食らいやがれ！プリキュア！キャラクター！オールシュート!!!」

バシユウウウー~~~~~
!!!!!!!

たくさんの色を混ぜ合わせた巨大な光線がみゆきに近づいてくる。

UEハッピー「くっっ！」

ガガガガガガガガガガガガガガ
!!!!!!!

プリンセスキャンダルで防いでいるが徐々にひび割れが始まっていた。

UEハッピー「くううううう~~~~~！」

キャラクター「ははははは!!消えろ！消えろ！消えろ！消えろ！消えろ！消えてなくなれ!!!」

みゆき・・・・・・・・

ポコン「プリキュア~~~~~!!!頑張れ!!!」

星奈「ポコン？」

ポコン「かつては敵対してたが俺はお前を応援するぜ!!!プリキュ

アーーーー!!! 頑張れーーーー!!!

ポコン……………があんなにみゆきにエールを……………私は……………

者……………で……………も……………みゆき……………プリキュアを憎む

星奈ちゃんは私の大事な友達だよ♪

星奈「みーーーーゆーーーーきーーーー!!! がーーーーんーーーー
ばーーーーれーーーー!!!」

ピカーーーー!!!

キャラクター「なんだ？この光は？」

この光はみゆきの背後からあれは……

ペガサス「ヒヒヒーーーーン!!」

フェニックス「ピャーーーーー!!」

ペガサスとフェニックス……その2匹の幻獣がみゆきのプリンセスキャンドルに入り込んだ時……奇跡が起きた!!

UEハッピー「星奈ちゃんの思い……届いたよ。はああああ!!」ピシピシ

パリーーーーーーン!!

ポコン「嘘だろ？」

キャラクター「それはなんなんだ!？」

星奈「みゆき……その剣は……」

UEハッピー「クイーンカリバー!!!」

みゆきの持っているのはキャラクターの必殺技を防いでいたプリンセスキャンドルが背後から出現したペガサスとフェニックスが入り込んだことで進化した巨大な大剣、"クイーンカリバー"に進化した。

UEハッピー「これで終わらせる!!プリキュア!ハッピーカリバー!!
シャイニンググー!!」

バシユウウウー————ン!!!!

キャラクター「う……うわあああああ!!!」

UEハッピー「届け!ウルトラハッピー!スマイル!」

ドオオオオオオオ————ン!!!!

星奈「やった……」

ポコン「よっしゃ————!!」

ポコンは大喜びでみゆきの勝利を祝っていたが、私はすこし複雑だった。

UEハッピー「うっうう……」パシユー

ハッピー「うわ……」ドサツ!

星奈「みゆき!!」

みゆきがノーマルのハッピーに戻ってしまい、蓄積したダメージが出てしまい倒れてしまった。

られた痕だよ。あいつらは硫酸をただ溶ける水と認識しただけで面白がり、その悪ふざけで私の顔は奪われた」

星奈「まさかその悪ふざけ程度で恨みを持つなんて案外小さいのね」

キャラクター「うるさい!!お前に何がわかる?私の美しい顔をこの星の奴等に奪われた屈辱を・・・」

キャラクターは禍禍しいオーラを放ち戦おうとしたが

ブレイン「およしなさい」

キャラクター「ブレイン!？」

キャラクターの背後からブレインが現れた。

ハッピー「あれは・・・」

星奈「あれはキュアブレイン・・・強いていうならジエネラルプリキュアの参謀的存在の奴よ」

ブレイン「プロトプリキュアNo.111号とキュアハッピー・・・」

ブレインはみゆきの方をみて何かを納得した。

ブレイン「私は先ほどあなた達の戦いを見ましたけど・・・そういうことでしたか・・・何故キュアハッピーが私達を裏切ったのか」

星奈「裏切った?」

ブレインの言うキュアハッピーの裏切りという言葉に私は疑問を覚えた。

ブレイン「今回はここで引き上げます。それでは」シユンツ

キャラクター「ちっこれで勝ったと思うなよ……例えお前がピエーロを倒したとしても本当の絶望はここから始まるんだ！ははははははは」シユンツ

二人のジェネラルプリキュアがいなくなり私達はホツとした。

星奈「ふー」

ポコン「星奈」

ハッピー「星奈ちゃん大丈夫？」

星奈「大丈夫な訳ないでしょう……腕も腰も左目もヤバイ状態よ」

ハッピー「星奈ちゃん……ごめん」

星奈「別にあんたが謝る訳じゃないでしょ」

私とみゆきのやりとりをしているとき突然揺れが始まった。

ゴゴゴ……

ハッピー「何!?何!?

星奈「始まったか・・・」

ーサニーsideー

サニー「うりやああああ!!」

元氣「うおらああああ!!!」

ドガーーーーーン!!!

ピース「ええええーい!!」

豊島「うおりやああああ!!」

バチバチバチバチ!!

マーチ「はあ!やあ!」

けいた「ふっはっ!」

ひな「せいや!」

バキッ! ドガッ! ボゴッ!

ビューティー「はああ!!」

淳之介「ふん!!」

キンキンキンキン

サニー「はあ はあ はあ、よう粘るなあ元気」

元気「姉ちゃんこそ」

豊島「凄いな黄瀬：…もとの姿だとオタクと泣き虫なのにプリキュア
アの時は強いなんてな」

ピース「オタクと泣き虫は余計だよ」

けいた「なお姉、サッカー以外に格闘も強いなんてな」

ひな「正直驚いたよ」

マーチ「……………」

淳之介「さすがだよ……れいか剣術も体術も文句なしだな」

ビューティー「お兄さま……」

こいつら、うちらはこんなに疲れとんにこいつらは疲れてる所な
んか全然ないで

元氣「じゃあ、姉ちゃんこれでしま「ビービービー」ん」カチツ

なんや？元氣の奴ポケットの中からケータイを取り足しおって……

元氣「姉ちゃん！どうやら作戦は失敗に終わってもうたわ……せ
やから俺らはここで退却するで」

サニー「なんやて」

突然の元氣の言葉にうちは怒りむき出しで元氣に怒鳴った。

サニー「元氣！どう言うことや!?!逃げるんか!?!」

元氣「ああ、今回の作戦でオーディウム隊長がキュアハッピーの首
を取ってミッション成功すると思うとつたがとんだ邪魔が入って作

戦失敗になったわ」

サニー「オーディウムがみゆきの首を・・・」

元氣「作戦失敗になった以上俺らは引き上げる・・・もう会うことはないかもしれんけどな・・・」

サニー「なんでや・・・元氣なんでうちらを攻撃してきたんや？それだけは教えてや」

うちの質問に元氣は振り向いた。

元氣「姉ちゃん・・・俺らのいる時代はとて最悪な状況になってるんや」

サニー「え？」

元氣「そのせいで・・・お母ちゃんもブライアンも」

サニー「お母ちゃんにブライアン・・・どういふことや！元氣！お母ちゃんとブライアンはどうなっとんや？」

元氣「・・・・・・・・・・」

カーーーーー

サニー「うわっ！」

元氣達は白い光に包まれ光が消えた途端元氣達はいなかった。

サニー「元氣・・・」

ピース「サニー……」

マーチ「元気出しなよ」

ビューティー「みなさんあれを！」

ビューティーが指差した方向を見ると白い光が出とる穴を見つけた。

ビューティー「もしかしたら……あそこにキャンディ達の世界に通じているかもしれません！」

サニー「よっしみんな行くで！」

ピース「うん！」

マーチ「行こう！」

うちらはその穴に飛び込んだ。

元気………あんたのいる世界にはお母ちゃんやブライアンはどうしてるんや？

「星奈 side」

ハッピー「何!?地震?」

星奈「恐らく・・・この世界の崩壊が始まったのよ」

ポコン「え?じゃあやべえじゃん!」

ポコンが慌てているとみゆきは私の方に近づいてきた。

ハッピー「星奈ちゃん・・・どこか出口はないの?」

私はワールドフォンで空間の方に押したとき、次元の穴を出現させた。

ハッピー「この穴って」

星奈「この穴の向こうにはあなたの仲間がいる場所に続いているわ」

ハッピー「本当に!それじゃみんなで一緒に脱出「ドン」え?」

私は力強くみゆきを穴の方に押した。

ハッピー「星奈ちゃん!なんで?」

星奈「みゆき・・・私とポコンはまだやらなきゃならないことがある

るの。それが済んだら脱出するわ」

ハッピー「そんな!？」

星奈「だからみゆき……………」

ハッピー「え?」

星奈「また会おうね♪」

ーハッピーsideー

ハッピー「星奈ちやああああー……………ん
!!!!!!」

そして私は次元の穴から出たときみんなと合流し、ピエーロとの最終決戦が始まった。

最終話 来るべき戦いのために

ーみゆき side ー

あれから私たちはみんなと合流し、全員無事帰ってきたことに喜びました。それを見て驚いたジョーカーは驚き、こうなったらと私たちの周りが荒れ果てた世界になってしまいジョーカーはピエーロと一体化してしまったことでピエーロは完全復活を遂げてしまいました。

その時、私達はピエーロの力でバッドエンド状態になってしまい、私達は意識を失いそうになったけどキャンデイが私達を絶望から救ってくれた。

私達はキャンデイの想いを無駄にしないために私達はピエーロに反撃し必殺技でピエーロを倒すことに成功した……。はずだったのに……

「おのれープリキュア!!!」

空を見上げるとそこには闇色に染め上げる邪悪な顔を持ったピエーロが地球を多い尽くそうとしていました。

私達の必殺技じゃピエーロを倒すことは不可能になってしまい、このままどうするのか悩んだ時、ポップの発言では「ミラクルジュエルの力を使えばピエーロを倒すことが出来る!」という方法を聞いたとき歓喜に道溢れたけど、その代償として、この世界とメルヘンランドの繋りを断ち切るということになるのです。

それを聞いた私やあかねちゃん、やよいちゃん、なおちゃん、れいかちゃん、そしてキャンデイみんなは悲しみに溢れて泣き崩れてしまいました。私達はそのままピエーロをほっといてしまえば世界は

バッドエンド状態になってしまう。それだけは嫌だ！

私達は意を決意してミラクルジュエルの力を使うことにしました。

そしてようやくミラクルジュエルの力を持った私達の必殺技で見事ピエーロを倒すことが出来て世界に平和が訪れたのです。

そう、それはキャンデイの・・・大切なお友だちの別れでもあったんです。

私達は空へと昇るキャンデイやポップを涙を流しながら見送り、私はキャンデイに笑顔を・・・スマイルを忘れないで・・・を言い残し、キャンデイ達はメルヘンランドに帰っていききました。そして・・・私達はキャンデイ達が別れたことで泣いた。

そしていつもの日常に戻ったと思った私は学校に来た時、ある変化があったのです。

先生「みんな全員揃っているわね」

みゆき「あれ？」

ない ない ない

どこにもない

星奈ちゃんの机がない！

みゆき「あの先生！」

先生「どうしたの？ 星空さん」

私が手をあげるときと同時にみんなは私の方を見た。

みゆき「あのまだ星奈ちゃんじゃなかった！ 黒井星奈さんがいないんですけど……」

先生「くろいせな？ ……そんな子いたかしら？」

みゆき「え？」

あかね「なあ、みゆきその黒井星奈って誰や？」

みゆき「あかねちゃん……」

やよい「その子ってみゆきちゃんのお友達？」

みゆき「やよいちゃんも……ほら二学期に転校してきた子だよ」

なお「どうだろう？ みゆきちゃんが転校してきてからほかの転校生がこの学校に来た話はあまりないよ」

みゆき「なおちゃんも!？」

れいか「私もその黒井さんという人にはあまり見かけたことがありません」

みゆき「れいかちゃん……」

なんで？どうして？なんでみんな星奈ちゃんのことを覚えてないの？

みゆき「そうだ……星奈ちゃんと親しかった友達なら何か分かるかも」

私は他の組に行つて星奈ちゃんと親しかった友達に質問した。

希美「黒井……星奈……さんですか？」

みゆき「うん！希美ちゃんなら何か知ってるんじゃないかな？」

希美「ごめんなさい……私……その黒井っていう人は会ったことありません……」

みゆき「黒井星奈ちゃんのこと覚えてる？」

主「黒井……星奈……誰？転校生？……あまりそういう情報はないわね……」

みゆき「そんな〜」

主「それよりも！気になる謎の事件について聞いてくれる！なんでも地球に忍び寄る謎のブラックホール！そして謎のネガティブ状態、この謎は世界中の学者達は悩ませているっていうすごい情報……あれ？」

やっぱり……あの二人も……星奈ちゃんのことを忘れて……最後は……

3年生教室前

みゆき「この教室に怖い人がいるんだよね……」

ガラララッ

みゆき「ひっ！」

秋人「あ？誰だお前？」

すごい目で見られている私……私は勇気を振り絞って質問した。

みゆき「あの……黒井星奈ちゃんについてなにか知っていますか？」

秋人「黒井星奈……？」

みゆき「……」

秋人「……知らねえな……」

みゆき「そんな！あなたなら知ってると思ったのに」

秋人「おい・・・つまんねーことで声聞かすんじゃないよ」

みゆき「・・・・・・・・・・・・・・・・」

どうして、なんで、みんな、誰も、星奈ちゃんのことを誰も覚えていないなんて・・・

みゆき「星奈ちゃんを知ってるのは・・・私だけ？」

私はいろんな所にいって星奈ちゃんのことを聞き出したが誰も星奈ちゃんのことを覚えていなかった。

帰った時、お父さんやお母さんにも質問したが・・・

博司「黒井・・・星奈・・・うーんあまり知らないな」

育代「私も流石に・・・そこまでは・・・」

みんなは、誰も星奈ちゃんのことを知らない・・・いろんな人達に星奈ちゃんのことを聞いたけど・・・誰も記憶になかった。

みゆき「星奈ちゃん・・・どうして？」

キャンディ達が別れたことはとても悲しいけど・・・星奈ちゃんが
いなくなったことは・・・もつと悲しい・・・

みゆき「星奈ちゃん・・・」

私は泣きつかれて寝込んでしまいました。

? 「……………き」

? 「……………ゆき」

星奈 「みゆき!!」

みゆき 「はっ! はい! ってえ?」

明かりが消えた部屋でみゆきの前に立っているのは紛れもなく親友の黒井星奈であった。

みゆき 「星奈ちゃん……………本物?……………幽霊とかじゃないよね?」

星奈 「本物よ!あの程度でくたばるような訓練はしてないからね」

みゆき 「よかった……………よかったよお〜」

みゆきは星奈の無事に涙ぐんだ。

星奈「……………みゆき……………感動の再会に悪いけど、今すぐ着替えて！」

みゆき「え？なんで？」

星奈「早く!!」

みゆき「は！はい!!」

みゆきは急いで私服に着替えて星奈と共に夜の中学校の校舎に入った。

そして2人は夜の図書室に入った。

みゆき「星奈ちゃん怖いよ〜」

みゆきは涙目で星奈に取り入ったが星奈はそれを無視して1つの紙切れを開いた。

星奈「みゆき、今からこの通りの順に本を並べてみて」

みゆき「え？こ〜う」

パタン

パタン

パタン

パタン

パタン

パタン

パタン

その時、本を並べた時、パアアアと光り輝き始めた。

みゆき「え？もしかして不思議図書館が？」

星奈「みゆき!!行くわよ！」

みゆき「え？うわああああ!!!」

星奈はみゆきの腕を掴み光の中へと入り込んだ。

みゆき「うーーーーーん……………え？こっつて」

星奈「……」

「ゾゾ」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

設定集3

定集3-1

1 設

DWD所属七色ヶ丘担当新人部隊

日野元氣

関西出身で日野あかねことキュアサニーの弟、プリキュウス復活でほとんどが不治の病気におかされ、母親もその影響で痩せ細ってしまった。元氣は実の姉を止めるべくDWDに入ることを決意した。

異世界の武器 帝具 炎球 プロメテウス

豊島ひてかず

七色ヶ丘2年 みゆき達の同級生でギター一筋の少年であり、文化祭の時はみゆき達と一緒に絵本のキャラに仮装したコンサートを開いて大成功をおさめた。だがプリキュアの反乱でギターを捨ててDWDの隊員となる。

異世界の武器 帝具 雷矛 トニトルス

緑川けいた

緑川家の長男で緑川なおことキュアマーチの弟、キュアマーチとマジョリーナの戦いが夢だと思っていたが本当はプリキュウスを復活

させるためのヒーローごっこと知ったとき悲しみに溢れて母親は病気で痩せ細ってしまい父親は母親の看病に勤しむ。そしてひなともにも決意しDWDの隊員となる。とある異世界で“流水岩碎拳”を習っていた。

スタンド名 ハリケーンストライカー

戦闘スタイルは蹴り技で走れば走るほどその威力は竜巻をも起こさせる。

緑川ひな

長男のけいたと同じく異世界のアルカでDWDの隊員となり優一の流水岩碎拳を使いこなす。

スタンド名 サイクロンデイフェンダー

彼女のスタンドも兄と同じ足蹴だが蹴れば蹴るほど貯まった力を暴風に変えて吹き飛ばす威力を持つ。

青木淳之介

青木れいかことキュアビューティーの兄であり朝のランニングは欠かせない。淳之介は祖父の曾太郎にれいかがプリキュアと呼ばれる戦士を知っていて曾太郎自信はかつて異世界アルカでDWDの隊員をしていたことに驚き、曾太郎は淳之介にとある異世界で唯一の友である旋風鉄斬拳のボンブに弟子入りし、とある異世界では神鳴流に入門し剣術を学んでいた。

神鳴流 斬岩剣

百列桜花斬などの技を会得している。

ポコン

ポンポーがメルヘンランドにいた頃の姿であり、顔の黒い部分が丸くなっており、尻尾はモフモフしていて星奈にいわくお気にいりである。

後日談ではポコンはポンポーになることが可能になり、たぬ美に告白し、結果たぬ美も同じ気持ちでアルカで結婚し、祖父の店、狸屋を引き継ぎ8人の子供を持ったという。

ウルトラエターナルキュアハッピー

星奈のみゆきの想いがデコルに変わり、それをみゆきがスマイルパクトに装着して変身したみゆきの最強形態、その威力はプリンセスフォームとウルトラキュアハッピーさえも凌ぐほどの力を持つ

クイーンカリバー

星奈の声援がみゆきに届き、みゆきの背後からペガサスとフェニックスが出現しみゆきのプリンセスキャンドルに憑依したときに誕生した桃色の巨大な剣、この剣はメルヘンランドや他のプリキュアさえも知らない剣で作者いわく伝説の剣として記されている。

キュアソーン

女子高生がジエネラルプリキュアのキュアブレインに差し出したアイテムで変身した。キュアブレインいわく雑魚プリキュア、もし名乗っていたならこう呼ぶ思い通りにならない者を全て縛り付ける…：キュアソーン！ソーンは棘、その名を茨にして名乗らせました。

プリキュア・ウエイク

ジエネラルプリキュアにしか使えない技でプリキュアの力を解放しプリキュアの力を怪物に変える力である。他のプリキュアはこの力が使うことができない。

オーデイウム&HARUYA featデッドプ
ル
プリキュアの秘密

星奈「到着ね」

みゆき「あれ……ドイツってこんなに明るいなだね」

星奈「正確に言えば日本とドイツの時差は8時間……日本時間、夜の11時、ドイツの時間は昼の3時よ！地理の授業で学んだでしょ！」

みゆき「え……えーと……ぞうだっけ……あははは」

星奈「それじゃあ、行くわよ」

みゆき「ちよっと！待ってよ」

そして星奈とみゆきはドイツを観光（みゆきの妄想）もとい探索しドイツの首都ベルリンの近くのマンホールの前に立っていた

星奈「ふん！」

パカン

星奈はマンホールの蓋を開けると星奈とみゆきをその中へと降りていく。

そしてドブネズミがさ迷う地下通路へと足を踏み入れた。

ドブネズミ「キキ」

みゆき「ひっ！」

ドブネズミがこそこそと動く姿にみゆきはびびってしまう。

みゆき「……………ねえ、星奈ちゃん」

星奈「何？」

会話のない行動に思わずみゆきが星奈に質問する。

みゆき「星奈ちゃんは どうしてプリキュアを憎むの？」

星奈「……………」

みゆき「プリキュアはみんなのしあわせのために悪い奴らと戦ってるんだよ？なのはどうして？」

星奈「……………じゃあみゆき……………」

みゆき「？」

星奈「なんでこの世界は新しい敵と新しいプリキュアが現れるのか疑問を感じない？」

みゆき「え？」

星奈「プリキュアはドツクゾーンのジャアクキング、ダークフォーのゴーヤーン、ナイトメアのデスパライア、エターナルの館長、ラビンスの総統メビウス、砂漠の使徒のデューン、マイナーランドのノイズ、そしてバッドエンド王国のピエーロ、このような繰り返しがあつて誰も疑問を感じない…これがどういうことかわかる？」

みゆき「え？えつと…なんでだろう？」

みゆきはこれまで先輩として駆けつけたプリキュアとともにフュージョンと戦ったことがあるが、プリキュアがほかにもいることにはしやいでいたので、疑問をかんじざるを得なかったらしい

星奈「全ては一年前と……」

「この収容施設にその謎が明かされる」

星奈とみゆきは立ち止まり近くにあった梯子によじ登ってさび付いた蓋を開けた。

星奈とみゆきがたどり着いたのは明かりがなく古い部屋であった。

みゆき「ここって？」

星奈「ここは……かつて1940年代前半ドイツ軍がユダヤ人で、ある実験を行った施設よ」

みゆき「ドイツ軍？ユダヤ人？え？どういうこと？」

歴史に疎いみゆきに星奈はジト目でみゆきを見た。

星奈「みゆき…… あんた学校の授業居眠りばっかしてたでしょ？」

みゆき「へ？」

星奈「しかも夏休みの宿題が出来なく居残り「やめてえー！やめてえー！」！」

星奈のみゆきのこれまでの学校生活と態度にみゆきは赤面して大声で誤魔化した。

みゆき「星奈ちゃん……どうして私の成績がわかるの〜」

星奈「あなたの成績はDWDでは筒抜けだから！」

みゆき「!!」

ズーーン!

星奈の言葉にみゆきはがっかりしてしまった。

そんなみゆきをほっておいて、星奈は施設の内部を探り始めた。

星奈「ぼーっとしてないで手伝って」

みゆき「え! あっ! はい!」

みゆきは急いで星奈の手伝いをした。

星奈(どこかにあるはず! 予言の力を持つと言われるプリキュアのこと!)

みゆき「えつとえつとえー……と」

みゆきは本棚の本をとって開くと中身がドイツ語で頭がこんがつてしまうのであった。

みゆき「うー……!! みんな文字が日本語じゃないからわかんないよ〜!! はっぷっぷー!!」ポイ
「あっ!」

みゆきは暴れてうつかり投げた本がとあるドアのほうにあたった。

みゆき「……………」

みゆきは扉のほうを見つめた。

みゆき「そういえば……あの扉の向こうって？」

みゆきはゆっくりとドアのほうに向かう。

星奈「みゆき！そっちはどう………っていない!？」

みゆきは中に入るとさつきより暗闇で向こうに何かあるのかわからなかった。

みゆき「なんだろう？暗くて何も見えないよ〜！」

みゆきは両目が涙目となり戻る場所に向かおうとした瞬間、

カチツ

みゆき「わっ!？」

突然明かりが付き、みゆきは顔を覆った。

どうやらみゆきはうつかりして明かりのスイッチを押したのであろう。

みゆき「明かりがついた。えっとここは……」

みゆきはあたりを見渡し後ろの方を振り向くと……

ー(骸骨)ー

!?

みゆき「ぎゃ「みゆき!」むー!」

後ろ振り向くと倒れた骸骨が発見され思わずみゆきは無意識に叫ぼうとしたが星奈が間髪みゆきの口を塞いだ。

バシッ!

みゆき「いったあーい!何すんの星奈ちゃん!」

星奈「何すんのじゃないわよ 危うくばれるかもしれないって思ったわよ!馬鹿!」

みゆき「ううーはっぷっぷー!」

みゆきは顔を膨らませたが星奈はそれを無視して辺りを探し始める。

星奈「ここって……何かの実験室かしら……割れた大量のカプセル……」

その時、星奈は倒れた骸骨のほうに目を向き骸骨が着ている古い上着の胸の部分に目をむく。

みゆき「星奈ちゃんどうしたの?」

星奈「これって……プリキュア帝国のマークと同じ奴だわ!」

みゆき「プリキュア帝国って星奈ちゃん達が追ってるあの？」

星奈「ええ、そうよ！この施設やっぱりプリキュア帝国が絡んでるのね？」

みゆき「え！そうなの！」

ゴトツ

みゆき「え？」

みゆきは後ろのテーブルにあった物に当たったこと気づいて振り向くとそれは

みゆき「これは……」

星奈「映写機と……フィルム……？」

星奈「………これ………日本語だわ！」

みゆき「え？日本語!？」

星奈はフィルムで書かれたタイトルが日本語で書かれていることに驚いた。

星奈「しかも現代の文字と同じような字………どういふことなの？」

みゆき「それでなんて書いてあるの？」

星奈「………歪んだ………感情の………造り方？」

みゆき「何それ？」

星奈「とにかくこの映写機で映して見ましょう。」
2人は映写機を動かしてフィルムをセットした。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e